
カンピオーネ！
Campione
XIV
八人目の神殺し
丈月城
Illustration シコルスキー
スーパーダッシュ

スーパーダッシュ文庫
SUPER DASH

集英社

カンピオーネ！

XIV 八人目の神殺し

丈月　城

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。


丈月城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
八人目の神殺し
Campione
XIV


ウルディン
アイーシャ
護堂
恵那
祐理
エリカ


「——!?」
護堂はあわてて振り返った。
そこにはエリカと恵那がいた。
しかも、ふたりともバスタオル代わりの白い布で
前を隠しただけで——
ほかには薄布一枚もまとっていない。
裸、なのである。
「おおお、おまえたち、一体どうしてここに……!?」

主要登場人物

草くさ薙なぎ護ご堂どう

高校１年生。軍神ウルスラグナの権能を有するカンピオーネ。

エリカ・ブランデッリ

《赤銅黒十字》の魔術師。自称、護堂の「愛人」。

万ま里り谷や祐ゆ理り

霊視の力を持つ媛巫女。護堂の「正妻」と称される。

リリアナ・クラニチャール

《青銅黒十字》の魔術師。護堂の「騎士」を自任する。

清せい秋しゅう院いん恵え那な

当代随一とされる「太刀の媛巫女」。護堂の「剣」として侍る。

サルバトーレ・ドニ

イタリア最強の騎士たる「剣の王」。

パオロ・ブランデッリ

エリカの叔父。《赤銅黒十字》総帥。

甘粕冬馬

正史編纂委員会のエージェント。

Contents

イラスト / シコルスキー


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
八人目の神殺し
Campione XIV

第１章　トスカーナ前奏曲

1

　東西南北にドタバタ駆けまわった、強行軍の旅――。

　イタリア・トスカーナ州への遠征を簡かん潔けつに語るなら、まさにこれだった。

　一応、旅の最後に神しん獣じゆうとも対決したが、そちらの印象はだいぶうすい。それよりも『短期間にやたらと移動したよなあ』という感想の方がウエイトとしては大きかった。

　草くさ薙なぎ護ご堂どうが神殺しとなって、まだ間もない頃である。

　北イタリアのガルダ湖こ畔はんで〝同族〟サルバトーレ・ドニと対決した直後だ。

　あの朝、ドニと別れたあと、護堂はエリカから誘いを受けた。

『ねえ護堂、ミラノへ寄ってからトスカーナへ神獣退たい治じに行きましょう♪』

　この勧誘を振り切るところから、旅ははじまった。

　より正確に言うと、隙すきを見て逃げ出した。行き先はイタリア北部の古都ヴェローナ。ロミオとジュリエットの舞台となった街である。

ここはガルダ湖からも近く、しかも国際空港を擁ようしている。

ヴェローナ入りした護堂は脇わき目めも振らず、空港に駆け込んだ。

歴史ある古都。古代ローマの頃に造られた円形闘技場はいまだにイベント会場として利用されているというし、文豪ダンテとも縁が深い。定番の大聖堂ドウオモや教会もみごとな出来映えなのだとか。

観光のひとつでもしていきたい街だが、護堂は誘惑を断ち切った。

ここでじっとしていたら、エリカに必ず捕まる。そして骨抜きにされ、あのとんでもなく魅力的な少女を生しよう涯がいの伴はん侶りよとして受け入れてしまうのでは——。

それはそれで、まちがいなく甘かん美びな未来だろう。

しかし、さすがに高校一年生の五月に将来を決めるのもはばかられ、護堂は『バケモノ退治』のくわしい話も聞かぬまま空港に来たのである。それはエリカの圧倒的魅力に呑のみこまれつつあるからこその、刹せつ那な的行動だった。

ともかく、運よくキャンセルが出たという午前中最後の便にもぐりこめた。

しかし、飛行機が動き出すまでは気を抜かない。エリカが何らかの手段で出国を妨害するのではと警戒していたのだ。

が、護堂を乗せた旅客機は何事もなく離陸し、順調に飛び立った。

「変な心配しすぎたかな……」

飛行機のシートで護堂はつぶやいたものだ。

エリカのやつもさすがにあきらめたのだろう。実際、無茶なスケジュールなのだ。欧州最強の剣士だというカンピオーネと戦った翌日に、正体不明のバケモノ退治。詰めこみすぎもいいところだ。

それに草薙護堂は平和主義者。訳もなく戦うことなど御ご免めん

こうむりたい……。

　などと考えている間に、旅客機はスイスのチューリッヒ空港に到着した。ここで飛行機を乗り継ついで、東京へ向かう。

　次の便が飛び立つまで三時間あった。しばらく時間をつぶさないといけない。

　というわけで、免税店前のカフェでコーヒーを飲みながら一服。ひさしぶりにおだやかな時間がまったりと流れていく——。

　そして、護堂は不意打ちのような再会を果たしたのである。

「まあ護堂。こんな場所で会うなんて、すばらしい偶然ね！」

　近づいてきたエリカ・ブランデッリは運の要素をわざわざ言い立てた。口元に浮かぶ微笑がなんとも悪魔的で作さく為い的だ。

「ふふふ。きっと善良なわたしに神様がごほうびをくれたのだわ」

「待てエリカ。俺にはおまえが同じ飛行機に乗っていたように思えるんだけどな。でないと、ここにいる理由が説明つかない」

　護堂の脳内に、ある想像がわきあがってくる。

　満席状態の旅客機へ乗るため、たとえば乗客のひとりに一服盛る。空いたシートに金髪の美少女は何食わぬ顔で腰をおろす……。

　妄もう想そうである。しかし、エリカなら実行できるし、やりかねない。

「法と倫理に抵触するような真ま似ねは何もしてないわよ。ヴェローナの古い知り合いに頼んで、専用飛行機プライベートジエットを貸してもらっただけだもの」

「そ、そうか」

　しれっと言われて、護堂は安あん堵どした。

　だが、エリカはわざとらしく満面の笑みを浮かべてみせた。

「でもね。もし護堂がわたしのおねだりを聞いてくれないのなら、東京行きの飛行機が何らかのトラブルに見舞われるかもしれない

わ。たとえば、操縦士の急な体調不良とか」

「!?」

「そうなったら護堂はここに足止め。たくさんの人たちに迷惑もかかる……」

「俺を脅きよう迫はくする気か!?」

「まさか。これはね、愛人としてのお・ね・だ・り」

　護堂の隣に腰をおろすと、エリカはいきなりしなだれかかってきた。

　とてつもなく魅惑的な肢し体たいに密着された。赤みがかった金髪も頬ほおに押しつけられる。香水の芳ほう香こうまでかぎ取れてしまう。

　悲しくも情けないことに、護堂は大いに動揺した。胸がどきどきする。

　このあたり、年齢＝彼女いない歴の高校生男子としては致し方ない限界だろう。

「それにね。わたし、実は拗すねているのよ？　あなたったら別れの言葉も抱ほう擁ようもないまま、愛人を置き去りにして……」

「…………」

「愛いとしい人と次に会う日を待ちきれなくて、過激な手段で引き留めようとするわたしに、ほとんどのイタリア人は同情してくれるんじゃないかしら？」

「で、でも、愛人ってのはおまえが言ってるだけだろ」

「まあ。あんなに狂おしく唇くちびるを重ね合い、褥しとねまで共にした仲なのに？」

「そ、それは神様やドニのアホと戦うために必要だったことでもあるし……」

　エリカと『只ただならぬ仲』だという自覚が、やはり頭の隅にあ

るのだろう。

　あまり毅き然ぜんと反論できない。そして、密着する熱い肢体を振り払えないのはシンプルに腕力の差だ。エリカはあやしい魔術で筋力を強化し、重量級のレスリング選手すら超えるバカ力を発揮できるのだ。

「あとね。これはついさっき入った新情報」

　耳元でエリカにささやかれ、護堂はさらに硬直した。顔が熱い。

　が、続報を聞いて、すぐに表情を引き締めた。

「例のトスカーナに出没するウナギに似た怪物……今までは山奥で目撃されるだけだったわ。でも昨夜遅く、中世の城じよう塞さい跡あとに出現して、ちょっと暴れたらしいの」

「人を襲ったのか!?」

「それは大丈夫。人のいない、遺い跡せきみたいな場所だから。でも、近隣には街もあるから、そちらに現れる危険性も出てきたわね」

「ただでかいだけの生き物じゃないのか……」

　神獣。ウルスラグナの権けん能のうで呼び出す『猪いのしし』の同類らしい。

　ＵＭＡよろしく山奥に棲すみ着き、ひっそり棲息しているのかと思いきや。

「ドニが近所に住んでるなら、あいつにまかせればいいとも思ったんだけどなあ」

「それはたしかに正論だけど、深刻な事態になりつつあるようだから……。そうなると、あの方の存在は痛し痒かゆしなのよね」

「バカだからな。諸もろ刃はの剣つるぎってわけか……」

　サルバトーレ・ドニはトラブルの解決より、煽あおる方が明らかに得意だろう。

　エリカの言わんとするところを察して、護堂はうなずいた。

「今、フィレンツェの魔術結社が事態を収拾しようとしているわ。でも、この怪物がもし神獣クラスの生命体だったら——彼らの手には負えない。負えるはずがない……」

　エリカは今や護堂の膝ひざの上にすわりこんでいる。しかし、彼女の重みと肌のぬくもりを感じながらも、護堂は冷静さを取りもどした。

「神、そして神に連なるものと対たい峙じしうる地上の存在はカンピオーネのみ。あなたと、あなたの同族だけなのよ、草薙護堂？」

　こちらの器量を試ためすように通告されて、護堂は観念した。

　草薙護堂は平和主義者。訳もなく戦うことなど御免こうむりたい。しかし、人並み以上の責任感と公共心の持ち主でもあったのだ。

　かくして、護堂は三度目のイタリア訪問を急きゅう遽きよ行うことに決めたのである。

　チューリッヒからミラノまでは、一時間程度のフライトだった。

2

「運悪く戦う相手が神獣となった場合、われわれにはふたつの選択肢があります。敵の命を絶つために死力を尽くすか、時間を稼ぐために死力を尽くすか、です」

　エリカの同僚、クラレンスの言葉だった。

　オランダ出身だという。頭をスキンヘッドに剃そりあげた黒人である。

「断っておきますと、これはわれわれ大騎士級の魔術師が然しかるべき構成で迎撃部隊を組んだときのみ、持てる選択肢です。そうでない場合、『神に祈って避難する』が最良かつ唯ゆい一いつの選択

肢となるでしょうな」

「つまり、無茶苦茶な強敵なんですね」

　ミラノにある《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》本部ビル内、幹部専用待機室。

　ソファなどの調度類だけでなく、プライベートバーやビリヤード台まで備えつけている。豪ごう奢しやな雰ふん囲い気きの一室だ。ここで護ご堂どうは〝三人の人物〟と向き合っていた。

　エリカは服を着替えに別室へ行ったので、みんな男だ。

　そのうちのひとりが神獣と戦うむずかしさを語ってくれたのである。

「ええ。そして、その神獣でさえ到底かなわぬ超越者がカンピオーネなのです」

「超越者ってのはおおげさじゃ……」

「いやあ。そりゃ無茶な戦い続きで、感覚がおかしくなってるだけですぜ」

　コメントしたのはジェンナーロ・ガンツだった。

　小柄だが、がっしりとした青年である。黒髪に海賊を思わせるひげ面づら。三〇代なかばに見えて、実は二〇代前半だという。粗そ野やで人なつっこい雰囲気があった。

「カンピオーネの王様たちをのぞけば、人の分際で神獣どもと一騎打ちできるのはうちのパオロくらいのもんで。それだって死を覚悟しての大決闘になりますがね」

　パオロ——パオロ・ブランデッリ。エリカの叔お父じで保護者だという。

　名前が出た三人目の人物を護堂は見つめた。彼は苦笑していた。

「今の発言は正しくないな。その域に達した使い手は私以外にもいる」

「でも、神獣どもの相手はあんたがいちばん達者なんだろ？」

「慣れているだけだ。——私はあなたの同族、カンピオーネのひとりと個人的な縁があったのです。その関係で神獣たちと遭そう遇ぐうする機会が多かったのですよ」

途中から、パオロは護堂に向けて語ってくれた。

澄んだ青い瞳ひとみに見つめられて、護堂はどきっとした。
チューリッヒからミラノのマルペンサ空港に飛び、この本部にやってきたのは三〇分ほど前だ。

今日はじめて顔を合わせた『エリカのおじさん』。

あれだけの美少女を姪めいに持つだけあって、すばらしくハンサムだ。

端正な顔立ちに精せい悍かんさのアクセントを加えるのは、軽く肩にかかる長髪と口元をおおう無ぶ精しょうひげ。そして逞たくましい。長袖のＴシャツにパーカというラフな格好の上からでも、鍛きたえ抜いた鋼はがねの肉体であることが察せられる。

だが、容姿よりもパオロの立ち居振る舞いに護堂はつい見入ってしまう。

品があるのだ。ややワイルドな容姿とラフすぎる服装も、彼から生来の気品を奪うことができない。かえって引き立たせている。

雄お々おしく、理知的で、美しく、高貴——。

騎士ナイトという言葉がこれだけ似つかわしい人物にはじめて会った。

「あの。みなさん、俺なんかにそんなバカ丁てい寧ねいにしていただかなくても……。俺がこの場でいちばん歳とし下したでもありますし、ふつうに話してください」

ここにいる三人はサルバトーレ・ドニとはちがう。

特にパオロから丁てい重ちょうにあつかわれることに恐きょう縮しゅくし、護堂は申し出た。最年少の高校生としては当然の気き遣づかいだろう。すると、急にガンツが身を乗り出した。

「え、いいのか？　そりゃ助かる。七人目の王様は話がわかる男でいいな、おい」

「ジェンナーロ。いくら王自みずからの仰おおせでも、すこしは遠慮を見せろ」

　一方、クラレンスは同僚の言動に眉まゆをひそめた。そして言う。

「ご案じ召されますな、王よ。魔王の方々に敬意を払うのは、魔道にかかわる者として当然の振るまい。むしろ、気さくに話しかける方がむずかしい。しかし」

　ことさら恭うやうやしく奏そう上じようしてから、禿とく頭とうの黒人はにやっと微笑してみせた。

「幸いにもこのクラレンス、臨りん機き応おう変へんの才に困るほど落ちぶれてはおりません。まあ、今のお言葉を胸に刻みつけ、いい具合に案配いたしましょう。以後お見知りおきを」

　あげく、ソファにすわったまま優ゆう雅がに頭を下げてみせる。

　クラレンスの凝こった言いまわしと優美さに、護堂は苦笑した。今の切り返し、いかにもエリカの同僚らしい。

　一方、配下それぞれの反応にパオロも苦笑しつつ、こう言ってきた。

「草くさ薙なぎ護堂、あなたは王だ。もちろん、あなたの意向は最大限尊重したい。が、われら騎士の敬意を受け取ることも王のつとめと、多少は割り切っていただけるとありがたい」

「け、敬意ですか」

「私たちは全てのカンピオーネに最高の敬意と畏い怖ふを捧ささげる。彼らがどのような気性、経歴の持ち主であっても。神殺しとはそれに値あたいする偉業なのだから」

　まっすぐ護堂の瞳を見つめながら、パオロは語りかけてくる。

　視線の真しん摯しさと力強さに引きこまれて、護堂はついうなずいてしまった。

「そして、全ての魔王方への敬意とはべつに、私個人は草薙護堂に最大限の便べん宜ぎを図ると約束したい。あなたが欧おう州しゅうにいるときはもちろん、そうでない地にいるときでも」

「えっ⁉」

　思わぬ申し出に驚く護堂へ、パオロは男らしい微笑を見せた。

「理由はいくつかある。ひとつはあなたの人となりを伝え聞き、なかなか好ましい少年だと思ったからだ。そして、もうひとつは恩義のため。草薙護堂がいなければ、私の姪は生きてミラノへ帰ってくることもなかっただろう」

「いや、俺だってエリカには助けてもらいましたし」

　サルデーニャ島での出会い以来、ふたりで助け合いながらやってきたのだ。

　そして、エリカが護堂を助ける割合の方がより大きかったはず。恩義を云うんぬんするなら、むしろこちらが恩に着るべきだ。

　だが、護堂がかぶりを振ると、パオロは急に言いにくそうにした。

　すこしためらい、せき払い。それから、ゆっくり言葉をしぼり出していく。

「だったら、もうひとつ付け足そう。まあ、あれだ。エリカの亡き両親に代わって、娘の相手に力添えのひとつもしなければと思うわけだよ。親代わりの叔お父じとしては」

「あ、相手——」

　護堂はハッとした。そういえば、今の状況。よく考えてみれば『只ならぬ仲』となった少女の実家を訪れ、彼女の親と対面している図になるわけで……。

「だから、私には君を後押しすべき理由が公私どちらにもある。幸か不幸か、物わかりの悪い父親役をやるには、君は破格すぎる存在だしな」

　ぽろりと〝君〟呼ばわりするあたりに、パオロの困惑が見て取れ

た。

　しかし、文句を言う気など護堂にはもちろんない。逆にその素そ朴ぼくな不器用さ、場慣れしない父親代理としての振るまいを好ましく思った。

「まあ、あれはすこし頭がよすぎる娘だ。その相手がエリカと同じほどの切れ者でも、サルバトーレ卿きょうほどの自由人でもない事実を、今は素直によろこんでいるよ」

「そう言っていただけると、助かります……」

　護堂とパオロ・ブランデッリはしばらく見つめ合い、それから同時に苦笑し合った。

　エリカの叔父は姪ほど曲くせ者ものではなく、さっぱりした気性の常識人らしい。才気煥かん発ぱつな切れ者に振りまわされる者同士だからか、不思議な共感を覚える護堂だった。

　そんなパオロと護堂を見て、ガンツがしみじみと言う。

「それにしても、七人目の王様は言っちゃなんだけど〝まとも〟だな。こりゃ天変地異の前ぶれかね？　まさか、性格のおだやかな魔王なんて代しろ物ものが生まれるとはって」

「何を言うんだ、ジェンナーロ」

　パオロは配下をたしなめるように言った。

「どれだけ善良でおだやかでも、カンピオーネたる者が人じん畜ちく無む害がいであるはずない。予言してもいいが、これから草薙護堂は全世界を震しん撼かんさせる魔王になっていくはずだ」

「ぱ、パオロさん？」

「すまない。君にそのつもりがないのは今までの報告でわかっているんだが……まちがいなく君は〝そういう存在〟になるだろうな。私は不幸なことにカンピオーネの方々とつきあいが深い方でね。その経験が教えてくれるんだ」

「はあ」

　このとき護堂は『パオロさんは心配性なんだな』と思っただけで、反論は避けた。

　何人もの同族と知り合ったあとでパオロの言葉と自らの悪あく行ぎようを思い出し、本当に予言であったと痛感させられるのは数か月後の話である。

　ひとまずコメントをひかえる護堂の前で、パオロは感かん慨がい深げに言った。

「それにしても、エリカの見つけた相手が七人目のカンピオーネとはな……」

「いや、本当に。まさか、あの姫が……」

「あの雌め狐ぎつねがなあ……」

　クラレンスとガンツのふたりも遠い目をして感慨にふける。

　どれだけエリカは『じゃじゃ馬』だと思われてるんだ——護堂が返答に困ったとき。

「みんな、どうかしたの？　そろって神妙な顔をして。何か変よ」

　がちゃりとドアが開いて、エリカが入ってきた。

　男性魔術師たちはすぐさまいつもの顔にもどり、居ずまいを正した。三人を代表してクラレンスが何食わぬ顔で答える。

「べつに何でもない。それより姫、もう行くのか？」

「ええ。フィレンツェで情報も集めておきたいしね」

　エリカは紅あかいジャケットと黒のジーンズに着替えて、シンプルに紅と黒ロツソネロをコーディネートしている。旅行用ケースも転がして、すっかり旅支度だ。

　トスカーナへ向かう前に、すこし《赤銅黒十字》の本部へ寄っただけ。

　これからが旅の本番なのだ。次の行き先は古都フィレンツェ。この街を流れ、トスカーナ州を東西に横切る大河がアルノ川である。

ウナギに似たバケモノの住処すみかは、この川の源流に近い山岳地帯なのだ。

3

「でも意外だったな。おまえが電車に乗りたがるなんて」

護ご堂どうはすこしだけ退屈そうな連れに声をかけた。

まもなくミラノ駅を発つ特急列車の、ゆったりとした一等席だ。

しかし、隣にすわるブランデッリ家の令嬢には『バスだの鉄道だの、わたしが使うはずないでしょう』と明言した過去がある。

「まあ、フィレンツェへ行くときは車や飛行機よりも速いそうだし。それにあなたったら、ジェンナーロの『車で送ろうか』なんて誘いに乗りかかっていたのですもの」

すこしだけ機嫌の悪さを表に出しつつ、エリカは答えた。

「いけなかったのか？」

「いいわけないわ。あの人のことだから、ここぞとばかりに車のなかで日本製幼児向けアニメを再生し続けたはずよ。あなたに見せるために」

「あ、あにめ？」

「そんなのにつきあうのは、絶対に御ご免めんこうむりたいもの」

護堂はジェンナーロ・ガンツの強こわ面もてを思い出した。

やたらと男くさいひげ面づら。バンダナを頭に巻けば、立派な海賊ができあがる。あの顔とアニメがとても結びつかない。しかし、エリカがウソを言うとも思えず……。

「人間、いろんな趣味を持ってるもんだなあ」

短くコメントするにとどめた。話しているうちに列車も走り出

す。

　この一等車ではミネラルウォーターからコーヒー、ワイン、シャンパン等まで、サービスで供される。そのうえ菓子類や軽食まで。

　だが、エリカは持参していたバスケットをおもむろに開けた。

「どうしたんだ、それ？」

「助手の子に着替えを持ってきてもらったのだけど、その子が気を利きかせてくれたの。これも旅のお供にどうぞって」

　バスケットの中身は手作りとおぼしきサンドイッチがいくつも並んでいた。

　トーストしたパンで、具材——生ハム、モッツァレラチーズ、プロシュート、レタスやルッコラなど葉物野菜をはさみ、実に見栄えがいい。

「へえ。美う味まそうだな」

「《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》で徒と弟てい——魔術師見習いをしていた子で、才能がなくて除籍されそうになったの。でも、家事とか得意だというから、わたしの助手兼メイドをまかせてみたのよ。おもしろい子だから、そのうち紹介するわ」

　連れの口ぶりから、護堂は一〇代前半の女の子を想像した。

　これが実はエリカより歳とし上うえのアリアンナ嬢だったと知り、えらそうな言いぐさにあきれるのはもうすこし先である。

　ともあれ、見知らぬメイド少女の心づくしに舌した鼓つづみを打ちながら、列車の旅を続ける。

　流線型の高速列車はミラノからフィレンツェまでを二時間強で走り抜けた。

　護堂はその間、エリカとのんびり話したり、イタリアの新聞に目を通しながら、ゆったりとすごした。これから危険なバケモノの巣に近づくというのに、特に緊張もせず。

　なんとなく直感していたのである。

　ウナギ似の巨大生物が本当に神しん獣じゅうであっても、おそらく苦戦はしないと。

　護堂も『猪いのしし』という神獣を使う身だからか、直感的にわかるのだ。苦戦するとすれば、近くに主あるじである『まつろわぬ神』かカンピオーネがいるときだけ——。

「さすがにそんな連中とは出くわさないよなあ」

　フィレンツェ駅のホームに降りながら、護堂はつぶやいた。

　古代中東の神王メルカルトと戦ったのは一か月前。神殺しサルバトーレ・ドニと戦ったのはつい昨夜のことなのだ。

　こんな大イベントがそうそう起こるはずない。確率論的にありえない。

　見あげれば、イタリアの夕焼け空が広がっている。

　夕ゆう陽ひの紅色と宵よい闇やみの黒が玄げん妙みように混じり合い、日本とはまた趣おもむきのちがう黄昏たそがれ時どきだ。

「今夜はフィレンツェに一泊して、この街の魔術師と会食ついでに話をしましょう。《百ゆ合りの都みやこ》という結社が事件解決に当たっているの。まず彼らから情報を——」

　エリカが言いかけたとき、彼女の携帯電話がメロディで着信を報せた。

　護堂はイヤな予感を覚えた。この音が不吉の前兆に思える。そう、チャチな確率論を吹き飛ばすため、理り不ふ尽じんの国から来た使し徒とのような——。

　エリカは液晶画面で発信者の名をたしかめるなり、すぐ電話に出た。

「どうしたの、叔お父じさま？　えっ、サルバトーレ卿きようが？」

　そして護堂は、いちばんの危険要素を忘れていたことに気づくのだった。

古都フィレンツェはイタリアでも有数の知名度を誇る。

この街を流れる大河アルノ川は、トスカーナ州の大地を東から西へと進み、やがてティレニア海にいたる。その河口付近にはピサ——斜しや塔とうで有名な古都もある。

やはり水こそが人の営いとなみに欠かせぬものであり、水のほとりに都市は生まれるのだ。

今回はアルノ川の源流へ向かう旅。

となれば当然、フィレンツェから東に向かうべきである。

しかし、護堂とエリカは迎えの車に乗って、フィレンツェの南方に向かった。そして到着したのはトスカーナ州のほぼ中央に位置する都市、シエナ。

この都も起源は古い。かつて古代ローマ帝国の植民市であったという。

中世の街並みをそのまま遺のこした歴史地区は、街全体が世界遺産に登録されている。名所として特に有名なのが『世界一美しい広場』カンポ広場だ。

赤レンガを敷きつめた広場なのだが、実は平坦ではない。

すり鉢ばちの底のように、ゆるやかに傾斜している。市民や観光客はこの斜面に座りこんだり寝転がったりして、思い思いの時間をすごすのだ。

「ここまで来ると、バラエティ番組の旅企画だな……」

今日一日の移動経路を思い出して、護堂はうんざりした。

ガルダ湖、ヴェローナ、チューリッヒ、ミラノ、フィレンツェ、そしてシエナ。

いずれも由ゆい緒しよある古都にして観光地。それらをほとんど素通りして、こんなところまで来てしまった。国境すら越えての強行軍である。

　シエナに着いた頃には、すっかり夜になっていた。

　あちこち見てまわる刻限ではない。にもかかわらず、護堂とエリカはカンポ広場に連れていかれた。見物ではなく、待ち合わせのためだった。

「やあ護堂。ひさしぶりだね、我が心の友よ！」

　今け朝さ会ったばかりの青年が待っていた。

　その明るさと軽薄さはまさにラテンのノリで、彼にひどく似つかわしい。サルバトーレ・ドニ。剣の王として知られるカンピオーネである。

　半袖の黒いシャツにコットンパンツ、スニーカーとあいかわらずラフな装いだ。

　そして、足下に転がした円筒型ケース。中身はまちがいなく、物ぶつ騒そうな凶器のはずだ。

「用があるなら自分から来いよ。俺たちはべつの場所に行く途中だったんだぞ」

「それがさあ。僕の側近にすごい堅かた物ぶつがいるんだけど、彼に遠出を禁止されてるんだ。最近ハメを外はずしすぎだから、しばらく街の外に出るなって」

「あんたの身近にもちゃんと常識人がいるんだな……でも」

　ぼやき節のドニへ、護堂はさらに文句をつけた。

　ドニ～パオロ～エリカ経由で伝えられた『ちょっと会いにきてよ♪』。無視してもよかったのだが、そうしたらドニがまたバカをしでかすのではないか。

　それを危き惧ぐして、シエナまで来たのである。

「だからって、その謹きん慎しんに俺たちを巻きこむなよ」

「でも君、ファルテローナの山に出るっていう神獣、退治しにいくんだろ？」

　にやにや笑いながらドニは言う。

　昨日の今日でその情報をもう知っているとは。護堂は肩をすくめた。

　軽薄な愚おろか者に見えて——いや、実際そのとおりなのだが、同時に抜け目なさと自然な狡こう猾かつさも併あわせ持つ。つくづく不思議で油断できない男だった。

「悪いけど、ちょっと遠慮してもらおうか……なんてね」

「俺の代わりに、あんたがバケモノ退治に行くっていうのか？」

「そうそう。うるさいアンドレアをどうにかしたら、パパッと行ってくるからさ。今回は僕にゆずってよ。僕と君の仲だろ？」

　護堂はいぶかしんだ。たしかにサルバトーレ・ドニは気さくなくせに好戦的な男。だが、この発言はどうも彼らしくない。

「卿。ファルテローナ山で目撃されたのは、神獣と目される生物が一体だけ。カンピオーネである卿には弱敵もいいところでしょう」

　探るように口をはさんだのはエリカだった。護堂もうなずく。

　そうなのだ。駆け出しの護堂でさえ、神獣一体を脅きよう威いと思わないのである。歴戦の勇者であるドニなら尚なお更さらだろう。なのに、自分で倒すという。

　その執しゆう着ちやくが妙だった。むしろ嬉き々きとして面倒事を護堂に丸投げしそうである。

「そのような些さ事じ、わたしたちにおまかせいただきたく思うのですが」

「うん、たしかにそうなんだけどね。こっちにも事情がいろいろあるのさ」

　エリカにつっこまれて、ドニは飄ひよう々ひようと笑った。

「事情？　何だよ、それ？」

「まあまあ。そのあたりはないしょってことで——」

護堂の追及にもとぼけて、ドニは円筒型ケースを拾いあげた。

そこから引っぱり出すのは鉄製の長剣。銀の腕の権けん能のうで超絶の切れ味を発揮する武具だ。これをドニは無造作にかまえた。

「俺を斬きり捨てて、バケモノ退治に行かせないつもりか？」

「まさか。僕ら、昨日あれだけの死闘を繰りひろげたばかりじゃないか。翌日いきなり再戦なんて風ふ情ぜいがなさすぎるよ。これはただの賭かけ。ゲームだよ」

ドニは剣の切っ先を護堂に向けて、突きつける。

「僕の一ひと太た刀ちを封じることができれば君の勝ち。今回の神獣退治、君にまかせよう。でも、封じられなかったら……僕の好きにさせてもらう」

「ったく。勝手に決めやがって……」

いきなり通告されて、護堂はわずかに腰を落とした。

守備についた内野手のように身がまえる。ドニの剣にそなえるためだ。

そういえば——。護堂は気づいた。まだ夜の七時台だというのに、カンポ広場には自分たち以外の誰もいない。

あやしい魔術で人払いしたか、魔王の影響力を駆使して通行止めでもしているのか。

いずれにしても、対決の状況はととのっていた。

「護堂、やる気なの!?」

「このままこいつにまかせたら、絶対におかしな事態になるからさ。仕方ない」

心配そうなエリカに答える。その間も注意はサルバトーレ・ドニに向けている。

敵は長剣を右肩にかつぎあげるようにしてかまえた。

日本の剣術でいえば八はつ相そうの構えだ。しかし、ドニ本来の

構えは融ゆう通ずう無む碍げな自然体。こんな攻撃体勢、いつもはととのえない。宣言どおり本気で戦うつもりはないのだろう。

　だからこそ攻撃の構えを見せ、ゲームを楽しもうとしている。

　一歩まちがえば死人が出る、危険すぎる死亡遊ゆう戯ぎであったが——。

（……とにかく『鳳おおとり』の速さでどうにかして避けてみる）

（……気をつけなさい。そうかんたんに事を運ばせてくれる相手じゃないわよ）

　ささやき声で告げてから、エリカはさっとはなれていった。

　ついにドニと一対一。敵の右腕が銀色の輝きを放つ。

　昨夜の決闘は、ほぼ二四時間前。あのとき剣の言こと霊だまで封じた『銀の腕のヌアダ』の権能もきちんと回復し、使用可能になっていたのだ。

「ふふ……おたがい手の内はわかっている。そこが昨日とのちがいかな」

　静かにドニが微笑ほほえむ。いつものバカっぽい笑顔とはちがう。

　命のやりとりを心底から愉たのしむ男の、ほの暗い愉ゆ悦えつの笑みだった。軽薄なハンサム顔が精せい悍かんな戦士の顔に変わっている。

　護堂とドニの間には、五メートルほどの距離が横たわる。

　ドニが跳び込みざまに剣を繰り出せば、この距離は一瞬にして埋まる。

　そう、勝負は一瞬で決まるはず。しかし、ドニの剣技の鋭さ・速さが護堂に『鳳』を使わせてくれる。雷かみなりと同等のスピードを持つ、ウルスラグナ第七の化身を——。

　速すぎて精密な動きができないため、攻撃するときは役立たない。

　が、防御と逃走に専念するなら、これほど役立つ力はない。ドニが剣を振りおろした瞬間に神速を振りしぼるべく、護堂は身がまえていたのだが。

　不意にぞっとした。体にまとわりつく空気が重い。

　ドニの視線のせいだ。護堂をにらんでいるわけではない。凄すごみもない。それは涼やかで、おだやかとさえいえるほど静かなまなざしだった。

　しかし、見られている。護堂は確信した。

　草くさ薙なぎ護堂の全身、一いつ挙きょ手しゅ一いつ投とう足そく、急な戦いにはやる胸の鼓動、息づかい。その全てを見られている。聞かれている。観察されている。把は握あくされている。

「やっぱり、守り切るのは無理な相手か……」

　そっと護堂はつぶやいた。敵が言ったとおり、たがいに手の内を知っている。

　神速すら見切る、サルバトーレ・ドニの眼力。気づけば懐ふところへ入り込んでくる玄げん妙みような歩法。おそろしく避けづらい剣さばき。

　一瞬の攻防とはいえ、剣けん仙せんめいた武術の数々を防ぎ切れるか。

　ドニと目が合う。敵はフッと不敵に微笑んだ。その瞬間に肚はらが据すわる。できれば、いちばん無害な『鳳』でしのぎたかったが――

　最高の技を打ち砕くには、最強の力を繰り出すしかない！

「鋭く近寄りがたき者よ、咎とが人びとに裁さばきをくだせ！」

「僕は誓う！　この世の全てを斬り伏せ、両断してみせると！」

　それは手の内を知る同士だからこその、シンプルな激突だった。

　厄やつ介かいな攻撃を受ける前にこちらの切り札をぶつけ、そのまま押し切りにかかる――。

　結果、護堂が呼び出した『猪』はカンポ広場の石いし畳だたみを豪快にぶち破りながら、地上に躍おどり出ようとした。ついでにドニへ頭突きを仕掛ける形で。

　ドニはドニで神獣が地面から出てきた瞬間、黒い額ひたいに魔剣をたたきつけた。

　オオオオォォォォォォォォォオオオンンンンンンンッ！

　獣けものの咆ほう哮こうと轟ごう音おんがとどろく。

　銀の腕が振るう魔剣は『猪』の額に深々と刺さり、黒き神獣は頭半分が地表に出たところで消滅していく。しかし、ドニは「しまった！」と叫んだ。

　強引すぎる形ではあったが、護堂がドニの一太刀を封じてみせたからだ。

　剣と体が天然自然に動くにまかせる。それがドニの無む想そう剣けん。こちらから強烈な攻撃をぶつければ、無意識にカウンターで迎え撃つだろう——。

　まさに予想どおり。護堂は大きくうなずいた。ただ、しかし。

「護堂が勝負に乗ったときから、こうなるんじゃないかと思ってはいたけど……。あなたって本当に期待を裏切らない人ね」

　カンポ広場に刻まれた〝代償〟を見つめ、あきれ気味にエリカが言った。

　深く大きな、断層じみた裂け目である。横一文字の裂け目が広場の端から端までを深々と抉えぐり、引き裂いていた。

『猪』を呼び出す際、カンポ広場そのものを破壊目標にしたせいか。

　黒き神獣は地中から出てくる際、さっそく広場にダメージをあたえていたのだ。

　護堂は頭をかかえた。まあ、『猪』が本格的な破壊活動をはじめる前に消滅したため、この程度の被害ですんだわけだが——。

「ち、ちょっと待った。今のはすこしずるいよっ。もう一度やったらダメかな!?」

一方、往おう生じよう際ぎわ悪くドニが不服を唱となえる。

護堂は反省しつつも戯ざれ言ごとを聞き流す。とんでもない失態をしでかしたが、騒動の火種を前もって鎮ちん火かできたことが不幸中の幸い——。

しかし、ドニはどうして神獣退治などしたがるのだろう?

訊たずねようとしたとき、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。パトカーか消防車が出動したようだ。やはり目的地はここだろうか。野次馬も集まってくるはずだ。

それらの揉もめ事ごとを片づけるためか、エリカが携帯電話で連絡を取りはじめた……。

4

結局、カンポ広場の『後始末』はドニの配下にまかせる形になった。

ひとまず事件現場をはなれ、近くのバールに逃げ込んだ護ご堂どうたちのもとへやってきたのはアンドレア・リベラと名乗る青年だった。

銀ぎん縁ぶちのメガネをかけ、かちっとしたスーツを着ていた。

いかにも生き真ま面じ目めそうな彼は、ドニの執事役でお目付役なのだという。

その役職を聞いて、護堂は大いに同情したものだ。当のアンドレア・リベラは事後処理のため淡々とシエナの魔術結社に電話をかけ、いくつかの指示をてきぱきと出したあとで、護堂にくるりと向き直った。

「この件については、我わが主あるじサルバトーレ・ドニに非があ

ると言えましょう。一切の後始末はわたくしどもの方で取りおこないます」

「す、すいません。ご迷惑をおかけします」

「いえ、これも王に仕つかえる者として当然の行い。お気になさらずとも結構です。……が、それはそれとして、ひとつよろしいでしょうか」

　ドニの共犯者として頭を低くする護堂へ、リベラは言った。

「カンピオーネたる者が激情にまかせて荒ぶるのは致し方のないところ。しかし、我が主の愚ぐ行こうにつきあいよく応じる必要もなかったはず。あなた方の戯たわむれは時に無む辜この民たみを苦しめる災さい厄やくとなること、どうか御心におとめいただきたく思います」

　リベラは律りち儀ぎかつ剛ごう毅きに、王への諫かん言げんを淡々と口にする。

　これがあるからドニの監視役なのかと納得し、恐きよう縮しゆくもする護堂の前で、魔王の執事はエリカにもこう告げた。

「ではエリカ・ブランデッリ。神しん獣じゆうの件は君にまかせてかまわないか？　私はこのバ——もとい、サルバトーレ卿きようをある場所にご案内せねばならん」

「もちろんですわ、アンドレア卿」

　バカと言いかけたのかもしれない青年に答えてから、エリカは不思議そうな顔をした。

「ですが、卿を一体どちらへお連れするのでしょう？」

「サルバトーレ卿は草くさ薙なぎ護堂と戦われた際の傷が重く、療養を必要とする身だ。しばらく静かな環境に身を置いて、英気を養っていただく」

「えっ？」

　執事の言葉を聞いて、当のサルバトーレ・ドニがきょとんとする。

　昨夜、『白馬』で灼やかれて真っ赤に日焼けした以外、健康面で問題をかかえているとは思えない男である。ドニは能天気な顔で小首をかしげた。

「どういうことだい、アンドレア？　たしかに全身ひりひりしてるけど、それ以外はまあまあ健康体だと思うよ、僕は」

「そんなことはないだろう。いい機会だから、三、四か月ゆっくりしてこい」

　護堂への恭うやうやしさが一変して、リベラは対等の口調になった。

　見れば、こめかみが微妙に痙けい攣れんしている。怒りのせいだろう。のちにドニが神殺しとなる前からの友人同士と聞いて、護堂はうなずいたものだ。

　魔王の執事は『謹きん厳げん実じつ直ちよくな仏ぶつ頂ちよう面づら』とでも形容すべき表情で言い放った。

「インド洋の孤島にある監かん獄ごく同然の病院を貴様のために手配した。ここの地下一二階・特別病棟に強制入院させてやる。アルカトラズなど比ではない牢ろう獄ごくのなかで頭の中身を治療してくるがいい、生きているだけで世間に迷惑をかけるゴミ屑くず以下の存在め！」

　思えば、リベラの啖たん呵かがこの事件最大の山場であった。

　実際、ここからもそれなりに苦労はしたが、カンピオーネとの遭そう遇ぐう以上に厄やつ介かいな揉もめごとはなかったのである。

　愚ぐ行こうの報むくいとしてドニが連行されたあと、護堂とエリカはシエナに一泊した。

　翌日、天気はあいにくの雨。しかし、リベラが手配してくれた車と運転手に送られて、つつがなく事件の舞台に到着した。

　トスカーナ州の東端、カゼンティーノ地方である。

　自然ゆたかな地域で、緑の野原や丘、森や谷にあふれている。

　国立森林公園に指定されているほどだ。ここまで自動車で走ってくる間も、車道やまばらに点在する民家以外の人工物をほとんど目撃しなかった。

　ドニが言ったファルテローナ山について、エリカは教えてくれた。

「ファルテローナより出いでてトスカーナをさまよう川がある。百里を流れて尚なお、とどまることを知らず……ダンテの『神曲』よ。煉れん獄ごく篇へんの第一四歌」

「それがこの川なんだな」

　快走する自動車の後部座席に、ふたりはならんですわっている。

　車道のそばを渓けい流りゅうが流れていた。これがアルノ川。トスカーナの大地を流れるうちに雄ゆう渾こんさを増し、ゆったりとした大河になっていくという。

　雨のせいだろう。水量がだいぶ増しているように見えた。

「俺たちの行き先、そのファルテなんとかって山でいいのか？」

「だったら、わかりやすくてよかったのだけど。目標はどうやら住処をはなれて、居場所を転々としてるらしいの」

「一昨日、怪物が出たのはどういう場所なんだ？」

「ファルテローナ山のふもとにある中世の城しろ跡あとよ。といっても、すこし城壁が残っている程度で、ほかには何もない場所だけど」

　このあたりの地図を広げながら、エリカは言った。

「実はね、昨日もべつの城跡に神獣らしき生物が現れたらしいの。で、城壁を突き崩したりして一暴れしたあと、去っていったようよ。幸いにも巻きこまれた人間はいなかったけど、街にも近い場所だったから……そろそろ危ないでしょうね」

「たしかにな。ところで、その蛇へびだかウナギの怪物」

　今の話で気になったところを、護堂はつっこんで訊きいてみた。

「二回とも城跡に出たっていうけど、古い場所が好きなのか？」

「かもしれないわね。あとはもしかしたら、水の近くが好きとか」

「水だって？」

「ええ。古来、都市と集落は水の近くに造られるものよ。この土地の場合、古くからある街や建物は当然アルノ川流域に多いの。そして、二度目の出現場所がここ」

「へえ。本当に川の近くなんだな」

　エリカが指した地図の一点を見て、護堂はうなずいた。

「その辺も考慮しながら、フィレンツェの魔術師たちが行方ゆくえを追っているところ。推測が当たりなら、今日中に発見されてもおかしくないわ」

「じゃあ、うろうろ探しまわるより——」

「彼らの捜査報告を待つ方が賢いでしょうね」

　護堂たちはファルテローナ山とアルノ川の水源に近い街で待機することにした。

　そして、深夜と呼んでいい時間帯に、エリカの携帯へ発見報告が来た。

　即座に車を出してもらい、アルノ川へ急行。

　そして護堂は見た。篠しの突つく雨のなか、水量を増した川の水面みなもを黒く細長い生物が泳いでいるのを。たしかに巨大ウナギに見えなくもない。

　護堂はレインジャケットを着こみ、大雨で荒れたアルノ川へ近づいていった。

『敵』を観察してみるつもりだったのだ。しかし気配に気づいたか、黒い生物はさっと水中にもぐってしまう。

　凶悪な怪獣らしからぬ警戒ぶりに、エリカが首をかしげた。

「偵察役の魔術師を見ても悠々としていたらしいのに……。まさか

護堂がカンピオーネだと気づいたのかしら？」

「神獣って、そんなこともできるのか？」

「超自然の生き物だから、できてもおかしくはないわね。偵察役にまざっていた霊視術師が蛇神にゆかりのある神獣だろうと霊視したみたいよ」

「じゃあ、ウナギの線はやっぱりなしだな」

　ともあれ、つかまえなくては話にならない。

　夜を徹しての追跡がはじまった。フィレンツェの魔術師たちにもひきつづき協力を要請し、探索の魔術を使い、携帯電話で連絡を取り合い、車を走らせる。

　夜が明け、早朝というべき時間帯。護堂とエリカはふたたび怪物と対たい峙じできた。

　場所はポッピという田舎いなか街まちで、アルノ川のほとり。

　近くには一五世紀の建築だという中世の城が建っていた。

　悠ゆう々ゆうとうろつく怪物を借り物の双眼鏡で眺めてから、護堂とエリカはつぶやいた。

「ウナギどころか蛇でもなかったか……」

「むしろ恐竜よね。昔、ああいうのを映画で見たわ」

　科学の力で恐竜を復活させたテーマパークが舞台のアクション映画。

　あの作品を代表する恐竜の近きん似じ種しゆが目の前にいた。作中ではヴェロキラプトルと呼ばれていた。細身で俊しゆん敏びん、獰どう猛もうかつ狡こう猾かつな肉食恐竜だ。

「恐竜好きが言ってたけど、本当はデイノニクスとかユタラプトルっていうらしいな」

「あら、見た目どおりの名前なのね」

「どういうことだ？」

「デイノニクス。ラテン語で『恐ろしい爪』という意味よ」

　語学堪かん能のうなエリカの解説を聞いて、護堂はうなずいた。

　黒いデイノニクスもどきは強きよう靭じんそうな後ろ肢あし二本で直立歩行しているのだが、その足先には鋭く大きな鉤かぎ爪づめがあったのである。

　体長は七メートルほどで、全体に細身だった。

　しかも、尾も長い。水面すれすれを泳いでいれば背中のラインしか見えないだろう。色が黒いこともあって、たしかに蛇やウナギと見まちがえそうだ。

「ふつう、そこらの川に恐竜がいるなんて思わないもんなあ……」

　ウナギ説が出た理由を悟りながら、あいつを倒せと『猪』を呼び出す。

　水中に逃がしたら厄介なので、すぐに片づけなければいけない。漆しつ黒こくの大猪は期待どおりの迅じん速そくさで恐竜もどきを蹴け散ちらしてくれた。

　ＫＯタイムはよく覚えていないが、三、四分だったはず。

　まあ、戦闘以外のところで問題も起きた。『猪』が発した吠ほえ声は例によって超音波をふくんでおり、長雨でもろくなっていた地面を突き崩したのだ。

　たまたま丘の斜面に立っていた護堂の足場まで崩れてしまった。

　斜面を転げ落ちた護堂はそのままアルノ川に落ちて、水量を増して濁だく流りゆうとなっていた川に流され、何時間か漂流する羽目になった……。

　しかし、護堂はこの辺の出来事を自然と忘れてしまった。

　カンピオーネになった年の五月は、トラブル続きだったせいだ。

　月のはじめにドニと決闘し、そのままトスカーナへ遠征。帰国して一週間もしたらエリカにイタリアへ呼び出され、何十人もの魔術師が集まる降霊会とやらに強制参加。月の終わり頃には女神アテナ

との対決という一大イベント——。

　その後も戦いと揉もめ事の連続である。

　戦いよりも移動で苦労した事件など、どうしても印象がうすくなる。

　だから九か月の間、ほとんど思い出すこともなかった。しかし、この出来事がのちに草薙護堂を厄介な冒険へと導みちびくのである。

第２章　イタリアからの便り

1

　草くさ薙なぎ護ご堂どうは年の瀬と正月を赤道直下の南洋ですごした。

　ついに帰国し、家に帰ってきたときは正月気分とはほど遠い心境であった。

　しかも祖父はブータンに旅立ったきり。妹の静しず花かもカリブ海ツアーの最中。母は日本にいるはずだが、この時期は正月宴会を渡り歩く日々なので、ほとんど顔を合わせない。

　とはいえ、ようやく帰ってきた日本である。

「せっかくの正月だし、冬休みの間に初はつ詣もうでをすませようと思うんだ。万ま里り谷やのところに行ってみないか。新年の節目として」

「「…………」」

　草薙家へやってきたエリカとリリアナを誘ったら、微妙な視線が返ってきた。

　ちなみに、恵え那なは実家のある秩ちち父ぶへ帰国早々もどっている。

「初詣。たしか日本の風習でしたね。年のはじめに神社を訪ね、願掛けをする」

「神様を殺した人が神に願いごとをするのって、どうなのかしらね……」

「い、いいだろうっ。俺だって人並みに正月っぽいことをしたいんだ。大体、日本の神社なんて、どんな神様を祀まつってるのかよくわからないところばっかりだし！」

　リリアナが感かん慨がい深げにつぶやき、エリカは皮肉っぽく遺い憾かんの意を示す。

　騎士ふたりの反応に、罰当たりなことを口走る護堂だった。

　それでも三人は連れ立って芝しば公こう園えんへ出発し、足しげく通っている割に縁起も祭神も知らない七なな雄お神社を訪れたのである。

「お帰りなさいませ、お兄さま！　お正月はご苦労さまでした！」

「みなさん、お寒いなか、よくいらしてくださいました。こちらへどうぞ」

　七雄神社の境けい内だいでは万里谷家の姉妹が出迎えてくれた。

　ひかりと祐ゆ理りである。神社の『繁はん忙ぼう期き』である年末年始、媛ひめ巫み女この彼女たちも連日おつとめを続けている。護堂は巫み女こ装しよう束ぞくの姉妹に声をかけた。

「ひかりは去年の終わりから、毎日来てるんだって？」

「はい。これでもお姉ちゃんの名みよう代だいですから！」

「がんばってくれたみたいで、大おお晦日みそかも三が日もつつがなくおつとめできていたそうです」

　冗談めかして答える妹を、姉がやさしいまなざしで見つめる。

　武蔵むさし野のの重要な聖域のひとつだという、七雄神社。ここを『媛』としてあずかる正規の媛巫女は祐理である。ひかりはまだ見習いにすぎない。

　が、姉が護堂のつきそいでマレーシアへ旅立ったため、代役をまかされたのだ。

「それにしても、この神社に参拝客がいるのも珍しいな」

「いつもはほとんど人ひと気けがないものね」

　リリアナとエリカが珍しそうに境内を眺めている。

　七雄神社についての情報は、正せい史し編へん纂さん委員会が規制しているという。このため、近所の人々以外にはあまり知られていないのだとか。

　だからなのか、参拝客はめったに見ない。だが今日はちがった。

　いつも見かけない一般人らしき人々が一〇名ほど、正月らしくのんびりと歩いていた。年配の人ばかりで、護堂たち以外に若者はいなかったが。

「やっぱり、時期が時期ですから。ご近所の方々や、昔から懇こん意いにしている方たちもわざわざ初詣にいらしてくださるんですよ」

　事情を教えながら、祐理がみんなを境内の一角に案内してくれた。

　折りたたみ式のテーブルをならべて、おみくじや破は魔ま矢やなどを販売している。七雄神社にしては珍しい、ふつうの神社じみた光景だ。

　売り子は短期アルバイトとおぼしき、若い巫女さんたちである。

　ここでは甘酒まで振る舞ってくれるという。護堂はエリカ・リリアナといっしょに熱々の甘酒をありがたく頂ちよう戴だいして、寒気で冷えた体をあたためた。



　それから拝はい殿でんに向かい、賽さい銭せん箱ばこにコイン投入後、鈴を鳴らして二拍手。

　だいぶ適当なお参りだが、とにかく初詣は完了した。正月らしいことをひとつできたので、大いに満足する護堂だった。

　そして、初詣の翌日。草薙家に妹の静花が帰ってきた。

　しかも、同じ日に祖父の草薙一いち朗ろうもひょっこりもどってきた。

「これはおみやげだけど……ちゃんとハワイで買ってきたものだよ」

「って、いまどきマカダミアナッツか」

　菓子箱と共にいたずらっぽく祖父は申告し、護堂を苦笑させた。

　ここで『ブータンを旅してきたんじゃないのか？』とつっこまないのは、草薙家の家風だろう。一方、静花が首をかしげていた。

「ずっと海外にいたおじいちゃんはともかくさ……」

　ひさしぶりに会った兄の顔をしげしげ見つめながらの質問だった。

「お兄ちゃんはどうして日焼けしてるの？　海水浴でもしてきた感じだけど」

　かく言う静花もよく焼けていた。

　カリブの海で真夏の日差しをたっぷり浴びてきたのだろう。『実は俺も東南アジアの方に行ってきたんだ』とは、さすがに言えず。

　護堂は妹から微妙に視線をそらし、ごまかすことにした。

「あー……正月はさ。南の方に住んでる友達に誘われて、そっちへ行ってたんだ」

「何それ!?　あ、さてはお兄ちゃん。その旅、エリカさんたちの誰かといっしょだったんじゃないでしょうね!?」

「…………」

「図星か。誰!?　エリカさん？　万里谷さん、リリアナさん？　それともまさか――全員まとめていっしょだった、なんてことじゃ!?」

　結局、静花は妙に察しよく真相を言い当ててしまったのだが。

　この間、祖父は事情をすこしも詮せん索さくしようとせず、護堂にウインクしてから夕食作りのため台所へ向かった。これもやはり、草薙家の家風だろう。

　そうこうする間に三学期がはじまる。

　正月がバタバタした割に、しばらく平和な日々が続いてくれた。

　まあ、いくつかトラブルはあった。たとえば静花といっしょに〝一ひと稼かせぎ〟したり、奥おく多た摩まで神しん獣じゆう退治をしたり。後者の件ではムカデ型の巨大生物と対決する羽目になったが、大事になる前にかたづけられた。

　このように、新しい年の一月をおおむね平和にすごしている間。

　護堂は試験勉強にも励んでいた。城じよう楠なん学院は三学期に中間テストを行わず、二月の初旬に期末テストのみを行うのである。

　そうして迎えた、二月はじめの放課後。

　護堂はクラスメイト三名といっしょに、高校の正門周辺をほうきで掃はいていた。

　掃除当番なのだ。時節柄、ゴミよりも落ち葉が多かった。共に当番をこなすのは名な波なみ・反そり町まち・高たか木ぎ――通称三バカの面々だ。

　あることを思い出して、護堂は友人たちに声をかけた。

「なあ。みんな、今年のバレンタインデーは予定とかあるのか？」

　何気ない質問。しかし、護堂はとっさに跳びのいた。

　二秒後、今まで護堂の頭があった空間にほうきの柄えが振りおろされた。大上段からの渾こん身しんの一ひと太た刀ち。剣道部所属の高木が打ち込んだものだった。

「バカ、何するんだよ!?」

「すまん、草薙。気づいたら体が自然に動いていた」

　時代小説の剣豪めいたことを、高木は人斬り浪人の顔で言った。

　今の斬ざん撃げきもみごとで、荒事に慣れた護堂でなければ回避不可能だったろう。

「だが許せ。今のはおまえが悪いんだぞ……」

「ああ。高木の言うとおりだぜ……」

「おまえは竜の逆げき鱗りんにふれたんだ。殺されても文句は言えねえ……」

「どうしたんだよ、みんな？」

　高木だけでなく反町・名波まで険しい顔つきになっている。

　三人の視線にわずかだが殺気がちらついたのを見逃さず、護堂はとまどった。何がこの連中を怒らせたのか、見当もつかない。

「おまえは今、リア充じゆうとして最もしてはならないことをした。よりにもよって二月一四日——恋愛資本主義に毒された現代日本で、一二月二四日とならぶ忌いむべきドゥームズデイの予定を訊く。そんな暴挙、神が許してもオレたちが許さん」

「ああ、絶対にだ」

　名波の演説に反町がすさんだ目で同意する。高木もかみつくように訊たずねてきた。

「そもそもだな、おまえのところにはいくつチョコが届く予定なんだ!?」

「一応、妹が毎年くれるけど。それ以外の決まった予定はないぞ」

　三バカの反応に困惑しながら護堂は言った。

「静花——妹のやつ、俺がもらってきた義理チョコの数を数えたあとで、妙に機嫌悪そうにくれるから、ありがたみもそんなにないし」

「くっ。しっかりチョコもらってやがるうえに、ツンデレ妹のイベントまで！」

「しかも、素すでエリカさまたちのことを忘れていやがる！」

「いや、あいつらとは仲いいけど、だからってチョコくれるとは限らないだろ。特にエリカのやつはそういうの気にしないか、めちゃくちゃサラッと流しそうだし」

　甘いものは嫌いではないが、格別に好きということもない。

　チョコレートに執しゆう着ちやくのない護堂はさらりと語ってから、本題に入った。

「でな。今年のバレンタイン、女抜きで集まってチョコを食おうみたいに、俺の知り合いが計画してるんだ。おまえたちも来ないか？」

「な、に？」

　この誘いに、なぜか名波が愕がく然ぜんとした。ほかのふたりも同じだ。

　三人の反応に首をかしげながら、護堂は勧誘を続ける。

「俺の知り合いにモテてモテて仕方ない人がいてさ。山ほどもらう義理チョコを、知り合いの男連中を総動員してどうにかしようってイベントなんだ」

「「「…………」」」

　正史編纂委員会の若き幹部、沙さ耶やの宮みや馨かおるの企画である。馨の個人的な知り合い十数人、〝おひとりさま〟だという独身の部下たち、甘あま粕かす冬とう馬まなどに声がかかったという。

　会場は三バカの知り合いでもある陸りく鷹よう化かの店、秋あき葉は原ばらのメイド喫茶『國こく士し無む双そう』。

　予想されるチョコの量に対して、参加予定者の数はまだ足りてないらしい。

「く、草薙もそこに行くのか、もしかして……？」

「その日はまだ予定ないし、一応そのつもりだ。おまえたちもよかったら、どうだ？　クリスマスに似たようなことやってたし、こういうの結構好きだろ？」

「「「…………」」」

「あ、でも、企画した人が言ってたんだよな。俺は来ない方がいいって。仲間はずれにされる理由がよくわからないんだけど」

　ぼやく護堂の前で三バカたちはいきなりくずおれ、打ちひしがれてしまった。

「ちくしょうっ。二月一四日にさらりとそんな予定をいれやがって……！」

「こ、この余裕が持てる者と持たざる者の差か……」

「大体だな！　そんなふざけた企画を考える野郎はどれだけモテるっていうんだよ!?」

「えっ？　いや、まあ、あの人はちょっと無茶苦茶すぎるくらいモテるから、信じられないかもしれないけど……」

　いきなり根本的なことを質問されて、護堂はたじろいだ。

　考えてみれば沙耶宮馨という人物、正史編纂委員会の件を抜きにしてもリアリティがなさすぎる。なにしろ少女マンガから抜け出てきたような美形なのだ。

　この男子三人組になんと説明したものか。頭を悩ませる護堂だった。

2

「割合かんたんなものだと……チョコとエスプレッソ風味のティラミスとか」

　すこし考えてから、リリアナ・クラニチャールは提案してみた。

　放課後の教室である。ただし、リリアナが所属する一年五組ではなく、隣の六組だった。こちらのクラスの万ま里り谷や祐ゆ理りと、ほか二名に招かれてきたのだ。

　今、リリアナはお菓子作りの講義中なのだ。

「卵黄やマスカルポーネチーズで作るチーズクリームに、あまり甘くないチョコレートやエスプレッソコーヒー、白ワインを加えて作る」

「うん。たしかにおいしそう。でも」

「それだとチョコというより、ケーキって感じじゃない？」

　コメントしたのは六組の宮みや間まさんと澤さわさんだった。

「そこは目をつぶるしかないような……。市販のチョコレートを溶かして成形するだけだと、大体もとのチョコより味が落ちるからな。生チョコやトリュフにする手もあるが、はっきり言って市販品の方がだいぶおいしいと思う」

「お店でテンパリングするようにはいきませんしね……」

　リリアナが割り切るようにつぶやくと、そばにいた祐理も困り顔で言った。

　講義の発ほつ端たんは、宮間さんの相談である。

『バレンタインも近いしチョコを作ることになったんだけど……どんなのがいいかな？』

　同じクラスの料理上手・祐理がまず相談を受けたという。

　しかし、彼女はふつうの料理ほど洋菓子作りにくわしくない。そ

こで仲間を呼んだのだ。休日にはケーキを作ることも珍しくないリリアナ・クラニチャールを。

「せっかく手作りするわけだし、こだわりたい気持ちはわかる」

　リリアナは宮間さんにうなずきかけた。

「あなたの恋を応援するためだ。いくらでも相談に乗るから、じっくり計画を練るといい」

「え、ええっ!?　ち、ちがうよ。これは告白とかじゃなくて！」

「宮間のはただの部活動よ。この子、実は料理研究会なの。で、バレンタインも近いし、次の部活のときにチョコを作るってなったみたい」

「なんだ、そうだったのか」

　小こ柄がらな宮間さんが顔を真っ赤にしてあわて、メガネの似合う澤さんがクールに語る。

　リリアナは拍ひよう子し抜ぬけした。二月一四日の『本番』に向けて、レシピの準備に余念がない彼女である。宮間さんも仲間だと思ったのだ。

「リリアナさんと万里谷さんは……訊きくまでもないわね。どうせ草くさ薙なぎにチョコとかあげるんでしょう？」

「わ、私が護ご堂どうさんに、ですか!?」

　澤さんが肩をすくめて言うと、急に祐理が狼ろう狽ばいした。

「あの、私、父と祖父以外の男性にそういう贈り物をしたことがないのですけど……やっぱり、がんばってみるべきなのでしょうか!?」

「その辺は万里谷さん次第、かなあ。私たちが何か言うことじゃないって」

「た、たしかにおっしゃるとおりです。じゃあ、早く準備をしないと駄目ですね……」

祐理が小声でささやく一方、澤さんと宮間さんは目配せし合った。

「草薙くんってさ。『いい人』なんだけど、すごい『ろくでなし』でもあるよね……」

「ヒモとかヤクザっぽいところは不思議なくらい何もないくせにね。そのうち、本当に一回くらい刺されるんじゃないかしら……？」

「「…………」」

今度はリリアナと祐理が目配せを交わす番だった。尚、過激発言をつぶやいた澤さんは演劇部所属。一年生にして主演や演出なども手がけるオさい媛えんである。

澤さんはあわててあやまってくれた。

「ごめんなさい。ふたりには不ふ愉ゆ快かいなこと言っちゃった？」

「い、いえ。いずれ護堂さんがそのような目に遭あうかもしれないとは、私たちも前々から覚悟していますから……。本当に仕方のない人ですし」

「ただ、彼のそういう面が学友たちに知られていることを驚いたんだ」

祐理がため息をついたので、リリアナもうんうんとうなずいた。

「彼の人として問題がある部分は、傍はた目めにはだいぶわかりづらいと思うんだが」

「護堂さん、いつもはしっかりとした、感じのいい人ですものね」

「善良で責任感があって、偏へん屈くつなところもない、安定した人柄でもある」

「お節せつ介かいではないですけど、面倒見もいいですし」

「あれで、火がついたら止まらない性格さえなかったら……」

「でも、ああでなかったら護堂さんじゃありませんし……」

　リリアナと祐理は口々に言いつつ、うなずき合う。

　草薙護堂という矛む盾じゆんの多い人格を語るときは、必ずこんな具合になってしまう。善良さと公共心を併あわせ持つ人間なのに、どうしてあんな具合なのかと。

　しかし、リリアナたちの憂ゆう慮りよを聞いて、宮間さんがぼそりとつぶやいた。

「草薙くんへの文句なんだか、のろけなんだか、よくわからないね……」

「「!?」」

「そういえば、前から訊きたかったんだけど。あなたたち、冬休みはみんなそろって南の海にでも行ってきたの？」

「澤さん、どうしてそのことを!?」

「かんたんよ。真冬だってのに、みんなそろって日焼けしてたから」

「「…………」」

　根本的な部分を指摘されて、リリアナだけでなく祐理も絶句した。そんなところを見られているとは想定外だった。

「草薙くんの家族もいっしょだったんでしょ？　中等部の妹さんもいい感じに焼けていたって、噂うわさで聞いたよ」

「家族同伴のうえ彼女の軍団を引き連れて海へって、王様ぶりにもほどがあるわね」

　真実だけでなく、いつわりの実績まで喧けん伝でんされている。

　うわさの過か剰じような伝でん播ぱぶりに、リリアナは目を丸くしてしまった。

　ともあれ、ここで話は一段落し、みんなで教室を出た。それぞれの部室へ行くという澤さん・宮間さん・万里谷祐理と別れて、リリ

アナは校門に向かう。

　夕暮れ時だった。校庭も校舎も西日でオレンジ色に染まっている。

「偶然だな……」

　正門前にいる男子生徒の顔を見て、リリアナはつぶやいた。

　彼女の主あるじ、草薙護堂だった。が、奇妙な光景も目撃した。彼といっしょにいた名な波なみ・反そり町まち・高たか木ぎの三人組がいきなり走り出したのだ。夕ゆう陽ひに向かって、である。

　三人とも涙目で、捨て犬のような顔だった。

　一方、取りのこされた護堂は『困ったな』と言いたげに頭をかいていた。

　三バカたちが夕陽に向かってダッシュしていった直後。

　ひとり残って唖あ然ぜんとしていた護堂のそばに、銀髪の女子生徒がやってきた。

「どうかされたのですか、草薙護堂？」

「いや、それが俺にもよくわからないんだけど」

　不思議そうに訊たずねたのは、もちろんリリアナだ。ちょうど下校中らしい。

　学園の正門前で立ち話もできない。護堂はイチョウ並木の奥へリリアナといっしょに引っこんでから、話をはじめた。

「二月一四日の予定とか、俺の知り合いにとんでもなくモテる人がいるとか話してたら、なぜかショックを受けたみたいで……」

「とんでもなくモテる――やはり、沙さ耶やの宮みや馨かおるですか？」

「ああ。馨さんの話が決め手になった感じだ」

彼女の性別はひとまず伏せて、なるべく淡々と語ったのだ。

容姿は超端麗、文武両道、数々のモテ話などなど。すると三バカたちは世界への呪のろい文句を叫びながら、夕陽をめざして走り出したのである。

一部始終を聞いて、リリアナはおもむろにつぶやいた。

「それはたしかに謎なぞですね。彼らはどうして走り去ったのでしょう？」

「俺が何かまずいこと言ったのかな？　とにかく明日、話をしてみるよ」

「それがよろしいかと思います。やはり、おたがいの気持ちを確かめ合うことが人間関係の基本でしょうし」

護堂の疑問に、リリアナは生き真ま面じ目めな騎士らしく相づちを打つ。

こういうセリフは、まちがっても紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソからは出てこない。さすがリリアナだと護堂は感心した。まあ、前に幼なじみから言われた『ボケだけのコントじゃないんだから』という台詞が頭を一瞬かすめたりもしたが。

しかし、ポニーテールの女騎士は急に話題を変えた。

「ところで、今の話に聞き捨てならない箇所があったのですが」

「えっ、どの辺が？」

「もちろん、聖ヴァレンタインの日に妙な予定を入れようとしていることです」

やや憤ふん然ぜんとした口調でリリアナは訴えた。

「この日は由ゆい緒しよある恋人たちの記念日。日本でもここまで浸しん透とうしているとは、正直に言って意外でした……」

「浸透と言っていいのか、悩みどころだけどなあ」

女の子からチョコレートを贈るのは、完全に日本オリジナルの習

慣だという。

　たとえばイタリアなどでは、男の方から愛のメッセージ入りカードを贈るらしい。その辺を護堂が思い出していると、リリアナは訳知り顔で言った。

「枝し葉よう末まつ節せつのちがいなど些さ細さいな問題です。肝心なのは、大切な人に愛を伝えようとする姿勢なのですから」

「でも、愛はともかく義理チョコみたいな習慣は正直めんどくさいような……」

「そういう遊びもたまにはいいじゃありませんか」

　毎年ホワイトデーになると、静しず花かは『どこかへ連れていけ』とうるさくなる。

　それを思い出して護堂は言ったのだが、リリアナのスタンスは小揺るぎもしなかった。

「先ほども申し上げましたが、おたがいの気持ちを確かめ合うことこそが人間関係の基本にして究きゆう極きよくです。そこを踏まえたうえでおうかがいしますが——」

　リリアナはとがめるような目つきになり、護堂をじろっと見み据すえた。

「問題の記念日にそなえて、わたしもあなたの騎士として準備を進めていました」

「き、騎士として？」

「はい。チョコレートを使ったお菓子のレシピも万全ですし、当日はまったく予定が入らないように調整済みで、完全に自由の身です」

　リリアナが妖よう精せいを思わせる繊せん細さいな顔立ちをすっと近づけてくる。

　凛り々りしいだけではない少女の美び貌ぼうに、護堂はドキッとしてしまった。

「あなたにも王として、きちんと応こたえていただきたいと思います。たとえば、わたしを連れて夜景のきれいな場所に出かけたり、熱い想おもいをカードにしたためて贈り物にしたり」

「り、リリアナといっしょに？」

　王と騎士というよりも深い仲の男女にこそふさわしい提案をされて、護堂はたじろいだ。

　ほとんど抱き合えそうなくらいにリリアナとの距離が近い。しかし、この距離感が彼女と何度も繰りかえしてきた行為を思い出させる。

　だからだろうか。つい自然に、護堂はうなずいてしまった。

「た、たしかに、そういうことも考えないとダメ……なのかな」

「は、はい。わたしたちは王と騎士。主従の誓いを確かめ合うためにも、そういう節目節目を大切にしていくべきだと思いますっ」

　微妙に照れながらも生真面目な表情を取りつくろい、リリアナは訴える。

　じっと護堂を見つめるまなざしの凛々しさがすこしだけうすれ、女っぽさが増した気さえする。さらに言えば、たがいのウソを自覚している同士の連帯感まで加わっていた。

　恥ずかしくなってきたのか、リリアナはわずかに目をそらした。

「大体、わたし以外にも気を遣つかうべき相手はいるはずでしょう？」

「う……」

「沙耶宮馨の遊びにつきあう前に、まずはその辺りをきちんとなさってください」

「わ、わかった」

　有能な副官にして侍じ従じゅう長ちょうらしい提言。しかし、微妙に皮肉の響きがある。

ちくっと針で刺された気分になり、護堂は頭をかいた。

「たまには男だけでバカをやるのも面白いかなって思ったんだけどなあ……」

「そういう男同士のつきあいも大切なのだろうとは理解できますが、時期がいけません。またの機会に検討しなおすべきです」

あえて企画者の性別を不問にして、護堂たちは話を進める。だが、不意にリリアナが思案顔になった。待てよ、だとしたら……などと、口のなかでもごもごつぶやいている。

「どうかしたのか、リリアナ？」

「あ、いえ。ちょっと思いついただけです。その集まりに草薙護堂が出席したあと、深夜にでもわたしの家へ来ていただくという方法もあるなと――」

「深夜に!?」

「は、はい。わたしの自宅が駄目なら、どこか外で落ち合って……」

ぶつぶつ言っていた妄もう想そう気質の女騎士は急にハッとした。

アイデアの過激さに気づいたらしい。二月一四日の深夜にリリアナとふたりきり。その可能性を頭から追い出すべく、護堂は大声でつっこんだ。

「それはさすがに問題があるだろっ。ほら、いろいろとさ！」



「そ、そうですねっ。今のは聞かなかったことにしてください！」

　まじめな性格同士なので、こういうときは話が早い。

　今の提案を忘れることにして、ふたりは〝後始末〟をはじめた。

　消えた三バカたちと護堂は掃除中だったのだ。掃除の残りをすませ、ほうき等を用具室へ返却しに行く。落ち葉でいっぱいのゴミ袋は、当然ゴミ捨て場へ。

　ひととおり終わった頃には、すっかり陽が暮れていた。

「そういえば、万里谷祐理は茶道部に顔を出してから帰ると言っていましたね」

「へえ。じゃあ、いっしょに帰れるかもな」

　リリアナがつぶやいたので、護堂は携帯電話を取り出した。

　祐理に電話してみたら、もう下校するところだという。そこで正門前にふたたび陣取り、リリアナといっしょに待っていたのだが――。

　約一五分後、やってきた大和やまと撫子なでしこは深刻そうな悩み顔だった。

　ぎゅっと握りしめているのは携帯電話。護堂と連絡を取ったときも使ったはずの道具だ。

「護堂さん、リリアナさん！　おふたりに折り入ってご相談があります！」

　顔を合わすなり、思いがけない申し出を口にする祐理だった。

3

　そして、しばらくの後。護堂と祐理・リリアナは秋葉原にいた。

　三人が通う城じよう楠なん学院は文ぶん京きよう区く根ね津づ。電車で三〇分もかからないため、学校帰りに寄り道するのはかんたんなのだ。

　駅にほど近い、大型家電量販店の一階をみんなで訪れていた。

「それで万里谷はどんなのを見たいんだ？」

「は、はい。品名はノートパソコン……だと聞いています」

　護堂に訊かれて、祐理は不安そうに答えた。口ぶりから、機械音痴のお嬢様がノートＰＣという概念をはっきり理解していないと察せられる。

「そういうのは、かなりたくさんあるんだよな……」

「みたいですね……」

　売り場を見まわして、祐理はため息をついた。

　一階——最も集客のいいフロアには携帯電話・ノートＰＣ□デスクトップＰＣなど、この手の店の主力商品が大量に展示されている。

「だが万里谷祐理。どうしてパソコンに興味を？」

　リリアナが不思議そうに訊ねた。さっき学校の正門前で祐理に頼まれたのだ。『こ、今度ぱそこんを買うかもしれないので、下見につきあっていただけますか！』と。

　同じ疑問を感じていたため、護堂もすかさずうなずいた。

「たしかに似合わないよな。そういうの苦手だろ、万里谷は？」

「は、はい。実は父がひかりに進学祝いを買う約束をしていたのですが、あの子はパソコンがいいと言いまして」

「そういえば、彼女も四月からは中学生だったな」

　リリアナがつぶやく。万里谷家の次女は小学六年生なのだ。

　ちなみに、草薙家の妹も四月には城楠学院の高等部へ進学する予定である。

「それで先ほど父から電話があって……私にも同じものを贈ってくれると言われたんです。必要ないと伝えても、そのうち役に立つから持ってるだけでいいと」

　護堂からの電話を受けたあとで、この会話があったという。

　さっきも握りしめていた携帯電話を憂ゆう鬱うつそうに見て、祐理はため息をついた。

「万里谷の親父さん、気前いいなあ」

「実は私、中学に上がる頃は媛ひめ巫み女この修行で家を出ていたのです。進学祝いをもらうこともなかったので、埋め合わせをするつもりではないかと」

　万里谷姉妹の父は、娘にだいぶ甘い性分らしい。しかし、同じ男として気持ちはわからなくもない。護堂はうなずいた。

「ただ気持ちはありがたいのですが、すごく困ってしまいます。私、こういう物を絶対に使いこなせない自信がありますから」

　困惑のまなざしで売り場を見つつ、途中から毅き然ぜんと断言する祐理だった。

　彼女は携帯電話のメール機能にも苦戦する機械音痴。説得力がちがう。護堂は思わず笑ってしまった。

「わ、笑わなくてもいいじゃありませんか！」

「悪い悪い。でも、たしかに万里谷が言うと説得力あるよなって」

「もう……。そんなことをおっしゃる護堂さんはきらいです」

　拗すねたように祐理はつぶやき、わざとらしくそっぽを向く。

　奥ゆかしい大和撫子の彼女だが、最近こういう態度や仕草を見せるようになってきた。それが護堂にはうれしい。むしろ親密さの表れに思えるからだ。

　だから笑ったままでいると、祐理もくすりと微笑んでくれた。

　今のやりとりがおかしくなったらしい。そのまま、ふたりして笑

い合う。一方、同じように微苦笑していたリリアナが急に歩きだした。

　銀髪の少女が向かった先は、タブレット端末のコーナーだった。

　ある端末のタッチパネル液晶に『おそるおそる』という感じで人差し指をのばす。

　それから指先を『しゅっ』と液晶上で走らせたり、ちょんちょんとつついてみたり、いろいろ試ためしはじめた。

　割と面白いらしく、リリアナはおもちゃでもいじるように指を動かしていた。

　祐理といっしょにそばへ行き、護堂は声をかけた。

「そういえば、リリアナもあまりパソコンとか使ってないよな」

「この手の道具は、我が家ではカレンの担当になっていますから」

　クラニチャール家のメイドにして魔女見習い、カレン・ヤンクロフスキ。

　護堂も知る少女の名を出しながらも、リリアナはタッチパネルをあれこれいじる。

　地図ソフトの拡大縮小を指二本で調整できると知って、『おお！』と目を輝かせた。いつもの凛り々りしさとはまたちがう子供っぽさだが、こういう面もリリアナらしい。

「しょ——文章とか書くのに便利なんじゃないか？」

「以前、カレンにも同じようにすすめられましたが、とんでもないことです。我が手で書きつらねた言葉だからこそ、そこに言こと霊だまが宿るのです」

　小説執筆はリリアナが秘密にしている趣味。

　数々の作品には、さまざまなこだわりと情念をそそいでいるらしい。

　その後、多すぎるノートＰＣの機種に祐理が呆ぼう然ぜんとしは

じめたので、護堂たちは生活家電のコーナーに移動した。

　女子ふたりは電子レンジや炊飯器などを興味津しんゝしんの体ていで見てまわる。

『水蒸気加熱式！』『石いし窯がまドームでムラなく温め！』『真空圧力炊き！』『本格土ど鍋なべ釜がま！』といった売り文句の数々を熱心に吟ぎん味みしていた。

　決して家電マニアではない護堂は、手持ちぶさたな気分になったのだが。

　女子たちが楽しそうだからいいかと思い直し、うしろからついていく。祐理が倒れこみそうになったのは、そんなときだった。

「万里谷!?」

「大丈夫か、万里谷祐理!?」

　いきなり祐理の足がもつれ、ふらっと倒れこみそうになった。

　それをあわてて護堂とリリアナが支えたのだ。祐理は「だ、大丈夫です……」とつぶやいて、気丈に持ち直した。支えを遠慮して、ひとりでどうにか立つ。

「ちょっと立ちくらみしただけですから……。たぶん、人が多いからだと思います」

　平日の夜とはいえ、ターミナル駅に近い大型家電量販店。

　たしかに店内はかなりの人でにぎわっていた。

「疲れている気は全然しないのですが、ときどきこうなってしまうんです」

「そういえば、一月は何日か病気で欠席していたな……」

「もしかして、あの島で無茶をしたせいか？」

　心配しているせいかリリアナが眉まゆをひそめ、護堂もあることを思い出した。

　女神キルケーがいた南洋の孤島で、祐理は術と呪じゆ力りよくを

限界まで使ってくれたのだ。

「いえ。あれはもう一か月も前のことですし」

「でも、前にルクレチアさんも力の使いすぎとかで寝こんでいたぞ？」

　祐理は否定したが、護堂は重ねて訊ねた。ルクレチア・ゾラが呪力を消しよう耗もうし尽くしたのも、軍神ウルスラグナと神王メルカルトの戦いに巻きこまれたからだった。

　護堂とリリアナに見つめられて観念したのか、祐理はふぅとため息をついた。

「本当にふだんは何でもないんです。ただ、人が多いところに来ると疲れやすくなるみたいで、めまいがするといいますか……」

「精神感応の力にめざめた弊へい害がいかもしれませんね」

　このところ成長著いちじるしい媛巫女を、リリアナは悩ましげに見つめた。

　精神感応。心と心、思念と思念をつなげ、結びつける稀け有うな霊能力だという。

　この能力を祐理に指南したのはプリンセス・アリス。しかし、かの巫女姫も霊力の強さに体がついていけず、一日の大半をベッドですごす日もすくなくないとか。

　それを思い出して、護堂とリリアナは目配せし合った。

「深刻な症状ではないように思えますが、ひとまず場所を変えた方が……」

「そうだな。ちょうど近所だし、鷹よう化かのところにでも行ってみるか」

　秋葉原某所の雑居ビル内に、メイド喫茶『國こく士し無む双そう』はある。

　店を訪ねた護堂は祐理・リリアナといっしょに、奥のＶＩＰルームへ足を踏み入れた。飄ひようゝ々ひようとあいさつされたのは、この直後だった。

「や。おひさしぶりですね、みなさん」

　見れば、甘あま粕かす冬とう馬まがソファに腰かけていた。またしても絶賛サボり中らしい。

「まあ。甘粕さんもこちらに通われているのですか？」

「ときどきですよ。仕事の合間にちょっと一服というやつです」

　驚く祐理に対して、甘粕はしれっと笑ってみせる。

　暗にサボりを公言しているあたりが昼ひる行あん灯どんのエージェントらしい。一方、媛巫女の体調はどうやら問題なさそうなので、護堂は銀髪の侍従長に目配せした。

　リリアナも安心したらしく、軽いうなずきが返ってくる。

　休憩させてもらうことにして、護堂は手近なイスに腰かけた。

　祐理とリリアナもソファに――甘粕の対面に腰をおろす。すると、メイド衣装のスタッフがやってきて、コーヒーを給仕してくれた。

　このＶＩＰルームには、ビリヤード台やダーツなどプールバーめいた遊ゆう戯ぎ設備もある。

　ここがはじめての女子ふたりは物珍しそうに眺めたり、さわったりしていた。

「わざわざのお越し、恐縮です。ここで叔お父じ上うえに会えるとは望外のよろこびですよ」

　しばらくすると、店のオーナー的存在・陸鷹化が顔を出してきた。

　香ホン港コン陸家の若き幹部にして魔教教主の直じき弟で子しはいそがしい少年で、決して系列の喫茶店に常駐しているわけではない。

　今日会えるとは期待していなかったので、護堂は目を輝かせた。

「本当だなあ。結構ひさしぶりだよな？」

「この間お目にかかったのは、たしか半月前でしたかね？」

　細身の美少年のくせに、陸鷹化は目つきの狷けん介かいな女嫌いだ。

　さりげなく祐理・リリアナと目を合わさないようにしつつ、あいさつする。あいかわらずの傲ごう岸がんさと偏屈さに、護堂は苦笑を誘われた。

「それはそうとリリアナさん。イタリアじゃあ、例の魔王さまがあやしげな企画を進行中だって聞きましたけど」

「耳が早いな、甘粕冬馬」

　甘粕に話を振られて、リリアナはため息をこぼした。祐理が目を丸くする。

「魔王……ということは、サルバトーレ卿ですか？」

「ああ。数日前、卿は北イタリアの名門結社に召集状を送ったんだ。今度トスカーナで行われる〝神獣狩り〟に参加せよ、と」

「狩りって、俺の猪いのししみたいなのをわざわざ獲え物ものにしてか？」

　イタリアが擁ようする六人目の神殺し、サルバトーレ・ドニ。

　思いがけない事情をリリアナの口から聞いて、護堂は目をぱちくりさせた。

「ここ最近、トスカーナ州の山地に出没しているそうです。討とう伐ばつを嘆願されたサルバトーレ卿は、神獣ごときの相手では気が乗らないらしく——」

「バカな企画を思いついたのか……」

　リリアナの物もの憂うげな説明で、護堂は呆あきれはてた。さすがに一ひと筋すじ縄なわのバカではない。

一方、今の話をつまらなそうに聞いていた陸鷹化がおもむろに言った。

「サルバトーレ卿といえば……あの方、イタリアの方で誰だか若い女をこっそり捜索させていたらしいですね」

「ドニのやつが人捜しだって？」

意外なところからイタリアの情報が出てきて、またも護堂は驚いた。

一方、ミラノの魔術結社に所属するリリアナが不審そうに首をかしげる。

「そのような話、《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》からは何も聞いていないが」

「いやねえ。あの王様、実はローマの中華街にいる連中と昵じつ懇こんなんだ。情報収集やおおっぴらにできない裏仕事をたまに頼んだりしてるんだよ」

陸鷹化はあっさり答えて、肩をすくめた。

「向こうに陸家の親しん戚せきがいてね。その関係で、あの人の情報がときどき伝わってくんのさ」

「サルバトーレ卿が華か僑きよう系の幇ほうと!?」

幇。中国の秘密結社を意味する言葉。意外な情報にリリアナが瞠どう目もくした。

そういえば――護堂は思い出した。情報収集に熱心だとはとても思えないのに、サルバトーレ・ドニはときどき妙に耳ざとい。

思い当たるところがあったのか、リリアナもうなずいている。

「あの方がカンピオーネになったのは四年前。たしか華僑の古こ物ぶつ商しように護衛を依頼されて、トルコを訪ねたことが発端だったな。もしかして、その頃からの縁か？」

「らしいね。盗掘とか物騒なこともやる連中だし、用心棒が欲しかったんだろ」

　おざなりに答えてから、鷹化は肩をすくめた。

「その結果、あんな人が誕生しちまったんだから……本当に勘弁して欲しいよ」

「もしかして鷹化、ドニのやつと会ったことあるのか？」

　今の鷹化は、あの男のバカを承知しているような口ぶりだった。

　訊いてみたら、魔教教主の直弟子はすぐにうなずいた。

「何年か前に一度だけ。師し父ふのお供をしているときです」

「そういや、ドニのことを姐ねえさんはちゃんと知ってたもんな」

「まあ、非常に残念な出会いでしたがね……」

　残念を強調するあたりに、鷹化の心情がにじみ出ていた。

「自慢にもならないので吹ふい聴ちょうしませんけど、僕は七人いる当代の魔王方全てとお目にかかり、言葉を交わしたことがあるんです」

「それはたしかに……全然うらやましくないですねえ」

　しみじみと実感を込めて、甘粕がつぶやいた。

　遺い憾かんながら草薙護堂もその七分の一。残りの六人中五人までとも顔見知りだ。そういえば、まだ出会っていない最後のカンピオーネ、名はなんといっただろう？

　リリアナも同じ人物のことを考えたらしい。鷹化に訊ねる。

「七人全員ということは、あの御方ともか？　長く隠いん棲せいを続けているアイーシャ夫人、カンピオーネのなかでも最も謎の多い方と？」

「あー……うん。なんていうか、いい人だよ」

　昔を思い出したのか、鷹化はやや疲れた目つきになっていた。

「半日以上いっしょにいたくないけど。あの方のお供を三日するくらいなら、師父のもとで一〇日間しごかれる方を選ぶな、僕は」

「姐さんより厄やつ介かいな人間って、ちょっと想像つかないぞ……」

「ヴォバン侯こう爵しやくだって、長年ヨーロッパ各地のホテルを転々としているくらいです。なんだかんだで世慣れていますしね……」

　護堂は絶句し、リリアナも驚いている。

　最も性格の破は綻たんしたカンピオーネは、おそらく羅ら濠ごう教きよう主しゆであろう。

　ライバルだという東とう欧おうの老ろう侯こう爵しやくは、あれで人並みに電車や飛行機に乗るときもある。

　しかし、羅ら翠すい蓮れんはまちがいなく無理だ。同乗する〝下しも々じもの者〟を皆殺しにしかねないし、プライベートジェットすら掌しよう打だで破壊しそうだ。

　まだ見ぬアイーシャ夫人のすさまじさに、護堂たちが思いを馳はせたとき——。

　おずおずと口を開いたのは、祐理だった。

「あの……サルバトーレ卿のお話を聞いたときに感じたことなのですが」

「何か視みえたのか、万里谷祐理？」

「視えたというほどではありません。なんとなく感じただけなんです。その『狩り』がきっかけで、何かよからぬことが起きるかもしれないと——」

　リリアナに問われて、祐理が答える。

　ずっとひかえめに沈黙していた大和撫子。カンピオーネのうわさ話はどうしても口が悪くなりがちなので、不適切な発言をしないように口をつぐんでいたのだろう。

　しかし今、祐理は千せん里り眼がんじみた霊視能力者として託たく宣せんを告げてくれたのだった。

4

『我、サルバトーレ・ドニ卿きようの執しつ事じたるアンドレア・リベラは主の御み名なのもと、諸しよ卿きようらに集結を要請する。数日前、出現を確認されたカゼンティーノの神しん獣じゆうを狩り出すためである。諸卿の武と侠きよう気きに期待する――』

　ドニの執事が選抜した大騎士たちに、この〝召集状〟が送られたのだという。

　いずれもイタリア北部の名門魔術結社に所属しているらしい。

「集結場所はトスカーナ州のカゼンティーノ森林公園よ」

　エリカが語る。召集状のコピーを持ってきたのは彼女なのだ。

　護ご堂どうだけでなく、祐ゆ理りとリリアナもいる。放課後を迎えた城じよう楠なん学院の中庭であった。

「神獣との戦いを要請されて、卿は国外に逃げ出そうとしたらしいのよね。その程度の相手だと、カンピオーネである卿にとっては弱敵もいいところだし」

　祐理が霊視を得たのは昨夜のこと。

　あのあとエリカとも連絡を取り、イタリアから情報を仕入れてもらったのだ。

「ただ奇妙なことに、出現地域がカゼンティーノだと聞いた途端、ころりと態度を変えられたそうです。『いざというときのために待機するくらいなら』と」

　リリアナもいぶかしげに言った。彼女もミラノの《青せい銅どう黒くろ十じゆう字じ》と連絡を取り、詳細な情報を得ているのだ。

　騎士たちの報告を聞いて、護堂は考えこんだ。

「つまり、その場所に何か秘密があるってことだよな……」

「ねえ護堂、覚えている？　あなたもそこに行ったことがあるわよ」

「えっ、俺が？」

　きょとんとする護堂へ、エリカはさらに言う。

「ほら、あなたとサルバトーレ卿がはじめて決闘したあと。トスカーナに出る神獣を退治しに行ったじゃない。あそこのことよ」

「……ああ！　そういえばあったなあ、そんなこと」

　ようやく思い出して、護堂はうなずいた。

　途中経過の面倒さばかりが印象的で、最後の記憶があいまいだったのだ。

「いくつかの目撃情報から、今回の神獣はあれと同じらしいと推測されているわ」

「あの恐竜みたいなやつ、また出たのか!?」

「偶然、なのでしょうか？　同じ場所に二回も神獣が顕あらわれるというのは、かなり不自然に思えるのですが……」

　祐理が首をかしげるのも無理はない。また、護堂も思い出した。どちらが神獣退治するかでドニと揉めた、シエナでの一幕を——。

「そういえばドニのやつ、妙にあそこへ行きたがってたよな」

「ええ。この事件に関しては不可解な行動が多いのよね、サルバトーレ卿は」

　まとめるようにエリカが言った。

　護堂は考えこんだ。サルバトーレ・ドニはまちがいなく愚おろか者。しかし、意外なほどのしたたかさと、破は天てん荒こうな行動力を併あわせ持つ奇人でもある。

　バカと罵ば倒とうすることはできても、その脅きよう威いをあなどることはできなかった。

「ちょっと探さぐりを入れてみるか……」

　護堂はつぶやいて、携帯電話を取り出した。

　以前から番号だけは登録してあるのだ。何かの役に立つかもと、エリカが教えてくれたからだ。しかし、本当にかけるときが来るとは――。

　海外との通話になるため、所定の手順をすませてから発信。

　日本は今、午後三時。時差は八時間だから、向こうは朝のはずだった。

『やあ。我が友にして、永遠のライバルよ。君から連絡をもらえる日が来るとは、本当によろこばしいな。ひさしぶりだねえ』

　コール五回で応答したサルバトーレ・ドニは、あいかわらず無駄にいい声だった。

『ちょうどよかった。そろそろ僕の誕生日が近いから、パーティーには君も招待しようと検討中だったんだ。来月とか、暇ひまある？』

「暇があっても、誰がお誕生日会のためにイタリアへ行くか」

　相手のたわごとに護堂は暴言で応こたえた。言葉を交わすのはいつ以来だろう？

　しかし、会話の流れは自然だった。よどみない。

　実のところ、ふたりが顔を合わせた回数はわずかだ。だというのに、草薙護堂とサルバトーレ・ドニの距離感は変わらない。決して仲はよくないが疎そ遠えんにもならず、最も印象的な同族同士としておたがいを認知し合っている――。

　いやな事実を認識して、護堂は眉まゆをひそめた。話題を変えなければ。

「それより教えろよ、サルバトーレ・ドニ」

『何をだい？』

「今度イタリアでやるっていう〝狩り〟。あれの会場、前に俺がバケモノと戦ったところだよな。最初、あんたが自分でわざわざ行くって言った場所だ」

『あれえ？　ずいぶん耳ざといじゃないか』

　単刀直入に切り込んだら、苦笑が返ってきた。

『でも、まあ……ちょうどいいと言えば、これもたしかにちょうどいいかな。君も参加しに来るかい？　歓迎するよ～』

　今の言葉の前半をつぶやいたとき、ドニはにやりと笑っていたはずだ。

　護堂は確信した。いつものバカっぽい、軽薄な笑顔ではない。暗い戦士の愉ゆ悦えつを感じたときだけ見せる、鋭くも不敵な笑顔だったはずだ。

　造りだけ端正なドニの顔つきは、そういうときだけ美形っぽく見えるのだ。

「今度の狩りってやつ、やっぱり思惑があるのかよ」

『とんでもない。遊びだよ、遊び。ただ、せっかくゲームをはじめても、期待どおり楽しめるとは限らないしね。君がつきあってくれるなら、いい保険になる』

「保険？」

『いざとなったら、護堂と決闘でもすれば十分楽しめるだろ？』

「ざけんな。誰がそんな遊びにつきあうか」

『さすが護堂だ。君ってやつはツンデレにもほどがあるぞ』

「うるさいっ。そういう日本文化を誤解した発言で人を決めつけるな。それよりサルバトーレ・ドニ、あんた女の人を捜しているんだってな？」

　不毛な会話を終わらせるべく、護堂はもうひとつ火薬を投げ込んだ。

　はたして、ドニは『へえ』と嘆声をこぼした。

『それを知っているってことは、中国方面から情報が洩もれたのか。そういえば君、向こうの教主さまと仲良しなんだっけ』

「あんたもどこかの中華街の人たちと仲がいいんだろ？」

『まあね。僕もカンピオーネになる前は、ああいうところから用心棒の仕事をもらったりして、小こ遣づかい稼かせぎをしてたんだ』

　落ちこぼれのテンプル騎士だったというサルバトーレ・ドニ。

　エリカやリリアナならば、まちがってもしそうにない〝アルバイト〟であった。

『今でも縁があって、業界の情報とか流してもらっているのさ。あと、たまにお金借りたり、誘ゆう拐かいとか犯罪すれすれの悪さを手伝ってもらったり』

「すれすれじゃないっ。誘拐は立派な犯罪行為だ。それより本題だけどな」

　妄言につっこみを入れつつ、護堂はさらに切り込んだ。

　とてつもない大バカ野郎とはいえ、ドニが素直に答えるとは思わない。だが、ヒントくらいは口走らないかと期待して。

「遊びとかゲームとか言ってるけど、具体的には何をするつもりだよ？」

『それをここで話すのは、野や暮ぼってもんじゃないか。まあ、でも、さわりだけ話すくらいならいいかな？　実は最近、ゲームにはまってたんだ。あれ、オンラインゲーム』

「インターネットをやれる甲か斐い性しよう、あんたにあったことが驚きだよ」

『いやいや、誉ほめないでくれよ。設定なんかは全部アンドレアに丸投げだから』

「前言撤回だ」

『ファンタジーな感じの世界でモンスターと戦うゲームでね。僕も剣士のキャラで遊んでたんだけどさ。全然強くないんだ。ちょっと強い怪物にも、ほかのプレイヤーのキャラにも負けちゃうし』

「よく知らないけど、今時プレイヤー同士で戦えるゲームってすくないんじゃないか？」

『僕の遊んでたやつは、昔ながらのストロングスタイルだったらしい。で、あのゲームに人生捧ささげているような連中に全然勝てないのが腹立たしくてね』

「かけた時間がちがうんだから、そりゃ仕方ない」

いわゆる廃人と呼ばれるようなマニアに、後おくれを取ったらしいドニ。

そんな彼に同情するはずもなく、護堂は冷たく言った。

「おとなしくリアルに帰ってこいよ。そっちなら負けなしだろ、あんた？」

『それじゃ僕の気持ちが収まらない。というわけで、僕はもっとエキサイティングで、しかも自分に勝ち目があるゲームをやってみたくなったのさ』

「…………」

それがどうして〝神獣狩り〟につながるのか？

また、ドニが捜している女性とは？　数々の謎なぞをそのままにしつつ、カンピオーネふたりはどちらからともなく電話を切った。

現時点では、話すことはもうない。その認識を自然と共有できていたからだ。

そう。サルバトーレ・ドニはこういう男だった。

なれなれしくて図々しい。しかし、決して馴れ合う男ではない。ある一線から先には、絶対に踏み越んでこないのだ。特に相手を『強敵』と認めているときは。

そして、英国在住のカンピオーネと同じだった。

　草薙護堂の敵てき愾がい心しんを奇妙なほど刺激する、腹立たしくも無視できない男――。

　電話をしまったとき、すでに護堂は肚はらを固めていた。

　あとは現地に乗りこんで、必ず起こるはずの事件にそなえるのがいちばん。それ以上の対策はないと判断して、仲間たちに目配せする。

　話を聞いていたエリカ・祐理・リリアナはすぐにうなずいてくれた。

　ドニとの電話の翌日から、期末テストがはじまった。

　十分に勉強していたおかげで大たい過かなく乗り切り、護堂たちは試験休みと二月上旬の三連休をつつがなく迎える形になった。

　深しん山ざんに入って身を清めていた清せい秋しゆう院いん恵え那なも呼びよせ、準備は完了。

　もうまもなくバレンタインデーという時期の試験休み。

　草薙護堂は仲間たちと共に旅立ったのである。

第３章　波乱の幕開け

1

　かつて、花の都とも呼ばれたフィレンツェ。

　トスカーナ州の州都である。中世の頃にはメディチ家が支配者として君臨し、ルネッサンスを牽けん引いんする文化の中心地となった。

「それだけ見どころも多いわよ。定番のコースとしては宮殿や教会、大聖堂、アルノ川に架かかるヴェッキオ橋、都を一望できるミケランジェロ広場……」

　観光ガイドよろしくエリカが語れば、リリアナも継つぎ足す。

「やはり定番ですが、美術館めぐりもいいですね。レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロ、ラファエロといった歴史的巨きょ匠しようの作品を鑑賞できますし」

「そして、俺はそういうのをほとんど観みてないわけだ。来るのは二度目なのに」

　流りゆう暢ちように観光案内されて、ぼそりと護ご堂どうはつぶやいた。

　黒塗り高級車の後部座席にすわりながら、である

　飛行機でフィレンツェに到着したのは昨日の夜。市内で一泊した翌日の昼頃、迎えの車がホテルの前まで来てくれたのである。どれ

も招待者側が手配したものだ。

　車は今、フィレンツェ郊外を快走している。

　このままトスカーナ州の東端めざして一時間ほど走れば、目的地だという。

　空き時間に観光するという選択肢もあったが、やめておいた。これから何が起きるか、まったく読めていないのだ。体力を温存するにこしたことはない。それに祐ゆ理りの〝立ちくらみ〟が心配でもあった。

　車の後部座席は対面式になっていて、みんなで向き合うようにすわっている。

「帰りに一日くらい観光していきたいよ、本当に」

「はかない希望じゃないかなあ、それ」

　護堂のつぶやきに水を差したのは、清せい秋しゅう院いん恵え那なだった。

　マレーシアに続いての海外遠征なので、今回も私服姿だ。チェック柄のシャツに黒のフレアスカート、レギンスという服装だ。

「どうせ王様は今回も行く先々で大事件を巻き起こすんだから。滞在時間の余裕とか、絶対なくなるに決まってるよ！」

「未来は不確定なんだから、断定するなよ清秋院……」

「そりゃ先のことなんて何もわからないけどさ。でも、向こうにはイタリアの王様までいるんでしょ。無事にすむわけないって」

　護堂の苦情を軽やかに聞きながし、太た刀ちの媛ひめ巫み女こは笑顔で言った。

　しかも、リリアナとエリカまでうなずいている。

「たしかに。カンピオーネがふたりもそろう以上、絶対に何かが起こるはずだな……」

「羅ら濠ごう教きよう主しゅと護堂。アレク王子と護堂。今まで常

にそうだったものね。あとは護堂の存在が吉と凶、どちらに影響するか……」

「ち、ちょっと待てよ。俺はドニのやつを見張るために行くんだぞ」

　女子たちの認識に反論すべく、護堂は口をはさんだのだが。

　まだ発言していない万ま里り谷や祐理が何か訴えたげな視線を向けていた。

「どうしたんだ、万里谷？」

「あ、いえ。サルバトーレ卿きようを警戒されるのは当然ですが、護堂さんの方も『木ミ乃イ伊ラ取りが木乃伊になる』を用心すべきではと思いまして……」

「み、木乃伊？」

「はい。揉もめごとの火種に火をつけることにかんしては、護堂さんもサルバトーレ卿に劣おとらない実績をお持ちでいらっしゃいます」

　たおやかな媛巫女は、遠慮がちに己おのれの意見を表明した。

「見張り役である護堂さんが、逆に騒動の火種になる恐れも……」

「あるって万里谷は言いたいのか!?」

「はい」

　即答で肯定されて、護堂は「ぐっ」と絶句した。

　しかも、ほかの女子たちも賛同するように大きくうなずいている！

「待ってくれ！　俺があいつと互角ってのは、絶対にないと思うんだ！」

「護堂。今まで自分がしてきたことを振り返ってみても、その言葉を繰り返せる？」

「あ、えーと……」

振り返ってみた。そのうえで護堂は一部訂正した。

「それでも互角までいかないだろ。せいぜい四分の三くらい……」

「ほら。七五％までなら互角に対決できる自信、あるんじゃない」

「四捨五入したら、同じ数字になりそうだよねえ」

「日常的な問題行動の数はサルバトーレ卿の圧勝だろうが、ここぞというときの爆発力は草くさ薙なぎ護堂の方が上という気も……。やはり互角か」

語るに落ちたとばかりにエリカが言えば、そこに恵那やリリアナまで乗っかってくる。

しかも、女子たちのつっこみを締めくくるように祐理までが言った。

「護堂さん、そういうことですから十分にお気をつけくださいね。私たちもできるかぎりお手伝いしますから……」

いちばん頭の上がらない祐理に言われては、もう反論もできない。

悄しよう然ぜんとうなだれる護堂だった。



一方、話をしている間も車はトスカーナの田園風景を進んでいく。

見渡すかぎり続く野原や畑に、なだらかな丘きゆう陵りようがところどころ起き伏ふくをつけていく。

春には草や木の葉、若芽などの緑で、大地はあざやかにいろどられていた。しかし、今の季節は冬。大地の緑はだいぶくすみ、枯れ葉の茶色も多かった。

また、だんだん遠くに山々の峰が見えるようになってきた。

山間部に入ってきたのだ。さらに雪。大地をおおう色がくすんだ緑と枯れ葉の茶色から雪の純白に変わっていく。

そして、ドライブ開始から約一時間後。

護堂一行は目的地に到着した。そこは石造りの重厚な城だった。

中世の城を改装した、古城ホテルである。ここをまるまる〝神獣狩り〟のベースキャンプとして、貸り切ったという。

ホテル周辺は一面の銀世界で、かなりの雪が積もっていた。

この地方は決して雪国ではないが、一昨日降ったばかりなのだ。しかし、今日の天気は快晴。まぶしいほどの青さが空に広がっていた。

「いやあ護堂」

「しばらくぶりだな」

魔王ふたりの再会が実現したのは、古城ホテルのロビーである。だが、話すべきことは数日前に電話で話してしまっている。

ドニはにたっと笑い、護堂は仏ぶつ頂ちよう面づらで短く言葉を交わすのみだった。

「ま、楽しんでいってよ。できれば、君とまた対決したいもんだね」

「言ってろ。あんたも羽は目めを外しすぎるなよ」

　それだけでドニは廊ろう下かの方へ歩いていき、護堂はべつの知り合いを探した。

　今、話すべきは『剣の王』ではなく、お目付役の方だ。幸いにもロビーにいたアンドレア・リベラは、護堂の顔を見るなり歩みよってきた。

「すでに数名の騎士を斥せつ候こうに出し、問題の神獣を捜索中です」

　あいさつもそこそこにリベラが教えてくれた。

　南欧魔術界の盟主、サルバトーレ・ドニの名において魔術師や騎士を召集するときは、無む頓とん着ちやくな主あるじに代わって執事のリベラが集団を取り仕切るという。

　おそらく、この城で最もいそがしい人物であった。

「これまでの報告から、標的は基本的には温厚な生き物だと判明しています。ただ発作的に凶暴化することがあるため、やはり野放しにはできないでしょう」

「凶暴化、ですか。俺と戦ったやつはすごく臆おく病びように見えましたよ？」

　前回の記憶を引っぱり出して、護堂は言った。

「うかがっております。もしかしたら熟知しているのかもしれません。神殺しの恐ろしさをいやというほど、骨の髄ずいまで」

　不吉なことを告げるリベラへ、護堂は訊たずねた。

「ところで、今回の狩りがらみでドニが何を企たくらんでいるか、ご存じですか？」

「残念ながら、あのバ――いえ、主のお考えはわかりかねます。私に隠れて、こそこそと何か計画している気配はあるのですが……。ただ念のため、監視をつけております」

　不ふ敬けい・不ふ遜そんになりかねない言葉をきわめて謹きん厳

げん実じつ直ちよくに語る。

　妙な特技を披ひ露ろうしてから、リベラは一礼した。

「広間の方に食事や飲み物を用意しております。まずはそちらでおくつろぎください」

　やはり多忙なのだろう。リベラはすぐに立ち去っていった。

　仲間の女子四人にうなずきかけて、護堂は教えられた場所へ向かった。

　かつては城の大広間であったスペース。ここではビュッフェの準備がととのっていた。まだ昼の二時だというのにワインやビールも並べられている。

　つまるところ、立食パーティーであった。

　この催もよおしの主宰者であり、『いちばんえらい人』が壇だん上じようにのぼっていた。

「えーと諸君、今回は僕の呼びかけに応えてくれて、本当にありがとう（がさがさ）このサルバトーレ・ドニ、君たちの勇気と献けん身しんに心からの感謝を伝えたい……（がさがさ）」

　壇上のドニは堂々とカンペのメモ紙を読みあげていた。

　青い長なが袖そでの開かい襟きんシャツにコットンパンツというラフな格好のままだ。紙の『がさがさ』する音をマイクが拾っている。

「ほかにもいろいろ感謝の言葉はあるんだけど……もうこの辺でいいや」

　いきなりメモ紙を捨てて、ドニはこう締めくくった。

「あとは以下略で。しばらくの間、みんな楽しくやって欲しい。以上！」

　さっさと壇を降りて、奥へ引っこんでいく。ドニのやつにスピーチなんてできるのかと護堂はいぶかしんでいたのだが、これを見て納得した。『ああ、やっぱり』と。

「あれを堂々とやれる図太さはさすがだけどなあ……」

「ここにいる方々は、みんな卿のそういう振るまいにも慣れているしね」

　エリカが言う『ここにいる人たち』を護堂も眺めた。

　大広間には二〇人ほどが集まっていた。年齢は二〇代から四〇代までと幅広いが、みんな男である。ドニが号令をかけた魔術結社の大騎士たちだという。

　たいてい背広姿だが、なかにはジャケットを羽織るだけとか、ラフなＴシャツ姿もいる。

「イタリアの騎士の人たちが集まる席だからさ。なんとか座の怪人とか闘牛士マタドールみたいな格好の人がいるかもって期待したんだけど……。残念」

「ヴェネツィアのカーニバルといっしょにするな、清秋院恵那」

　恵那の感想を聞いて、リリアナがつぶやいた。

「べつにこれが目的で来たわけでもない。気合いを入れて着飾る必要もないだろう」

「たしかに……。私たちもそうですものね」

　自分たちの服装を見て、祐理もうなずいた。

　祐理はシックな黒のワンピースで、いつもより大人っぽいが普段着の範はん疇ちゆう。エリカとリリアナはいつも戦闘時に使うケープをまとい、共に黒のレザーパンツ。

　恵那は特に着替えていないし、護堂もふつうにシャツとジーンズという格好だった。

「それじゃ護堂、わたしは準備があるから」

「ああ、頼む」

　護堂がうなずくと、エリカはパーティーの人ごみに入っていった。

　この大広間の出入り口をめざしているのだ。が、途中で顔を合わせた相手が知り合いだったのか、急に立ち止まる。軽く談笑してから、ふたたび進みはじめた。

「あいつ、やっぱり顔が広いんだなあ」

　感心する護堂だったが、護堂自身の知り合いもこの席にいた。

　前にローマのコロッセオで会った、魔術結社《百ゆ合りの都みやこ》の筆頭騎士だ。大広間でぶらぶらしていると、彼から再会の挨あい拶さつを受けた。

　それを皮切りに、今日が初対面の大騎士たちも次々と挨拶に来る。

　もちろん草薙護堂の名前ではなく、カンピオーネという肩書きのためだろう。一段落すると、今度はタキシードを着たホテルスタッフがそばに来た。

　連れが呼んでいると耳打ちされた。エリカの準備ができたようだ。

　ほかの女子たちに別れを告げ、スタッフのうしろについていく。彼が案内してくれた先は、古城ホテルの一室だった。

　なかに通されると、旧きゅう知ちの人物が出迎えてくれた。

「ひさしぶりだな、護堂。君とまた会えてうれしいよ」

　このホテルでは初と言っていい、親しみのこもった挨拶。

　九か月ぶりに会う彼は護堂の顔を見ると、すぐそばに来て、肩をたたいてくれた。

「それとも、このところ飛躍いちじるしい君に対して、こんな口の利きき方は不敬もいいところかな？　もしそうなら、すぐにあらためさせていただくが」

「そのままでいいですよ。というより、そっちの方が助かります」

　悪気も嫌みもない冗談で護堂を苦笑させたのは、しっかりと背広を着こんだパオロ・ブランデッリだった。多忙な彼はこの会場への

到着が遅れていたのだ。

　もちろん姪めいのエリカも居合わせている。

　ここは護堂とパオロがじっくり話をするため、彼女が取った部屋なのだ。

　そして、あとひとり。護堂の知らない女性がいた。黒髪をポニーテールにまとめた、浅黒い肌の美女だった。

　いかにもラテンの生まれらしい、勝ち気そうな顔立ちだ。

「お初にお目にかかる、七人目のカンピオーネ殿」

　ラテン美女の声はややハスキーで、不敵に微笑ほほえんでいた。

「あたしは本名よりも通り名の方が有名になっててね。みんな、あたしのことを『ラファエロ』なんて呼んでいるよ。よければ以後、お見知りおきを」

「こちらは聖ラファエロさま。聖騎士パラデイーノの位階を持つテンプル騎士よ」

　補足するようにエリカが言い足した。

「昔、サルバトーレ卿に剣を指南されたこともある——あの御方のお師し匠しようさま」

「えっ？　あいつに師匠なんていたのか？」

　意外な情報を聞いて、目を丸くする護堂だった。

2

「師し匠しようといっても、一か月だけだよ。あの野郎、それきり姿を消しやがったから。あの頃からバカがきわまってたけど、さらに磨きがかかるとはねえ……」

　遠慮のない悪口でドニをくさし、伝でん法ぽうな口調で護堂に話

しかける。

　聖ラファエロは謹きん厳げんとは正反対の女性らしい。彼女とパオロ、エリカ、そして護ご堂どうはテーブルをかこむ形ですわり、話をはじめた。

「聖ラファエロには私が無理を言って、来ていただいたんだ」

　この席を仕切るつもりなのだろう。パオロが語りはじめた。

「というのも、サルバトーレ卿きようをのぞけば彼女はイタリア最強の騎士であり、アイーシャ夫人と面識のある数少ない人間だからだ」

「アイーシャ？　たしか俺たちのお仲間の？」

「ええ。アレクサンドリアに住まうという神殺し。妖あやしき洞どう穴けつの女王、永遠の美少女ともうたわれるアイーシャ夫人。あの方のことよ」

　首をかしげた護堂に、エリカがすばやく説明してくれた。

　いつも能弁な紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソも、この席では補佐役に徹するつもりのようだ。大先輩である聖ラファエロと叔お父じに気を遣つかっているのだろう。

「今回の件について、私たち《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》でもいろいろ調べてみた。サルバトーレ卿がなぜ、この土地に執しゆう着ちやくするのかをね」

　パオロがふたたび語りはじめた。

「結果、判明したことがある。去年の春、君がここに来る三か月前、この土地でアイーシャ夫人に似た女性が目撃されているんだ」

「もしかして、ドニが捜していた女の人って——」

「ああ。アイーシャ夫人のことでまちがいないようだ」

　パオロに言われて、護堂は想像してみた。

　この状況下でサルバトーレ・ドニが考えそうなことを。

「もしかして、あのバカ。神獣やカンピオーネが出没する土地だから、何か戦いの火種になりそうなことがあるんじゃないかって期待して——」

「だろうね。もしかしたら、そのカラクリもすでにつきとめているかもしれない」

　聖ラファエロは忌いまいましそうに言ってから、エリカに訊たずねた。

「おまえさん、アイーシャの姐ねえさんがどんな権けん能のう持ってるか、知ってるかい？」

「いいえ。夫人は羅ら濠ごう教きよう主しゆとならぶほど謎なぞの多いカンピオーネ。お顔も力の詳細も存じあげません。ただ、その権能によって永遠の美と若さを保たれているとしか……」

「もともとは若さを保つ権能じゃないんだけどねえ」

　ため息まじりに聖ラファエロは言った。

「あれは穴を造る権能なんだ。この地上に〝どこかべつの世界〟とつながる『穴』を造っちまうのさ。で、姐さんが帰ってくるまで、そいつはそのまま放置される」

「別の世界——アストラル界ってやつですか？」

　何度か訪れたこともある異世界の呼び名。

　護堂がその名を出したところ、聖ラファエロは微苦笑した。

「それだけだったら、全然マシだよ。そうじゃないところにも行けちまうから、アイーシャの姐さんは七人の誰よりも傍はた迷めい惑わくなカンピオーネなのさ」

「俺たちのなかでいちばん……？」

「ああ。ヴォバンの兄さんや羅濠姐さんも厄やつ介かいな人たちだけど、それでもアイーシャ姐さんが一等だね。あの人とだけはいっしょにいたくないよ、あたしは」

　昔を偲しのぶように聖ラファエロはしみじみと語る。

　そういえば、陸りく鷹よう化かも似たような述じゆつ懐かいをしていた。思い出した護堂に、パオロが重々しくうなずきかけて言う。

「夫人については、私も話でしか聞いたことがなくてね。それで聖ラファエロにわざわざおいでいただいたのだよ」

「でもね。あの姐さんの情報はあまり広めたくないんだ、本当は」

「どうしてでしょう？」

　護堂が訊ねると、聖ラファエロは憂ゆう鬱うつそうに答えた。

「聞いたら最後、たいていの人間は安心して眠れなくなるからさ。そのうち世界を一変させるヤバイ出来事が起きるんじゃないか。実はもうはじまってるんじゃないかってね」

　世界を一変。話半分にしても、物騒な表現だった。

「今回の件、あたしはこう考えるよ。アイーシャ姐さんの『穴』がこの土地のどこかで口を開けていて、神獣どもはそこから出てきたんじゃないかって」

　聖ラファエロの推測を聞いて、目をみはる護堂だった。

「やあ、君たちだけかい？　護堂はいないんだね」

「サルバトーレ卿！」

　不意に声をかけられて、祐ゆ理りは驚いた。

　臨時にパーティー会場となった大広間。その隅でリリアナ・恵え那なと共にいたら、サルバトーレ・ドニがビールのグラスを手にやってきたのだ。

「エリカさんの叔お父じさまと、別室でお話をされていますが……」

　祐理は恐縮しながら答えた。

　ドニとの出会いはサルデーニャ島。あのときは会って早々に荒あ

ら縄なわで縛しばられた。たいして話もしていない。決して親密な関係ではないのだ。

「あいかわらず草薙護堂が相手だと、マメになられますね、卿」

　リリアナが間に入ってくれた。いちばんドニとの縁が深いのは彼女である。

　丁てい重ちようさを崩しはしないが、微妙に皮肉っぽいコメントを口にした。

「わたしの知るサルバトーレ・ドニさまは、このような席で世間話をされる方ではなかったはずですが……」

「おいおい。いくら僕だって知り合いに声をかけるくらいはするさ」

　笑うドニのズボンから、明るいメロディが聞こえてきた。携帯電話が鳴っている。

　彼は「ちょっとごめんね」と電話を取り出し、通話をはじめた。

「うん……うん。へえ、そりゃ一大事だ。意外と早かったね。やあ、ごめんごめん。もちろんだよ、絶対まじめにやるからさ。すぐに準備する」

　にこやかに談笑するサルバトーレ・ドニ。

　祐理はなぜか居心地悪い気分になり、きゅっと身をすくめた。金髪のカンピオーネから、射出寸前の花火に似た気配を感じたのである。

　一方、ドニはそそくさと電話を切り、にこやかに言った。

「じゃあ、僕はもう行くよ。護堂によろしく！」

　去っていく足取りは不自然に軽やかだった。

　ドニの背中が十分にはなれたところで、いきなり恵那に訊きかれた。

「どうかしたの、祐理？　落ち着かないようだけど」

「あ、はい。今のサルバトーレ卿から、なぜか不吉な気配を感じたもので……」

　答えると、太た刀ちの媛巫女は「うーん」と考えこんだ。

「今の電話の相手、さっき王様と話してたリベラって人の声に聞こえたんだよね」

　聴覚をふくめた清せい秋しゅう院いん恵那の五感は、野生の動物なみに鋭い。

　それくらい聞き分けることは十分に可能だろう。祐理は疑いもせずにうなずいた。

「でさ。リベラさん、何かがこのホテルに接近中だから気をつけろ、警戒させろ～みたいに強く言ってたように聞こえたんだけど……」

「サルバトーレ卿には、そういうそぶりは全然ありませんでしたね……」

　恵那と祐理がつぶやくと、リリアナも腕組みして考えこんだ。

「まさか、卿はもう何か悪だくみをはじめるつもりなのか？　みんなが到着直後でバタバタしている状況をいいことに……」

「あの方がそこまで気をまわされるでしょうか？」

　祐理が訊ねると、リリアナはむずかしい顔でうなずいた。

「そうなるよう計算して仕組む、とかはないだろう。だが、利用できると思ったものは臨りん機き応おう変へんに活用していくはずだ。あれでなかなか抜け目のない方なんだ」

「そうなのですか？　すこし意外です……」

「気持ちはわかる。ときどき単刀直入にバカと形容したくなるからな……」

「り、リリアナさん。そういう風におっしゃったらいけませんっ」

「でも、たしかに細かく頭を使うのが苦手そうな人だよねー」

「恵那さんまで、ダメですよ！」

「いやいや。恵那もそうだから、親近感がわいちゃって」

「その割に清秋院恵那、さっき卿がいらしたときは妙におとなしかったな。卿を避けていたようにも見えたが……」

　リリアナが不思議そうに言った。実は祐理も同じことを感じていた。

　いつも物もの怖おじしない媛巫女筆頭がサルバトーレ・ドニと目を合わせないよう、祐理の陰に隠れていたように思えたのである。

「あー……実はさ。ああいう悟りを開いていそうな人、苦手なんだよね」

「「悟り!?」」

「ところでサルバトーレの王様、またいなくなってるよ」

　天てん衣い無む縫ほうの自然児とは思えない発言。『悟り』という意外すぎる言葉。

　驚く祐理とリリアナを尻目に、恵那がパーティー会場を見わたしながら言った。

「たぶん、会場の外に出たんだと思う」

「何を企んでいるかはわからないが、あまり放置したくないな……。すこし探ってみるか。つきあってくれ、清秋院恵那」

　リリアナが思し慮りよ深げに言う。こういうときにリーダーシップを取るのは、やはり草薙護堂の副官ともいえる彼女だった。

「下へ手たに『魔女の目』を飛ばしても、サルバトーレ卿には破られてしまう。卿の居場所を突き止めて、あとをつけてみよう」

「おもしろそうだね。もちろんいいよ。恵那も行く」

　空に視覚を飛ばす魔女術も、サルバトーレ・ドニには通じにくいようだ。

　しかし、リリアナも恵那も身軽で、視力が鋭い。この両名なら、

追跡・尾行という方法で捜査することも可能なはずだった。

「気をつけてくださいね、おふたりとも！」

　もちろん、肉体派ではない祐理は見送る側となる。

　リリアナと恵那が会場から出ていったあとは、ひとりで仲間たちの帰き還かんを待たなければいけない。まわりはパーティーの喧けん噪そうでにぎやかだが、知り合いはいなかった。

　ひとまず会場である大広間をあとにして、廊下に出る。

　壁際のイスに腰かけ、一息ついた直後——。

「アンドレア卿から報しらせが入った。神獣が一体、こちらに向かっているらしい！」

「偵察に出た騎士たちを逆に神獣が発見して、向こうから襲ってきたそうだ。偵察の連中はこちらへ全力で逃走中だ。救助と迎撃の準備を！」

　数人の騎士たちが古城ホテルの廊下を走り、周囲へ大声で報せていく。

　祐理はハッとした。つまり、ここがまもなく戦場になる。さっきサルバトーレ・ドニが受けていた電話は、この報告だったのだ！

　しかも、神獣到来という危機的状況が呼び水になったのか。

　いきなり鮮烈なイメージが祐理の心に浮かびあがった。もちろん霊視の啓示だった。

　しかし、その内容は——

「そんな！　どちらへ行かれるんですか、護堂さん!?」

　愕がく然ぜんとして、思わず呼びかける祐理だった。

古城ホテルのエントランスホールで、清せい秋しゅう院いん恵え那なは白いジャケットを羽織った。

リリアナはいつもどおり青と黒のケープ。時間を無駄にできる余裕はないので、これで防寒の備えは終わりだ。ホテルの外へ出る。

周囲一帯は一面の銀世界――。

積もった雪の上に足を踏み出せば、ずぶずぶと沈んでしまう。

しかし、恵那は厳冬であろうと深しん山ざん幽ゆう谷こくを駆けまわる自然児。猿さる飛とびの術で超人的な身軽さをも身につけている。

この術を使えば、悠ゆう々ゆうと雪上を歩くことができた。浅い足跡だけが雪に残る。

「リリアナさんは雪とか大丈夫な人？」

「べつに慣れてはいないが苦手でもない。気にしないで行ってくれ」

恵那とちがい、ミラノ育ちのリリアナは自然の申し子ではない。

しかし、身軽さを飛ひ翔しようの域にまで昇しよう華かさせた魔女だ。やはり雪上に浅い足跡を残すだけで、恵那のすぐあとを軽快に歩いていく。

「ホテルのなかに卿きようはいらっしゃらないようだからな……」

「やっぱり、外へ出たのかな？」

リリアナと共に、恵那は遠くを見やった。

このホテルは小高い丘に建っており、まわりの風景をパノラマのように見渡せる。

人工物といえば、十数キロ先にある小さな街くらい。糸杉をはじめとする木々がまばらに生えてはいるが、きわめて見晴らしがいい。

地平線の先まで続いていきそうな純白の雪原が広がっている。

　もう午後も遅い。しかし、夕暮れにはまだ時間がある。雲ひとつない冬晴れだ。十分に明るい空の下、恵那は『鷹たか目め』の呪じゅ術じゆつで視力を強化させた。

　もともと目のいい恵那だが、これでまさしく〝鷹の目〟となった。

　数キロ先から獲物の小動物を見いだす猛もう禽きん類るいの視力で、遮しゃ蔽へい物ぶつのすくない雪原をじっくりと見わたして――ついに人影を視認した。

「あれがサルバトーレの王様だといいんだけど……」

「この雪のなか外出する物好きもすくないだろうから、期待感はあるな」

　リリアナとうなずき合い、そちらへ向けて走りはじめる。

　見晴らしがいいということは、向こうもこちらを見つけやすいはず。念のため、リリアナが姿を隠す『隠れ身』の魔女術を使ってくれた。

　自分たちの姿を保護色のようにカモフラージュしてくれる術らしい。

「ところで、サルバトーレ卿を『悟りを開いてそうな人』と言っていたな？」

　雪上を飛ぶような速さで駆けながら、リリアナが訊たずねてきた。

「卿のお人ひと柄がらにそぐわない表現だと、わたしには思えるんだが」

「そうかなあ。あの王様、人並みの欲とか雑念を全然持ってないように見えるよ。それこそ赤ん坊と同じくらい、頭の中身がからっぽな感じで」

「頭のなかが空だと、それが悟りなのか？」

「そりゃそうだよ。一切の迷いと悩みから解放された境地が悟りなんだから。大たい智ちは大たい愚ぐに似たり。無念無想、明めい鏡

きよう止し水すい。頭であれこれ考えるのを捨てて、その場その場で融ゆう通ずう無む碍げに生きるがよく候そうろう。人の投げるにまかせ、人の笑うにまかすってね」

「わかるような、わからないような……」

　ふたりは雪上を駆けながら雑談していたのだが、唐突に口を閉ざした。風に乗って話し声が聞こえてきたのだ。同時に足を止め、聞き耳を立てる。

『どういうおつもりなのですか、卿!?』『誰か、急いで会場にもどれ！　アンドレア卿にご報告を——うっ』『くふっ』『ぬはあっ』

『悪いね、君たち。痛みはないように眠らせてあげたから、勘かん弁べんしてよ』

　それ以降、声は聞こえない。風鳴りだけが耳に入ってくる。

「……どう思う、リリアナさん？」

「……サルバトーレ卿が監視の目を実力行使で排除した、だろうか」

　意見が一致したので、ふたりはうなずき合った。

　ここからは走るのをやめ、声が聞こえてきた方角へ進む。気配を殺し、物音を立てないようにして、慎しん重ちように。やがて、糸杉林のなかで見つけた。

　雪のなか倒れている三人の男と、飄ひよう然ぜんとたたずむサルバトーレ・ドニを。

　黒いコートを羽織り、革のブーツをはいている。肩に負うのは円筒型ケースだ。

「さて、と。そろそろ来る頃合いだと思うんだけど、どうかな？」

　つぶやいた直後、ドニが視線をこちらに転じた。

　恵那はとっさに雪の上へ倒れこみ、華きや奢しやなリリアナは糸杉の裏側に身を隠した。

　しかし杞き憂ゆうだった。ドニはふたりではなく、古城ホテルの方を見つめていた。そして、にんまりと笑う。彼の視線を追いかけて、恵那は仰ぎょう天てんした。

　体長七メートルほどの『恐竜』がホテルの前に顕あらわれていたのだ。

　俊しゅん敏びんそうな細身の肉体。大きな鉤かぎ爪づめを持つ、強きよう靭じんな後ろ肢あし。草薙護堂たちから聞いたのと同じ、黒き肉食恐竜だった。

　最近の研究では、この手の恐竜は羽毛につつまれていたという説もある。

　だが、目の前の神獣は硬そうな表皮でおおわれていた。しかもカラスのように黒いので、純白の雪上ではおそろしく目立つ。

「よしよし。アンドレアたちが忙しい間に一仕事すませよう」

　満足そうにほくそ笑むと、ドニは狐きつねのような身軽さで雪上を走りはじめた。

　古城ホテルの方へ——ではない。まったくべつの方向だ。

「神獣の出現を無視して、卿はどこへ行くつもりなんだ？」

「このまま追いかけようよ。どうせ向こうには王様もエリカさんもいるんだし」

「たしかに、エリカの叔父上と聖ラファエロもいるというしな……」

　とっさに恵那が訴えると、リリアナはすぐにうなずいてくれた。

「あの黒いやつがまた出たのか⁉」

「ええ。偵察に出した騎士たちを追って、ここに接近中だそうよ！」

　護堂はエリカと共に古城ホテルの外へ向かっていた。

　アイーシャ夫人の『この地上ではないどこか』へ旅立つための権能について、ちょうど聖ラファエロから聞き終えたとき、不意にパオロの携帯電話が鳴った。

　それがリベラからの『神獣接近中』の一報だった。

　同行する聖ラファエロとパオロ・ブランデッリも険しい顔でささやき合う。

「で、あのバカの世話役はどうしたって？」

「サルバトーレ卿を監視中の者たちと連絡が取れないそうです。卿の行方ゆくえを追うので、こちらの指揮を私にまかせたいと」

「ちっ。次から次と、面倒事が続くねえ！」

　四人でホテルの庭園に出た直後、奇怪な咆ほう哮こうを聞いた。

　シャアアアアアァァァァァアアアアアアアアッ！

　声の方に目を向ける。護堂は九か月ぶりに黒い恐竜――体長七メートルほどの俊敏そうな神獣と対たい峙じした。やはり後ろ肢の鉤爪が大きな、デイノニクスの形状である。

　このデイノニクス、見た目以上に身軽らしい。

　古城を取りまく城壁の上にのぼり、ホテルの敷地内を見下ろしていた。

　まだ草薙護堂の登場には気づいてないようで、逃げるそぶりは見せない。護堂は首をかしげた。九か月前よりも大幅に増えた実戦経験のおかげで、あることに気づいたのだ。

「神獣、ではあるんだろうけど……すこし小さい気もするな」

「まだ真の姿があるのかもしれないわね。いきなり巨大化したりとか」

　経験を積んだのはエリカも同じ。ふたりでうなずき合う。

　護堂たちとはべつに、庭園には七、八名の大騎士が集まってきていた。

　ドニの招集に応じた精せい鋭えいたちだ。しかし、神獣を見あげる彼らの瞳には緊張と恐怖の色がたたえられている。

　かつてエリカの同僚が言ったことを、護堂は思い出した。

　神獣との対決は大騎士級の魔術師にとっても、決死の戦いになる――。しかも、この状況ではあまりに準備不足。護堂はとっさに指示した。

「あの人たちをさがらせてくれ。あいつの相手は俺がする！」

「いいえ。サルバトーレ卿の意図がわからない以上、不用意にウルスラグナの化身を使うべきじゃないわ。ここにはわたしもいるし、叔父さまたちもいらっしゃるのだから！」

　エリカが答えた瞬間、ケープの裾すそがひるがえった。

　イタリアの大騎士たちがまとう戦いくさ装しよう束ぞく――バンディエラと呼ばれるケープを、隣にいた聖騎士パラデイーノふたりが呼び出したのだ。

　聖ラファエロのケープは紫色ヴイオラ。パオロのケープは当然のように紅と黒ロツソネロ。

　エリカとリリアナがまとうものよりも、裾がだいぶ長かった。

　そして、紫の女騎士は刃渡り一メートルはあろう両手持ちの大剣を召しよう喚かん。紅き聖騎士パラデイーノは左手に楕だ円えん形けいの楯たてを、右手に逆さか棘とげ状じようの突ラ撃ン槍スを呼び出していた。

「出しゃばるつもりはなかったけど、高みの見物も気が引けるしねー」

「まずは私たちが前座として出よう。護堂、君は主役らしく、いちばんの見せ場が来るまで控えていてくれ！」

　聖ラファエロはデイノニクスを不敵に睨ねめあげていた。

　パオロは凝こった言いまわしの口上で、エリカの叔父であるゆえんを見せつけていた。

　一方、恐竜型の神獣は顎あごを大きく開けて、ふたたび咆哮を発した。

　シャアアアアアアアアァァァァァァァァアアアアッ！

　それに臆おくすることもなく聖騎士パラデイーノふたりは軽やかに跳躍し、城壁の上に降り立つ。ここでデイノニクスを迎え撃つつもりなのだ。

「じゃあ護堂、わたしも行ってくるわね！」

　エリカも細身の長剣クオレ・ディ・レオーネを呼び出し、叔父に続いて城壁へ跳ぶ。

　ひとまず騎士たちの戦いを見守ろう――。

　護堂が三人の背中を見つめていたときだった。不意に腕を引かれた。振り向くと、黒いワンピース姿の媛巫女、万里谷祐理がいた。

「護堂さん。折り入って、お話があります……！」

　ひどく思い詰めた表情で、祐理は訴えた。

4

　デイノニクスが顎あごを開くと、そこから幾いく筋すじもの稲いな妻ずまが吐はき出された。

　城壁の上にいた聖ラファエロはその直撃を喰くらってしまう。本当なら彼女の体は衝撃で吹き飛ばされ、全身に大おお火傷やけどを負って即死するはず。

　が、聖ラファエロの体を紫色の光がつつみこみ、守護していた。

「くぅぅっ！　聖ヨハネよ、我われを庇ひ護ごし給たまえ！」

　歯を食いしばりながら、女聖騎士パラデイーノは必死に言こと霊だまを唱となえる。

　すると、紫色の光が輝きを増した。その庇護のもと、聖ラファエロは稲妻に襲われながらもどうにか無傷で耐えていた。

　紫の輝きは、聖ラファエロが『聖絶』の秘儀で生み出した力場であった。

　エリカとリリアナも使う——否いな、彼女たちがいまだ短時間しか行使できない、聖なる殲せん滅めつの特権。その秘力をもって、聖ラファエロは神獣の注意を惹きつけているのだ。

　直後、デイノニクスが急に稲妻を吐かなくなった。

　その凶悪な顎で、やにわに女聖騎士パラディーノへ噛かみつきにかかる。しかし、聖ラファエロが呑のまれる寸前、デイノニクスの横っ面つらを紅あかい光がはりとばした。

　楯たてと槍やりで武装したパオロ・ブランデッリが体ごと突撃を敢かん行こうしたのである。

　紅き光を全身にまとい、聖なる殲滅者として全速力の飛ひ翔しょう。左手の楯で体をかばいながらデイノニクスの横っ面へ一直線に突っ込んで——。

　この突撃は、さながら巨人の右ストレートのごとくデイノニクスをふっとばした。

　しかも、パオロの攻撃は止まらない。ふっとんだデイノニクスの黒い頭部——そのこめかみめがけて、ふたたび飛翔と突撃を繰りかえす。

　今回は槍の穂先に、毒々しいほど紅い十字型の呪じゆ紋もんが浮かびあがっている。

「紅き十字よ……楔くさびとなり、穿うがて！」

　デイノニクスの頭に突っ込みざま、パオロは言霊と共に槍を突き出した。

　鋭い穂先と紅の五ご芒ぼう星せいが表皮を刺しつらぬく——寸前、デイノニクスは吠ほえた。

　クアァァァァァアアアアァァァァッ！

　その瞬間、デイノニクスの双眼から火花が放たれ、突っ込んできたパオロを直撃した。神獣らしく神力を振るったのだ。

「くうっ！」

　パオロは地上にたたき落とされたが、すぐに立ちあがった。

　聖なる殲滅者の光はあざやかな深しん紅くの輝きを保ったままである。その立ち姿の力強さは、人間でありながら英雄的でさえあった。

　雄お々おしいパオロの横に聖ラファエロも駆けつけ、紫の聖騎士パラデイーノとして大剣をかまえる。

　この両者はイタリアだけでなく、欧州でも最高クラスの達人なのだという。

　ふたりの戦いぶりを見て、護堂は気づいた。たしかに『聖絶』を使うときのエリカやリリアナとくらべて、安定感がちがう。

　おそらく瞬発力という点では、極端な差はないように感じる。

　しかし、パオロや聖ラファエロの力強さや落ち着き、揺るぎない安定感は、仲間の騎士たちにはないものだった。見ていて危なっかしくない。

　そのうえ第三の戦力として、エリカがいつでも加勢に入れる状態なのだ。

「あの調子なら、たしかに俺抜きでも大丈夫みたいだな……」

「ええ。なんとなくですが、この場はおふたりにまかせて問題ないように感じます。それよりも護堂さん、早くお話を――」

「あ、ああ。悪い万ま里り谷や。聞かせてくれ」

　中世の城をベースに造られた古城ホテル。その庭園の片隅である。

　話があると祐理に連れてこられた護堂だが、神獣との戦いが気になって、つい戦況を見守っていたのだ。

「はい。護堂さんとお別れする前に、是非お耳に入れておきたいんです」

　いきなり言われて、護堂は「えっ」と絶句した。

　祐理と別れる。そんな予定はない。考えられる理由としては、彼女の体調不良か。媛巫女が立ちくらみを起こしたと聞いて、エリカは言ったものだ。

『……並はずれた霊視力と精神感応の資質。祐理はプリンセス・アリスとよく似たタイプの霊力者よ。そして、プリンセスのお体がとてもか弱いのは、並はずれた霊力に体がついていけないから、とも言うわ』

　ロンドンの住まいで寝こみがちだという姫君を、エリカは引き合いに出した。

『幸い、祐理の体調不良は深刻じゃなさそうだけど。でも、あくまで今のところよ。すこし様子を見てみたいわ。あまり負担をかけないようにしながらね』

『プリンセスに似ているといえば』

　旧友兼ライバルの言葉に、リリアナもうなずいていた。

『万里谷祐理は異様なほど体力がない。もしかしたら、それも神祖の血が色濃く発現した者の特徴なのかもしれませんね……』

　根拠はないが、説得力のある考察だった。

　イタリアへ来る前も祐理は日本に残すべきか、だいぶ悩んだのだ。

「もしかして万里谷、体の調子がよくないのか……!?」

「い、いえ。そんなことはありません」

　思わず勢いこんだら、祐理はきょとんとしてしまった。

　ウソではないようなので、護堂はほっとした。ならば、なぜ『別れ』なのだろう？

「実は……先ほど視みえてしまったんです。私たちがもうすぐ離ればなれになる――護堂さんがどこか遠いところへ旅立たれてしまうと」

「俺が旅立つ？　一体どこへ？」

　祐理は霊視を得ていたらしい。当然、疑いはしないが護堂は首をかしげた。

「わかりません。かんたんには帰ってこられない場所としか……。ですから、旅立ちの前にお話ししておきたいんです。護堂さんが得られた、新しい力について」

「力？」

　予想外のことを言われて、護堂はきょとんとした。

「はい。私も最近、感じるようになったのですが……護堂さんのなかで、あの力が新たな形に昇華しつつあります」

「…………」

「本当に必要なときが来るまで、黙っているつもりでした。でも、護堂さんが旅先で危ない目に遭あわれるかもしれませんし……そのときのために、ここで封を解きましょう」

　常識人で穏おん健けん派はの祐理らしからぬ、物騒な申し出だった。

　護堂は驚いて、消極的に反対しようとした。

「そんな危険そうな代しろ物もの、べつに俺はなくてもいいんだけど……」

「いいえ。是非、用意させてください。おそばにいてあなたを守ることができない分、すこしでも何かさせて欲しいんです」

「万里谷……」

「そ、それでですね。封を解くには、術をかけないといけません」

　目を伏せ、うつむき、恥じらいながら祐理がつぶやく。

　しかし、巫み女こ装しよう束ぞくの乙女おとめは言いにくそうにしながらも、細々と訴えを続けた。

「も、もうすぐお別れになってしまいますし。いつかの恵那さんのように〝あとで〟としておいたら、護堂さんはお忘れになるかもしれませんし……」

　恵那との約束にまで言及されて、護堂は「うっ」とうめく。

　だが、これで媛巫女が何を望んでいるのか、完全に明らかとなった。

「で、ですから。もし、おいやでさえなければ、私たちで、是非──」

「万里──祐理！」

　これ以上言わせたら、もう祐理に顔向けできない。

　また、けなげな言葉をさんざん聞かされて、護堂もひどく昂たかぶっていた。即座に祐理を抱きよせ、強引に唇くちびるを奪ってしまった。

「護堂さん……！」

「妙な力なんて本当にいらないけど、俺は──」

「は、はい、ふたりでいたしましょう」

　見つめ合い、熱っぽくささやき合ってから、あらためてキスを交わす。

　今度はふたり同時に唇を差し出し、弦楽器の弓と弦が合わさるような接せつ吻ぷんとなった。唇同士を密着させ、たがいの舌を探り、唾だ液えきまで混じり合う。

　そして、護堂の心のなかにある女神の似に姿すがたが現れはじめたのである。

「さすが叔父さまと聖ラファエロ……。わたしの出る幕はなさそう

ね」

　神獣相手に奮戦する叔父たちを見守りながら、エリカはつぶやいた。

　いつでも援護できるように、獅し子しの魔剣クオレ・ディ・レオーネに魔術をかけ、投げ槍に変形させている。

　しかし、加勢の必要はなさそうだった。

　聖ラファエロが敵の注意を惹ひきつけた隙すきに、叔父パオロが殲せん滅めつ者しやの突撃をたたきつけ、一般人のスタッフもいる古城ホテルよりデイノニクスをひきはなす。

　自分たち以外の安全を確保できたところで、あらためて戦闘再開。

　叔父と聖ラファエロは無理に攻め込もうとはせず、神獣が繰り出してくる攻撃を上う手まくいなし続けていた。

　しかも、隙を見てはデイノニクスの急所に刃を突き立てながら。

　結果、神獣はすこしずつ弱り、叔父たちの優勢は揺るぎないものとなっていく。

　ただ倒すだけではない。敵の性質を把は握あくしようとしているのだ。同タイプの神獣と再戦する可能性を考慮して——。

「わたしやリリィ、それに恵那さんじゃああは戦えないわね……。聖騎士パラディーノ位階者がふたりがかりとはいえ、実力の差を見せつけてくれるわ」

　これがエリカたちなら、矢継ぎ早に速攻を仕掛けていくしかない。

　神獣との戦いでは、たった一度のささいなミスが命取りになる。長期戦になれば、その分ミスを犯すリスクも大きくなってしまう。となれば、最初から攻撃的に振る舞って、短期決着をめざす方が良策だ。

　しかし、これは仲間や草薙護堂のバックアップを期待できるからこその戦法。

　エリカもリリアナもあくまで『聖絶』を会え得とくしただけ。真に聖騎士パラデイーノ位階を得たとはいえない、修行中の身なのだ。

　ともあれ、叔父たちの安定した戦いぶりを見守っていた最中。

「えっ⁉」

　エリカは驚きよう愕がくした。デイノニクスがいきなり姿を変化させたのだ。

　強靭で逞たくましい後ろ肢に比べて、前肢は一応ついている程度の短さ、細さだった。この細い前肢がいきなり『翼』に変化を遂とげた。

　薄い皮ひ膜まくがはられた、コウモリの羽にも似た二枚の翼へ——。

　今やデイノニクスは黒き翼竜に早変わりしていた。体長と体型はそのままで、あいかわらず俊敏そうだった。

「変身、だとお⁉」

「こんな力を隠していたのか！」

　驚く聖ラファエロと叔父を、翼竜は尾の一振りでなぎ払った。

　殲せん滅めつの加護で守られているため、ふたりともたいしたダメージはなさそうだった。しかし、その隙に黒色翼竜は力強く羽ばたいて、空へ飛び立った。

　ぐんぐん高度を上げ、彼方へ飛翔していく。逃げ出すつもりなのだ。

「クオレ・ディ・レオーネ！」

　気づいた瞬間、エリカは投げ槍に変形させていた魔剣を投じた。

　すでに飛距離を伸ばす魔術と共に『憎悪と絶望の言霊』を宿らせている。地上から放たれた槍は一筋の閃せん光こうとなって、翼竜の喉のど元もとに突き刺さった。

　手応えあり。すでに手負いだった神獣は、これが致ち命めい傷しようとなって地上に墜おちてきた。

　墜つい落らくした黒き翼竜は、骸むくろとして雪上に横たわっている。

　だが超自然の生き物なので、もうしばらくすると形を失い、消滅するだろう。

「ふたつの姿に変化する神獣……。ただの恐竜ではなかったのね」

　倒した神獣を見下ろしながら、エリカがつぶやく。

　彼女だけでなくパオロと聖ラファエロ、そして祐理といっしょに護堂も駆けつけ、神獣の成れの果てを眺めていた。

「いちばん最初みたいに護堂が戦っていたら、たぶん気づかなかったわね。きっとすぐに倒してしまったでしょうし」

「苦き水より生まれたもの……母なる蛇へびにしたがう獣――」

　不意に祐理がささやいた。茫ぼう洋ようとした口調から、霊視を得たことがわかる。

「この神獣について、何か視えたの？　やっぱり、どこかの地じ母ぼ神しんと関係あるのかしら？」

「そこまではわかりかねます。本当にかすかなことしか視えなかったもので……」

　エリカと祐理のやりとりを聞いて、聖ラファエロも肩をすくめる。

「まあ、神獣を呼ぶのは神様だけに限らねえしな。由ゆい緒しよある神具、隠された聖域、禁断の上位魔術、それからカンピオーネさまさまだ」

「カンピオーネといえば、サルバトーレ卿はどちらに行かれたのだろうな？」

「――ん？」

　パオロのつぶやきを聞くのと同時に、護堂はべつの声を聞いた。

『草薙護堂！』『王様！』という呼び声。救済を求める声。それは遥はるか彼方より風に乗って届く、庇ひ護ご者しゃを呼ばわる声だった。護堂は耳をすませた。

　快晴の空のもと、雪片まじりの風が吹き抜けていく。

　そこに秘められた声は、窮きゅう地ちに立った者が助けを呼ぶための呪じゅ文もんだった。

「風が……『強風』の化身が使える……？」

「もしかして、リリアナさんと恵那さんですか!?　おふたりともサルバトーレ卿のあとを追っているはずなんです！」

「すぐに行きましょう、護堂！」

　祐理とエリカはさすがだった。

　護堂のつぶやきを聞くなり、すぐ状況に気づいたのだ。

　しかし、祐理はさっきの儀式で精神感応の力をわずかとはいえ使っている。疲れたのか、すこし顔色が悪かった。あまり無理はさせたくない。護堂はとっさに叫んだ。

「万里谷は休んでいてくれ。行くぞ、エリカ！」

　抱きついてくるエリカを受け止めながら、ウルスラグナ第一の化身を行使する。

　護堂の足下で大気が動きはじめた。風の渦うずが生まれ、つむじ風となっていく。瞬間移動の力が発現しつつあるのだ。

　驚くパオロと聖ラファエロを尻目に、護堂とエリカは風に乗って飛んだ。



「気をつけてください、護堂さん！　無事のお帰りをお待ちしています！」

　草薙護堂の帰還を願う、祐理の声を聞きながら。

「もどってこないときは、私の方から探しに参りますから！　絶対ですよ！」

5

　深雪におおわれたカゼンティーノの森。

　もともと山間部なので、山あり谷ありとひどく起き伏ふくに富んでいる。

　雪上を駆け抜け、峻しゅん険けんな地形を跳び越えていくサルバトーレ・ドニの身ごなしには、狐きつねや雪ゆき豹ひようめいたしなやかさがあった。

　剣技以外の武芸と体術についても、非凡な造ぞう詣けいを持つ達人なのだ。

　これで性格さえまともなら——とは欧州の魔術師全てが思っていること。リリアナもひさしぶりにそのことを痛感した。

「それにしても、卿きようはどこまで行くつもりだろうな？」

「とりあえず、山ふたつ越えたってところかな。今のところ」

　追跡行の相棒である清せい秋しゆう院いん恵え那なが答えてくれた。

　ドニに見つからないよう十分な距離を取りながら、軽快に走る彼のあとをつける。

　常人には不可能な難事だが、リリアナと恵那は術と身軽さを駆使して、どうにかこなしていた。しかし、見失ったとしても問題なかったかもしれない。

　というのも、ドニは〝ある痕こん跡せき〟を追いかけて進んでいたからだ。

　さっき古城ホテルの前で目撃した神しん獣じゅう——。

　デイノニクスは雪山を走ってきたらしく、足跡が雪の上に点々と残っていたのである。ドニは足跡を道案内にひた走っている。

「あの神獣の巣穴でも見つけるつもりなのか……」

「言われてみると、何かを探しているような目配りだよね」

　恐竜の足跡をたどり、やがてドニは渓けい谷こくに降りていった。

　谷底を流れるのは細い渓流だが、これはアルノ川である。いずれ雄ゆう渾こんな大河となって、トスカーナの広野を横切っていくはずだ。

　美しい渓流のほとり。これが春や夏の散策なら、最高に楽しめる場所だろう。

　ここでドニはついに目を輝かせた。理由は明白だった。この土地に満ちる霊気がよそよりもわずかに強いことをリリアナも感じ取ったからだ。

「由ゆい緒しよある霊山みたいな空気になってきたね。ところで」

　恵那が声をかけてきた。今まで泰たい然ぜん自じ若じやくとしていた媛ひめ巫み女こはすこし表情を引き締め、警戒のまなざしを尾行対象に向けていた。

「イヤな感じがするんだよね。あの王様、今にもイタズラとかはじめそうでさ」

「たぶん当たりだ。卿があういう顔になったときは、たいていろくでもないことになる」

　子供のように目を輝かせているサルバトーレ・ドニ。

　一二歳のとき彼と出会って以来、リリアナがしばしば見てきた姿だ。

　そのたびに英雄神ジークフリートとの決戦がはじまったり、地じ母ぼ神しんの石柱が八つ裂きにされたりと、面倒な事態になってきた。

「どうにかして卿を止めないとな……」

　決心すると、リリアナは行動を起こした。今まで渓谷には降りず、上からドニを見張っていた。だが、妖よう精せいの身軽さでついに谷底へ跳躍したのである。恵那もついてくる。

　ドニと真っ向から対たい峙じして、リリアナは言った。

「サルバトーレ卿！　一体、何をされるおつもりなのですか⁉」

「あれ？　君たちはリリアナ・クラニチャールと……ええと、名前を知らないけど護ご堂どうの連れの子だ。ついてきたのか」

　リリアナと恵那の姿を見て、剣の王はにやっと笑った。

「でも、これはこれで好都合かな？　彼に伝言、お願いしていい？　『ここがゲームのスタート地点だ。いっしょに遊ぶつもりがあるなら、あとから来てくれ』って」

「いろいろ省略しすぎですっ。順を追って、ご説明ください！」

　神殺しの魔王に対して、不ふ敬けいきわまりない発言。

　しかし、いいかげんリリアナもドニのあつかいに慣れてきた。彼のだらしなさに呑のまれまいと、あえて毅き然ぜんと要求する。

　はたして、軽薄すぎる魔王は「ごめんごめん」と返してきた。

「いやね。この辺に出てきた神獣って、どうも『地上じゃないところにつながっている穴』を通ってきたみたいなんだ」

「穴——つまり、異界につながる通廊ですね」

「うん、そういうの。僕はその穴をくぐってみたいのさ。向こうの世界には神獣がたくさんいるようだし、そいつらの主人である神様もいるかもしれないしね。いっちょ冒険の旅としゃれ込んでみようかなって」

あろうことか、こんなバカげた告白をにこやかに行うドニだった。

「ロールプレイングゲームっぽくて、おもしろそうだろ？　で、自分だけで遊ぶのもなんだから、護堂にもつきあわせたいんだよね」

「それで神獣の出所をたどってきたのですか……。どこかに穴とやらがあるはずだと」

「ごめん、王様。ちょっといい？」

リリアナがげんなりする横で、恵那が口をはさんできた。

「その穴ってさ、いつでも通れるわけじゃなさそうだけど。何か条件を満たしたときだけ、ぱかっと開くんじゃない？　満月の夜だけとか、決められた刻限だけとか。でないと、このあたりは神獣であふれかえっているはずだよ」

能天気な自然児であっても、清秋院恵那は文ぶん武ぶ両りよう道どうの才女。

正論だったので、リリアナもうなずく。その手の『異界へ旅する神秘』は特定条件下でしか機能しないのが、魔術の世界では常識なのだ。

しかし、常識の枠外で生きる金髪のカンピオーネはにへらと笑った。

「そこは大丈夫。こういうときのために、僕には切り札がある」

「切り札……？」

直後、ドニの体から強大な神力があふれ出てくる。

権けん能のうを使うつもりだ――察知した瞬間、リリアナはハッとした。霊視の啓示が降りてきて、教えてくれる。

この権能はもしかすると、古代ギリシアの秘教に由来するのではないか？

「酒と豊ほう穣じようの神……狂気を司つかさどる秘儀の神。まさかディオニュソス!?」

「へえ。それがわかるとは、さすがクラニチャール」

　ドニの笑いの質が変わった。陽気なラテン男の軽薄な笑みから、神を殺あやめてでも己おのれの傲ごう慢まんを通そうとする魔王の微笑に——。

「そういう君だから、安心してまかせられる。アンドレアによろしく言っといてよ。まずいことになったら、護堂に丸投げしろって」

「まったく、あなたという人は！」

　リリアナはため息をつき、それから決然と顔を上げた。

　あきれた無責任男でも、神殺しである事実に変わりなし。対抗できるのは同じ神殺しか、神のみ。そうであるなら——リリアナは仲間に目配せした。

「天叢雲あまのむらくも！　おねがい、力を貸して！」

　恵那は察しよく、すぐに神刀・天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを右手に呼んでくれた。

　リリアナもサーベル形状の魔剣、イル・マエストロを召しよう喚かんし、戦闘態勢をととのえる。

「ふふふふ。ここで剣を抜く君たちの無鉄砲さ、きらいじゃないよ」

　期待どおり、ドニは背負っていた円筒型ケースを降ろす。

　ふたを開けて取り出すのは、鋼はがねの長剣——。これをだらりと下げた右手で持つ。自じ堕だ落らくだが剣けん呑のんきわまりない闘争の構えをついに取った。

「安心してくれ。なるべく痛みはないようにしてあげよう」

　うそぶくカンピオーネと対たい峙じした瞬間、リリアナと恵那は叫んだ。

「草くさ薙なぎ護堂！　あなたでなくては戦えない敵がここにいます。どうかおいでください！」

「王様！　恵那たちを助けるために、早く来て！」

　呼び声に応えて風が吹き、強さを増して旋せん風ぷうとなり、やがてうずまく竜巻と化した。

　轟ごう々ごうと吹く強風の中心には草薙護堂と、彼の首っ玉にかじりついたエリカ・ブランデッリがいたのである。

　かくして、護堂とエリカは瞬間移動を果たした。

　やってきたのは、どこかの渓谷である。細い渓流の両脇は切り立った崖がけだ。この谷底にそれぞれの剣を持つドニ、恵那、リリアナの三人がそろっていた。

　護堂が到着するなり、銀髪の女騎士は言った。

「草薙護堂。例によってサルバトーレ卿が事の元げん凶きようです。早く止めないと！」

「うん。まあ、それだけわかっていれば十分だな、本当に」

　リリアナの要点だけをしぼった説明に、一瞬だけ苦笑してから。

　護堂は顔を引き締め、サルバトーレ・ドニをにらみつけた。珍しく優やさ男おとこの表情が鋭い。能天気なバカ男が本気になっている証拠だ。

「いよいよバカをはじめるつもりか、サルバトーレ・ドニ」

「君が駆けつけてくるのは予想外だったよ、護堂。でも、もう間に合わない」

　うそぶくドニの体から、強い神力が洩もれ出している。

　何か権能を使いはじめている。やはり、魔剣の権能か——。護堂が身がまえたとき、そばにいるエリカがいきなりハッとした。

「護堂、あれを見て！」

　金髪の少女は切り立った崖の方を指さした。

　アルノ川の向こう岸だ。場所はここから四〇メートルほど先。そこにはいつのまにか洞ほら穴あながぽっかりと口を開けていた――否。

　正確には『洞穴』に見える穴が発生していた。その内部は完全なる闇やみだ。

「なるほどね。あれが『地上ではない別世界へ通じる穴』ってわけだ」

「別世界へ通じる……？　まさか、アイーシャって人が造ったやつか!?」

「おっ、君も夫人のことを探り当てていたのか。じゃあ、ちょうどいいや。よかったら、僕といっしょに向こう側の世界へ旅立つかい？」

　戦せん慄りつする護堂を前にして、ドニは軽やかにウインクしてみせた。

「本当は、あとから追ってこいって伝言するつもりだったんだ。僕といっしょに冒険の旅をしたり、王国を乗っ取って戦争したりしようよ」

「冗談じゃない、誰がそんな真ま似ねするか！　清秋院、手を貸してくれ！」

　アイーシャ夫人の残した権能がどうして唐とう突とつに活性化したのか？

　この疑問を一時棚上げし、護堂は〝相棒〟の共同所有者へ呼びかけた。さすが恵那は察しよくうなずき、持っていた天あまの 叢むら雲くもの 劍つるぎを高々とかかげてくれる。

　護堂はすかさず指示した。

「天叢雲、あの穴から力を吸い取ってくれ！　大至急だ！」

　呪力や神の権能を吸収する黒き神刀の性質。それを恃たのんでの指示だった。

　どこまで効くかはわからないが、すこしでも力を弱められれば

と、相棒である神刀へ護堂は呪力を送りこんだ。あとは恵那がそれをコントロールすれば——

「えっ？　天叢雲……言うことを聞いてよ⁉」

　しかし、太た刀ちの媛巫女は驚きよう愕がくの面おも持もちで呼びかける。

　天叢雲劍はぶるぶると小刻みに震えていた。さらに、青白い焔ほのおが漆しつ黒こくの刀身から陽炎かげろうのように立ちのぼり、めらめらと揺れる。

「あ、熱っ！」

　さすがの恵那も天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを取り落とした。

　青白く燃える神刀は切っ先から落ち、河原の地面に突き刺さる。天叢雲劍はそのまま実体を失い、消え失せてしまった。

　今の一幕、気性の荒い暴れ馬が騎手を振り落とした情景と似ていた。

「な、何が起きたんだ……？」

「いざバッカスの巫女たちよ——神の子を呼び参らせよ。荒ぶる神の酒に酔い、家を捨て、山をさまよえ。われらの神を崇あがめ奉たてまつれ！」

　困惑する護堂の前で、ドニが言こと霊だまを唱えている。

　護堂は全身が熱くなっていくのを感じた。カンピオーネの肉体にたくわえられた大量の呪力が力を増し、猛たけり、荒れ狂っているのだ。

　次の瞬間、空気が轟ごう々ごうと音を立てて動きはじめ、風となった。

　それも崖の『洞穴』めがけて吹く、すさまじい烈風だ。

　護堂は気づいた。あそこから万物を引きよせる不可視の力——引力が放たれている。

　それによって渓谷の空気は風となり、『洞穴』へと吹きこんでいく。大小さまざまな河原の石が、上に降りつもった雪などが吸いこまれていく！

　護堂自身も体ごと持っていかれそうになったが、なんとか堪こらえた。

「あの穴、まわりのものを吸引しているのか……!?」

「お、暴走がちょうどいい具合に転んでくれたな。よかったよかった」

　暴走!?　護堂はハッとした。天叢雲剣に起きた異常、『洞穴』がいきなり見せはじめた異様な吸引力——。まさか。

「ふふふふ。今ね、僕はあらゆる神秘の力を強化したり活性化させる——というより、勢いまかせに暴走させる権能を使ったのさ」

　混乱のなか、にこやかにドニは語る。

「絶対にコントロールできないから、権能や魔術は使わない方がいいと思うよ。使った僕でさえ自分の権能を制御できなくなるんだ」

「ちょっと待て！　何だよ、その自爆技は!?」

　今まで謎なぞだったサルバトーレ・ドニ、第四の権能。

　その正体を知って、護堂は愕がく然ぜんとした。自爆技と罵ば倒とうしたが、すぐに気づいたのだ。これは上手くはまれば、極上の切り札ジョーカーになるかもしれない。

　というのも、この男には磨き抜いた剣技がある。

　権能がどれだけ不安定になっても、剣の技は決してドニを裏切らない。

　神の力や魔術があやふやな状況下なら、羅ら濠ごう教きよう主しゆやサルバトーレ・ドニのような男が格段に有利になるのでは——。

「護堂、ちょうどいいから僕はこのまま行くよ。よかったら君も本当についてくるといい。ふたりで冒険の旅をするのもきっとおもし

ろいよ！」

　ドニはにやっと笑い、全身の力を抜いた。

　直後、アイーシャ夫人の『洞穴』に吸引され、闇やみへ消えていく。

「王様！」

「草薙護堂！」

　恵那とリリアナが腰を落とし、重心を低くして吸引力にあらがいながら、こちらへ近寄ってきた。すでにそばにいたエリカも合わせて、四人で身を寄せ合う。

「護堂、このままではわたしたちもあの力に捉とらえられてしま——きゃあっ！」

　訴えの途中で、エリカが短く悲鳴を上げた。

　不可視の吸引力が一気に高まり、紅き悪魔デイアヴォロ・ロッソの華きや奢しやな体をついに持ち上げたのだ。彼女だけではなく、護堂、恵那、そしてリリアナも同じだった。

「うわっ⁉」「ひ、ひっぱられるよ！」「く——っ！」

　四人全員の体が闇に吸いこまれてしまうというとき。

　それでも、ひとりリリアナだけには最後の手段が残されていた。

「女神アルテミスよ、わたしたちに飛翔の翼を！」

　得意の飛翔術で、全員を安全なところへ運ぶつもりなのだ。いつものように青い光が四人をつつみこもうとする。しかし——。

「わあああああっ⁉」

　リリアナは絶叫し、ひとりだけ青き光につつまれた。

　そのまま彼方の空へ飛んでいく。ドニが残した『暴走の呪のろい』を、魔女の飛翔術も逃れることはできなかったのだ。

　残された護堂・エリカ・恵那は、まとめて『洞穴』へ吸いこまれ

ていった。

　そういえば、これこそが『妖あやしき洞穴の女王』の呼び名を生み出したのだと、紫の女聖騎士パラディーノは語っていた……。

　今さら思い出す護堂であった。

第４章　彼方の地の魔王たち

1

　この地上ではないどこかへつながるという穴に吸いこまれて。

　気づけば、護ご堂どうたちは深い闇やみのなかに浮いていた。夜ではない。上を見あげても星空はない。ただ闇だけが広がる空間だった。しかし、ひとつだけ光源があった。

　遥はるか前方に白い小さな光がきらきらとまたたいているのだ。夜空の星のように。

　その光を頼りに、夜目の利きく護堂は仲間たちを見み出いだした。

「みんな、無事か!?」

「うん、大丈夫。どこも怪け我がとかしてないよ」

「わたしもよ。はなればなれにならなくて幸運だったわね」

　恵え那なとエリカの声がかえってきた。ほんの二、三メートル先にふたりともいる。

　しかし、銀髪の女騎士はどこにもいないようだった。

「たしかリリアナさん、どこかへ飛んでいったよね」

「幸か不幸か、そのおかげでここに吸いこまれなかったのね。まあ、リリィのことだから無事に切り抜けたと思うわ。心配は要いらないんじゃないかしら」

　恵那の言葉に、エリカがすぐに答える。

　次の瞬間、護堂たち三人の体は動きはじめた。遥か前方の光に吸いよせられている。軽くジョギングする程度の速さで、三人はそちらへ運ばれていった。

　無重力のなかで浮遊しているのに等しい状態である。

　つかまるものも、踏みしめるものもない。抵抗は無理だった。

「これがラファエロさんの言っていた『通つう廊ろう』か……」

「アイーシャ夫人が残した別世界への通り道。実体験するとは思わなかったわ……」

「あれ。ふたりともこれの正体、知ってるんだ？　くわしく教えてよ」

「そいつはあとまわしでいいか？　こんなところでおしゃべりする気にもなれないし、今はおとなしく向こう側へ運ばれよう」

　恵那にうながしてから、護堂はため息をついた。

　白い光へと順調に近づいていく。間近で見ると、直径六、七メートルほどの光る球体であるとわかった。三人はそのまま、光のなかに呑のまれてしまう。

　次の瞬間、見知らぬ風景が目の前にあった。

「また森か」

「しかも、川のほとりよ」

　護堂とエリカはぼそりとつぶやいた。

　目の前に広がる情景を端的に語ると、まさにそうなる。ただし、さっきまでいたカゼンティーノの森では絶対になかった。

　目の前を流れていく川は、雄ゆう渾こんな大河である。渓けい流

りゆうではない。

　川の両岸にはおびただしい数の木々――ブナや樫かしなどが立ちならんでいる。

　護堂たちは今、森林地帯を流れる大河のほとりにいるのだ。小鳥のさえずりが聞こえる。日差しがあたたかい。ひらひらと蝶ちようが飛んでいった。

　春だった。断じて真冬のトスカーナではない。

　目の前の大河はとても澄んでいて、水が青く、感動的なまでに美しかった。

「一体どうなってんの、これ……？」

　天てん衣い無む縫ほうの恵那も状況をつかめず、さすがに首をかしげた。

　護堂が説明しようとしたとき、頭上を巨大な影が通りすぎていく。

　竜が二匹、連れ立って上空を飛んでいったのだ。しかも、トスカーナの古城ホテルで目撃した黒き翼竜である。悠々と翼を広げて、滑空している。

「護堂、あれを見て！」

　エリカが指さした。護堂たちがいるのと同じ側の岸辺に『砦とりで』がある。

　二匹の翼竜はその敷地内へ降下していく。あそこが目的地だったのだ。『砦』は四方を城壁でかこわれていた。城門の上は見張り台になっている。

　遠目に見た印象では、敷地内に三、四〇棟の建物がならんでいるようだった。

「あそこに神獣の御主人がいるのかな？　たとえば神様とか」

「それとも、誰かさんの同族かしらね……？」

　恵那が言い、エリカが肩をすくめた直後、ざばっと水音がした。

　見れば、目の前の大河を黒い恐竜が泳いでいたのである。頸くびをのばして、川岸にいる護堂たちを凝ぎよう視ししていた。

　それはやはり、カゼンティーノに出没したデイノニクスだった。

　護堂と目が合うなり、すごい速さで水中にもぐってしまう。

「この森、もしかしてあいつらの巣なのか⁉」

「とんだ〝失われた世界ロストワールド〟ね。ひとまず撤退というのはどうかしら⁉」

「いいアイデアだと思うよ。みんな、あっちに行こう！」

　三人の意見はひとつになり、さっさと歩きだした恵那に続いて、護堂とエリカも足早に水辺をはなれていった。

「つまり、サルバトーレの王様が暴走させたのは、アイーシャ夫人の権能なんだ」

「ええ。夫人が造る『妖精の通廊』を通れば、アストラル界のような〝地上ではないどこか〟へ行けるらしいの」

　森のなかを歩きながら、不可思議な移動のカラクリをエリカは語っていた。

　しかし、恵那は納得していない顔つきだった。

「でもさ。それってリリアナさんが前に使った『幽かく世りよ渡り』の術とたいして変わらない気がするけど。王様たちの権能だったら、もっとすごいことができるんじゃない？」

「…………」

「大体、ここ幽世じゃないでしょ？　あの世界のにおいが全然しないし」

「あいかわらず勘がいいわね、恵那さん。その件はすこし保留させて頂ちよう戴だい。わたしたちのいる土地がどういうところか把は

握あくできるまで、不用意な話をしたくないの」

　恵那に詮せん索さくされて、エリカは珍しく問題を棚上げしようとした。

　しかし、気持ちはわかる。最悪の事態だと判明する前から、不吉な情報を言いふらしたくないのだろう。護堂が多くを語らないのも同じ理由だ。

「わたしたちは今、ものすごく困難な状況にあると思うから……。その辺もふくめて、順を追って説明したいわ」

「了解。幽世に行くよりもややこしいことになってるわけだ」

「不本意ながら、そのとおりよ。目下のところ、わたしたちが為なすべきは情報を手に入れること。まずはそちらを解決しましょう」

　エリカはため息まじりに言って、立ち止まった。

「やっぱり人里を見つけたいところよね。行き先を占ってみようかしら？」

「いきなり非科学的だな……」

「そんなことないわよ。たまに護堂の居場所を突き止めるためにやってるでしょう？　今回は特定の人物じゃなくて、漠然と人の気配を探してみるわ」

　護堂のつっこみを受け流し、エリカは懐中時計を取り出した。

　進行方向を決めるとき、いつもダウジングの要領で使っている道具だ。鎖くさりを持って、手から吊つりさげる。待つこと暫しばし。時計はかすかに揺れはじめた。

「当たっているかはわからないけど、指針がないよりマシよね。行ってみましょう」

　時計が揺れるのと同じ方角へ、エリカが歩きだした。

　護堂と恵那もそれに続く。しばらく歩くと森が終わり、平原に出た。

　そう、平原——。真っ平らな野原が見わたすかぎり続いている。せまい日本ではめったにお目にかかれない地形だ。

　この野原には、一本の道が敷かれていた。

　道幅はそれほど広くないが、砂利や石を敷きつめて造った街道だ。道の両脇には排水溝まであって、ずいぶんと行き届いている。

　この道をたどっていけば、人里に行き着ける可能性はきわめて高い。

　もちろん三人は歩みを速め、街道までやってきた。

「ここに出るまで、徒歩で約三〇分。完全に運が尽きたわけではないようね」

　懐中時計でかかった時間を計算して、エリカはくすりと微笑ほほえんだ。

　ちなみに、時計盤が指している時刻は午後七時過ぎ。これを確認してから恵那が空を見あげ、自然児らしい推測をした。

「太陽があの位置だから、今はたぶん昼の一一時くらいかなあ」

「やっぱり、時刻は当てにできないか……」

　護堂がつぶやいたときだった。

　二頭立ての馬車が街道をのんびりと進み、護堂たちの方へ近づいてきた。御ぎょ者しゃ台だいにはふたりの白人男性がすわっている。

　彼らの衣服はひどく素そ朴ぼくで、粗末と言いかえても問題なかった。

　上半身はかんたんにいえば長袖のＴシャツである。ただし、長めの裾すそを腰帯でしばり、きゅっとさせている。下半身はゆったりとしたズボンだった。

　そして物騒なことに、ふたりとも御者台に長剣を立てかけている。

柄がらが悪そうな人相でもあった。もしかしたら、あまりまっとうな職の人間ではないのかもしれない。恵那が「？」と首をかしげている。

こんな服装で馬車に乗る人々が不審なのだろう。

とはいえ、ようやく遭そう遇ぐうした情報源である。すぐにエリカが動いた。

「ねえ、そこを行く方たち！　すこしいいかしら？」

馬車の行く手をふさぐように立ちはだかり、イタリア語で呼びかける。

何語が通じるか不明なので、まずは慣れた言語を選んだのだろう。しかし、彼らがエリカの言葉を理解したかはわからなかった。

というのも、彼らはエリカを無視して、隣にいた護堂を凝ぎよう視ししたからである。

「××××、××××××××！　×××××、×××！」

「××、××××××××、×××！　×××××、×××、×××××！」

護堂を指さして、なにやら叫んでいる。未知の言語だった。しかし、語感がすこしドイツ語に似ているような気はした。

「エリカ。なんて言ってるか、わかるか？」

「わたしにもはっきりとは……」

英独仏をはじめスペイン語、ギリシア語などにも不自由しない少女が通訳に困る。

やはり尋じん常じようならざる場所なのだ。うなずく護堂へ、エリカはさらに続けた。

「ただ、あなたをひどく恐れているわね。『ついに来たか、黒髪の悪魔め！』『頼む、命だけは取らないでくれ！』みたいに言っている気がするわ」

「へっ？」

　意外すぎる説明に、護堂はきょとんとした。

　また、彼らは恵那も凝視して、さらに何事か叫ぶ。もちろん意味はわからない。しかし、恐怖ゆえの叫びであることは、ひきつった表情から容易に想像できた。

　気さくな自然児も気分を害し、きゅっと眉まゆをひそめる。

「言ってることはさっぱりわからないけど、なんか傷つくなあ」

　不満そうな声音が馬車のふたりを刺激したらしい。

　彼らは御者台から飛び降りると、馬車の荷台から積み荷を次から次へと地面に降ろす。大工道具、灰色のつぼ、鍬くわや鋤すき、ずっしり重そうな布袋、さらに何十枚かのコイン――。

　最後のコインに護堂は注目した。

　どれもいびつな形である。鋳ちゆう造ぞう技術が未熟で、完かん璧ぺきな円形を造れないのだ。ほとんど銅貨だったが、何枚か金貨もまざっている。

「×××××、×××、×××××××××××！」

　そして、ふたり組は来た方向へ全速力で走りはじめた。

　荷物と馬車をその場に残して、逃走したのである。護堂は呆ぼう然ぜんとして言った。

「なあ、あの人たちが今言ってたのって――」

「『稼ぎは全部くれてやるから、見逃してくれ！』だったわね」

「だろうねえ。あれなら恵那にも通訳できるよ」

　全てが予想外すぎる。三人とも呆あつ気けにとられてしまった。

　護堂は悩ましい思いでしゃがみこみ、布袋を開けてみた。これが日本なら五キロの米でも入っていそうなサイズだ。中身は大量の白い粉末だった。

「小麦粉みたいだな……。どうしたもんかなあ、これ」

「そうね。状況が状況だし、もらっておいてもいいんじゃないかしら」

「おいおい」

「でも護堂、今は非常時よ。役に立つものは何だって役立てないと」

　エリカの発言に異論はあったものの、護堂は口にしなかった。

　たしかに状況を考えると、この支援物資を手放すのはかなり惜しい。というわけで清せい濁だく併あわせのむことに決め、荷物を積みなおす。

　それから三人は馬車に乗り、街道を進むことにした。

　さっきのふたりが逃げたのとは逆の方向へ向かう。御者台で馬を操るのはエリカだった。道中、彼女は積み荷をあれこれ確認して、しきりにうなずいていた。

　特に陶とう製せいのつぼに描かれた文様や、金貨に刻まれた文字や人物の顔に注目していた。

　そのまま街道を進むこと、なんと三時間ほど。

　馬車はついに小さな集落へ到着した。煉れん瓦が造づくりの家があちこちに点在している。

　当然、人間もいた。羊飼いらしき青年が羊の群れを先導し、ラバを連れた老人がのんびり道を歩く。農具をたずさえた人々や牛ともすれちがう。

　家、人々の装束、持ち物、道具類、どれもひどく素朴であった。

　また、エリカは唐突に祠を調べにも行った。それは街道沿いに建っていた。白い大理石製で、太い円柱が何本も並び、パルテノン神殿のミニチュアという風ふ情ぜいである。

　そして、ついにエリカは告げた。

「じゃあ恵那さん。わたしの推測を言うわね。ここはおそらく古代のヨーロッパよ。時代は四世紀から五世紀のどこか。場所はローマ帝国の属州、たぶんガリアでしょうね」

「…………へ？」

　いつもは大胆な言動で人を驚かす側の清せい秋しゅう院いん恵那。しかし今回、驚きよう愕がくさせられるのは彼女の方だった。恵那はきょとんと目を丸くした。

「つまりね。アイーシャ夫人の権能が造る通廊は、アストラル界や過去の時代に通じているのよ。わたしたちは過去の世界へ流れ着いてしまったの」

「えええっ!?」

　聖ラファエロからの情報がなければ、護堂も同じ反応をしていただろう。

　護堂はしみじみと女聖騎士パラデイーノの言葉を思い出した。『いちばん迷惑なカンピオーネはまちがいなくアイーシャ夫人』。今なら、心から同意できる。

「これから俺たち、どうすればいいんだろうなあ……」

　つぶやいたところで気づいた。集落の住民らしき一団が近づいてくる。

　中心にいるのは、立派そうな長衣トーガを着た老人だ。あれはたしか、ローマ帝国の衣装ではなかったか。彼のそばにいるのは体格のいい青年たちだった。

　考えてみれば、護堂たちの風ふう体ていも服装も目立つ。

　人目を惹ひくのは当たり前だった。さっきのふたりとのゴタゴタもある。

　いよいよ一波乱か——。しかし、護堂は気づいた。彼らが向ける視線に宿るのは、あからさまな恐怖と畏い怖ふである。

　彼らは護堂を見つめながら、ぼそぼそとささやき合っている。

　そのなかで何度も、ウルディン、テュールという二語が繰りかえされていた。

2

　いきなり時間旅行がはじまってから、四日が過ぎた。

　しかし、言葉が通じず、頼れる人物もいなかったのは最初だけ。今、護ご堂どうたちの生活はきわめて快適だった。

「こちらは先日、運よく入手できたファレルヌス産の葡ぶ萄どう酒しゆとなります。ウルディン殿に是非ご賞味いただきたいと思い、持参いたしました」

　うやうやしく言上するのは、ローマの長衣をまとう老人である。

　彼は四日前に行きついた農園の主で、フリウスという名だった。ローマ人の血を引く貴族なのだとか。以前は近くの都市で『議員』をやっていたそうだ。

　その経歴ゆえか、腰は低いものの十分に気品ある立ち居振るまいをする。

「すいません。何度も言いますが、俺はその男とは別人なんですよ」

　護堂は気まずい思いをかみしめつつ、言った。

　フリウス老人の背後では、小間使いの少女が取っ手付きのつぼを捧ささげ持っている。この中身が『ウルディン殿への贈り物』らしい。

「草くさ薙なぎ護堂が俺の名前です。いろいろお世話になっている分、お礼をしなくちゃいけないのはこっちの方ですし、本当に何も気を遣つかわないでください」

「なるほど……。そういうことにしておけと、あなたはおっしゃるのですな」

　護堂の言い分を聞いて、老人は思し慮りよ深げにうなずいた。

「お詫わび申し上げます。うわさに聞く『テュールの剣つるぎ』ウルディィン殿とよく似た風ふう貌ぼうで、金髪と黒髪の美び姫きをお連れであることから、勘かんちがいをいたしました」

　フリウス老人はちらりと護堂のうしろを見やった。

　そちらに控えているのはエリカと恵那だ。金髪と黒髪で、これだけの美少女ふたりという組み合わせ。たしかにそうあるものではないが。

　これが誤解を生んだ理由なのだろうか。護堂は首をかしげた。

「こちらはやはり、お詫わびの品として納めていただきたく思います。リンデ、支度を」

「はい、お館やかたさま」

　フリウス老人に言いつけられて、小間使いの少女が奥へ引っこんでいく。

　ちなみに今いる館は彼の住まいであり、護堂たち三人の仮住まいであった。本来の主である老人は家族といっしょに館を出て、べつの持ち家で暮らしている。

　つまり、己の家を草薙護堂に〝献けん上じよう〟したのである。

「草薙殿。あなたがウルディィン殿でなくとも、竜をたばねる『テュールの剣』の同胞であることに変わりはございますまい。どうか、よしなに」

「あの川沿いの砦とりでがウルディィンって男の住すみ処かなんですよね？」

「ええ、そのとおりです。前にあなたが――いえ、おそるべきフン族の竜使い、ウルディィン殿が奪った砦にございますな」

　老人は護堂の言い分を『方便』と受け取ったらしく、こんなことを言った。

「ウルディィン殿といえば、勇猛なだけでなく機き略りやく縦じゆう

横おうの清せい濁だく併あわせのむ御ご仁じんとうかがっております。新たな戦いのために、きっとお考えがあるのでしょうな」

　ウルディンという男、この地方を気ままに襲い、略奪する無法者であるらしい。しかも、あの竜たちの主人だという。

　フリウス老人は四日前、護堂へ言ったものだ。

『ウルディン殿。あなたさまの滞在をできうるかぎり快適なものにする意思がわたくしどもにはございます。それに免じて、どうか寛容なお振るまいを——』

　以来、家も食べ物も最上のものを捧げられつつ、この農園に滞在中なのである。

　今日の『ご機嫌うかがい』でも、老人は実にうやうやしく護堂と会話し、長居することもなく辞去していった。

　ただ、今日は帰り際ぎわにこんなことを口にした。

「もしよろしければでございますが……あなたか、あなたの同胞であるウルディン殿には、ラウリカ市と聖女にも格別の慈じ悲ひをたまわりたいと存じます」

　などと、最上の恭うやうやしさで。

「この四日間でいろいろなことがわかってきたわ」

　老人が去ったあと、いきなりエリカが言った。

　彼女は農園やその周辺をあちこち調べてまわったり、老貴族フリウスと長く話しこんだりして、情報収集に余念がなかったのだ。
尚、この辺の言語は「ドイツ南部で使われていた高地ドイツ語の原型……となった言語のひとつだと思うわ」らしい。

　カンピオーネと上級魔術師は、未知の言語でも超短時間で修得できる。

　その恩恵で、護堂たちはどうにか会話できるようになっていた。
この素養、日本の媛ひめ巫み女こは決して積極的に磨こうとしない

らしい。国外で活動することは稀まれだからと。

　が、今回はさすがに緊急事態。

　媛巫女筆頭の恵那も古代語の修得に余念がなかった。

「わたしたちが今いるのはやっぱりローマ属州のガリア、それも東方の端よ。初日に見た大きな川、あれはまちがいなくライン川でしょうね」

「ライン川なんて、現代でだって見たことなかったぞ……」

　損をしたのか得をしたのか、微妙な気分の護堂だった。さらにエリカは言う。

「最初は全然気づかなかったのだけど、ここは現代だとスイス領よ。バーゼル市の近く。ライン川を下っていけば、ストラスブールも近いわね」

「そこって、フランスとドイツの国境にあるんだっけ？」

　地名を聞いて恵那が訊たずねた。

「ガリアって大昔のフランスだよね？　ずいぶん端っこにいるんだ」

「ええ。わたしたちは今、ガリアとゲルマニアを分けるライン川沿岸にいるわ。この時代のライン川はね、ローマの文明がおよぶ土地か否いなかを分かつ境目でもあるの」

「あの川を渡ると、未開の地って意味か……」

　護堂は世界史の知識を引っぱり出そうとしてみた。

「たしか、ゲルマニアにはゲルマン人が住んでるんだよな。ゴート族とかだっけ？」

「この時代のすこし前はそうだったわ。今は状況が変わっているけど。そのあたりを検討しだすと、わたしたちはかなり厄やつ介かいな時代にいるのよね……」

「というと？」

「初日に金貨を見たときから、東西分裂後のローマ帝国にいることは想像できていたわ」

　貨か幣へいのデザインを見て、使用された時代を特定する。

　博識なエリカらしい発言に、護堂はさすがと感心した。しかし、手柄を語る紅き悪魔デイアヴォロ・ロツソの表情は物もの憂うげだった。

「世界情勢のことを聞いてみると、現皇帝の名はホノリウス。彼はイタリア半島に侵入してきたゴート族を恐れて、ラヴェンナの都に引きこもっている……」

　エリカは浮かない顔のまま、淡々とつぶやいた。

「以上から、今は五世紀の初頭——西暦四〇〇年から四一〇年頃だと思うのよね。まさに西ローマの崩壊がはじまっている時期」

「それが問題なのか？」

「この流れはもうすこしすると一気に加速するの。帝国に自助能力はすでになく、ゲルマン人の王国が帝国領土の新たな支配者になっていく。ちなみに、あと何十年かしたらガリアには獰どう猛もうな騎馬民族が侵入してくるわ。ライン川を越えてね」

　エリカはつらつらと未来の出来事を語った。

「この時代、ライン川の向こう側ゲルマニアは騎馬の民フン族の勢力範囲なの。ローマ帝国とガリア人をおびやかす最大の脅威よ。フン族に押し出される形でゲルマニアのゲルマン諸族はローマ領内に移住してきて、さまざまなトラブルの原因になっている」

「フン族……世界史の教科書にも載のっていたよな、たしか」

　謎なぞの男ウルディィンはフン族だと、さっきも言われたばかり。

　部族名を口にしたことがきっかけで、さらに護堂は思い出した。

「アッティラとかいう王様がいて、そいつがヨーロッパ中を荒らしまわるんだっけ？」

「ええ。決して一枚岩ではなかったフン族を統一して、東西のロー

マ帝国と戦う大王。王のなかの王ともいわれたわ。彼が台頭するのは、たぶん三〇年くらいあとかしら？」

「もうすぐ戦国時代のはじまりなんだねえ……」

「できるかぎり早く、もとの時代に帰った方がいいわけだな」

　エリカの語る世界情勢に、恵那と護堂はしみじみと言った。

「でもさ王様、どうやったら帰れるの？」

「アイーシャさんを見つけて、現代につながる通廊を開いてもらえばいい——と思うんだよな。見つけるのがむずかしそうだけど」

「当てもなく探すだけでは、発見できる可能性はかなり低いわよね」

　護堂がため息をつけば、エリカも肩をすくめて言う。

　時間旅行の直前、聖ラファエロから聞いた話を護堂は思い出した。

『あの姐ねえさんの〝通廊〟は本っ当に大迷惑なんだよ……。洞どう窟くつみたいな穴を造って、そこを〝この地上ではない世界〟につなげるのさ。アストラル界や過去の時代にな』

　あのとき聖ラファエロは、みごとなほどのしかめ面つらだった。

『通廊は姐さんが旅立ったあと、一応は消える。でも、年に何度か……同じ場所にまた出てくるらしいんだよ。そこを通れば姐さんが旅立った世界へ行けちまう寸法だ』

『じゃあ、運悪く誰かが入っていったら……』

『向こうにひとっ飛びさ』

『恐竜の神獣が通廊を通ってきたのが事実なら……』

『おおよ。向こうからも渡ってこれるってことさ。姐さんはこの権能、ケルトの神話に出てくる常若の国テイル・ナ・ノーグの妖精たちから簒さん奪だつしたらしいんだけどね』

　護堂が水を向けると、聖ラファエロはいちいち不吉な解答をくれた。

　すると、エリカが渋じゆう面めんの大先輩に訊ねた。

『アイーシャ夫人といえば、長く隠いん棲せいされていることで有名ですが……』

『あんなのウソっぱちだよ。隠棲なんて、とんでもない。姐さんはしょっちゅう通廊の権能を使って、あちこち旅しているんだ。地上にいる時間の方がすくないから、どこぞで隠棲してるって伝説ができただけなのさ』

　あの一幕を思い出して護堂は暗い気分になり、そして、あることに気づいた。

「でも、俺たちは気づいたら、あの川岸に立っていたよな。通廊の出入り口みたいな穴はあの辺にはなさそうだったぞ」

「たぶん、あの近くのどこかにちゃんとあるんだろうけど……」

「顕あらわれるのはやっぱり、年に数回だけじゃないのかしらね？」

　恵那とエリカから口々に言われ、護堂はもう一度ため息をついた。

「あそこに行けば、いつでも帰れるってわけにはいかないか……」

「あと護堂、もっと厄やつ介かいな問題があるわよ。あそこはウルディンという男が根ね城じろとしている場所。そして、彼は神獣の群れを何らかの手段で飼い慣らしている」

　エリカは最大の問題点に言及した。

「彼はもしかしたら、この時代のカンピオーネじゃないのかしら？　偉大な魔術師なら、神獣の一匹くらいはどうにか召しよう喚かんできるかもしれない。でも群れを飼い慣らすような真ま似ね、神かカンピオーネ以外にできるはずないわ」

「たしかにな……」

「話を聞いたかぎりだと、その人が神様とは思えないしねえ」

「そうなると、あそこへ近づくときは慎しん重ちようさが必要になるわね。カンピオーネふたりがあいまみえるとき、必ず何かが起こる。わたしたちが現代でさんざん痛感したことよ」

　護堂がうなずき、恵那はつぶやき、エリカが要点をまとめる。

　事の厄介さを実感して三人同時に沈黙したとき、がしゃんという音がした。

　振りかえる。さっき農園の主が連れてきた小間使い——リンデと呼ばれていた少女が陶とう製せいの杯さかずきを床に落とし、割ってしまったところだった。

　彼女は〝貢みつぎ物〟の葡ぶ萄どう酒しゆを杯に注ごうとしていた。給仕の途中だったらしい。

「も、申し訳ございません！　とんだ粗そ相そうをしてしまいました！」

　リンデがこの世の終わりのような顔をして、謝罪する。

　金髪で年齢は一三、四歳ほど。妹の静しず花かと同年代だった。なかなか可愛かわいらしい顔立ちで、驚くほど色白な少女だった。

　膝ひざ丈たけのＴシャツのような衣を着て、腰帯できゅっと締めている。

　簡素で粗末な服装だった。館やかたに滞在する護堂たちの面倒を四日間ずっと見てくれたのは、彼女なのだ。こんな娘を叱しつ責せきする気になれるはずがない。

「気にしないでくれよ。俺たちは外に出てくるから、ゆっくり片づけるといい」

　後かたづけを手伝おうとすれば、逆にリンデは恐縮してしまう。

　そう読んで、護堂は仲間たちに目配せした。さっさと立ち上がり、部屋から出ていく。エリカと恵那も当然ついてきてくれた。

回廊には柱がならび、広い庭園には小さな池まである。

ローマ様式だという平屋建ての邸宅は部屋が数十個もあって、現代日本人の感覚でもかなり豪ごう奢しやだ。庶民の家は一間しかないそうだから、尚なお更さらだろう。

「あ、そうだ。馬の乗り方、教えてくれよ」

廊下を歩きながら思いついて、護堂は言った。

館には馬小屋があり、自由に使ってかまわないと言われているのだ。

「この時代なら、かなり役立つ特技になりそうだしさ」

「あ、いいね。恵那もそっちは得意じゃないから、きちんと指南して欲しいなあ」

「かまわないわよ。まあ、わたしもこの時代の基準だと、決して達人ではないけど」

馬のあつかいにも慣れたエリカが請け合ってくれた。

「そういう水準って、時代で変わるものなのか？」

「それはそうよ。本物の騎馬民族、生しよう涯がいのほとんどを馬に乗って生活する人たちがいる時代ですもの。でも、たいていのローマ人より上う手まい自信はあるから、安心して」

エリカの妙な自慢を聞きながら、外へ出る。

はじめは村と勘ちがいしたが、この一帯はフリウス老人所有の農園なのだ。

ただ、東京ドーム（約五ヘクタール）が五、六〇個は入りそうな広大さである。護堂の第一印象はまったく自然なものであったが……。

屋敷の厩うまやから馬と馬具を持ち出し、適当な空き地で練習をはじめた。

尚、古代ローマに『鐙あぶみ』はないという。鞍くらの両脇に吊

つりさげ、左右の足を乗せる馬具だ。鐙のあるなしで乗馬の難易度は大きく変わる。

「この時代、ヨーロッパで鐙を使用していたのはフン族のような騎馬民族たちね。彼らの場合、裸馬でも平気で乗りこなして、馬上で弓まで撃つというけど」

「すごいね。日本の流鏑馬やぶさめだって、鐙がないと無茶苦茶むずかしいよ」

　エリカの語る豆知識に感心しながら、恵那も苦手だという乗馬に取り組んでいた。まったくの初心者である護堂よりもずいぶんと上手い。

　ちなみに、鐙はないが代わりになる馬具はあった。

　ローマ騎兵も使うという鞍は、四隅が角のように突き出ていて、これが揺れる馬上でもしっかり体を支えてくれた。

　やはり、騎乗しながら槍やりや弓を使う必要上から発明されたのだろう。

　この日は結局、陽ひが暮れるまで乗馬の練習をした。

3

　そして夜になり、護ご堂どうは安息の時を迎えていた。

　慣れない乗馬でふだん使わない筋肉をあちこち使い、体は心地よく疲れている。それを癒いやしてくれるのは、熱い露ろ天てん風ぶ呂ろだった。

「こればっかりは本当にラッキーだったよなあ……」

　小声でつぶやいて、望外の幸福をよろこぶ。

　ローマ人の手で建造された都市なら、帝国式の大浴場は珍しくもないそうだ。しかし、こんな農園では望むべくもない。水道がない

ので、水を運ぶだけでも一苦労である。

　だが、屋敷の裏手には天然温泉がこんこんと湧わき出ていた。

（エリカいわく、今いる農園は現代のスイスとドイツの国境に近いあたり。この付近は古代の頃からの温泉地で、ローマ軍団の湯とう治じ場ばまであるという）

　その恵みを利用して、屋外浴場が造られたわけだった。

　タイルを敷きつめ、浴槽を設置し、温泉水を引く。壁は省略して、屋根だけ設ける。

　おかげで今、ささやかな幸福を満まん喫きつできている。

　しかし、ひとりのんびりと湯船につかりながら、護堂はふと思い出した。

　そういえば、小間使いの少女リンデが言ってなかったか。この農園の人々も、たまに蒸し風呂で汗を流したりすると。

「おもしろそうだから、そっちも近いうちに試ためしにいくか」

　浴槽の縁に背中をあずけながら、つぶやいたのだが。

　この場にいるはずのない仲間ふたりの声がささやき合うのを聞いてしまった。

「護堂ったら、口では『早く帰れる方がいい』とか言ってるくせに、この時代にしっかりなじみつつあるわよね……」

「そこはほら、王様だからさ。やっぱり、どこででも生きていける人なんだよ」

「――!?」

　護堂はあわてて振り返った。そこにはエリカと恵え那ながいた。

　しかも、ふたりともバスタオル代わりの白い布で前を隠しただけで――ほかには薄布一枚もまとっていない。裸、なのである。

「おおお、おまえたち、一体どうしてここに……!?」

護堂は震える声で訊たずねた。

乗馬で汗をかいたのは彼女たちも同じ。しかし、ふたりとも用事があるというので、護堂が男ひとりで先に入浴していたのである。

エリカも恵那も護堂に見られて、恥ずかしげに身を固くした。

羞しゆう恥ちと緊張のせいだろう、表情もぎこちなくなり、微妙に護堂から視線をそらす。

だが、ふたりの少女は意を決したようにうなずき合い、同時に湯船のなかへ入ってきた。そのままエリカは護堂の右、恵那は左に陣取ってしまう！

しかも距離が近い。エリカとの距離は二〇センチ、恵那との距離は一〇センチほどか。

すると、金髪の美少女はむっと眉まゆをひそめた。

逆側のライバルに対抗するかのように、護堂との距離を五センチまで詰める。

それを見て、黒髪の自然児はすこしだけ逡しゆん巡じゆんしてから、珍しくおどおどした表情で護堂の顔色をうかがいながら、間を詰めてきた。

ほとんど肌と肌が触れあいそうな至近距離であった。

「まあ、恵那さん……」

不機嫌そうにつぶやいて、すぐさまエリカも動く。

やはり、肌と肌が触れあいそうな近さにまで。金髪と黒髪の美少女ふたりにサンドイッチされる形となり、護堂は大いに緊張した。

「こ、こんなことをする理由、きちんと教えてくれないか……？」

ひとまず護堂はつぶやいた。

ふたりがこれ以上の過か剰じようなスキンシップを望むという可能性は、自制心を総動員して、あえて頭から追い出す。それにしても、今の状態は悩ましい。

　何しろ、エリカも恵那も布きれ一枚で前しか隠していないのだ。

　当然、彼女たちの白く柔らかな素肌も、すっかりおなじみになってしまった魅惑的すぎる肢し体たいも間近なわけで——。

　首と視線を固定して、護堂は前だけを凝ぎよう視しした。

　決して左右は見まい。見てはならない。己おのれに強く言い聞かせる。

「護堂。これから恵那さんと『抜け駆け禁止協定』について、討議しようと思うの」

「ぬ——抜け、なんだって？」

「王様を取り合って抜け駆けするの、禁止にしようってルールだよ。この四日間、恵那とエリカさんでいろいろ話してたんだ」

「それで具体的な内容を決めたいと思うから、立会人になって頂ちよう戴だい」

「何だよ、それは……」

　三人で露天風呂につかりながらの、予想外の会話。

　しかし、どうにか護堂は動転から立ち直りはじめた。仲間内でも特に破は天てん荒こうなエリカ・ブランデッリと清せい秋しゆう院いん恵那の組み合わせ。しかし、冷静さをしっかり保ち、理性と批判精神を強く持って接すれば、必ず対抗できるはずだ。

　何事にも動じてはならないと己を戒いましめながら、顔を引き締めたのだが。

「やっぱりさ。その……王様と一線を越えて、深い仲になったりならなかったり……」

「ここは現代とはちがう、危機的状況でしょう？　……吊り橋効果もふくめて、わたしたちのどちらかと護堂がそうなる可能性、低くはないと思うのよね……」

「ぐはっ！」

　恵那は恥ずかしそうにつぶやき、エリカはすこし困った表情で声を低める。

　そんなふたりを前にして、護堂の冷静さはすぐに吹き飛んだ。

「特にわたしは、前々から護堂との間に子供をもうけることに抵抗はなかったし……」

「あ、何言ってんの、エリカさん。恵那だってさ、王様とそういうふうになるんだろうなって、きちんと前々から考えてたよ」

「でも恵那さん、そういうことにすこし怖おじ気けづくところがあるでしょう？」

　エリカは女友達を心配する、サロンの女主人めいた口調で言った。

　ライバルを非難するというより、むしろ包容力にあふれる口ぶりなのがエリカらしい。

「その点、わたしはそういう未知の領分にもできるかぎり前向きに立ち向かいたいと思っているし……。護堂とよろこびを分かち合うためにも……」

「え、恵那だって、きっと大丈夫だよ」

　やや強がっている雰囲気はあったが、恵那はきっぱりと言った。

「この手のことは実際にやってみればなんとかなるし、やらなければ何もはじまらないって、うちのばあちゃんも言ってたし」

「おおおおまえら、俺の前でなんて会話してるんだ……」

「「…………」」

　意見交換にどうにか割り込むと、さすがにふたりともばつの悪そうな顔をした。

　気まずさをごまかすように、エリカがせき払いする。

「つまり、こんな感じで競争がエスカレートするのを避けたいのよね。只ただでさえ困難な状況なのに、無駄なエネルギーを使うべき

じゃないわ」

「というわけで、きちんと協定を作ろうと思って」

　今度はふたりで連携しつつ、エリカと恵那は言った。

「現代に帰るまで、わたしたちはおたがいに抜け駆けしない。これは問題ないかしら？」

「うん、大丈夫。異議なしだよ」

「ただ何かの勢いで護堂に火がついて、彼の方から誘ってきた場合は——」

「特例として、おとがめなしでいいと思う」

「そうね。護堂のことだから、そういう行動に出る可能性は十分考えられるし」

「断るわけにもいかないもんね……」

　ふたりがとんでもないことを言いだしたので、あわてて護堂は口をはさんだ。

「ち、ちょっと待て。おまえたち、俺がそんな人間だと思うのか!?」

「思うわ。あなたってここぞというところで、必ずわたしたちを翻ほん弄ろうしてくれるじゃない」

「でも、そういう王様も恵那は結構……きらいじゃないかな。エリカさんは？」

「わたしはあの奔ほん放ぽうさ、もうすこし抑おさえて欲しいわ。もちろん、たまにああいうあつかいをされるのも新鮮だし、悪くない気がすこしするのは否定しないけど……」

「あ、エリカさんもきらいじゃないんだね、やっぱり……」

「恵那さんっ。そういう淑しゆく女じよらしくないこと、はっきり言うべきじゃないわ！」

「ええと……なんていうか、いろいろ申し訳ない……」

　女子トークするふたりにはさまれて、いたたまれない気分の護堂だった。もちろん自じ業ごう自じ得とくなので、文句を言うことは許されなかったが。

　第四の人物がやってきたのは、このやりとりの最中であった。

「お、おくつろぎのところ恐縮ですが、失礼いたします……」

　屋外浴場にやってきたのは、なんとリンデだった。

　しかも、腰布を巻いただけで、ほかに衣服を身につけてはいない。少女の肌のなめらかさと華きゃ奢しゃな肢し体たいがかんたんに見て取れた。幸い、小さなつぼをかかえていたので、体の前側は程ほどよく隠されていたのだが。

「な——なんで君がこんなところに⁉」

「ご、ご入浴をお手伝いしようと思いまして……。あ、こちらはお館やかたさまからお届けせよと言いつけられた香水です。姫様たちに使っていただきたいと……」

　リンデはうつむき、護堂と目を合わせないようにしながら言った。

　ぶるぶると震え、おびえきっているのが一目でわかる。護堂は思わず言った。

「そんな格好で風呂場に来たらダメじゃないか！　こういう場所では、男女べつべつに入浴するのがルールなんだから！」

「護堂……。今のあなたが言っても、説得力はないわよ」

「恵那たちを侍はべらせて、お楽しみ中にしか見えないもんね……」

「そ、それはおまえたちがいきなり入ってくるからっ。ええと、とにかくさ。俺がバカなことを考えて、まちがいを起こしたらまずいだろ？」

「い、いえ。そのときはそのときで……覚悟はございます……」

「へっ？」

　悄しよう然ぜんとうなだれつつ古代人の少女が言うので、護堂は絶句した。

　まじまじとリンデを見つめる。するとエリカが気を利きかせ、代わりに言ってくれた。

「ここはもういいわ。さがって夕食の準備をしなさい」

「は、はいっ。かしこまりました、お嬢さま！」

　エリカに指示されて、リンデはーいち目もく散さんに浴場をはなれていった。

「どういうつもりなんだ、あの子は……」

「あなたが置かれている状況を理解してもらう、いい機会のようね」

　ぐったりする護堂にエリカが言った。

「いい、護堂？　あなたがまちがわれているウルディンという人物、単なる無法者ではないのよ。彼はこの地方で最も力ある軍勢の長おさ。王や族長のような立場だわ」

「王、だって？」

「ええ。そして、ここは現代社会じゃない。どれだけ無体な真ま似ねでも、古代世界の暴君なら許されることは多いわ。あの子を手た折おるくらい、何の問題にもならないでしょうね」

「なにぃ!?」

「いやな話だけど、よくあることだもんね……」

「ただ、あなたにひとつ言っておくわ。機会があっても絶対にがまんして、そういう欲求はわたしか恵那さんにだけぶつけること」

「エリカ、嫁入り前の女の子が何を言ってるんだ!?」

　紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソが顔を赤らめながら言うことに、護堂は大声でつっこんだ。

　しかし、エリカは尚も恥ずかしげに続ける。

「でも大切なことよ。あなたの浮気は絶対に許せないというのもあるけど、あなたの子孫をこの時代に残すのも心配でしょう？」

　唐突に出てきた子孫という単語。護堂は目を丸くした。

　すると、補足するように恵那がしみじみと言う。

「うちのじいちゃんもそうだったし、えらい人には隠し子とか付きものだけどさ。王様の子供がこの時代に生まれたら、歴史とか変わるかもしれないしね」

「誰かを殺したり、逆に命を助けたりするのも怖いわよ」

　エリカは物もの憂うげにため息はついた。

「そのときはよくても百年先、千年先にどんな影響が出るか、全然わからないもの。それがきっかけで、本来生まれるはずだった人が生まれない。歴史上で重大な役目を果たすはずの人物がいなくなり、結果、歴史と未来が変わってしまう恐れも……」

「ああ。バタフライ効果、だっけ？」

　仲間の言わんとするところを察して、護堂はうなずいた。

「ちっぽけな蝶ちようの羽ばたきがどこか遠くで嵐の原因になる、だろ。タイムスリップするドラマでも言ってたよな。でも、そんなかんたんに歴史って変わるものか？」

　エリカの言い分、わからなくもない。しかし、護堂は半信半疑だった。

　それより露天風呂で、しかもほとんど裸で話をしている方が問題に思える。護堂は両隣を見ないよう己に暗示をかけながら言った。

「ひとりの人間にできることなんて、たかが知れているわけだしさ」

「あなたがふつうの人間なら、ここまで神経質にならないわ」

「神様だって殺せる人だもんね。ひとりで戦うだけでもたいていの戦争に勝てるだろうし、ちょっとがんばれば国のひとつやふたつ、かんたんに興おこせそうだよ」

　古代世界にまぎれこんだ神殺しが歴史を改変してしまう可能性。

　左右から口々に指摘されて、護堂は「……」と言葉に詰まる。そういえば、聖ラファエロも言っていた。

『聞いたら最後、たいていの人間は安心して眠れなくなるからさ』

『そのうち世界を一変させるヤバイ出来事が起きるんじゃないか。実はもうはじまってるんじゃないか、ってね』

　通廊を通った人間、そして誰よりアイーシャ夫人が過去で歴史を改変したら。

　それがきっかけで未来の世界が大きく様変わり――。

　たしかにありうるかもしれない。やはり江戸時代にペニシリン薬が発明できたら、その後の医療と歴史は大きく変わっていくのがふつうなのだ。

「アイーシャって人がいちばん迷惑って、このこともあったのか……」

　ほか六名のカンピオーネとは一線を画かくす、時空を超えたトラブルメーカー。

　その意味を理解して、護堂はため息をついた。

「いろいろ懸け念ねんは多いから、不用意な行動は慎つつしみましょう、護堂？」

「本当にそうだな……。肝きもに銘めいじておくよ」

　エリカの助言に深々とうなずいた。

　そのとき、頭上の夜空を大きな影が飛んでいった。ウルディンのしもべだという翼竜型の神獣である。一匹だけで軽快に飛んでいく。

「あの砦とりでにもどっていくのかな？」

「偵察かもしれないわよ。『テュールの剣』ウルディンはアウグスタ・ラウリカ市を次の獲え物ものに物色中だと、うわさで聞いた

わ」

「アウグスタなんとかって、何のことだ？」

「いちばん近くのローマ植民市よ。ここ一か月くらいウルディンが何度か訪れて、遊び半分に竜をけしかけているそうなの。市の実力者が逃げ出したり、守備兵たちも士気が落ち切ったりで大変らしいわ」

「そりゃそうだろ。いくら古代だからって、恐竜を呼ぶのは反則だ」

　護堂がしみじみ言うと、エリカは苦笑した。

「幸か不幸か、この時代に古生物学の権威はいないから。あの恐竜たちも『竜』とひとくくりにされて、受けいれられているようね。あ、でも」

　エリカはいたずらっぽく微笑ほほえんで言った

「ひとつ気になる情報があるわ。ラウリカ市には『聖女』と呼ばれる人物がいて、都に加護を授けている――。それでぎりぎり持ち堪えてきたのだとか」

「神獣たちの襲撃を防いでいるの？」

　エリカが披ひ露ろうした情報に、恵那がびっくりした。

「もし本当なら、すごいね。そんなことできるの神様か、神殺しの王様くらい――」

　途中で恵那が口ごもる。護堂もあることに思い至る。

「そもそも通廊がここにつながってるんだから、アイーシャさんもこの近くにいる可能性は高いんだよな」

　このつぶやきにエリカが微笑する。紅き悪魔デイアヴオロ・ロツソはとっくにそこまで考えていたのだろう。

　次に行くべき土地がわかって、護堂は大きくうなずいた。

4

　目的地をアウグスタ・ラウリカ市と決めた夜。

　護ご堂どうたちはフリウス老人を訪ねて、別れの挨あい拶さつをした。そして翌日の昼頃、農園を旅立ったのである。いくつかの〝贈り物〟を受け取ってから。

「贈り物というか、脅おどし取ったというか……」

「あら。わたしはただ、こういう物があればいいと伝えただけよ。向こうが気を利きかせて、出発前に用意してくれただけで……」

　護堂のつぶやきに、エリカが眠そうな声で答えた。

　朝に弱い金髪の少女は、まだはっきり目覚めていないのだ。それでも栗毛の馬に颯さつ爽そうとまたがり、危なげなく乗りこなしている。

　エリカの馬と、鞍くらなどの馬具一式は贈り物の一部である。

　護堂と恵え那なが乗る屋根付きの木製四輪馬車、それを曳ひく二頭の馬、三人が現代の衣服の上に羽織っているフード付きの外がい套とうなどもそうだった。

　ちなみに、この時代の衣服も譲り受けていたのだが。

　着心地と機能性のよさから、もともと着ていた衣服をみんなで愛用していた。

「まあ、いいんじゃないかな？　貧乏な人から強盗したわけでもないんだし」

　四輪馬車の御者台で手た綱づなを取りつつ、恵那があっけらかんと言う。

　栗毛馬を駆るエリカも馬上で、うんうんとうなずいている。

　そんな女子ふたりを見て、護堂はむしろ感心してしまった。ある意味で頼もしい、旺おう盛せいなサバイバル能力である。

　リリアナと祐理の組み合わせだと、こうも単純には割り切れないだろう。

　ともあれ、騎馬と馬車による牧歌的な旅がはじまった。

　競馬のように走らせても、馬はすぐに疲れ、つぶれてしまう。馬たちは一定速度で歩かせるのが基本だった。当然遅い。現代の旅行とは比較にならない遅さだ。

　その代わりに、旅路の模様をじっくりと見聞できる。

　護堂たちが進むのは、ローマ帝国の軍団兵が敷ふ設せつしたという街道だった。

　帝国の街道網はガリア中にはりめぐらされ、移動を効率的にしてくれるのだ。

「このルートを急ぎたいときは、船でライン川を下る方法もあるわね」

「やっぱり、ラウリカって街も川沿いにあるんだな」

「ライン川の岸辺には昔から都市が多いの。ストラスブール、マインツ、ボン、ケルン……そのあたりはみんな、ローマの植民市が原型よ。この時代だと、べつの呼び名だけど」

　エリカの昔（？）語りを旅の友にして、三人は進んでいった。

　この道中、護堂たちは野宿を一回した。

　屋根付きの馬車をテント代わりに、交代で見張りをしながら夜を明かす。

　食料は老フリウスの配慮で十分に積んでいたし、エリカと恵那は魔術で水を大量に作れたので、飲料水の心配もない。

　悩みといえば、慣れない馬車の振動で腰と節々が痛くなる程度だった。

　そして、のんびりとした旅の二日目。

陽ひが沈みはじめた頃、護堂たちの行く手に大きな街が見えてきた。

アウグスタ・ラウリカ市に到着したのだ。もっとも、都市といっても現代の基準では『街』程度の規模だった。

ライン川のほとりに、何千という家々が軒のきをつらねている。

護堂たちが進む街道はもちろんそちらへ向かっているのだが、街よりも二キロほど手前に要よう塞さいがあった。四方を高さ五メートルほどの城壁で囲っている。

前に見たウルディンの砦とりでとよく似た造りだった。

そして、護堂たちは見た。あのときと同じ生き物が要塞の上空を旋回している。黒き翼竜である。いきなり翼を生やしたデイノニクス型の神獣だ。

だが、今回の翼竜には乗り手がいた。

背中に鞍が装着されていて、そこに黒髪の青年がまたがっていたのである。

「彼がうわさのウルディン氏かしらね？」

「そうかもしれない。農園のおっちゃんが言ってたとおり、王様に似てるよ！」

エリカが言うと、視力のいい恵那が予想外の報告をしてくれた。

自分に似ている——日本人の草くさ薙なぎ護堂に？　東洋人である護堂と恵那は、白人ばかりの古代ガリアではひどく目立つ存在のはずだが……。

奇妙に思いながらも、護堂たちは馬と馬車を急がせた。

しかし、こちらが到着する前に、翼竜を駆る人物は行動を起こした。白く小さな物をいくつも地上へ投げたのである。

それは肉食獣の牙きばで、七個もあった。

地上に落ちるなり、それらの牙がいっせいに形を変えた。

トカゲに似た形にふくれあがり、黒に変色する。変化後の姿はデイノニクスと瓜うりふたつだった。ただし、サイズは体長四メートルほど。ふたまわり小さい。

小型デイノニクスも後ろ肢あしがよく発達し、凶悪な鉤かぎ爪づめをそなえている。

この後ろ肢だけで二足走行をはじめた。頭部・背中・尾をぴんと一直線にのばし、地面と水平にしながら走る。駿しゅん馬めのごとき速さだった。

牙から生まれた小恐竜軍団はすぐに城門まで到達する。

城門の上は見張り台だ。待機していた兵士数名が顔を引きつらせていた。

「あいつら、街を襲うつもりなのか!?」

七匹の小型デイノニクスは閉ざされた城門へ次々と体当たり。

体をぶつけられるたび、木造の門は大いに揺らぐ。この激突は際限なく続き、そのたびにぶあつい木材が軋きしむ。門は砕けそうになるがどうにか持ち堪こたえていた。

このままだと、破られるのは時間の問題と思われたとき。

十数名の守備兵たちが城壁上に現れた。どうやら要塞の内部からは、あの城壁の上に登ることはかんたんらしい。

彼らは機敏に『武器』に取りつき、攻撃準備をはじめる。

城壁の上には巨大なボウガンがいくつも、間かん隔かくを開けて設置されていたのだ。

「な、何だあれ!?」

「バリスタ――攻城用の弩いしゆみよ！」

さすが騎士だけあって、エリカが即座に教えてくれる。

約一〇個のバリスタが兵たちによって、次々と発射される。標的は七匹の小型デイノニクスである。歩兵が戦車に立ち向かうような

光景だ。

「すごいね。みんな全然ひるんでないよ！」

「勇ゆう敢かんというより無謀に見えなくもないけど。よく逃げ出さないものだわ」

　恵那が驚く横で、エリカはあきれている。

　攻撃するのが彼女たちなら、一刀で致ち命めい傷しようをあたえているかもしれない。

　だが、ローマ守備兵たちも善戦していた。バリスタ——攻城用の大型ボウガンは太めの矢を次々と撃ち放って、これが小型デイノニクスたちの表皮に刺さっていく。

　血しぶきが舞い、恐竜軍団も苦しげにうめく。

　さらに、放たれた矢の一本がとある小型デイノニクスの眼球をつらぬいた！

　ガアアアアアアアアァァァァァァアアアアッ！

　目をつぶされた恐竜が吠ほえた。痛みを堪こらえるように頭をさかんに振り、苦しみでのたうちながら城門をはなれていく。

　オオオオオオオオオオオオオオッ！

　それを見て、城兵たちがいっせいに鬨ときの声をあげた。

　とんでもない士気の高さだ。あんな怪物を相手にしているというのに。

「なんか勇敢とかじゃなくて、恐怖心が麻ま痺ひしているみたいにも見えるな……」

　護堂がつぶやいた直後、新たな動きがあった。

　城門の上の見張り台に壮年の男が登ってきたのだ。金属製の甲かつ冑ちゆうを身につけていて、兜かぶとは目立つ羽根飾り付きだった。身分が高そうな装備である。

「蛮ばん族ぞくウルディンよ！　われらの街を脅おびやかす狼ろう

藉ぜき、これ以上はやめるのだ！」

　彼は野太い声で、夕焼け色の空へ呼びかける。

　すると、黒き翼竜が見張り台の近くに舞い降りてきた。ウルディンである。今まで城兵の奮闘を空から悠々と見守っていたのだ。

「つまらぬことを言うな、司令官殿。オレはひさしぶりに陥おとし甲が斐いのある獲え物ものを見つけて、じっくり愉たのしみたい気分なのだ」

　まだ若い男の声。しかし、不思議な威い厳げんに満ちていた。

　決して大声をはりあげているのではないがよく通り、自然と耳を傾けてしまう。これが竜をしたがえる謎なぞの男、ウルディン——。

　翼竜を滑空させながら語る男の声に、護堂は思わず聞き入った。

「攻めるに難かたく、守るに易やすい砦。竜どもにも臆おくせぬ兵。そして、それをひきいる勇将——と言っておこうか。ところで、麗うるわしき聖女殿は息そく災さいか？」

「黙れ蛮族！　この市への狼藉を中止して、とっととねぐらに帰るがいい！」

「おいおい。オレは決して話のわからぬ男ではないぞ」

　気け色しきばむ『司令官殿』に、ウルディンは心外そうに答えた。

「おまえたちが忠義を誓ったうえで是非にと望むなら、しばらくオレが王となってもかまわんのだし。オレの兵として二年も戦えば、十分な富と勝利を必ずくれてやる」

「帝国の民たみを貴様が奪うと申すのか⁉」

「うむ。オレは自分で言うのもなんだが、その手の仕事には慣れている。上う手まくやってやるぞ？　例の聖女殿もオレの女に加えてやりたいしな」

「下げ劣れつな！　この度どしがたい色狂いめ！」

　彼らの対話を聞きながら、護堂はひとつうなずいた。

　ウルディンがどういう男か、すこしわかった気がした。おそらく人を統とう率そつし、命令することが第二の天性として染みついている男なのだ。

　だから、その言葉と振るまいには自然と威い厳げんがにじみ出てくる。

　一方、連れの少女たちは異なる感想を抱いたようだった。

「やっぱりさ。あの人もうちの王様といっしょなのかな？」

「神殺しの覇は者しやとして権能を振るい、麗しき乙女おとめにかこまれて日々を過ごす。でも、あちらの方が男としての欲求には素直なようよ」

「お、俺をあんなのといっしょにしないでくれよ……」

　思わずつぶやいたら、ウルディンが新たな行動を起こした。

　いきなり『ぴゅう』と口笛を吹いたのだ。すると、城門で暴れていた小型デイノニクス軍団が煙のように姿を消した。

「ようし相棒、おまえの方はすこし荒っぽく頼むぞ」

　ウルディンは自らの翼竜に声をかけた。

　その瞬間、見張り台の上で騒動が起きた。司令は「迎え撃て！」と叫んだのだが、まわりにいた兵たちが彼を引きずるようにして見張り台を降りていった。

　城壁の上でバリスタを操作していた兵たちも、いっせいに逃げはじめる。

　小型デイノニクスにもひるまず立ち向かっていた彼らが。おそらく、ウルディンのすさまじさを熟知しているのだ。

　蜘く蛛もの子を散らすように無人となり、城門から守備兵は誰もいなくなった。

「打ち砕け！」

翼竜の駆り手ウルディンは簡潔に指示を発する。

彼の騎獣である翼竜が口を大きく開けた。吐き出されるのは灼しやく熱ねつの稲いな妻ずま。木造の城門は一瞬で灼やかれ、衝撃で派手に吹っ飛んでいく。

恐ろしい威力だが、しかし、護堂の目には手加減しているようにも見えた。

こんな要塞など、かんたんに壊かい滅めつできるはずなのにと。

拳こぶしを強くにぎりしめる。歴史を変えてしまう行為はひかえるべき。しかし、あの男をこのまま放置することも――。

行動すべきか否か。躊ちゆう躇ちよと逡しゆん巡じゆん。しかし、それもほんの一瞬で。

気づけば、護堂は馬車の御者台を飛び降りていた。

これで身軽に動きまわれる。そして、言こと霊だまもすぐに唱となえた。

「我がもとに来たれ、勝利のために。不死の太陽よ、輝ける駿馬を遣つかわし給たまえ！」

あの男が民衆の敵であることは、とっくに察知していた。

だから、ウルスラグナ第三の化身『白馬』の標的とすることができる。今は夕暮れ時。西の地平線へ沈みゆくオレンジ色の太陽から、光が放たれた。

太陽神ミスラの申し子ウルスラグナが放つ、焔ほのおと閃せん光こうの槍やりだった。

「む……？」

しかし、言霊に応こたえて夕陽が揺らめいた瞬間、ウルディンも動いていた。

怪け訝げんそうに眉まゆをひそめながら、左手で鞍くらにかけていた小振りの弓を取りあげる。そして、右手には黄金の鏃やじりを持つ矢が忽こつ然ぜんと顕あらわれた――。

　ウルスラグナの『白馬』が放たれた瞬間、古代のカンピオーネは叫んだ。

「ルドラの矢よ、オレに日にち輪りんの輝きをよこせ！」

　聖なる権能を操あやつるための言霊だった。さらに黄金の矢を夕陽めがけて撃つ。

　それと同時に、第二の太陽が東方の空に顕れた。

　本当なら夜明けと共に昇ってくる太陽。しかし今、夕暮れで紅くれないに染まる空を、暁あかつきの曙しよ光こうが薔ば薇ら色に染め変えてしまった。

　そして、焔と閃光の矢が第二の太陽から放たれる。

「護堂、気をつけて！　『白馬』と同じ、太陽を操る権能よ！」

　エリカの警告が全てを悟らせてくれた。

　ウルディンもまた太陽を武器とするカンピオーネ。同じ力を使う者の直感で危機を察知し、迎え撃ちにかかったのだ！

　東からも太陽神の焔が飛来し、『白馬』の焔は西から飛んでくる。

　ふたつの焔は護堂たちの上空で激突し、ぶつかり合い、対つい消滅していった。

「ほう、やはりな……」

　焔と焔の対決を目まの当たりにして、ウルディンはつぶやいた。

　翼竜の上から視線を落とし、鳥の視点から大地を俯ふ瞰かんする。その視線が護堂たちのところで止まった。しかも、草薙護堂をまっすぐ見み据すえている。

　ほかにエリカと恵那がいるにもかかわらず、だ。

　ウルディンの翼竜が高度を下げ、護堂の眼前に降り立った。

「いよう、兄弟。はじめて会う神殺しよ。オレの邪魔をしたのは貴様だな？」

古代と現代のカンピオーネがあいまみえた瞬間だった。

第５章　神殺しの聖女

1

　黒き翼竜を馬のごとく乗りまわす男、ウルディン。

　竜の鞍あん上じようにいる彼を、護ご堂どうは地上から見あげる形になった。が、だからといって卑ひ屈くつになる気は毛頭ない。肩をすくめて問いかけた。

「俺があんたたちの同類だって、よく気づいたな？」

「そんなもの、オレ以外でいちばん態度のでかい人間を探せばいいだけだ。この場でオレを畏おそれていないのは、おまえだけだぞ」

　古代では『カンピオーネ』の呼び名はまだない。

　その呼こ称しようを使わずに言った護堂へ、ウルディンはあっさりと答える。

　恵え那なの報告どおりだった。たしかに草くさ薙なぎ護堂と顔つきが似ていた。が、うりふたつというほどではない。せいぜい『血を分けた従い兄と弟こ』程度の相そう似じだろう。

　むしろ似ているのは、全体的な風ふう貌ぼうだった。

　共に背丈は一八〇センチ前後。黒髪黒目。そして、まちがいなくモンゴロイドだった。フン族は東洋から流れてきた匈きよう奴どの末まつ裔えい——という一説を護堂は思い出した。

「ならば兄弟、オレもひとつ問おう。なぜオレの邪じゃ魔まをした？」

「あのなあ。あんたを好きにさせたら、城の門をやったときみたいに街を壊したり、人を襲ったりするんだろう？」

　いにしえのカンピオーネは割と端正な顔立ちだった。しかし、それよりも顔つきをいろどる精せい悍かんさや精気の方が遥はるかに印象強い。

　眼光鋭いウルディンの目をにらみつけ、護堂は言った。

「そんなひどい真ま似ね、見すごせるか。死人だって絶対に出るぞ」

「それはまあ、いくさだからな。だが安心しろ。オレは逃げる輩やからを追い打ちするほど働き者ではないし、虜りよ囚しゆうとした連中も奴ど隷れいとして売る方が得になる」

　降伏した敵は勝者の財産。いかにも古代人らしい考え方だった。

　あげくウルディンは「オレは無駄な殺しをしない男なのだ」と胸を張る。根本的な価値観のちがいを悟りながら、それでも護堂は諭さとすように言った。

「だから、それがダメだって言ってるんだよ」

「なぜだ？　べつにおまえと争うつもりはないんだがな。それどころか客人として迎え入れ、歓迎の宴うたげを開いてやってもいいくらいだ」

　不思議そうにウルディンは首をかしげ、無ぶ精しようひげの生えたあごをなでる。

　護堂が『狼ろう藉ぜきはやめろ』と主張する理由を、おそらく本気で理解できないのだ。

「めったに会えない同族同士。気が合うかは知らんが、別れる前に酒でも酌くみ交かわしたいと願うのが情だろうに。兄弟、おまえは割と冷たいやつなのだな」

　あげく、気のいい好漢めいたことを言いだす。

　おそらく、ウルディンのなかでは『武力による襲撃と略奪』が狩りや漁業と同レベルの生産行為として位置づけられているのではないか？

　護堂はかすかに眉まゆをひそめた。

　この男は神殺しで、戦争と略奪が常にセットであった時代の戦闘的遊牧民族。

　やはり、現代人の平和主義者・草薙護堂とは倫理観がまったく相あい容いれないのか——。

「いや待て、そういうことか。ははは、オレとしたことが不覚だったな」

　ウルディンがいきなり笑いだした。

「すまんすまん。おまえがオレに噛かみつく理由、もっと早く気づくべきだった。おまえも狙ねらっているのだな、あの都を？」

「おいおい」

「みなまで言うな。どちらが都の主となるか、オレと競う肚はらなのだろう？」

　気のいい兄貴分のように、ウルディンはとんでもないことを言いだした。さらに、こちらの対話を注意深く見守るエリカと恵那へ、和なごんだまなざしを投げる。

「あやつらはおまえの女か？　悪くない趣味だ。そういえば、あの都にも『聖女』とか呼ばれる者がいてな。あれもなかなか佳いい女だぞ。知っているか？」

　ウルディンの声は気さくで、緊張感に欠けていた。

　しかし、それは戦闘準備を怠おこたっているのとはちがう。もし護堂が攻撃を仕掛ければ、彼はまちがいなく笑いながら応戦するだろう。

「それとも、聖女とやらもおまえの女なのか？　ふふ、妙な力を持っているようだから、どう転んでも只者ではないだろうが……」

　探るようにウルディンが言う。和んでいた目が一瞬だけ鋭くなった。

　聖女——。一体、何者なのだろう。やはりアイーシャ夫人なのか。いぶかしむ護堂を前にして、騎馬の民たみでもある神殺しは竜の鞍あん上じようでうそぶいた。

「まあ、神殺し同士、都と女を賭かけて勝負するのも悪くないかもしれん。よし、おまえとの勝負に乗るか否いなかをひとつ吟ぎん味みしてやろう。返事はすこし待て！」

　ウルディンはぴしゃりと騎竜の首をたたく。

　黒き翼竜は翼を力強く羽ばたかせ、夕焼けの空へ上昇していった。

　ここで護堂は気づいた。あの神獣は今まで間近で遭遇するたび、カンピオーネである護堂を過度に警戒してきた。

　だが今の一幕、黒竜はそんなそぶりをすこしも見せなかった。

　ウルディンの竜を制御し、統率する力がそれだけすさまじいのだろう。

「まずはさらばだ、兄弟。次に会ったときは名前を教えろ。オレの名はウルディン、『テュールの剣』とか『魔王』と呼ぶ者もたまにいる！」

　快活ですらある別れの言葉を残して、ウルディンは東へ飛び去っていく。

　その影を空にしばし見送ってから、護堂は馬車へもどった。

「これからどうしようっか？　このまま街へ行ってみる？」

　恵那も馬車の御者台に乗りこみながら、問いかけてきた。

　いつでも護堂に助すけ太だ刀ちできるよう、降りて待機していたのだ。一方、馬から下りずに文字通り『騎士』としてそなえていたエリカはすぐに答えた。

「もちろんよ。予定どおりでいきましょう」

「でもいいの？　王様、ウルディンさんと派手にやったばかりだよ。あの人たち、すごく警戒してるみたいだけど……」

「だからこそ、上う手まくいくこともあるわ。かえって好都合かも」

　いつのまにか城壁の上に、数名の兵士たちがもどっていた。

　姿勢を低くして、こちらをうかがっている。この一行——というより草薙護堂に注目しているのが遠くからでもわかった。

　古代人たちの視線を浴びながら、エリカと恵那は討議を続ける。

「その気になれば、どうとでも迎え撃てるでしょうし。護堂もいるのよ？」

「それもそっか。じゃあ、襲われたらいっそ、あの要塞を乗っ取っちゃう？　それでウルディンさんと戦えばいいよ」

「その辺はわたしも検討ずみ。でも、たぶん大丈夫だと思うわ」

　愛馬にまたがりながら、エリカは請け合った。

「そこまでしなくても、護堂は客人として問題なく滞在できるでしょうし。そのまま事実上の最高権力者になることもむずかしくないはずよ」

「さすがエリカさん。じゃあ、大船に乗ったつもりでおまかせしようかな」

「…………」

　街に入る前から、物騒な征服計画まで口にする女子たち。

　ふたりの過激さにあきれつつも、護堂はコメントを差しひかえた。

　恵那が手綱を取り、城門めざして馬車を進ませる。エリカの馬も横にならぶ。

　金髪の女悪魔が何を企んでいるかは知らないが、街の人々の迷惑になりそうなときはすぐに止めなくては……。ひそかに誓う護堂

だった。

　そして数分後、三人はついに城門をくぐった。

　城壁の裏側は縦に垂直ではなく、なだらかな坂になっていた。

　この壁、土ど塁るいの外側に石を積みあげて造ったものなのだ。あちこちに階段があって、城壁の上へかんたんに登れるようになっている。

　要塞の敷地は、五〇〇×六〇〇メートルほどの長方形だった。

　ひとつの町といってもいい広さだ。実際、内部には長屋のような建物が五、六〇棟もならんでいる。護堂はすこし既き視し感かんを覚えた。日本の住宅街、それも独身者向けのアパートが多い界隈を思い出したのだ。

　要塞の中心部は広場になっていた。

　この広場に数百名の兵士たちが集まっている。

　ほとんどの兵が兜かぶとと鎖くさり帷子かたびらを着こみ、卵形の楯たてや槍で武装していた。

　これだけの武装勢力のなかに、三人だけで乗りこむ。本来なら、護堂たちの方が怖おじ気けづき、こわごわ進んでいくはずなのだが。

　逆に兵団の方が護堂たちをこわごわと見つめていた。

　彼らのすぐ前までやってくると、不意にエリカが口を開いた。

「この砦の司令官殿にお話があるの。かまわないかしら⁉」

　馬から下りもせず、優美に問いかける。

　赤みがかった金髪を王冠のようにかかげ、上から目線で兵たちを眺めていた。

　まるで、彼女こそがこの軍団を仕切る長に見えてしまう。そして兵たちをかき分けて、兜に羽根飾りをつけた男が進み出てきた。

　ウルディンにも司令官殿と呼ばれていた人物だ。

「何の用だ、娘よ？　そなたはあの者らの従じゆう僕ぼくか……？」

　護堂と恵那にちらりと視線を投げてから、司令は硬い声で言った。

　この時代、金髪碧へき眼がんはゲルマン系の民族に多い特徴だったらしい。黒髪黒目の日本人はウルディンと同じフン族に見えているはずだ。

　三人の内ひとりだけ民族がちがう理由を、司令はそう解釈したようだ。

　一方、奴隷まがいの存在と見られてもエリカは昂こう然ぜんと胸を張り、フッと微笑んだ。

「わたしがどのような立場の者かは、おいおい語らせていただくわ。それよりも今は、この質問に答えて頂戴。我が主・草薙護堂を傭よう兵へいとして雇うつもりはある？」

「傭兵だと？」

　司令が驚いた。が、これは護堂にとっても予想外の提案だ。

　まじまじとエリカを見つめる。あいかわらずの優美さで彼女は口上を述べた。

「この草薙護堂は『テュールの剣』ウルディンと出しゆつ自じを同じくする者」

「そやつもやはり蛮族の出か……」

「あなたたちも知ってのとおり、ウルディンは神に等しき力を持つ勇者よ。でも、草薙護堂も同じ力の所有者。天から焔ほのおを降らせて撃ち合う彼らを見たでしょう？」

「むっ……」

「力は互角。でも、草薙護堂は決してウルディンと志を同じくする者ではない。彼と彼の部族を兵として雇う機会、あなたたちに差し上げてもいいのよ？」

　そして二時間後。草薙護堂はアウグスタ・ラウリカ市に駐ちゆう屯とんする辺境部隊の傭兵隊長として、身分を保証されることになった。

　が、雇用条件は無茶苦茶といってもよかった。

　草薙護堂とその部下は、戦場では独自の判断によって行動する。要請は聞くが、命令を聞く義理はあらず。一月ごとに高額の報酬を支払うべし等々。

「おまえ、とんでもないことばっかり要求したな。呑のむ方もあれだけど……」

「いいのよ。どうせ護堂以外にウルディンとは戦えないんだから」

　護堂が感想を言うと、金髪の女交渉人は悪びれずに言った。

　ちなみに今は、さっきの広場前の要塞司令部にいる。この建物、広いホールや列柱回廊、中庭まであって、かなり立派な造りだった。

　護堂たちは人ひと気けのない中庭に出て、現代人だけで会話していた。

「それを承知しているから、向こうも破格の条件を呑んだのよ」

「でも、ウルディンさんと同じ部族に見える王様をよく雇ってくれたよね。そういうの、いやがられたり警戒されたりとかしないんだ」

　恵那がつぶやくと、エリカはくすりと微笑んだ。

「大丈夫よ。この時代のローマ軍団は異民族の人間を部族単位で雇って、よく傭兵隊にしていたから。たとえばゲルマン系のゴート族とかヴァンダル族、もちろんフン族も」

「ウルディンの部族もか!?」

「ええ。ほら、前にランスロット卿の謎を追ったとき、サルマティア人やスキタイの名前が出たでしょう。彼らもよくローマ帝国で傭

兵をやっていたわ」

「何で異民族をわざわざ兵隊にするんだか……」

「この時代、ローマ軍団はかつての精強さを失って、弱体化しつつあったから。それに、騎兵としては騎馬民族の方が遥はるかに優秀だもの。ゲルマン人だって、生きつ粋すいのローマ人よりは馬のあつかいにずいぶんと慣れていたし」

　あきれる護堂に、エリカが説明してくれた。

「結局、兵として異民族を重用しすぎたことも西ローマ崩壊の要因になるのだけど。でも、こういう時代だから、護堂がその気になれば出世なんてかんたんよ」

「どういうことだよ？」

「あ、そうか。田舎いなかの方で軍隊の実権をにぎって、軍ぐん閥ばつを作るんだ」

　恵那がイタズラっ子のようにニタッと笑った。

「中央の権力が弱くなった時代では、軍事力を持ってる人間イコール権力者だもんね。日本の戦国時代に戦国武将がたくさん生まれたのと同じ理屈だよ」

「そこまで言われたら、俺にも理解できる。でもな、おまえたち」

　女子ふたりの物騒な会話を聞いて、護堂はしみじみと訴えた。

「何日か前、俺に言わなかったか？　歴史を変えるような真似はつつしめって」

　このつっこみは効果てきめんだった。

　恵那は照れくさそうに笑い、エリカはごまかすようにそっぽを向く。あの忠告のことをふたりとも忘れていたようだ。

「それはそうなんだけどね。王様の場合、たったひとりでも最強の軍隊かかえているようなものだから、つい気分が盛りあがっちゃって」

「実際、ウルディンもほとんどひとりで好き勝手にやっているものね」

「そうそう。それに天下布ふ武ぶとか天下統一って、ちょっとかっこいいよね。もしかしてさ、この時代でがんばれば王様も歴史に名を残す大王になれたりして……」

「アレクサンドロス三世の見果てぬ夢を引き継ぐわけね」

「成吉思汗チンギスカンのやることを、七〇〇年前に先取りするのもおもしろそうだよ」

「でも版はん図とが広大になりすぎると、どうしても統治がむずかしくなるわ。この手の大帝国が必ず内部崩壊するのは、歴史が証明するところですし」

「考えだすと切りがないよねー」

　恵那とエリカが口々に言うのを聞いて、護堂は思う。

　智力・行動力・出来心をあわせもつ少女ふたりの組み合わせ。やはり、いや想像以上に危険なようだ。こいつらを暴走させないよう、俺がしっかりしなくては。

　決意を新たにする護堂だった。

「俺たちの最優先目標は現代に帰ることなんだから、悪だくみもほどほどに——」

　言いかけたとき、広場の方から歓声が聞こえてきた。

　兵たちが騒いでいるようだった。

「聖女さまだ！　聖女さまが傷を癒いやしてくださるぞ！」

　そう訴える声はひどく素朴で、敬けい慕ぼの念と信仰心に充みち満みちていた。

　エリカ、恵え那なをともない、護ご堂どうは司令部の外へ出た。

　要よう塞さい中央部の広場には、一〇名前後の兵士が横たわっていた。

　打撲や骨折はまだいい方で、昏こん倒とうしている者、重度の火傷やけどを負って包帯でぐるぐる巻きにされている者など、ほとんど瀕ひん死しの兵もまじっている。

　彼らが苦痛にあえぐのを聞いて、護堂は痛ましい気持ちになった。

「さっきウルディンの竜が稲いな妻ずまを吐いたとき、巻きこまれたそうよ」

　まわりにたむろする兵たちから、エリカが事情を聞いてきた。

　そして、横たわる負傷兵の前に黒髪の女性がいた。ゆったりとした白い外がい套とうを着ているので、体型はよくわからない。

　だが、その美しい顔立ちは明らかに乙女おとめのものだった。

　おそらく一七、八歳ではないか。繊せん細さいな面おも差ざしのなかで優美さとたおやかさがみごとなほど融和している。ひどくやさしげな印象の美少女だ。

　しかし、護堂たちは目配せを交わした。驚いたのである。

　少女の肌は褐かつ色しよくで、明らかに欧おう州しゆうの生まれではない。だというのに城兵たちは奇異の目を向けたりもせず、逆に好意と憧しよう憬けいのまなざしで彼女を見つめていた。

「聖女よ、どうかこの者たちにお慈じ悲ひを――」

　兵のひとりに懇こん願がんされて、褐色の少女は困り顔になった。

　まるでおっとりと『まあ、どうしましょう』とでも言いたげに。それから数秒の逡しゆん巡じゆん。そして、決意の表情になる。

「わたくしごときの祈りがどこまで届くかはわかりませんが……精一杯みなさまのために祈らせていただきます……」

　つぶやきながら少女はひざまずき、両手を胸の前で組んだ。

　そっと目を閉じる。敬けい虔けんな修道女が行うような、神聖な祈りの姿。そして、そのとき一陣の風が吹いた。

　それはひどく心地よいそよ風で、やさしく吹き抜けていった。

　護堂はハッとした。かすかな神力の気配を感じ取ったのだ。

　おまけにこの直後、一〇名前後の負傷兵はむくりと上体を起こした。みんな、『けろり』とした顔だ。目でわかる外傷が全て消えていた。

　まったくの健康体に見える。特に変化が甚はなはだしいのは火傷していた兵だった。

　彼の素肌はいまや赤ん坊のようにつるりとしていて、腫はれてさえいない。奇跡というより、コメディめいた治ち癒ゆと復活だった。

　今のは、やはり権けん能のう——!?



護堂があわてて少女へ駆けよろうとした瞬間だった。

おおおっ！

今の復活劇を見守っていた兵士たちがいっせいに絶叫した。

それは歓喜の爆発であり、雄お叫たけびだった。耳が痛くなるほどの音量で、地面が揺れているような気さえする。

兵士たちが口々に叫ぶなか、不意に護堂は気づいた。

「なんだか急に気温が上がったみたいだな。気のせいか……？」

「そうじゃないと思うよ。恵那もすごく風をあったかく感じるし」

肌寒かった空気がぬくまっているのを感じて、恵那といっしょにつぶやく。

一方、エリカは復活劇を目まの当たりにして、眉まゆをひそめていた。

「誓って言うけど、今みたいに瀕死の重病人を一瞬で癒やすような離れ業わざ、どんな大魔術師にだって不可能よ。護堂が『雄お羊ひつじ』の化身を使うのとはちがうんだから」

「だろうな。じゃあ、ちょっと行ってくる」

うなずいてから、護堂はひとりで少女の方へ向かった。

盛りあがっている兵士たちは邪魔だったが、間をすり抜けていくうちに彼らは自主的に道を空あけてくれるようになった。

ついさっきウルディンと対決した男の顔を見て、我われに返ったのだ。

おかげで、思ったよりすんなりと少女の前にたどり着けた。白い外套をまとう褐色の美少女は護堂を見て、『あら？』という感じで首をかしげた。

それは優ゆう婉えんな彼女にひどく似つかわしい、おっとりとし

た仕草だった。

「もしかしてアイーシャさんですか？　俺は草薙護堂という者です」

「まあ、はじめまして。この土地で本名を呼ばれたのは、今日がはじめてですわ」

　褐色の少女は淡い微笑を浮かべて、答えてくれた。

「あなたのお名前、わたくしも覚えがございます。たしか、遥はるか未来の世に現れた七人目のご同輩であるとか……」

　決定的な一言が出た。やはり、眼前の美少女こそが探していた人物なのだ。

　草薙護堂とアイーシャ夫人が古代ガリアの地でまみえた瞬間だった。

「ウルディンさんと互角の力を見せた神殺しらしき御方——。司令が雇い入れたと聞いて、あとでご挨拶にうかがうつもりでおりました。でも、傷ついた方々を癒やしてくれと頼まれたもので……」

　ラウリカ市内のキリスト教会がアイーシャ夫人の滞在先だという。

　護堂は〝落ち着いた場所〟で話をするため、夫人と共に教会を訪ねていた。場所柄のせいか、現代と大差ない造りだった。

　エリカと恵那もいっしょに礼拝堂に集まり、古代人抜きの話をはじめた。

「さっきのあれ、やっぱりアイーシャさんの？」

「はい。わたくしが春の女神ペルセポネより心ならずも奪ってしまった力です。生きとし生けるものに生命の力を分けあたえ、傷を癒やすことができます……」

　確認すると、夫人は痛ましげに答えてくれた。

　護堂はぬぐいがたい違和感を覚えて、「？」と首をかしげた。彼女と出会って、まだ半日も経っていない。しかし、今まで受けた印象は『すごくいい人そうだ』なのだ。

　たおやかで、おっとりとしていて、いわゆる癒やし系。

　おだやかな春風のごとき空気感をまとい、優美な微笑を振りまいて、まわりの人間の心を明るくしてくれる——。そこがおかしく思える。

　一部の例外をのぞけば、ろくでもない性格破は綻たん者しやと災さい厄やくの申し子ばかり。

　それがカンピオーネという集団の特性ではなかったのか？

「夫人。草薙護堂の騎士、エリカ・ブランデッリに発言をお許しいただけますか？」

「もちろんです。ふふ、あなたは女の子なのに、とても勇ましいのですね」

　許可を願い出るエリカへ、やさしくも高貴な笑顔を向けてくれる。

　アイーシャ夫人は『美少女』と呼ぶしかない容姿でありながら、包容力にあふれる貴婦人めいた振るまいもできるのだ。

　そんな女性に対して、エリカは完璧な恭うやうやしさで問いかけた。

「何ゆえ夫人はこちらの市へいらっしゃるのでしょう？　そして、なぜ『聖女』と？」

「ここに来たのは只の偶然です。この時代を当てもなく旅して、たまたま立ちよったのです。そのときはちょうどウルディンさんが街を襲ったあとで……怪我をされた方がたくさんいらっしゃいました」

　すこしだけ困った顔をして、アイーシャ夫人は語った。

「みなさんの傷を癒やしてまわったら、いつのまにか聖女などと呼ばれてしまい……引き留められてしまったのです。この教会の司教

さまもちょうどご不在でしたし」

「まさか、ウルディンのやつが殺したとか？」

「あ、いえ。あの方を避けるため、司教さまは市を去られたと聞いております。ローマの血を引く貴族の方で、本国に帰られたのだとか……」

「お坊さんとかって、えらくなるほどずるい人が多いもんねー」

　護堂が訊くと夫人は苦笑し、恵那もにやりと笑ってコメントする。

　その気になれば雅みやびな言葉遣いもできる大和やまと撫子なでしこは、アイーシャ夫人の人柄にふれたせいか、自然児らしいフランクな物言いをしている。

　実際、夫人はくすりと微笑んだだけ。とがめるつもりはないようだ。

　カンピオーネらしい猛たけ々だけしさが皆無の彼女、本当にいい人なのだろうか？

　疑問に思いつつも、護堂はもっと根本的な謎を解くことにした。

「じゃあ、もうひとつ教えてください。一体、何が目的でこの時代に来たんですか？」

「目的……ですか？」

「はい。アイーシャさんの目的。それがずっとわからなかったんだ」

　現代イタリアの片田舎から古代ガリアへ。

　脈みやく絡らくというものが一切ない。こんな通路をどうして作ったのか？　護堂がまっすぐ見据えて問うと、夫人は恥ずかしげにうつむいた。

「あの、実は……わたくし、通廊を作る権能って上手く制御できないんです」

「へっ？」

「あれって作りたいと思うときには全然作れませんし。そのくせ、わたくしが忘れた頃にぶらぶら散歩とか旅行をしていると、何年かに一度、勝手にできてしまうから……」

「か、勝手に？」

「はい。どこに行きたいとか思ってなくても、勝手にどこか昔の時代とか、生と不死の境界とかにつながってしまうんです。しかも、ものすごい力でわたくしを吸いこんでしまうから、そのまま旅立つしかなくて」

　トスカーナの通廊が護堂たちを〝吸いこんだ〟のは、ドニの権能による暴走だけが原因ではなかったようだ。護堂は目をぱちくりさせた。

　傍はた迷めい惑わくな権能を持つカンピオーネはほかにもいる。

　しかし、自分自身に迷惑をもたらす者はアイーシャ夫人くらいではないか……。

「あ、未来には行けないみたいで、一度もつながったことはないのですけど」

「つまり、行き先は完全にランダムだと……」

「ええ、おっしゃるとおりですわ。あ、でも。大体、行った先には困っている方々がいらっしゃいます。今回のように侵略者に襲われていたり、大勢の人々がひどく傷ついていたり、圧政に虐しいたげられていたり——」

　はじめてアイーシャ夫人は眉をひそめ、拳をぐっと握りしめた。

　過去の旅と当時の怒りを思い出したのだろう。しかし、こんな表情と仕草をしても、どこか可愛かわいらしい。この女性はおそらく筋金入りの癒やし系なのだ。

　だが、護堂は彼女の正体を理解しはじめていた。

　そんなことも露つゆ知しらず、アイーシャ夫人は凛り々りしいくせに可愛かわいらしい表情で、きりっと言い放ってみせる。

「もしかしたら――これはわたくしに困っている人を救えと求める、天の意思なのかもしれません。わたくしの権能は全てそのためにあるのだと！」

「待ってくださいアイーシャさん。それ、きっと勘かんちがいです」

　護堂はつとめて冷静に指摘した。

　まあ、転移先で困こん窮きゆうした人々と出会うのは偶然ではないのかもしれない。しかし、だからといってアイーシャ夫人が無条件に救世主たりうるはずはなかった。

「アストラル界はともかく、あなたが過去に行った場合、歴史が改変される危険性も大きいんですから。人助けのためだからって好き放題やって、それがきっかけで歴史が変わったら――逆に未来がメチャクチャですよ？」

　起こるべき事件が起こらない。生まれるべき人間が生まれない。死すべき人間が死なず、作られてはならない物が作られ、世界の様相すら大きく変へん貌ぼうする――。

　そんな混乱を思い描きながら、護堂は淡々と忠告を続けた。

「俺たちの力は、只でさえ無茶苦茶なんですから……」

「た、たしかにそういう可能性もあるでしょう。でも、きっと大丈夫だと思います。今までだって、何度も切り抜けてきましたし……」

「何度も？」

「はい。さすがにフリードリヒ大王があのようになったときは、わたくしもいろいろ覚悟しましたが、現代に帰ってみたら何もおかしなことは――」

「……それ、くわしく説明してもらえますか？」

　ぽろりと出てきた失言につっこんでみたら、夫人は「⁉」と我に返った。

　護堂の視線をよけるように顔を背そむけ、必死にとぼけようとす

る。

「い、いいえっ。わたくし何も申しておりませんわ！　く、草薙さんのお聞きちがいではないでしょうか！」

「ちがえてませんっ。今めちゃくちゃ重要そうなことを聞きましたよ！」

　やはりそうか。護堂はつっこみながら痛感した。

　たおやかでやさしい『いい人』であっても、性格の破は綻たんした災厄の申し子たりうることは十分に可能なのだ。しかも、今わかったがアイーシャ夫人は意外とノリやすく、自じ己こ陶とう酔すい的な性格らしい。

　こんな人間が定期的にタイムスリップを繰りかえすのだから……。

「……フリードリヒって人、たしか三〇〇年くらい前の王様だよね？」

「……同じ名前の人物はたくさんいるけど、大王の称号はプロイセン王フリードリヒ二世だけのものね。教養にすぐれ外交にも長たけ、そのうえ天才的な軍略家。自軍の倍以上の兵力を相手に何度も勝利を収めた、不屈の帝王よ」

　肝きもを冷やす護堂の横では、恵那とエリカがささやき合っていた。

　アイーシャ夫人はどんな事件を〝やらかした〟のか？　ちらっと見たら、問題の人物はこほんとせき払いして、こんなことを言った。

「で、でもね草薙さんっ。過去への旅を何十回も繰りかえした経験から、わたくしにはこう思えるのです。歴史にはおそらく『修正力』みたいな力があると！」

「し、修正力？」

「はい。未来とちがって、過去はすでに筋書きが決まっている物語のようなものですから。その筋書きを変えてしまうような事件が起きたときは、修正力が必死につじつまを合わせてくれるのだと思い

ます」

　物語。筋書き。つじつま合わせ。

　歴史改変問題には不似合いな言葉をアイーシャ夫人は口にした。

「たとえば国の頂点に立つ王が死んだときは、影かげ武む者しやや側近のみなさんが王の不在を必死に埋めてくれたり。本当は死ぬはずだった人物が命を救われたら、何年かあとに病や事故でいきなり死んでしまったり……」

「つまり、そう考えるとつじつまが合うことを何度もしてきたんですね？」

「い、いえっ。今のはただの想像、仮説というものです！」

「まあ、仮説でもいいですけど……。それだと、もうひとつわからないことが」

　下手くそにとぼける夫人に、護堂は疑問をぶつけてみた。

「修正力とかがアイーシャさんの行動を〝なかったこと〟にするかもしれないのに、人助けはやめないんですね？　無駄になってしまうかもしれないのに？」

「歴史の筋書きに関係ない人助けなら、きっと修正されないでしょうし」

　アイーシャ夫人はにこりと笑って、言った。

「それに、だからといって見すごせませんから。先のことは先のこと。困っている方がいるなら何も考えずに助けて、細かなことはあとで考えればいいじゃありませんか」

「…………」

　さっき『派手な行動はまずい』と考えながらも、ウルディンの破壊行為を妨害したのは草薙護堂自身である。実はあまり他ひ人とのことを言えない。

　ひとまず無言でうなずいておいた。すると、不意に恵那が言った。

「実は今日までずっと忘れていたんだけどさ。……サルバトーレの王様って、どこに行ったんだろうね？　全然見かけないし、うわさも聞かないよ？」

　サルバトーレ・ドニ。一足先に古代ガリアへ転移したはずの男。

　ひさしぶりにあの男の名を聞いて、護堂とエリカは顔を見合わせた。

「そういえば……バタバタしてたから、ずっと忘れていたな」

「わたしは覚えていたけど、お探しする余裕はずっとなかったものね……」

「あら？　そのお名前もほのかに聞き覚えがありますわ。草薙さんのほかにも現代から神殺しの方がいらしているのですか？」

「ええ。俺たちよりも何分か早く、通廊を通っているはずなんですが」

　護堂たちが最初に現れたライン川のほとり。

　もしかして、あの近くの草むらにでもひそんでいたのだろうか？　いぶかしんでいたら、アイーシャ夫人はたおやかに微笑んだ。

「それでしたら、離ればなれになるのも仕方ありませんね」

「どういうことでしょう？」

「わたくしの権能が開いた通廊、人を送りこむ場所は同じなのですが、送りこむ時間の方は微妙にズレができるのです。その辺、割と大おお雑ざつ把ぱといいますか」

　大雑把。なんとも不安なワードを口にして、夫人はさらに言う。

「あの通廊、たとえば西暦五〇〇年頃に送ることはできても、五〇〇年の何月何日と決めて送ることはできないのです。春・夏・秋・冬のどこに出るかは完全に運ですね」

「運⁉」

「ちなみに、わたくしがこの地に来たのは二か月前、真冬の頃でした」

「じゃあ、ドニのやつも何か月か前に送られたかもしれないんですか!?」

「逆に、数か月後へ送られた可能性もありますね」

「なんて適当すぎるタイムマシンなんだ……」

　思わず護堂はぼやいた。まあ、『通廊』は結局、只の通り道である。

　分単位の時間調整を期待するのは、おそらく筋ちがいだろう。しかし、これがまたべつの厄介事につながりそうな気がしてたまらなかった。

3

　デヤンスタール・ヴォバン侯こう爵しやくの誕生は、一八世紀の前半であったという。

　その好敵手・羅ら濠ごう教きよう主しゆは本人いわく『魔王となって二〇〇有余年』。直じき弟で子しの証言によれば、武ぶ林りんでは名門とされる無法者一族の出身らしい。

　この両名とアイーシャ夫人が旧世代のカンピオーネと呼ばれる。

　しかし、夫人の出生年代は不明である。

　エリカによると『一九世紀のなかば頃から後半にかけて、イギリス植民地のどこかで生まれ育ち、最初の神殺しを成じよう就じゆさせた——という伝説があるわ』だった。

　名前もただ〝アイーシャ〟としか名乗らない。

　姓も家名も口にしないのだ。『夫人』の称号は単に高貴な女性を呼ぶ尊そん称しようにすぎず、夫や子供がいるわけでもない。

本拠地だというアレクサンドリアには、屋敷が一応あるらしい。

この館やかたで長いこと隠いん棲せいしている——。これも彼女についての伝説だが、実際は地球上や現代にすらいないほどの旅行家だった。

「わたくし、ずっと同じ土地で暮らすことができない性分なので、そういう意味では通つう廊ろうの権けん能のうも重ちよう宝ほうしております」

「つまり、引っ越しが趣味みたいな？」

引きこもりと真ま逆ぎやくの発言をするアイーシャ夫人に、護ご堂どうは相づちを打った。

アウグスタ・ラウリカの要よう塞さい内部にある、将官用宿舎である。

傭よう兵へい隊長として雇やとわれた護堂に司令があてがったものだ。一般兵が暮らすアパートのような長屋とちがい、一軒家だった。

その応接間で、現代から来たカンピオーネふたりは談話中なのだ。

ここに来てから、すでに二日がすぎていた。

一応『同盟部隊』という名の傭兵隊をひきいる護堂だが、部下はエリカと恵那だけ。ふつうの軍団兵、さらに司令からも『ウルディンと互角に戦う男』と恐れられている。

ここに来て、まだ日が浅い。

すこしずつ距離を詰めていこうと考え、ひとまず宿舎にいたら、アイーシャ夫人がふらりと訪ねてきた。暇人同士とわかって、雑談がはじまったのだ。

「引っ越しまではいたしませんが、ときどき数年がかりの長期旅行でもしないと、息が詰まってくるのです」

「そんなに長い間、どこを旅してくるんですか？」

「そうですね。……たとえば一九世紀のロンドンへ送られたときは、蒸気船に乗ってインド航路を往復しますし。九世紀頃のサマルカンドがスタート地点ならパミール高原と天てん山ざん山脈をラクダで越えて、シルクロード経由で長ちよう安あんをめざしてみたりも――」

「せっかく過去に行ったからって、大冒険を満まん喫きつしないでくださいよ！」

　同世代の魔王仲間とちがい、アイーシャ夫人は偏へん屈くつとはほど遠い性格だった。

　しかし、あれこれ話すたびにつっこみどころが必ず見つかる。特に体験談を語り出したときは、たおやかで優美な美少女という見た目に反するエピソードばかりだ。

　ちなみにアイーシャ夫人、例の白い外がい套とうを今は脱いでいる。

　その下は女性用の短衣トウニカだった。Ｔシャツに似た簡素な服を腰帯で締める、例の衣服だ。これは丈が膝ひざまであった。

　薄着なので、夫人がほっそりしているくせにグラマーな体型だとよくわかった。

「でも、そんなにあちこちまわっていると大変じゃないですか？　よそものをきらう人たちともよく会いそうですし」

　護堂は祖父・草くさ薙なぎ一いち朗ろうのことを思い出して言った。

　東アジアの伝統芸能を研究テーマとする民俗学者だった祖父。若い頃はアジア諸国の村や町を渡り歩き、聞き取り調査を重ねたという。外国人のよそものは、やはり忌き避ひされることが多かったらしい。

　祖父はその苦難を人たらしの達人らしく飄ひよう々ひようと乗り切ったようだ。

　が、アイーシャは祖父以上に目立つ風ふう貌ぼうで、しかも女性である。より面倒な体験が多いのではないか――心配したら、あっさりと言われた。

「あ、大丈夫です。わたくし、どんな人にも好かれる権能を持っていますので」

「なるほど」

「とあるカトリックの守しゅ護ご聖せい人じんより、心ならずも簒さん奪だつする形になったのですが……あれのおかげでどんな時代に行ってもおかしなことにならず、重宝しております」

「この街にすんなり溶けこめている理由はそれですか。ところで」

　心から感謝するようにつぶやく夫人へ、護堂は淡々と言った。

「そいつが神様の権能なら、『好かれる』以上にやばいことができそうに思うんですけど。それだと、おとなしすぎるでしょう」

　ガリアに来た当初、恵那が言ったことを思い出しての追及だった。実際、催眠系の魔術でも似たような印象操作を行えそうである。

　指摘されて、アイーシャ夫人は困り顔になった。

「そ、それはもちろん、わたくしのために命を惜おしまない狂信者の教団さえもたやすく創設できますが、そのような暴挙をみだりに繰りかえすわけにもいきませんし……」

「よりにもよって、何でそんな力ばっかりなんですか!?」

　過去や異世界へ通じるゲートのランダム作成。瀕ひん死しの怪け我が人にんが大勢いても一瞬で全快させる奇跡の治ち癒ゆ力りょく。悪魔的なカリスマ性。

　こんな能力の持ち主で、しかも人助けを惜しまない性格。

　おまけに汽車や飛行機がない時代でも、大冒険を繰りかえす行動力の持ち主。

　聖ラファエロがアイーシャ夫人を恐れる気持ち、痛いほど理解できる。こんな人物が過去の世界をうろうろしていたら、いつ歴史が変わっても不思議ではない。

「考えてみたら、不思議だったんですよね……。この間ウルディン

が来たとき、軍の人たちが全然怖がらないでバケモノと戦っていたのが」

「あ、みなさんが最近すっかり怖おじ気けづいていたので、ほんのすこし……」

　おそらく兵たちを直じき々じきに激励したのだろう。

　英雄に類する神々がどれほどのカリスマ性を持つか、護堂もよく知っている。とんでもない離れ業わざだとうなずいたとき、
「ん？」と気づいた。

　今まで話に出た夫人の権能は、どれも戦闘とは関係ないものばかり。

　彼女はどうやって神ないし同族のカンピオーネと戦うのか——。気になったが訊くのはやめておいた。アイーシャ夫人と戦う未来など想像したくもなかったからだ。

　代わりにこう言った。

「そうだ。俺たちが現代へ帰るにはどうすればいいか、教えてくださいよ」

「方法としては、ふたつあります」

　夫人はすぐに答えてくれた。護堂たちを巻きこんだことが申し訳ないのかもしれない。

「ひとつは、この時代にある通廊の出入り口が開くのを待つこと。あれはよく晴れた満月の夜に自然と現れるのです」

「つまりチャンスは月に一度、それも天気に左右されるわけですか……」

「もうひとつは、すぐれた魔術師のみなさんに頼んで開けてもらうことです。妖精のことにくわしい方や魔女の方々を何人もお招きして、知恵と魔力をお借りできれば、おそらく半月から一か月で準備は終わるでしょう」

　前にやってもらったのだとアイーシャ夫人は語る。しかし、護堂はため息をついた。

「そっちもすぐには実現できないし、人を集めるだけで苦労しそうですね」

　となれば、やはり前者を検討すべきなのだが――。

　さて、この時代の神殺しウルディィンとどう相あい対たいすべきか。ここ幾日か懸けん案あんにしていた問題を考えこんだとき、不意にアイーシャ夫人が顔を近づけてきた。

「ど、どうしたんですか？」

「今日おうかがいしたのには理由がありまして。実は教えていただきたいのです。兵たちの間で流れているうわさが本当なのかを……」

「俺のことで、どんなうわさがあるんですか？」

「草薙さんが要よう塞さいの外に屋敷を用意させて、そこに乙女おとめふたりを侍はべらせ、ひとつ屋根の下で暮らしていると。あの少女たちはどちらも草薙さんの妻さい妾しようであると」

「さ、さいしょう⁉」

　古代のローマ軍団では、軍役中の結婚は許されない。

　妻を迎え、家庭を持つのは退役後――と規定されている。建前上は。

　このルールは、すでに形けい骸がい化かしてひさしい。兵士たちは軍の駐ちゆう屯とん地ち内で内縁の妻や子と同居したり、近くの集落に〝別宅〟を持ったりする。

　三人で寝食を共にするにあたり、護堂たちも別宅を確保したのである。

「わたくし、草薙さんはお連れの少女ふたりのどちらかと親密な仲なのだろうと予想していたのですが、まさか両方いっぺんに恋をお楽しみだなんて……」

「ま、待ってください。そのうわさ、いろいろと誤解があります！」

「でも、ふたりともお屋敷にかこっているのでしょう？」

「そういうのじゃなくて、同じ敷地内で『共同生活』してるんですよ！」

　アイーシャ夫人はあわてる護堂をじっと見つめていた。

　それから罪人の懺ざん悔げを聞く修道女のようなまなざしになり、おもむろに言う。

「草薙さん、己おのれを偽いつわってはいけません。あなたは今、うそをついていますね。その曇くもった瞳を見れば、一いち目もく瞭りよう然ぜんです」

　あれこれうしろめたい記憶がある護堂は「!?」と驚きよう愕がくした。

「わたくしはこれでも、古今東西のあらゆる国を渡り歩いてきた女。人を見抜く目には多少の自信がございます。あらいざらい白状されるとよろしいですよ？」

「そんなこと聞いたって、アイーシャさんにいいことないでしょう!?」

「いいえ。それは失礼ながら浅はかなご見識かと」

　あらゆる叡えい智ちを得た女賢者のごとき怜れい悧りさで、夫人は言った。

「古今東西のあらゆる女はある種の話題を好むものです。すなわち他人の醜しゆう聞ぶん、愛憎のもつれ、三角関係……。もちろん、このわたくしも例外ではございませんわ！」

「ただの野次馬根性じゃないですか！」

　夫人がずいっと詰め寄れば、同じ距離だけ護堂が逃げる。

　そんなやりとりの最中に、話題の人物のひとりが応接間に入ってきた。

「ここにいたんだ、王様。それにアイーシャさんまで」

　恵那はいつもどおりの気さくさで笑いかけてくる。アイーシャ夫人もいつものおっとりした優美さで微笑し、親愛の情を示した。

　一方、護堂は恵那の手に注目していた。紙の巻物を握っていたのだ。

　ここは古代ガリア。パピルスか羊よう皮ひ紙しのどちらかだろう。

「これ、エリカさんが王様に見せろって。さっき街の上をウルディンさんの竜が飛んでいってさ。この招待状を落としていったんだ」

「招待状、だって？」

「うん、王様宛あて。ウルディンさんの砦とりでで歓迎の宴うたげを開くから、王様に是非来て欲しいって書いてあるらしいよ」

　手紙を受け取ってみた。紙の裏地が妙につるつるしていた。

　文面は横書きのアルファベット。おそらく古いラテン語あたりなのだろう。厄やっ介かいな相手にどう対処すべきか。招待状をにらんで、思案をはじめる護堂だった。

4

　アウグスタ・ラウリカ市の遺い跡せきは現代にも残っているらしい。

　スイス領内に存在するローマ遺跡としては、最大のものだとエリカが教えてくれた。ラウリカ市は実際、古代の辺境都市とは思えないほど発展していた。

　推定二万の人口。石造りの家々に、市街を行き来するための道路網。

　大量の水を市民に供給する水道施設。劇場、円形闘技場。神殿。キリスト教会。議員が集つどう議事堂に、公衆浴場など——。

しかし、これが古代ローマの植民市としては標準スタンダードなのである。

もっと時代が進んだ中世の都市より、まちがいなく住み心地は快適だろう。

夕方になると護ご堂どうは要よう塞さいを出て、高級住宅街の〝別宅〟へ向かった。もちろん、エリカと恵え那なもいっしょだ。

途中、庶民向けの食堂に寄って夕食を適当に済ませる。

「おまえたち、育ちがいい割に食い物はなんでもいけるよな」

「だって変な食べ物もすくないし、どうとでもなるよ」

「海の近くの街なら、古代ローマの定番だったというウツボ料理を食べられたかもしれないのに……残念だわ」

今晩のメニューは塩と酢とオリーブオイルで味付けしたサラダに、豆と各種野菜の煮込み、焼いたソーセージにオムレツ、やや味気のないパンだった。

危険なつぶやきを聞きながしつつ、護堂も恵那も手づかみで食べすすめる。

ナイフやフォークはない時代なのだ。しかし、食卓で出会う食材はなじみ深いものが多かった。野菜ならキャベツ・ニンニク・ソラマメ・タマネギなど。肉は豚が多い。鳥はニワトリよりガチョウなどの方がメジャーらしいが、まだ試ためしていない。

味付けのベースは塩味が多いので、現代人の舌にもそれなりに美う味まかった。

食事のあとは浴場に寄り道する。

有名な、古代ローマ式の公衆浴場である。ただ大きな湯船につかるだけではなく、運動場やプールなども擁ようする施設だ。ここではもちろん男女べつべつになり、護堂はひとり湯につかったあと、女子たちと合流した。

帰宅する頃には、すっかり夜になっていた。

　軍に用意してもらった屋敷なので、広く豪ごう奢しやな造りである。

　本来はここに奴ど隷れいの一団も住まわせるところなのだが、それは現代人として抵抗があったため辞退し、三人だけの暮らしである。

　護堂たちは着替えたあと、屋敷の広間へ集まった。

　ウルディンが送ってきた『招待状』について、みんなで相談するためだ。

「まあ、向こうにも何か思惑があっての招待でしょうけど」

「あっちのふところを探るチャンスでもあるよね」

　エリカと恵那がさっそく話をはじめた。

　例の『抜け駆け禁止』があるせいか、ふたりとも護堂に〝ちょっかい〟を出すでもなく、仲よく状況の検討をしている。それ自体はとてもいいことだろう。

　よくないのは、彼女たちの居場所と格好である。

　エリカと恵那がいるのは大きな寝台の上。ふたりは向かい合うように寝そべりながら、たがいの間にこの付近の地図を広げていた。

　さらにいうと、どちらも古代の衣装に身をつつんでいる。

　まずはうすい絹の短衣トウニカ。ふたりが着ているものは裾すそが短く、ズボン類も省略しているので、素足がむき出しである。

　そして、長いショールを腰に巻きつけてから、肩にまわして羽織るようにする。

　こんな格好でだらしなく寝そべっているのだ。

　寝台の上にはまぶしいほど白いふともも、素足がこぼれ出ている。さらにうすい衣服を盛りあげる胸のふくらみや、寝台の上でなまめかしく隆起するお尻のライン等も、護堂の理性を悩ませていた。

　しかも、エリカと恵那は公衆浴場に行ったばかりで、湯あがりだった。

　いい具合に体がほてり、ふたりともリラックスしきっている。

「じゃあ、俺はそろそろ寝ようかな……」

　いつもとちがう衣装のエキゾチックさと、くつろぐ少女たちの無防備さに抗しがたい魅力を感じながらも、護堂は席を外そうとした。



今日の昼、アイーシャ夫人に『共同生活』だと訴えたばかり。

誤解を招くシチュエーションはできるかぎり避けたいのだが、ひきとめられた。

「駄目よ護堂、まだ話し合いの途中でしょう？」

「そうだよ王様。さっきから、ずっと黙ったままだし」

「あのな。このなかに男ひとりだけでいるの、すごく落ち着かないぞ……」

白旗をあげるつもりで、護堂は正直に語った。

しかし、エリカも恵那もにこやかに笑い、取り合わない。

「何を言うの？　ここは家族団らんと大勢での会話を楽しむための場所よ」

「そうそう。郷に入ってはともいうことだし、王様もこっちにおいでよ。いっしょに寝っころがって、お話ししようよ」

この部屋は宴会用の大広間だった。家族で集まり、ときに客人を招いて食事もする。話もする。酒も飲む。ただし、寝台のような長いすに寝そべり、大いにくつろぎながら。

現代人にはなじみにくい。しかし、これが古代ローマ式なのである。

ふたりに誘われて、すこしだけ護堂の心は揺らぎかけた。

が、ぐっと堪こらえて、寝そべる少女たちの魅力的すぎる姿から目をそらす。就寝時の寝室はせっかく三人バラバラなのに、これでは意味がない。

自分が妙な出来心を起こしてしまったら——その『もしも』が護堂は怖い。

「いや、ほら。ここで俺が変な気分になると、おまえたちの言ってた協定が台なしになるし……。その辺を予防するためにも、な」

思うところを真正直に語り、退避する正当性をわかってもらおう

とする。

　しかし、エリカと恵那はあっさりと答えた。

「台なしにはならないわ。だって、これは抜け駆けじゃないもの」

「うん。ふたりいっしょに王様へアピールしてるんだからね」

「アピール!?」

　予想外の言葉に愕がく然ぜんとしたら、ふたりの少女は意味ありげにささやいた。

「あのね。わたしたち、寝るときも部屋に鍵をかけるつもりはないの」

「だからさ……夜中に忍びこんできてもいいんだよ」

「な――!?」

　ショッキングすぎる言葉。ハンマーで頭を殴られた気分になった。

　愕然とする護堂を前に、恵那は続けて言う。

「王様がエリカさんと恵那のどちらを選んでも恨うらみっこなしって、話はついてるから」

「条件をいっしょにしたいから、ふたりで同じ格好をしているのよ。これなら、決め手になるのはわたしたち自身の魅力だけになるわ」

「そうそう。ふたりで相談して……下着とかもつけてないし」

「ちょっと恵那さん！」

　媛ひめ巫み女こが恥ずかしそうにとんでもない告白をすると、金髪の女悪魔は珍しく他人の奔ほん放ぽうさに憤ふん然ぜんと文句をつけた。

「そういうことをあからさまに言うのは淑しゅく女じょらしくないわ。もちろん、護堂の気分が盛りあがることを期待して、そういう下準備をしたわけだけど……」

「あ、ごめん。でもエリカさんって、普段はすごく大胆なくせにさ」

　恵那は素直にあやまってから、『てへへ』という感じで照れ笑いを浮かべた。

「ときどき妙にお嬢さまっていうか、お姫さまっぽいことを言うよね」

「もう、茶化さないで。淑女らしく、貴婦人らしく振る舞うことは、大胆に恋を愉たのしむのと同じくらい大切なことよ？　だから護堂」

　不意にエリカが身を起こして、つかつか歩みよってきた。

　そのまま護堂の腕を取ると、もといた寝台の方に引きこんでしまう。魔術で腕力を強くしているから、やはり力ではかなわない。

　護堂は寝台の上にすわりこむ形になった。

　そして、そう仕向けたエリカは護堂の右側に腰をおろす。ぴったりとよりそい、その悩ましい肢し体たいを密着させながら。

「わたしたちは淑女らしく、あなたに愛を無理強じいしたりはしないわ。だから腰を据すえて、必要なことを話し合いましょう？」

「だったら、なんで体をくっつけるんだよ⁉」

「それはこうしていると落ち着くし、楽しいから。堅い話ばかりしていたら、いいアイデアも出ないと思うのよね」

　しれっと言うエリカは、やわらかなショール以外は絹きぬの薄着一枚だけの姿。

　そして、下には何もつけてない。護堂は戦せん慄りつした。つまり、今のしかかってくる肌のぬくもり、やわらかさ、量感あふれる胸のふくらみ——それらはほとんど裸のときと同じ感触ではないのか。ただ薄絹のなめらかさが加わっているだけで。

「もちろん護堂がその気になってくれるなら、話し合いが終わったあとにべつの形で楽しむのもすばらしいと思うけど」

くすりというエリカの微笑には、色香よりもむしろ可か憐れんさの成分の方が多かった。

いつも大胆な彼女だが、このところは押してきたと思ったら引き、引いたと思ったら押してくる。ライバルに差をつけるため、細心の気配りで緩かん急きゆうをつけているのだ。

その駆け引きの妙に、護堂はどぎまぎしてしまった。

「んもう。淑女らしくとか言っといて、エリカさんはすぐそうなんだから……」

しかも、不満そうにつぶやきながら恵那がすりよってきた。

エリカの逆側、護堂の左にぴったりとはりつき、ライバルに対抗するように密着する。やはりあたたかで、やわらかかった。ふたつの胸のふくらみも大きさと弾力の両方をかねそなえ、イタリア人少女とまったく互角の感触だった。

実際、エリカと恵那はスタイルも背丈もほぼ同じくらいなのだ。

数値としては若じやつ干かんエリカの方が勝るかもしれない。しかし、外から見た印象は『ほとんど同じ』である。そして今回、直じかにふれたときの感触も『ほとんど同じ』であると、護堂は図はからずも知ってしまった。

「こうしていると、木き更さら津づでいっしょだったときを思い出すね」

恵那は『えへへ』と照れくさそうに微笑ほほえんで、昔のことを引き合いに出す。

その表情に護堂がどきっとしたら、すぐにエリカも言った。

「あら。わたしだってシチリアでは護堂と褥しとねを共にしたのよ？　そのまま一夜も明かしたし」

「恵那だって、いつだったか王様に手料理を振る舞ってあげたりしたよ？」

「それを言うなら、わたしの方も……」

　エリカが言いかけてやめると、恵那も「……」と沈黙した。

　そして、ふたりして同時にうなずき合う。

「この辺を張り合っていくと、護堂がどれだけ好機を逃さない狼おおかみか検証できそうだわ」

「うん。本当にわずかな隙すきも見逃さないって感じがすごく王様らしいよね」

「そ、それより話し合いをするんだろっ！」

　対抗していたはずが意気投合の気配を見せる女子たち。

　仲よきことは美しいはずなのだが、護堂は身の危険を感じ、地図を引きよせた。ふたりが寝台の上で見ていたものだ。

　地図上では、ライン川が東から西に流れている。

　この流れはアウグスタ・ラウリカ市を通りすぎたところで北にカーブし、『Ｌ』の字に似た線を描いている。ちなみに現代のヨーロッパでいうと、ラウリカは温泉地として有名なラインフェルデン市とバーゼル市の間に位置する。

　ライン川に沿って東へ進めば、ウルディンの本拠地。

　護堂たちが古代ガリアに来た日、最初に見た森へと行きつく。

「これはうわさレベルの情報だけど。ウルディンの森には何十匹も竜が――あの恐竜みたいな神獣がいるともいうわ」

　あいかわらず密着しながらも、エリカは怜れい悧りな声で言った。

「実際、わたしたちも三匹を目撃しているわけだし。何十という数は眉まゆ唾つばでも、まとまった数の神獣がいるかもしれないわね」

「その辺、軍団のおっちゃんたちも正確な情報を持ってなかったよ」

　恵那は天てん衣い無む縫ほうの気さくさで、年輩の男性とも遠慮

なしに語らう少女である。

　ガリアの地でもその特技を発揮して、軍団内の知り合いを増やしているようだった。

「竜が恐ろしいから、最近じゃ誰も森に入らないんだって。恵那がひとっ走りして、細かく見てこようか？」

「そうしてもらいたい気持ちはあるけど……わたしは反対だわ」

「そうだな。あの恐竜が本当に何十匹もいたら危険すぎる」

　清せい秋しゅう院いん恵え那なは身軽なうえ、神がかりに天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎという切り札を持つ。

　本当なら偵察役としては最適の人材だ。しかし、エリカの意見に護堂もうなずいた。神がかりを使うと消耗が激しいので、恵那は連戦に向いていない。

　並の怪物相手ならともかく、神獣の巣は彼女にとっても厳しい場所だ。

「やっぱり、俺が自分の目で見てくる方がいいか……」

「そうね。神獣と遭遇したら戦いながら情報収集するつもりで乗りこむ方が、今回の場合は正解だと思うわ。そうなると、わざわざ敵陣の中ちゅう枢すう部ぶへ招待してくれる好機、見逃したくはないわね……」

「じゃあ、ご招待を受けるってこと？」

「そうしたいところね。ここの司令が許可してくれれば、だけど」

　恵那に確認されて、エリカは眉をひそめた。

　傭よう兵へい隊長として契約したとき『草薙護堂は独自の判断によって行動する』という条項を設けた。しかし、これはあくまで戦闘中にのみ適用される。

　はたして、司令はウルディンに対して打って出ることを許可するだろうか？

「野盗や敵対部族をいち早く鎮ちん圧あつすることは、本来ローマ軍団が得意とするところよ。ただ、敵がある程度の戦力を持っていると、放置するケースが多いらしいのよね。特にウルディンほどの強敵相手にギャンブルするかというと――」

「たしかにあのえらいおっちゃん、口では強がってたけど攻め込んだりはしなさそう」

　エリカが言えば、恵那もうんうんとうなずく。

「王様が要塞を出たら、ウルディンさんと戦える人いないもんね。一応、許可を願い出てみて、ダメだったらないしょで街を抜け出すのはどうかな？」

「あー……それなら、たぶんどうとでもできるぞ」

　恵那が不穏当なアイデアを出したので、護堂は言った。

　昼間、四人目の仲間（？）と交わした会話を思い出したのだ。まあ、彼女の力に頼るのも相当に不適切な〝ズル〟なのだが――。

　翌日の午前中、護堂たちは要塞の城壁上部にいた。

　高さ五メートルほどの土ど塁るいを、積みあげた石材でかこんだ城壁である。その上部は通路になっていて、兵士が二、三人ならんで歩くこともできる。

　ウルディン襲来時のように、この通路が要塞を守るときに活躍する。

　護堂はエリカ・恵那といっしょに城壁上の通路に陣取って、部隊演習を見物していた。六〇〇名近いという兵士たちが要塞の外に集合し、訓練中なのだ。

　六人一組で横一列になり、この列をつらねて陣形を作る。

　武装は長なが槍やりと楯たてで完全統一。同じ速度で前進し、最前列の兵は完かん璧ぺきに同じタイミングで槍を振りおろす。さらには一いつ糸し乱れぬ動きで、全員同時に方向転換する。

　要塞は市街から二キロほど離れている。

　おかげで、大がかりな演習を行うための空き地は十分にあった。

「こういうの、なんか〝軍隊〟って感じするよな」

　統とう率そつが行き届いた兵団の挙動は、見ていて感動的ですらある。

　よほど訓練を積まなければ、数百人規模でこんな動きはできない。護堂がうなずく横で、恵那も感心していた。

「もうすぐ国が崩壊していくっていうから、兵隊のおっちゃんたちもたいしたことないのかと思ってたけど……。結構ちゃんとしてるんだねー」

「兵の練度は、決して低くないはずよ。三万のゲルマン部族連合を皇帝ユリアヌスが一万のローマ軍団で破ってから、まだ半世紀しか経たってない時代だし」

　気の毒そうに肩をすくめるのは、もちろんエリカだった。

「ただ、あの人たちって現地採用なのよね。ガリア人と、フン族から逃げてきたゲルマン人ばかりの軍隊。西ローマの属州はほとんどそうなの。彼らの目当ては給金であって、忠誠心はたいして期待できないわ。それに兵士の数が絶対的にすくないし」

「そりゃいろいろ難儀だなあ」

　諸しよ行ぎよう無む常じようを感じながら、護堂はアイーシャ夫人を探した。

　司令の〝説得〟をお願いしてあるのだ。見れば、演習を視察する司令のそばに白い外套姿の夫人がいた。

　彼女はなにやら懇こん願がんしている。祈るように腕まで組んだりする。

　司令はおそろしくあっさりとうなずき、夫人は花咲くような笑顔になった。そのまま城壁の護堂たちを見あげ、うれしそうに手を振ってくれた。

あの笑顔だけで、上々の首しゆ尾びだとわかる。

「大丈夫だったみたいだな……」

「すごく助かるけど、あとが怖いのは何でだろうね……」

「たぶん、あの権能がものすごく広い範囲に悪用できるからよ。夫人はああいうお人柄だからいいけど、もっと野心的であくどい方だったら……」

春しゆん風ぷう駘たい蕩とうとしたアイーシャ夫人の笑顔になぜか不安を覚えつつも、護堂は仲間の少女たちとうなずき合った。

古代ガリアに来て以来、状況に流されることも多かった。

しかし、ついに自分たちから動き出す番となった。それがやけにうれしい。

「あとの問題は、ウルディンとどこまで本気で戦うべきかよね」

「俺は今のところ、あいつとのゴタゴタは話し合いで解決するつもりだけど……もし戦うようなことになったら、何か問題が出てくるのか？」

心配そうにエリカがつぶやくので、護堂は首をかしげた。

すると、ピンときたらしく恵那が訊ねる。

「もしかして、ウルディンさんって歴史に名を残すような人なの？　あの人に万一のことがあると、未来が変わっちゃうくらいの」

「まだわからないわ。いくつか可能性を思いついているだけで」

憂ゆう鬱うつそうにエリカはかぶりを振り、それから言葉を継ぎ足した。

「夫人のおっしゃった修正力——そういうものが本当にあるとしても、今回みたいなケースを修正しきれるのか不安でもあるし……」

新たな旅のはじまりは、なんとも不吉なつぶやきであった。

第６章　魔王城の虜

1

　騒動がはじまる前、サルバトーレ・ドニは『ゲームをしよう！』と放言した。

　その言にしたがうなら、ゲームの開始地点へもどってきたことになる。護ご堂どうは今、ウルディンの砦とりでがある森へ足を踏み入れようとしていた。

　木々の間で陽光の燦きらめきがはじけ、気持ちのいい春風が吹き抜けていく。

　これが現代なら、美しいスイスの森を散策となるところだ。しかし、ここは古代ガリアで、そのうえ恐ろしい神しん獣じゅうの巣であった。

「いつでも訪ねてこいとか書かれてもなあ……」

　送られてきた招待状、文面は適当もいいところだった。

　なにしろ『ひさしぶりだな兄弟。その街に居着いているなら、ちょうどいい。いつでも訪ねてこい。できうるかぎりの歓かん待たいをしてやる』なのだ。

　待ち合わせの場所も時間も決めない。うらやましいほどの自由人ぶりだ。

　玄関口も案内板もない森のなかへ、護堂は踏み込んでいった。

　ここに来るまで、馬車で約一日。道なき森林地帯にそのまま乗りいれることはできないので、今は徒歩だった。

　とにかくライン川のほとりをめざそうと、適当に歩くこと約三〇分。

　その間に二回、神獣を見かけた。デイノニクスによく似た、例の黒い恐竜である。体長七メートルの巨体だが、森のなかをうろつく姿は軽快だった。

　いずれも護堂を見かけるなり、そそくさと森の奥へ逃げていったが……。

「まるで、俺の方が熊みたいじゃないか」

　肩をすくめたとき、『ざざっ』と木の葉がこすれる音を聞いた。

　何か大きな生き物が木々の間をかきわけながら、近づいてくる。またデイノニクスだろうかと予想したら、当たりだった。

　頭・背中・尾のラインを一直線にして二足歩行する特徴的な姿。

　後ろ肢あしの凶悪そうな鉤かぎ爪づめ。黒い巨体。もはや見なれた神獣の再登場である。ただし、今回は背中に鞍くらと騎手を乗せていた。しかもウルディンではない。

「お初にお目にかかります。我が主あるじウルディンと同じく、神殺しの君とお見受けいたしましたが、いかがでしょう？」

「あ、はい。一応そうなります。草くさ薙なぎ護堂です」

　礼儀正しく訊きかれたので、護堂は現代日本式にぺこりと頭を下げた。

　黒きデイノニクスに乗るのは金髪の女性だった。革の鎧よろいと兜かぶとで武装している。兜の両脇には羽根飾りがついていて、なかなかに見栄えがいい。

　そのうえ、すばらしい美女だった。細身で細ほそ面おもて、何より気品がある。

「クロティルドと申します。主の砦までご案内申し上げましょう」

気け高だかい女戦士という風ふ情ぜいである。護堂は「よろしくお願いします」と答えた。おそらく森のなかに見張りでもいて、侵入者の情報を報告したのだろう。

「よろしければ、私のうしろに乗っていただくこともできますが」

「え、いいんですか⁉」

思いがけない申し出に、護堂はすこしよろこんだ。

恐竜の背に乗るなど、めったにできない体験。すぐにクロティルドの手を借りて、伏せの姿勢を取ったデイノニクスによじのぼる。

この間、恐竜型の神獣は身じろぎもせず、実におとなしかった。

今までの連中とちがい、護堂を怖がらない。おかげで難なく鞍に腰をおろせた。

すぐ前にはもちろんクロティルドがいる。ずいぶんと背が高く、一八〇センチの護堂よりもわずかに低い程度だった。そういえば細身なのに力も強かった。

「よろしいですか？　では参ります」

馬ならぬ恐竜の腹を蹴けって、クロティルドは出発を命じた。

デイノニクスはすぐに身を起こして、歩きはじめる。歩幅が大きいので進みも速い。また思っていたほど揺れもひどくなく、乗り心地も悪くなかった。この神獣、バランスを取るのが異様に上う手まい生き物なのだろう。

ちなみに、クロティルドの両足はしっかり鐙あぶみを踏みしめていた。

馬具については、騎馬民族式らしい。鞍に小振りの弓と矢筒もかけてあった。

「飛びます。しっかりつかまってください！」

ライン川のほとりに出たところで、いきなりクロティルドが言った。

一瞬驚いたが、護堂はすぐに意味を諒りよう解かいした。バイクのうしろに乗る要領で、彼女の腰に手をまわす。直後、デイノニクスの短い前肢は翼に変化した。

そして、両翼を広げて飛び立つ。

飛ひ翔しようの開始だった。高度としては三、四〇メートル程度だろう。馬が駆けるのと大差ないスピードで、ゆったりライン川の上を飛んでいく。

数百メートル先に砦が見えてきた。四方を城壁でかこんでいる。

空から見ると、ラウリカ市のローマ軍要よう塞さいと同じ建築様式だとわかる。

「そうか。ウルディンは帝国の砦を奪ったんだな……」

護堂はうなずいた。眼下の水面では二匹のデイノニクスが悠々と泳いでいる。頭から尾にかけての細長いラインしか見えないので、やはりウナギを連想してしまう。

「こいつら、もしかして水が好きなんですか？」

「ええ。水のすくない場所でも不自由なく動きまわれるのですが……。水場が近いときはよくああしておりますね」

護堂はアルノ川での神獣退治を思い出した。クロティルドの言うとおりなら、やはり水を好む習性があったことになる。

「ちなみに、何匹くらいいるんでしょう？」

「今はたしか一〇頭前後だったかと。正確にはわかりかねますが」

神獣の数はそのままウルディンの戦力。

ダメ元で訊きいてみたら、クロティルドは意外とあっさり答えてくれた。機密保持に無関心なのか、あるいは偽いつわりの情報なのか。どちらだろう？

こんなやりとりをしているうちに、いつのまにか砦の上空に到達していた。

　やはり、ラウリカ市の要塞と似たような構造だった。五〇棟前後の長屋がならび、中央には広場や要塞司令部が配されている。

　クロティルド操る翼竜はゆっくりと広場へ降下していった。

　後ろ肢が『ずん』と地に着き、左右の翼は短い前肢にもどる。恐竜型の神獣はそのまま伏せの姿勢になり、乗り手と護堂が降りるのを助けてくれた。

　そこに黒髪の男が笑顔で近づいてくる。

「よく来たな！　ははは、今日は心ゆくまで飲み明かすとしよう！」

　真っ昼間から不ふ埒らちな宣言をしたのは、もちろん神殺しウルディンだった。

「次に会ったときは名を教えろと言っておいたな。さあ兄弟、約束を果たしてくれ」

「草薙――護堂だ」

　些さ事じにこだわらない快かい活かつさと、人を惹ひきつける磁じ力りよくのようなカリスマ性。

　この男がある種の人格的魅力を持っていると認めながら、短く名乗る護堂だった。

　ウルディンの指示で、広場に長テーブルが運び出された。

　といっても、フン族の神殺しは豪快かつシンプルに告げただけである。

「今日の客は特別だぞ！　酒と食い物をあるだけ持ってこい！」

　しかし、召使いらしき人々はその一声できびきびと動きはじめた。

　テーブルを外に運び、ずらずらと椅子をならべる。さらにさまざまな品を手て際ぎわよく配膳していく。葡ぶ萄どう酒しゆの甕か

め、肉を乗せた大皿、ザクロ・桃・イチジクなどが入った果物の鉢はち、小麦のパン、いっぱいのチーズ、焼いたタマネギなどなど。

　こういう宴席が多いのか、慣れた仕事ぶりだ。

　彼らは男女合わせて三〇人ほどだった。ウルディンに訊いてみたら、「売られるよりもオレのために働きたいという連中を使っている」らしい。

　この男の稼業が『襲撃と略奪』であると再確認して、護堂は眉まゆをひそめた。

　それから、ふと思いついて訊たずねてみる。

「もしかして、この森はあんたの竜を飼うための場所なのか？」

「ああ。あいつらはあまり長生きしない生き物でな。たいてい一、二年で死んでしまう。常に予備を用意しておくのだ」

　もし本当なら、重大な機密事項をウルディンは語った。

　騎馬民族とは畢ひつ竟きよう、遊牧民である。いかにも動物を飼いならすという発想をしそうなので、訊ねてみたのだが——。

「じゃあ、気づいたら姿が見えないときもあるんじゃ……」

「まあ、たまにな。一ひと月つきくらい前も、数えてみたら二匹減っていたぞ。おそらく、森のどこかで野の垂たれ死じんだのだろうな」

　水を向けてみたら、無視できない情報をウルディンは口にした。

　現代のトスカーナ州に現れたデイノニクスたちは、その二匹ではないのか？　そう考えるとつじつまが合う。護堂はひそかにうなずいた。

　などと話すうちに、宴席の準備がすっかりととのっている。

　護堂はウルディンと共に長テーブルの真ん中付近にすわる形となった。ふたりに給仕するため、召めし使つかい団だんの人々がまわりにひかえる。

「このままじゃあ華がないな。誰か、あいつらも呼んでこい！」

　またウルディンが一声かける。

　数分後、着飾った美女たちが集まってきた。金髪碧へき眼がんもいれば、ローマ人の特徴である黒髪黒目、銀髪や茶ちや褐かつ色しよくの髪の娘もいる。さらにいえば黒人女性も、ウルディンと同じ東洋系の女性もいて、ここだけ人種のるつぼというありさまだ。

　美女たちはふたつの酒杯に葡萄酒を満たし、神殺しふたりに渡そうとする。

　それをウルディンは一気にあおり、護堂は逆に断りながら言った。

「この人たちもあんたの召使いなのか？　妙にきれいな人が多いけど」

「いいや。みんな、オレの女だが？　愛人というやつだな」

　当然のように言われて、護堂は「なにィ!?」とのけぞりそうになった。

「決まり切ったことを面と向かって訊くなよ、兄弟。照れくさいじゃないか」

「な、何だよそれは！　ここにいる全員がそうだって言うのか!?」

「ああ、もちろん。一二人全てがオレの女だ。まあ、いろいろ言いたい気持ちはわかる」

　うなずきながら、ウルディンは葡萄酒を飲み干す。

　空になった酒杯には、愛人のひとりがすぐさま新たな酒をつぎ足した。

「オレほどの男が所有する後宮としては、いささか規模が小さい――。そう思っているのだろう、兄弟は？　だが、荷物が多いのは性に合わんのだ」

　予想外の言葉を吐かれて、護堂は目をぱちくりさせた。

　対して、ウルディンはひどくまじめな顔つきでこう続けてみせた。

「無駄に数だけ多いより、これはという女だけいてくれる方が断然いい」

「バカ言うなっ。一二人もいれば十分大規模だ！」

　ぐいぐい酒杯をあける暴言の主に、護堂は全力でつっこんだ。

　尚、この時代の葡萄酒、つまりワインは水などで薄めるのがふつうだ。が、ウルディンが原酒をそのまま飲んでいることは、色の濃さと匂においから明らかだった。

　どうやら酒にも強いらしい。一方、護堂は水だけ飲んでいる。

　ここは古代ガリアだが、現代日本の飲酒ルールを遵じゅん守しゅするつもりなのだ。

　すると、愛人団のひとりが豚肉の串焼きを持ってきてくれた。断るのも悪いので、適当に口へ運ぶ。塩を振って遠火で焼いただけの品だが、シンプルに美う味まかった。

　口のふさがった護堂へ、ウルディンはさらに言った。

「ん、まあ、白状すると、こいつら以外にもたしかに妻がいるのだが。ああ兄弟、ちょうどいいから、おまえにも紹介しよう」

　一二人の愛人以外にも妻。あきれる護堂の前で、ウルディンは手招きした。

　やってきたのは――クロティルドだった。

　革かわ鎧よろいに羽根付きの兜という勇ましい装束に、気高く美しい顔立ち。背の高さとあいまって、女王のような雰ふん囲い気きすら感じさせる。

　すこし言葉を交わしただけだが、かなり生き真ま面じ目めな性格ではないのか。

　そう思わせる彼女がウルディンの妻とは。

驚く護堂へ一礼してから、クロティルドは夫へ言った。

「ウルディンさま、私はそろそろ……」

「ああ、悪いな。よろしくやってくれ」

何か用を頼まれていたのか、クロティルドはこの場をはなれていった。

さっき護堂も乗せてもらった翼竜にまたがり、ふたたび空へ飛び立っていく。そのまま漫然と宴うたげは進み、一時間近くが過ぎた頃だった。

「ところで兄弟。今日はおまえに折り入って頼みがある」

ざくろをかじりながら宴の主催者が言ったので、護堂は気を引きしめた。

ウルディンの気性である。特にふくみもなく歓迎の宴をやりそうな気もしてきたが、予想どおり思おも惑わくがあるのかもしれないと。

しかし、続きの言葉には意表を突かれてしまった。

「おまえ、オレの名みよう代だいとして王にならんか？」

「お、王？」

「オレにはひとつ趣味があってな。たまに代理の者を王に立てて、国を取らせるのだ。そいつに指図して各地を攻め取らせ、さらに国を増やす」

かんたんに『国を取らせる』とウルディンは言う。

ふつうの人間が口にすれば、ただの妄もう言げん。しかし、この男は竜の軍団を御ぎよすカンピオーネで、ここは乱世の古代世界。王者となるための垣かき根ねは現代よりも遥はるかに低い。

ウルディンなら、たしかにやれるかもしれない――。

「この間も東方に国を作り、名代にはオレの名まで貸して族長に据すえたのだがな。そやつがどうにも頼りにならん。近いうちに国ご

と自滅しそうな気がする」

　国の興亡をフランチャイズの事業展開さながらに語る。

　ウルディンはまだ若い。しかし、アイーシャ夫人や義姉の例がある。カンピオーネは見た目と実年齢が一致しないのだ。この男が積み重ねた経験は何十年分なのか——。

　思わず凝ぎよう視ししたら、ウルディンはにやっと微笑ほほえんだ。

「やはり、名代にもそれなり以上の器量がなくては大事は成せん。そこでだ。同じ神殺しであるおまえを見こんで頼む。オレの代わりに王となれ！」

「そんな頼み、聞けるわけないだろ。大体、なんで俺なんだよ？」

　慎しん重ちように断りながらも、護堂は不機嫌に言った。

　たまたま出会っただけの縁で、どうしてこんな話になるのかと。

「そりゃ決まってる。女の趣味が似てるからだ」

「女!?」

「ああ。この間、おまえが連れていた女ども、どちらも相当なじゃじゃ馬と見た。そんなのをふたりもそろえているくらいだ。若いくせにいい趣味をしている。実は、オレもその手の女が好みでな。従順なだけのやつはどうもいかん」

「…………」

　エリカ・ブランデッリと清せい秋しゆう院いん恵え那な。たしかにそのとおりではあるが。

　顔つきとたたずまいをさっと見た程度で見抜く、ウルディンの特技。この男、女性にかんしてはとんでもない芸の持ち主なのではないか。

　あきれながらも感心する。それから護堂は深呼吸した。

　体と心のギアを上げるためだ。喧けん嘩かを売るつもりは毛頭な

いが、火の粉が降りかかってきたら腕ずくで払う。その準備だった。

「せっかく招待までしてくれたのに、悪いな。あんたの提案に乗る気はない」

「そう早く結論を出すなよ。この砦に何か月か逗とう留りゅうして、じっくり考えてみろ。オレはこれでも気の長い方でな。たっぷり時間をくれてやる」

「いいや。その必要はない。あんたとの話し合いはまたべつの機会にする」

　護堂が立ちあがると、ウルディンは軽く手を振った。

　まわりの愛人と召使いたちは、それだけで足早に去っていく。荒事の気配を察しよく感じとったようだ。

「あんたに言ってもわからないかもしれないけど、俺は平和主義者なんだ。無駄に争うつもりはない。出ていかせてくれないか？」

「おお、それはますますいいな」

　護堂の平和主義宣言に、ウルディンは目を細めた。

「俺も省略すべき戦いは省略する主義だ。そのための材料も届いたことだしな」

　と、空を見やる。鋭い騎馬民族の視力が何かを捉とらえているらしい。

　護堂には黒い点にしか見えない何かがこちらへ飛んでくる。しばらくすると、それが二匹の翼あるデイノニクスだとわかった。

　それぞれに乗り手がいる。片方はクロティルド、もう片方は黒髪の女性だ。

　護堂は目を疑った。竜を駆る騎手たちのほかにも乗員がいたからだ。クロティルドが鞍の前に乗せているのは、縄なわで縛しばられたエリカだった。めったに見せない悔くやしそうな表情で唇くちびるを噛かみしめている。

　そして、もうひとり黒髪の乗り手は恵那を連れていた。

　やはり縛られていて、ケンカに負けたガキ大将のように拗すねた表情をしていた。

　実は護堂と共にウルディンの森へ来ていた両名。砦のなかで草薙護堂が起こす行動を講和・逃走・戦闘のいずれであっても適てき宜ぎフォローする予定だったのだが。

「さすがオレの女房たちだ。上手くやってくれたらしい。そういうわけだから、すこし泊まっていくといい」

　自慢そうに言ってから、ウルディンはあらためて護堂へ目を向ける。人質を取られた格好である。もちろん、否いなとは言えなかった。

「念のため、ちょっと小細工もさせてもらおう」

　ウルディンの目配せで、クロティルドがさっと翼竜から降りた。

　長身の金髪美女は護堂へ近づきながら、小さな刃物――剃かみ刀そりを取り出す。

　護堂は驚いた。クロティルドの剃刀から神力を感じ取ったのだ。こんなものが何かの神に由来する品なのか。

　いぶかしむうちにクロティルドが目の前にやってきて、小さな刃を一いつ閃せんさせる。

　謎なぞの剃刀は護堂に対して、みごとな切れ味を見せた……。



2

　ウルディンの砦で『滞在』をはじめて、早くも二日目。

　護ご堂どうにあてがわれた住まいは、ここでも将校用の宿舎だった。ただし、宿舎のまわりには数名の見張りが配され、軟禁状態であったが。

　尚、滞在するのは護堂だけ。ふたりの仲間はいっしょではない。

　ひとりきりの時間をもてあましていたら、昼頃にエリカが訪ねてきた。

「あの女ひ性とたちにはしてやられたわ」

　護堂を前にして、エリカは悔しそうに語った。

　宿舎の応接間でふたりきり。見張りもつかない。護堂は囚しゅう人じんではなく『客人』という建前があり、こうして面会を受ける自由もあった。

「ウルディンの奥さんたちか……」

「ええ。クロティルドはまちがいなく聖騎士位階者に匹敵する猛も者さよ。叔お父じさまか聖ラファエロでも連れてこないと太た刀ち打うちできないでしょうね」

　クロティルドが女戦士であることは、護堂も予想していた。

　が、エリカいわく『この時代のルーン魔術』の達人でもあったらしい。剣と魔術を駆使した真っ向勝負で、エリカと恵那は次々と撃破されたらしい。

　しかも、武器のみ手から落とされ、体は無傷という明らかに手加減された形で。

「もうひとりの人もすごいのか？」

「ルスカね。彼女は……ちょっと底が知れないわ。たぶん魔女だと思う。わたしたちの居場所をあっさり突き止めたのも彼女みたい」

　驚くべきことに、畏い怖ふすら込めてエリカは語った。

「リリィと祐ゆ理りがいてくれたら、まだ対抗のしようもあったでしょうけど……」

　彼女たちがいれば、敵襲を霊視力や精神感応の霊力で察してくれたかもしれない。力で上回る敵を魔女術で眩げん惑わくし、逃走を成功させたかもしれない。

　五人いるべきメンバーがふたりも欠けている。

　その影響を実感して、護堂とエリカは深くため息をついた。

「護堂の方はどう？　やっぱり権けん能のうは使えないまま？」

「ああ。世の中にはあんな道具もあるんだなあ……」

　先の方が切られた前髪をさわり、護堂はつぶやいた。

　昨日、クロティルドが振るった剃かみ刀そり。あれで前髪をすこしだけ切られたのだ。この直後から、権能が使えなくなった。

　天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを呼んでも、右腕から出てこない。

　心のなかで「この砦とりでを壊せ」と『猪いのしし』に命じても、何の反応もない。

「あの剃刀、旧約聖書の士し師しサムソンゆかりの神具だと思うわ。ただ、由来を見抜いたところで護堂の力が回復するわけでもないし、悩ましいわね」

「おまえや清せい秋しゆう院いんの方はどうだ？　変なあつかいはされてないか？」

「そこは大丈夫。わたしたちも丁てい重ちようにもてなされているわ。クロティルドとルスカも親切にしてくれるし。……まあ、あくまで人質として、ね」

　やや皮肉のニュアンスを込めて、エリカは言った。

　護堂はホッとした。彼女たちが何か非道な振る舞いを受けていたら、絶対にウルディンを許さないところだ。

「ウルディンのやつ、あれで意外と気配りが細かいよな……」

「豪快なだけじゃ人をまとめることはできないもの。彼はきっと、偉大な王の資質を持つ人物なのだと思うわ。――ねえ護堂、アッティラの名前はあなたも知っていたわよね？」

「ん？　ああ。そのうちフン族を統一する王様なんだろ」

　世界史の教科書で名前を知り、エリカから詳細を教わった人物。

　野や蛮ばんとされる騎馬民族の王でありながら戦争に強いだけでなく、外交にも明るく、優秀な人材は民族を問わず重用したという。その帝国はカスピ海方面からドナウ川流域――現代でいうロシア西部・東欧・ドイツを支配したらしい。

　が、彼の急死をもって帝国は瓦が解かいし、フン族は歴史のなかに消えていった……。

　偉大な蛮ばん族ぞく王おうの名を口にしたイタリア人少女は憂ゆう鬱うつそうに言った。

「わたし、こう思うのよね。あと何十年かしたら、ウルディンは大王アッティラの即位を助けて、フン族の一大帝国を築くんじゃないかって」

「なんだって？」

「護堂にも『王になれ』と持ちかけたのでしょう？　今後もウルディンが生き続けるなら、それくらいの事業は成なし遂とげそうよ」

　大胆すぎる仮説を唱となえたエリカは、さらに付け足す。

「それに無視できない符合の一致があるのよね。五世紀のはじめ頃、フン族にはたしか『ウルディン』という族長がいたはずなの。そして、アッティラにはこんな伝説があるわ。持ち主に勝利をもたらす軍神テュールの神剣を所持者していたという……」

「…………」

　ウルディンは言っていた。王とした男に今も名を貸していると。

　そして、彼の異い名みようは『テュールの剣』。ただ今のところ、フン族の神殺しが剣を取る場面は一度も見ていなかったが——。

　エリカの指摘どおり、偶然と言うにはためらわれる符合の一致だった。

「アッティラが活躍した時代は短いけど、ヨーロッパの歴史に遺のこした爪つめ痕あとはおそろしく深くて大きいわ。その存在がいいか悪いかはともかく、超重要人物であることはたしかよ」

「いなくなれば歴史にとんでもない影響が——」

「出るでしょうね。わたし、はじめはウルディンが将来アッティラになる可能性を考えていたの。でも、自みずから王に立つ意欲はないというから……」

　やや大胆すぎるが、それなりに説得力のある仮説。

　護堂は悩ましい気分になった。現状、ウルディンと戦えない状況だが、それが可能になっても戦うべきか否か。

「アイーシャさんの言ってた修正力説が正しいなんて保証ないもんな。ＳＦとかなら、むしろ並行世界パラレルワールドの話にならないか？　ほら、歴史が変わった世界と変わらなかった世界の両方が生まれてしまう、みたいな」

「だとしたら、こうは考えられないかしら？　わたしたちに言っていないだけで、あの説の根拠になるような何かを夫人はご存じなのかもって——」

「なるほど。逆の発想か」

「王様っ。差し入れ持ってきたよー」

　エリカの意見にうなずいていると、明るい声で呼びかけられた。

　ちょうど恵え那なが応接間に入ってくるところだった。しかも、

連れがいる。日本人の媛ひめ巫み女こと同じく、つややかな黒髪の持ち主だ。

　超ロングヘアの恵那とちがい、肩の辺りで切りそろえている。

　昨日、クロティルドと共に翼竜を駆っていた妙齢の美女だ。東洋系の人種に見える。フン族か、アジア方面の生まれなのだろう。護堂は声をかけた。

「たしか、ウルディンの奥さんでしたよね……？」

「うん。ルスカっていう。あの人は今日いないから、あたしがあんたたちの面倒を見るよ。不自由してること、ある？」

「この砦の外に出ていきたいですね」

「ははは、残念。それは却下」

　ルスカは気だるげな瞳ひとみをした黒髪の美女。

　言葉を省略気味で、微妙にテンションが低い。しかし、にやりとした笑顔とローテンションな笑い声でリアクションはしてくれた。無ぶ愛あい想そうではないようだ。

　恵那は果物を盛った大皿、ルスカは飲料水のつぼをかかえていた。

「ルスカ。あなたの旦だん那な様、どちらへお出かけなの？」

「わかんない。行き先を言い残すことなんて、めったにない人だから」

「あ、わかるわかる。恵那も行き先は言わない方」

　もうひとりのウルディン夫人相手に、エリカも恵那も親しげな口を利きく。

　このあたりはさすが一流の社交術と天性の人なつこさを持つ両名、良好な人間関係を問題なく築けているようだ。

「ところでさ。うちの王様が力を使えなくなったの、どうして？」

「あれ、あの神具。デリラの剃刀」

　言葉足らずの回答に恵那はきょとんとし、エリカは「やっぱり」とうなずいた。

「旧約聖書に登場する士師サムソンは無双の怪力の持ち主。力の源みなもとである髪の毛を、愛人デリラの裏切りで失ってしまう——。あの逸いつ話わを再現する神具なのね？」

「そう。寝ているサムソンは剃刀で禿はげ頭あたまにされて、力を失った」

　すこし前髪を切られた護堂に、ルスカはにんまりと笑いかけた。

「昔、ウルディンもあれでひどい目に遭あった。でも自じ業ごう自じ得とく。あの剃刀は女にしか使えない道具だから……」

「もしかして、ウルディンさんもいっしょに寝てた人に裏切られたの？」

　目を丸くして恵那が訊くと、ルスカはこっくりうなずいた。

「あの人は昔からそう。あたしの目が届かないところで、すぐべつの女といい仲になる。たまに連れ帰ってきて、愛人に加えたりする」

「でも、『たまに』なら、まだ救いがあるかもしれないわよ」

　皮肉っぽく相づちを打ったのはエリカだった。

「どこかの誰かさんは『必ず』愛人にしてしまうから……」

「王様の場合、浮気じゃなくて本気だもんね。でも、そのおかげで四人目の恵那とも深い仲になれたわけだし、あまり文句は言えないかな……」

　護堂へ批判的な視線を向けるエリカに対し、恵那は苦笑気味に笑っている。

　しかし、どちらも草薙護堂に対する誤解を生む言動だった。案あんの定じよう、ルスカがこちらを気だるげに見つめて、つぶやいている。

「必ず……四人目……へえ、やっぱり……」

「あ、いえ。何でか俺のまわりには女子が多いですけど、決してウルディンみたいな問題行動を繰りかえしているわけじゃなくてですね」

「んー……あんたさ。あの人、ウルディンに似てる」

　ルスカに衝撃的なことを言われて、護堂は「!?」と凍りついた。

「たぶん、大本は似たような性格……。豪快で、勢いまかせに突っ走る方。でも、意外と細かく気配りもできる……。人を見抜くのも、使うのも上う手まい……」

　うつろにつぶやくルスカの両目が玻は璃り色いろに変わっている。

　護堂は驚いた。これはときどき祐ゆ理り――神しん祖その血が色濃い媛ひめ巫み女こも見せる変化。つまり、ルスカも神祖たちの遠い末まつ裔えいなのか!?

　エリカと恵那も目配せしてくる。彼女たちも昨日の戦いで気づいていたのだろう。

　だから、『ルスカは底が知れない』などと言ったのだ。

「受け入れる女の数がちがうのは……育った世界がちがうからか。ん？」

　霊視のお告げらしきことをつぶやいていたルスカ。

　しかし、急に首をかしげて、護堂の顔をまじまじと見つめ直した。

「世界がちがう男……ここにいるはずがない神殺し……あんた、何者？」

「まあ――だいぶ遠くから来た者です」

　ルスカの『いるはずがない』という言葉に、護堂は深くうなずいた。

　やはり、自分はこの時代に長くとどまるべきではないのだろう。きっとサルバトーレ・ドニやアイーシャ夫人も同じではないのか。

　ひとつ彼女にいろいろ相談してみようか——そう思ったときだった。

「ここにいたのですか、ルスカ」

　またひとりやってきた。今度はクロティルドだった。

「ウルディンさまの御姿が見当たらないのですが……ご存じではありませんか？」

「いいやー。あたしは何も知らない。あの人のこと、今け朝さから誰も見てないんだ」

「そうなんですか？　あいつ、朝早くに俺のところへ来ましたよ」

　数時間前のことを思い出して、護堂は言った。

　古代ガリアの朝は早く、日の出と共に起き出す人も珍しくない。エリカなどはあいかわらず優ゆう雅がに起床しているが、もともと早起きの護堂は現代でいう五時前にはめざめるようになっていた。しかし、ここで早起きしてもやることがない。

　そこにウルディンが来たのである。あの男はしばらく雑談して去っていった。

　クロティルドが勢いこんで訊たずねてきた。

「どちらへ行くとか、何か言っておりましたか⁉」

「いえ、そういうことは何も……。やたらとアイーシャさん——俺たちがいた街の聖女について、うるさく訊きいてきたくらいです」

　アイーシャ夫人の情報を明かすつもりは一切ない。

　護堂はサルバトーレ・ドニに対するがごとく、ひたすら邪険な受け答えをして、ウルディンを追い払ったのだが。今の話を聞いて、ふと恵那がつぶやいた。

「もしかしてさ。ひとりでラウリカの街へ行って、アイーシャさんをさらってくるつもりじゃないのかな？　ウルディンさん、女の人に目がないんでしょう？」

それは推測というより、冗談めかした軽口だった。

しかし、クロティルドの反応は激しかった。『びくっ！』と肩をふるわせ、まじまじと現代日本の媛巫女を見つめたのである。

「我が夫であるウルディンさまに限って、そのようなことは……ことは――」

「あ、ゴメン。今のは適当に言っただけ。根拠とか何にもないから、気にしないで」

珍しいことに、天てん衣い無む縫ほうの恵那があわてていた。

実力では圧倒的に上だというクロティルドを、『参ったなあ、イジメるつもりはなかったのになー』と困惑したまなざしで見つめている。

一方、思し慮りよ深ぶかげに考えこみながら、エリカが腕組みした。

「でも言われてみると、それくらいのことはしそうな人よね。ちょうど懸けん案あんだった護堂を手中に収めた直後でもあるし」

この発言で、クロティルドがハッと顔を上げる。

険しい顔つきで虚空をにらみ、わなわなと全身を震わせる。その姿をルスカが気だるげに眺めていたのだが、やがて面倒くさげにため息をついた。

「そこまで気にするなら、ちょっと観みてみようか？」

それは、底知れぬ実力を持つ魔女としての言葉だった。

3

夫人の尊そん称しようを捧ささげられたアイーシャだが、高貴の生まれではない。

当時、大英帝国の植民地であったインド北部に生まれ落ち、どこ

にでもいる低カースト層の娘として育った。人生の転機は七歳のときだ。

　ダイヤモンド鉱山を営むイギリス人の屋敷に、メイドとして召しかかえられたのだ。

　少女時代のアイーシャはこの家の主人と幼い令嬢に気に入られ、イギリス本国へ帰還する際には強く請こわれて、共に海を渡ることとなった。

　しかし、生まれが生まれである。

　英国本土でのメイド暮らしは、楽しいことばかりではない。

　さまざまにさげすまされ、苦労も多かった。が、アイーシャには持ち前の明るさと楽天的すぎる性格があった。さらにいえば、やせっぽちな体つきとは裏腹に、どんな国でも生き抜ける精神的逞たくましさの持ち主でもあった。

　苦労を苦労と思わぬまま、アイーシャが英国の地で一七歳となった頃。

　彼女の仕つかえる家で凶事が続いた。まず主人が急きゅう逝せいし、その財産を受け継いだ令嬢までが病没してしまったのだ。

　だが、令嬢はアイーシャにある配慮をしてくれた。

　多額の金銭と証券を『長年仕えてくれた親友』に遺産として贈与したのである。

　しかし、メイドの職を失った。親しい人たちもいなくなった。

　これからの人生、いかに生きたものか？

　よくも悪くも深く悩まないのがアイーシャの美点である。が、さすがにこのときは旅でもしながら落ち着いて考えようと、懐ふところのあたたかさにまかせてギリシア旅行に出かけてみた。当時はちょうど、シュリーマン夫妻によるトロヤの発見が大きく騒がれていた頃だ。

　アイーシャは本来、教養などとは無縁のメイド少女。

　しかし、今は亡き主人の厚意で書斎の本を読ませてもらったり、令嬢の勉強を手伝ったりで、それなり以上の知識を身につけていたのである。

　歴史や地理学は特にアイーシャの好むところだった。

　物もの見み遊ゆ山さんで訪れたギリシアの地。ここで彼女は『まつろわぬ神』ペルセポネと遭そう遇ぐうし、はじめての神殺しを心ならずも果たしてしまう――。

　かつて名もなき少女であった頃から、一〇〇年以上の歳月が流れている。

　今、アイーシャがいるのは古代ガリアであった。

　彼女はいまや、国と時代の狭間はざまを越えていく冒険家なのだ。しかし、冒険の旅には苦難がつきもの。アウグスタ・ラウリカ市は未み曽ぞ有うの危機に襲われようとしていた。

　その日の正午頃、市の上空に黒き翼竜が飛来したのである。

　しかも、三匹も。うち一匹には主のウルディンが騎乗していた。彼の本拠地へ草薙護堂が乗りこんでから、すでに数日が経たつ。

「草くさ薙なぎさんは上う手まくいかなかったのですね……」

　トラブルは平和的に避けたい。草薙護ご堂どうはそう言って、出かけていった。

　しかし、現代から来たカンピオーネの少年は失敗したのだ。もしかしたらウルディンと戦いになり、命を落としたのかもしれない。連れの少女たちもいっしょに。

　ぐすん。彼らの不幸な運命を想像したら、涙がこみあげてきた。

「せっかくお友達になれたところですのに……。草薙さん、あなたの無念はわたくしが晴らします……！」

　ぎゅっと拳こぶしを握りしめて、空を見あげる。

これが夜なら星に誓うところだ。が、今はラウリカ市の上空を翼竜二匹が気ままに飛びまわっている。しかも、けたたましく咆哮しながら。

クアァァァアアッ！　クアァァァアアッ！　クアァァァアアッ！

クゥゥアァァァアアッ！　クゥゥアァァァアアッ！

竜の飛ひ翔しようと吠ほえ声に圧倒されて、地上の市民はことごとく震えあがっていた。

アウグスタ・ラウリカ市の人口はおそらく二万前後。この時代の集落としてはかなりの規模だ。その誰もが神しん獣じゆうの到来におびえ、恐れ、おののいている。

一方、竜たちの主ウルディンはひとり悠々としている。

彼の騎竜だけは騒がない。左右の翼を大きく広げて、市上空をゆっくりと滑空する。その背に乗って、ウルディンはのんびりと街の様子を見わたしていた。

まるで、いずれ手にする宝物の価値を品定めするように。

アイーシャは胸が締めつけられる思いだった。

草薙護堂なき今、ウルディンを迎え撃てる戦士はもういない。彼らと同じカンピオーネとはいえ、アイーシャは戦いが不得手なのだ。

——せめて、要よう塞さいのローマ軍団に協力しなくては。

竜を相手に戦う彼らを鼓こ舞ぶし、傷を癒いやしてまわらねばならない。

決意すると、アイーシャは歩みを速めた。ちょうど市街を離れ、要塞方面へ向かっているところだったのだ。あと一キロほどで到着する。

たおやかな見た目に反して、アイーシャは運動神経がよく足も速い。

たたっと駆けはじめたら、いきなり行く手をふさがれた。空から

黒い翼竜が急降下してきたのである。しかも、その背には乗り手がいた。

「探していたぞ、聖女よ。見つからないときは、ここらの家を一軒一軒たたき壊してまわろうかと思ったほどだ」

　竜の鞍あん上じようから陽気に告げるのは、もちろんウルディンだった。

　アイーシャは竜の駆り手を『きっ』と鋭くにらみつけた。もっとも、生来のたおやかさのせいで、迫力はあまり出せないのだが。

「どのような理由があって、わたくしなどをお探しに？」

「なに。本格的に街を襲う前に、おまえをいただいておこうと思ってな」

「い、いただく？」

「うむ。おまえをどうしてもオレの女にしたい。いくさのゴタゴタで取り逃がしてしまってはあまりに勿もつ体たいない。だから、事前に罷まかり越した」

　ウルディンはいつもの快活さで、とんでもない通告をしてきた。

「いやだというなら無理強じいはしない。が、このまま連れていかせてもらう。なに、オレのところでしばらく暮らせば、必ず心変わりするはずだ」

「まあ……。たいした自信ですのね」

「大体いつもそうだからな。最初オレを忌いみきらっていた女は、そのうちたいていオレに惚ほれてしまうのだ。そんなそぶりを見せないよう、必死に意地を張りながら」

　にやっと笑うウルディンの言葉は、不思議と鼻につかない。

　気取りも気負いもなく、当たり前のことを言っているだけという雰囲気。この人物に無視できないカリスマ性があることをアイーシャは認めた。

　しかし、貞てい操そうの危機に追いこまれて、素直にしたがえる

わけがない。

「申し訳ありません。わたくし、どなたの後宮にも入るつもりはないのです」

「このオレでも駄目か？」

「はい。たしかに神殺しウルディンは希き代たいの英えい傑けつかもしれませんが……あなたとわたくしは格でいえば同等。したがう理由はございません！」

　アイーシャはできるかぎりの凜り々りしさで言い放った。

　そして、カンピオーネの肉体に宿る呪力を『やあっ！』と高める。このままでは力ずくで拉ら致ちされてしまう。戦闘向きの権けん能のうを持たないアイーシャだが、おとなしくいいなりになどなれない。精一杯、抵抗しなくては。

「その力、おまえもまさか……」

「神殺しはあなたと草薙さんだけではありません。これでもわたくし、最初に神を殺あやめてから百年の時を閲けみした者。女王と呼んでくださる方までいらっしゃいます」

　実は正面衝突でウルディンに勝てる自信、まったくない。

　が、それでもアイーシャはゆたかな胸を張って、めいっぱい強がる。こういうときハッタリに勝る武器はない。百年の魔王生活で学んだ知恵である。

　対してウルディンは、竜の鞍あん上じようから眼光鋭くアイーシャを見下ろすようになった。

「まちがいなく只者ではないと思ってはいたが——神殺しを名乗るか」

　翼竜は力強く羽ばたきをはじめ、ふたたび舞いあがる。空へもどったフン族の魔王は、地上の同族へ高らかに宣告した。

「それらしき気配はたしかに感じる。しかし、それだけではまだ信じることはできんぞ。試ためさせてもらおうか！」

　不敵な笑みをこぼしながら、ウルディンは手をのばした。

　鞍くらにかかった矢筒から矢を引き抜き、地上へ投げた。弓で放ったようにヒュンと飛んで、矢は大地に突き刺さる。アイーシャの眼前だった。

　直後、この矢がいきなり燃えはじめた。

　生まれた焔ほのおはすぐに爆炎となり、アイーシャの周囲は大炎上してしまう。

　これは火神の権能——。先日、草薙護堂が呼んだ太陽神の光こう槍そうを迎え撃った力だろう。猛火に取りまかれながら、アイーシャは冷静に察した。

　細身だが十分以上に女らしい彼女の肢し体たいは火傷やけどどころか、汗ひとつかいていない。

　それどころか、白い外がい套とうは煤すすで汚れてさえいない。

「ほう……」

　まったくの無傷であるアイーシャを空中から眺めて、ウルディンは弓を取った。

　そして矢を抜き、弓につがえ、弦つるを引き、狙ねらい撃つ——この動作を目にもとまらぬ速さで三回も続け、三連射を放ってみせた。

　三本の矢はことごとく、焔に呑のまれたアイーシャの心臓めがけて降ってきた。

　しかし、全てアイーシャの体を素通りして、背後の地面に突き刺さる。

「妙な芸を持っているな。では、これならどうだ？」

　つぶやきながら、ウルディンがパチンと指を鳴らす。

　あれだけ燃えさかっていた焔は一瞬にして消え失せ、代わりに飛んできたものがある。体長七メートルの翼竜二匹——前まえ肢あしが翼に変化したデイノニクスである。

　市の上空を飛びまわり、市民を恐怖させていた連中だ。

　いつのまにか主人のそばに集結していて、急降下してきたのだ！

　翼竜たちは後ろ肢の『恐ろしい爪デイノニクス』をアイーシャめがけて振りおろし、ちっぽけな体を無惨に引き裂こうとした。

　だというのに、彼らの爪もアイーシャの体を素通りしてしまう。

　これを見て、ウルディンは『ぴゅう』と口笛を吹いた。二匹の翼竜はふたたび空へ舞いあがっていく。どちらも怪け訝げんそうに地上のアイーシャを見ながら。

「カラクリはわからんがたいしたものだ。これでは空気と戦うようなものだぞ」

　感心した体ていでウルディンが賞賛する。

　余裕の表情に見えるよう祈りながら、アイーシャはふふんと笑った。彼女をこの時代に『つなぎとめようとする力』が事象を修正した結果である。

　しかし現状、これ以上は何もできない。

　アイーシャには攻撃に使える権能が何もないのだ。今は。

　魅み了りようの権能はきわめて役立つ力だが、神々やカンピオーネにはまず通じない。相手がよほど隙すきだらけの状態でなければ、試すまでもなかった。

　これから、どうやって切り抜けよう？



　必死に考えていたとき、援護射撃が飛んできた。一キロ向こうにそびえる要塞の城壁から巨大ボウガン——バリスタが発射されたのである。

　ウルディンや翼竜めがけて極太の矢が飛んでいく。

　しかし、神獣相手に通じるはずもない。翼竜の硬い表皮は射撃を全てはじく。が、兵たちはめげずにバリスタをいくつも準備し、続けざまに撃っていく。

　翼竜三匹はわずらわしくなってきたのか、機き敏びんに散開して矢を避けはじめた。

　また、城門が開き、要塞から四〇名弱の一個小隊が出動した。

　こちらへまっすぐ向かってくる。アイーシャを救助するつもりなのだろう。

「オレの恋路を邪魔する連中が出てきたか。まあいい。空気となったおまえをつかみ取るには、もうすこし力が必要そうだしな」

　竜にまたがるフン族の魔王は軽快に言い放った。

「ひとまず今は去ろう。夜になったらもどってくるぞ。そのときは必ず、おまえの身み柄がらをあずからせてもらう！」

　ウルディンは翼竜二匹をしたがえて、西の空へ飛び去っていく。

　この場はどうにか切り抜けられたようだ。アイーシャはホッとして全身の力を抜き、へたりこんでしまった。

　やがて、小隊の兵士たちがすぐ近くまでやってきた。

「聖女！　お怪我はありませんか⁉」

　小隊長が駆けよってくる。市民とちがい、恐怖に打ち震えてはいない。

　むしろ、いきり立った競走馬のようにさえ見える。アイーシャは気づいた。魅了の権能を使って何度か励ますうちに、兵たちの間に彼女への絶対的な忠誠心が育っていたのだ。竜への恐怖すら忘れて

しまうほどに。

「あの男、まさか聖女のお命まで狙うとは……なんというやつでしょう！」

「あ、いえ。ウルディンさんは命ではなく、わたくしを捕らえて妻にしたいようなことを言っておりました。だから決して危険だったわけでは——」

　兵たちの興奮をすこしなだめるため、事実を語ったのだが。

　意外にも、この言葉が逆に彼らを燃えあがらせた。

「聖女を妻にだと？」「あの蛮族め、そんな大それた望みを！」「次に来たときは返り討ちにせねば……」「殺せ！　ウルディンを殺してしまえ！」

　みなが口々に叫ぶのを聞いて、アイーシャは「あら？」と首をかしげた。

　予想外もいいところである。しかも、ある兵士が彼女のために馬を一頭連れてきて、その上に乗せてくれた。

　アイーシャを要塞に運びながら、兵のひとりが叫ぶ。

「必ず聖女を守り抜くぞ！　おまえたち、命を懸かけろ！」

　おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！

　呼びかけに応えたのは、地鳴りのような怒号だった。一方、彼らの心づくしで要塞に近づいていくアイーシャは、馬に揺られながらつぶやいた。

「もしかして、またやっちゃったかしら……」

4

　アウグスタ・ラウリカ市もそうだが、ウルディンの砦とりでもラ

イン川のほとりにある。

　この川を越えてくる異民族にそなえるためだ。外敵が襲来すれば、すぐさま兵を送りこみ、速すみやかに撃退するのがローマ軍団のやり方だという。

　ラインの流れは水の恵みをあたえるだけでなく、国境であり防衛線でもあるのだ。

　そして今、この大河の水面には神殺しふたりが対決する場面が映っていた。

　古代の神殺しウルディンとアイーシャ夫人というカードである。

　ウルディンの『ひとりめの妻』ルスカが遠方——アウグスタ・ラウリカ市で起きている出来事を呪じゅ術じゅつで映してくれたのだ。

「あたしの知ってる街でよかった。そうでないと観えないから」

　超然とした口調でルスカがつぶやいた。

　岸辺近くの水面という即席スクリーンでは、ウルディンが焔ほのおや神獣を駆使して大暴れしていた。が、それらは全てアイーシャ夫人の体を素通りしてしまう。

「何なんだろうね、あれ……？」

「やっぱり、アイーシャ夫人の権けん能のうなのかしら？」

　恵え那なとエリカが不ふ審しんがる。カンピオーネである護ご堂どうにも見当がつかない。しかし、ルスカは玻は璃り色いろの瞳ひとみで夫人を見つめ、おもむろにつぶやいた。

「いるはずのない神殺しがもうひとり……。起こるはずの事じ象しようをなかったことにし、起こった事象さえも修正する力に守られる……」

「えっ？」

　護堂は耳を疑った。修正という言葉が出たせいだ。

「あれはあの女をここに――この世界っていうのかな？　本来いるはずのない世界につなぎとめようとする力。そんな感じがする」

　霊視の託たく宣せんらしい。ルスカは茫ぼう洋ようとした口調で言った。

「中途半端な災さい厄やくや力はあの女に通じない。なかったことにされる。でも、ウルディンは勘かんがいいから……やっぱり気づいた」

　水面に映るカンピオーネふたりの戦い。ウルディンが『夜になったらもどるぞ！』と言って、竜たちと共に去ることで一段落した。

「あの妙な力、ウルディンたち神殺しの全力までは全てなかったことにできない……。その手応えを感じとって、引きさがったんだと思う」

　ルスカの話を聞いて、護堂は考えた。

　おそらく、アイーシャ夫人は前に語っていた『修正力』を彼女自身もある程度コントロールできるのではないか？　だからこそ、あのあやしげな自説を恃たのんで勝手気ままな時間旅行を楽しんでいる――。

　それにしても、この実況中継は便利な魔術だった。

　似たようなことをリリアナもできるが、あちらは映像を見せるだけ。対して、今回の中継は音声付きだった。

　ルスカの力量はそれだけ突出しているのだ。が、便利さもときには痛し痒かゆし。

　護堂はちらりとクロティルドを見た。

　金髪の美女は思い詰めた表情で、もう何も映っていないラインの水面を見つめていた。今の対決がはじまる前に、数々の問題発言をばっちり聞いたからだ。

『おまえをどうしてもオレの女にしたい』

『オレのところでしばらく暮らせば、必ず心変わりするはずだ』

　等々、ウルディンがアイーシャ夫人に言い放った言葉の数々を。

　クロティルドは肩をふるわせながら、つぶやく。

「私たちという妻がありながら——それ以外に一〇人以上もの女性をかこう身でありながら、またべつの女にちょっかいを出して……！」

　大声ではないが、悲痛な訴えだった。怒りというより、万ばん感かんの想いが込められている。おかげで空気が重い。慰なぐさめの言葉も不用意にかけられない。

　打ちひしがれるクロティルドを眺めて、護堂はしんみりとした。

（パオロさんと同じくらいの達人でも、こういうことはやっぱり堪こたえるんだなあ）

（当たり前でしょう。人間、いつの時代も最大のストレスになるのは恋愛・金銭・健康のどれかよ。叔お父じさまだって、最近は抜け毛を気にしているんだから）

（そ、そうなのか？）

（意外とスタイルとか気にする人なのよね……）

（殺人事件の原因も、痴ち情じようのもつれかお金のどっちかだっていうもんねえ……）

　エリカが肩をすくめて言えば、恵那は珍しく慨がい嘆たん口調だ。

　三人とも小声なのは、もちろんクロティルドに遠慮してのことである。

（ねえ王様、ひとついいかな）

　黒髪の媛ひめ巫み女こは悩ましげに護堂を見つめて、不意に言った。

　いつも能天気な彼女だが、ときどき大和やまと撫子なでしこらしいしおらしさを見せてくれる。そういうときと同じ表情に護堂はどきっとした。

（あのね。恵那は王様がどこに行っても、何年間か出かけたままでも、きちんと留守を守って待ちつづける覚悟はあるんだけど……）

（あ、ああ）

（お帰りなさいって出迎えたあとで王様のことを刺したくないから、外でのやんちゃは本当に程ほどほどで抑おさえておいてね？　そういうの、きっと後味悪いしさ……）

（…………）

（さっきルスカさんが『王様はウルディンさんに似てる』って言うのを聞いて、すごく納得しちゃった。あの人、誰かに似てるなーって、ずっと気になってたんだ）

（恵那さんもそうだったの？　奇遇ね。実はわたしもよ）

　仲間の発言にエリカもすぐさまうなずいた。

（護堂がこの時代に生まれていたら、ああいう人ひと柄がらになったんじゃないかしら？　ほら、自称平和主義も言ってしまえば現代社会ですり込まれた信条でしょう？）

（だよねー。まあ、でも、今回は恵那たちがいっしょでよかったのかも）

（たしかにそうだわ。わたしたちがいるからこそ、変な女が護堂のまわりをうろつく余地がなくなるわけですし）

（…………）

　うかつな反論は自滅を招くと悟り、護堂はあえて沈黙した。実際、草くさ薙なぎ護堂という『ろくでなし』は、彼女たちの寛容と好意と諦てい念ねんによって支えられているのである。

　また、ふと見れば、ルスカがクロティルドを慰なぐさめていた。

「いっそ、腹いせに本気で刺してやったら？　どうせ死なないし」

「や、やはり並の刃物ではウルディンさまに通じないと？」

「うん。あたしもずっと前に怒って、あの人の横っ腹を槍で刺し

た。だいぶ痛がってたけど、死なないどころか死にかけもしないから、あれはあれで腹が立った」

「結局、その程度では薬にならなかったのですね……」

　なにやら過激な相談に変わりつつある、美女ふたりの会話。

　これを古代人、しかもガリアという辺地にいる人間の過激さと見るべきか。ルスカとクロティルドが持って生まれた苛か烈れつさと見るべきか。

（護堂には今の話を決して忘れず、教訓にして欲しいわよね。あまり好き放題やっていると、わたしたちもああなるかもしれないって）

（…………）

　エリカにつぶやかれて胃袋の底をひやっとさせながら、護堂は古代の美女ふたりが語る物騒な内容を聞いていた。

「神殺しを滅ぼしうるのは神々か、同族の神殺しのみと前にうかがいましたが……」

「うん、そう。どちらもめったに出くわすものじゃないけど。でも、あの人が窮きゆう地ちに追い込まれるときは、いつもそういう戦いだった」

「だとしたら、今ここに神殺しさえいれば……」

「そうだね。ここに神殺しさえいれば……」

　クロティルドとルスカが意味ありげにこちらを見つめている。

　……彼女たちの意図を察して、護堂はため息をついた。このままいくとアウグスタ・ラウリカ市はあの男に蹂じゆう躙りんされ、アイーシャ夫人が危険にさらされる。

　事がここまで進んだ以上、やはりウルディンとの対決は避けがたいのだ。

　そうであるなら——護堂は交渉役に目配せした。

「じゃあ、条件の確認といきましょうか。草薙護堂の雇やとい賃ちん、決して安くはないわよ？」

　心得たもので、エリカはすぐに口を開いた。

　砦の広場で鍬くわを振るい、クロティルドは小さな麻袋を掘り出した。

　なかには小さな刃物——デリラの剃かみ刀そりと、一房の黒髪が入っていた。昨日切られた草薙護堂の頭髪である。

　クロティルドは髪の房を地面に置いて、人差し指を突きつける。

　指の先端に輝くのは、アルファベットに似た記号だった。この文字がめらめらと燃える火に変化し、髪の毛を呑み込む。発火のルーン文字らしい。

「これで剃刀の呪じゆ縛ばくは解け、草薙さまの権能はもとどおりとなります」

　すぐそばで待っていた護堂に、クロティルドが報告してくれた。

　髪を切った相手の権能を封じ込む。それがデリラの剃刀という神具。効果を破るには、切られた髪の毛を消滅させねばならないらしい。

　ルーンの火は小さいが強力らしく、ほんの数秒で髪の毛を灼やき尽くしてくれた。

　直後、護堂の体から『ぱりん』という音がする。得も言われぬ解放感が全身を駆け抜け、権能の封印が解けたことを悟った。

「船をあげるから、街まで乗っていくといい。それがいちばん速い」

「助かるわ。ありがとう、ルスカ」

「でも、よかったら竜の方を貸してくれるとうれしいな。あれに乗って空を飛ぶの、すごく面白そうだよ。船よりもっと速そうだし」

荷物を取りにいっていた三人がもどってきた。

先頭に立つルスカにエリカが礼を言い、恵那が提案している。

「やめた方がいい。あれは急に暴れだすことがあるから。あたしたちもウルディンがそばにいないときは、ほとんど乗らない」

「そっか、残念。でも、機会があったら乗り方を教えてよ」

苦笑するルスカに断られながらもちゃっかり恵那が頼んだあとで、護堂たちは船着き場まで案内してもらった。

アルプス山脈を水源とするライン川。

現代の地名でいえばスイス領内を東西に流れたあと、南から北に流れてドイツ・フランス間の国境線を描き、オランダへといたる。

この流れを利用した水運事業は、すでに古代の頃からさかんだった。

川岸にロープでつないだ荷運び用の大型ボートに、まず恵那がひらりと飛び乗った。エリカも優美な足取りで続き、最後に護堂が乗りこむ。

尚、ルスカの別れの言葉は過激もいいところだった。

「じゃあ、あとはよろしく。必ず殺すつもりで戦って欲しい。手加減抜きで」

「そもそも手加減できるだけの余裕が俺にはありませんけど……そんなこと言っていいんですか？　それでウルディンのやつが死んだら――」

護堂はもちろん常識論を唱えたが、ルスカはかぶりを振って言う。

「でも、殺すつもりで戦わないと、たぶんあの人を追い詰められない。殺すつもりが駄目なら、殺してもいいくらいのつもりで戦って欲しい」

「…………」

　この無茶苦茶さはあんな男、しかも神殺しと長年連れそっているせいか。

　ウルディンに同情するつもりは微み塵じんもないが、我が身を省かえりみて、護堂はため息をついた。

「水の精たち。どうか、この方たちに格別の加護を」

　クロティルドが魔術を使った。指先にふたたびルーン文字が輝く。

「あなた方の旅路はこれで安あん泰たいとなります。水の流れにまかせるだけで、船は目的の土地にたどり着くでしょう」

　途中で転てん覆ぷくしないよう、ありがたい加護を授けてくれたらしい。しかも、愛する夫と戦う予定の男に。護堂は複雑な思いで頭を下げた。

　かくして、ボートは船出していく。現代人三名と複雑な愛憎を乗せて。

「いろんな意味で責任重大だなあ……」

　軽快に進む船上で、しんみりとつぶやく護堂だった。

5

　ボートは大人が一〇人乗りこんでも、まだ余裕がありそうなサイズだった。

　はじめ、小舟に慣れた恵え那なが櫂かいを持っていたのだが。

　すぐに必要ないことがわかった。ボートは誰かが面倒を見なくても勝手にバランスを保ち、前方に岩などがあれば勝手に避けてくれるのである。

　まちがいなく、クロティルドがかけた『加護』のおかげだった。

「すごく楽ちんだし、そのうえ速くていいねー」

「街道を馬で急ぐより、遥はるかに短時間で行けるわよ。それで護ご堂どう、あなたには例の問題があるわけだけど、覚悟は定まった？」

「ウルディンとどこまで本気で戦うか、だろう？」

　恵那、エリカと共に川面を吹く風にさらされながら、護堂は考えた。

　フン族の神殺しウルディン。いずれ歴史に登場するという蛮ばん族ぞく王おうアッティラと何らかの関係を持つと目される人物。彼を殺せば、あるいは大おお怪け我がを負わせるだけでも、未来に大きな影響が出るかもしれない。

　また現代人の目から見ても、それなりに愛すべき一面があるように思える。

　暴ぼう虐ぎやくというより、傍はた迷めい惑わくな男というべきなのだろう。

　しかし、ウルディンが日常茶飯事とする『襲撃と略奪』を見逃し、好き勝手にさせれば、アウグスタ・ラウリカに住む何万もの人々が悲惨な運命に巻きこまれてしまう。

　古代世界では〝よくある悲劇〟なのかもしれないが――。

　やはり、見て見ぬふりはできそうにない。だから、護堂はきっぱりと言った。

「大丈夫だ。まずいことになったら……歴史の修正力がなんとかしてくれる！」

「さすが王様。そうこなくっちゃ！」

「なんだか落ち着くべきところに落ち着いた、という感じよね……」

　恵那は爽そう快かいそうに笑って後押しし、エリカは皮肉っぽく肩をすくめた。

「まあ、アイーシャ夫人の説にそれなりの根拠もありそうだとわかったし、得体の知れない力に期待する線でやってみましょうか」

「ああ。ルスカさんのおかげだな」

　さすがにただの希望的観測で、ここまでの賭かけをする気にはなれない。

　この時代でも傑出した霊視力者と出会えた幸運に、護堂は感謝した。そして、ここにいない仲間たち——祐ゆ理りとリリアナのことを思い出した。

　早く現代に帰って、彼女たちとも再会できるといいのだが……。

　一方、連れの女子ふたりは数時間後に迫る荒事のことを話題にしていた。

「じゃあ、ここからはウルディンさんの対策を相談しないとね」

「戦闘、というより戦争向きの権能をいくつも所有するカンピオーネ……傾向としてはヴォバン侯こう爵しやくに似ているけど、あの方よりもだいぶお若いわ」

　恵那が提案すると、すかさずエリカも乗ってきた。

「年齢から来る老ろう獪かいさでは候の方が上という気もするけど、逆に肉体的な逞たくましさではウルディンの方がかなり勝っているでしょうね」

「おまけに、インドの神様やメソポタミアの竜とかを倒している人だし」

「軍神テュールも忘れちゃ駄目よ。あの権能は彼の切り札らしいじゃない」

「……？　おまえら、いつそんなこと知ったんだ？」

　ふたりの仲間が訳知り顔でウルディンの権能を語っている。

　その会話に違和感を覚えて訊たずねたら、回答はひどくあっさりとしていた。

「さっき荷物を取りに行ったとき、ルスカさんから教わったの」

「あなたが戦う条件として、草薙護堂の勝利への全面協力を要求し

たでしょう？　その一環として、彼がよく使う三つの権能のことを教わったのよ」

「……相当、頭にきてるんだなあ」

　今回は身につまされることが本当に多い。

　全てウルディンの自じ業ごう自じ得とくなので同情はしないが、背筋が寒くなってきた。

「それで護堂。念のため、ルスカに『教授』の術でいろいろ教わってあるわ」

「ウルディンさんが倒した神様たちの神話……この時代で語られているやつを。現代の物語とちがっていたら、まずいしさ」

　このとき、護堂はイス代わりの樽たるにすわっていたのだが。

　エリカがやってきて、同じ樽に腰をおろす。ぴたりと密着される形になった。そのうえ金髪美少女はわがままますぎる肢し体たいをぎゅっと押しつけてくる。

　また、恵那もすぐそばに来る。くっつきこそしないが、手をのばせば届く距離にいる。

「そういうわけだから、どちらにまかせるか——早く決めて頂ちょう戴だい」

「う、うん。恵那かエリカさんのどちらかが王様に知識を授けないとダメだもんね。だから、どっちがいい……？」

　エリカがすこし怒ったような顔で、挑発的に言った。対して、恵那は恥じらいながら問いかけてくる。選択を迫られて、護堂は「？」と目を丸くした。

　ふたりの言った内容はもちろん理解できたが、思考停止してしまったのだ。

　すると、エリカがたたみかけてくる。

「もちろん、恵那さんも十分にその役をこなせるでしょうし、わたしはあなたの選択を尊重するつもりよ？　ただ、あなたには配慮を

して欲しいと思うの」

「配——慮？」

「ええ。なんといっても、わたしは草薙護堂の正妻というべき立場なのだし。あなたといちばん苦楽を共にしてきた女よ。そういうわたしをすこしは尊重して欲しいわ」

　エリカはあいかわらず怒り顔のままだった。

　しかし、護堂は気づいた。彼女が怒っているのは自分に対してだ。己おのれの魅力ではなく、過去の功績に頼って選択を迫る自分自身が腹立たしいのだろう。

　いつも自信たっぷりのエリカらしくない。それだけ不安なのだ。

　清せい秋しゅう院いん恵那という強力なライバル相手に、明確な優位を確保していないことがわかっているから。エリカは今、護堂の右側にすわって体を密着させている。しかし、それは誘惑というより、不安をごまかすため取りすがっているようにも思えた。

　実際、さっきから不安そうに護堂の右手をぎゅっと握りしめている。

　うわべは強気なくせに、いつものエリカとはちがう弱気な面を見せられて、護堂はくらくらしてきた。ここまでされて突っぱねられる男がいたら、それは意志が強いというより感受性にとぼしいというべきだろう。

「え、恵那はさ。エリカさんほど長く王様といっしょにいるわけじゃないけど……」

　急に左手が引かれた。思い詰めた顔の恵那に手を取られたのだ。

　明朗快活なはずの媛ひめ巫み女こは、護堂の左手を不安そうに握りしめている。

「やっぱり、こういうときは恵那を選んで欲しいって思うな。いつもいっしょにいられない分、おそばにいるときは添そい遂とげさせて欲しいし……」

　短い間とはいえ、護堂の注意がエリカばかりに向いていたせい

か。

　恵那はめったに見せない憂うれい顔だった。そして、自信なさげだ。やはりエリカ・ブランデッリ相手の一騎打ち、いつもの能天気さも減じてしまうのだろう。

「ご、ごめんねっ。こんなとき、おなかに王様の赤ちゃんでもいれば、もっと落ち着いてお願いできるんだろうけど。そういうのはおあずけって決めてるもんねっ」

　さらに狼ろう狽ばいしたのか、恵那がとんでもないことを言いだす。

　しかし、そのあわてぶりさえも可愛かわいく思えてくるし、いつかふたりきりの夜に交わしたやりとりのことも思い出してしまう。恵那はあのときもさんざん、草薙護堂の欲求を刺激してくれたのだ。

　エリカと恵那が左右から選択を迫る、この状況——。

　護堂の頭から冷静さが失われつつあった。

　それに何より、ガリアの地に来てから一週間以上。エリカと恵那は『抜け駆け禁止』協定のもと、ふたりいっしょに護堂へのアピールを夜ごと繰りかえして——。

　寝つけない夜も多かった。いいかげん我慢の限界でもあった。

「ふ……ふふふふふ……お、おまえたちときたら、ここに来てからずっと言いたい放題、やりたい放題で俺のことを挑発してくれて……」

「護堂？」「王様、どうしたの？」

　ふたりがいぶかしむのも無視して、護堂はくつくつと笑う。

　言うなれば、徹夜明けの躁そう状態によく似た心境だった。もうこれ以上は忍耐できないと己の限界を悟り、開き直り、ついに爆発させたのである。

「俺は前から、みんなに順位をつけるような真ま似ねはしないって言ってるだろ！」

「きゃっ……！」「ああっ!?」

　まずエリカの手を強く握りかえす。それから恵那の体をぐっと引きよせ、自分の膝ひざの上にすわらせてしまう。女子たちは大いに驚いていた。



「俺が言いたいことはかんたんだ。これからウルディンと戦いになる。いつもみたいに俺のことを助けてくれ。頼む」

　強く言い切って、すぐ目の前にいる少女ふたりを護堂は見つめた。

　噛みつくような目つきだったはずだ。いつもよりぎらぎらした目で彼女たちを見ていると自覚しながら、護堂はそのまま凝ぎよう視しを続けた。

　いつもとちがう護堂の勢いに、恵那は一瞬だけ逡しゆん巡じゆんを見せた。

　つい呑まれて、こういう場面ではひっこみ思案になる癖くせを出してしまったのだ。一方、エリカはとまどいながらも、それでも体の力を抜いてくれた。

　護堂の手をやさしく握りかえし、うなずくようにそっと目を伏せる。

　もう返事を聞く必要はない。護堂は顔を近づけ、エリカの唇くちびるを強引に奪った。

「——ん!?」

　強さと勢いに驚いて、エリカがうめいた。

　ほとんど唇くちびるをぶつけるようにして、護堂がキスしたからだ。しかし、かまわずに彼女の唇をふさぎつづける。そのまま数秒、数十秒——。

　息が続かなくなり、一瞬だけ唇を放す。

　その間に護堂もエリカもすばやく息継ぎし、もう一度キス。

　今度はおたがいに勢いがついていた。歯と歯が当たってしまう。

「ん——もう……。ご、強引すぎるわ、護堂……。もっとやさしくしてくれないと——」

「悪い。でも、おまえたちだって悪いんだぞ。俺のこと、さんざん

挑発して……」

「こんなふうに開き直るなら、もっと早くしてくれてもよかったのに……。でも、いいわ。甘んじて制裁を受け入れてあげる。続き、しましょう……？」

　今度は前より長く息継ぎしながら、睦むつ言ごとのようにささやき合う。

　エリカに誘われて、護堂はさっそくキスを再開した。エリカは舌で護堂の舌を探り、大胆に絡からめ、まさぐってくれた。

　それは細かな技巧ではなく、大胆な熱情に衝つき動かされた口づけだった。

　こういう行為にすっかり慣れた護堂だが、いちばんはじめの頃にエリカと交わしたがむしゃらな接せつ吻ぷんを思い出した。それは相手も同じだったらしく、ラテンの少女はたがいの唇がふたたび離れたところでとろんとした目になり、幸せそうに微笑ほほえんでくれた。

　しかし、逆に涙ぐんでいる少女もいる。もちろん恵那だった。

　一瞬の出遅れで先を越され、護堂の膝の上で所在なげにすわりこんでいる。

「清秋——」

「恵那さん……よかったら来て。わたしたちの王様はあなたもお望みよ」

　護堂よりも先にエリカがうながす。

　それはいかにもサロンをたばねる貴婦人らしい物言いだった。

　悪魔とも呼ばれる少女だが、仲間を気き遣づかうときの微笑みには母性めいた雰ふん囲い気きさえ漂う。ちょうど今もそうだった。

　この呼びかけを聞いて、すぐに恵那は護堂に顔を寄せてきた。

「んもう……王様とエリカさん、ふたりだけですごく楽しそうにして……。恵那だけのけ者にしたらヤだよ……」

「悪いな。どうしても抑おさえられなかったんだ」

「恵那だって王様のお相手、ちゃんとできるよ？　仲間はずれにしないで……」

　懇こん願がんしながら、恵那がちゅっとキスをしてきた。

　護堂の唇をついばむような、軽い接吻。しかし、それを何度も繰りかえし、ちゅっちゅっとキスの雨を降らせてくる。

　しばらくその軽さをたっぷり味わってから、護堂はおもむろに恵那の唇をふさいだ。

　強引なキスで恵那の唇を覆おおいかくしてしまい、動けなくしたのだ。すると、媛巫女はそれをおとなしく受け入れ、護堂の体にしなだれかかってくる。

　エリカに密着されながら、恵那にも体を押しつけられる形となった。

　ふたりの体で右側と前面からサンドされている。ほとんど互角の量感とやわらかさを肌で感じながら、護堂は恵那と口づけを交わした。

　涙ぐんでいた恵那はさびしさをまぎらわすように応じてくる。

　護堂が舌をのばすと舌で受け入れ、唇をついばむと護堂の唇もついばんでくれた。

　さらに、ぐいぐいと全身を押しつけ、のしかかってくる。それを見て、エリカも護堂に体重をあずけてきた。

「そろそろわたしも……。正妻をないがしろにするようでは、器量が知れるわよ？」

　恵那とキスする護堂のほほを撫なでて、自分の方を向かせる。

　護堂は苦笑して、エリカにも唇を寄せた。ひさしぶりに恵那以外とのキス。唇を離した瞬間に目が合い、金髪の少女とくすくす笑い合う。

　すると、今度は恵那が割り込んできた。エリカよりも先にちゅっ

とキスをする。

　たがいの割り込みにふたりの少女は対抗心を見せ合い、張り合うように視線をぶつけ合ってから、それから同時に苦笑した。休戦の意思を共有したらしい。

　ふたりは交互に護堂へ顔を寄せ、言葉を紡つむいでいく。

「ウルディンが最初に倒した神はメソポタミアの竜神、ウシュムガル……。母なる水と大地の女神ティアマトが随ずい獣じゅうの一体として生み出した獣けものよ……」

「ティアマトはね。この竜に恐ろしい力をあたえ、神様の仲間に加えたんだ……」

「ウシュムガルの名には『唯ゆい一いつ絶対の王』という意味があるわ……」

　エリカと恵那から、知識と愛情を口移しに捧ささげられていく。

　そのうち交互にではなく、ふたりと同時に口づけを交わす時間も長くなってきた。

「古代インドの聖典『リグ・ヴェーダ』にも登場するルドラ……この神様から、ウルディンさんは『弓』の権能を奪ったの……」

「ルドラはヒンドゥー教の破壊神シヴァと同体を成す神よ……」

「シヴァもルドラも嵐の神……風と雨と稲妻を呼ぶ神様なんだけど……シヴァになくてルドラにはある属性がとても大切なんだよ……」

　護堂はエリカとぴったり密着しながら、恵那も抱きかかえている。

　すっかり熱くなった彼女たちの体ともつれるように絡み合いながら、数え切れないほどの口づけを繰りかえしていた。

　ときにはエリカと恵那、ふたりいっしょに唇を合わせたりする。

　エリカに唇を吸われていたら、そこに恵那の唇もすべり込んできて、三人の唾だ液えきがひとつに溶け合うこともしばしばだった。

　口のなかでエリカと恵那、双方の舌がいっしょに動いているときさえある。

　護堂はそのたびにしびれるような興奮を味わった。

　——古代のライン川を下るボートの上で、三人は睦むつみ合う。その流れに合わせて、魔王ウルディンを切り裂くための刃がすこしずつ研とぎすまされていくのであった。

第７章　遙かいにしえの戦い

1

　夕焼けで紅くれないに染まるライン川の水面を、竜たちが心地よさそうに泳いでいる。

　ウルディンが連れてきた三匹である。彼自身はといえば、岸辺に生える大樹の幹へ背をあずけてすわりこんでいた。

　のんびり干し肉をかじったり、水筒代わりの革袋から水を飲んだりもする。

　しかし、この休憩はウルディンよりも竜たちのためだ。なんでも『竜』という神しん獣じゆうは水と大地の精らしい。彼の竜もその性さがに忠実で、たまに水を恋しがる。

　そして、水から精気と呪じゆ力りよくを吸いあげて、より活発になるのだ。

　尚なお、ウルディンは『竜使い』の権けん能のうを所有する神殺し。竜の群れを飼い慣らし、使役することができる。現在、本拠地には九匹もの竜がそろっている。

　ここにいるのは、そのうちの三匹だけだった。

　もっとも、これはこれで都合がいい。

　一度に使役する竜の数を増やすと、呪力の消しよう耗もうが激しい。ほかの権能が使えなくなる。

　神や神殺し相手の戦いでは、敵が何を仕掛けてくるか読めない。さまざまな権能を柔軟に使うためには、三匹は程ほどよい数であった。

「そろそろいい頃合いか……」

　沈む寸前の夕ゆう陽ひは鮮烈な紅あかさであった。まもなく夜。竜たちも十分に精をたくわえた。

　いよいよ聖女を——同じ神殺しである美女を奪い取るときだ。

　見た目こそ優美で、風にも折れそうな風ふ情ぜいだが、相当な『じゃじゃ馬』だ。そういう女がウルディンの好みなのだ。向こうが応じるなら五人目の妻にするのもいい。

（ちなみにルスカは第一の妻、クロティルドは第四の妻である。第二・第三の妻はそれぞれゲルマニアとサルマティアの地でウルディンの〝別宅〟を守っている）

　ウルディンは腰を上げ、水と戯たわむれる竜たちに声をかけた。

「そろそろいくぞ。これから嫁取りの時間だ！」

　護ご堂どうたちを乗せたボートはラインの流れに乗り、西へ進んでいた。

　ちょうど夕陽が沈んでいく方角だ。ついにアウグスタ・ラウリカ市の街並みと、その手前にある要よう塞さいという風景が見えてくる。

　川下りの旅は順調に、つつがなく終わろうとしていた。

　しかし、護堂・エリカ・恵え那なの三人は押し黙ったまま、前方を見つめるだけだった。

　三人ならんで腰をおろしているのに、誰も口を開かない。気まずいのだ。さっき三人で繰りひろげた行為の記憶が鮮烈すぎて、何も

言えないのだ。

　だが、ついにエリカがつぶやいた。

「今までだって、勢い余ってみんなで——というときはあったけど。そういうとき、護堂はいつもふつうじゃなかったわ」

「あ、ああ。たしかにそうだな……」

　護堂は力なくうなずいた。ウルスラグナ第六の化身『少年』を使っていたり、ランスロットの権能で〝狂きよう奔ほん〟していたりと、いろいろあったときだ。

「でも、今回の護堂は完かん璧ぺきに素すだった。わたしの方もつい前みたいに応こたえてしまって……。気づかないうちに慣れてしまったのかしら……」

「う、うん。恵那もつい受け入れたというか、乗っかっちゃった……」

　エリカがぐったりしながら言えば、恵那もとまどいを見せつつ言う。

「さっきのこと、祐理やリリアナさんに何て言えばいいかな……」

「もちろん秘密よ。わたしのこんな失態を知ったら、リリィがどんな顔をするか……考えたくもないわ。祐理にも……やっぱり言えないわね……」

「あ、でも。その……みんないっしょ、みたいなのもすこし楽しい、かな……」

　恵那がそっと小声でつぶやいた。恥ずかしそうに目を伏せながら。

　これにすぐさまエリカが気け色しきばむ。きっと媛ひめ巫み女こをにらむ。

「恵那さんっ。そういう淑しゆく女じよらしくない発言はあなたの欠点よ！」

「ご、ごめんっ。エリカさんはいやだったんだね……」

　エリカは答えず、代わりに護堂の背中をつねった。しかも、かなり思い切り。予想外の強さに「痛ッ！」とうめくと、紅き悪魔デイアヴォロ・ロッソは憤然と言った。

「甘んじて受け入れなさい。わたしたちを変なことに巻きこんだ報むくいよ。それから、早くお詫わびを頂ちよう戴だい。わたしの頬ほおにやさしくキスして、さっきのことを謝罪するの」

「し、謝罪はともかくキスはちょっとな……」

「もう！　あんなことまでしておいて、こういうときは全然ダメなんだから！」

　エリカが怒って、さらに護堂の背をつねる。

　しかし、痛みにのけぞったとき、金髪の少女はそっと体を寄せてきた。すこし背伸びして、護堂の耳に唇くちびるを近づけて、小声でささやく。

「あ、ああいうときに取り乱したくないから、せめてわたしにだけは事前に断りを入れて。さ、さっきだって本当に危なかったもの。恵那さんの手前、どうにか取りつくろったけど……」

　しかも、護堂の耳たぶを軽く噛かむおまけつきだった。

　ちくっという仕返しに、胸がどきどきと高鳴る。今の痛みがエリカの心を教えてくれたからだ。本当は怒りよりも照れの方が大きいのだと。

　悪魔と呼ばれる少女は顔を真っ赤にして、うつむいてしまった。

　その可愛かわいさに思わず護堂が抱きしめようとしたとき、逆に抱きつかれた。恵那が頬をふくらませて、飛び込んできたのだ。

「王様！　え、恵那だって、次はちゃんと——で、できると思うから。エリカさんばっかり見ていないで。そんなのいやだよ！」

　子供のような言いぐさだが、恵那はぐいぐいと護堂に体を押しつけている。

　己おのれの存在を必死にアピールしようとする、おそらく無意識の行動。しかし、やっているのはスタイル抜群の清せい秋しゆう院

いん恵那。子供ではない。

　当然、ゆたかな乳房の感触を押しつけられ、甘い髪の匂においを間近でかぐことになる。

　うっと護堂が言葉に詰まるのを見て、エリカが「仕方ないわね、恵那さんは」と貴婦人のやさしい微笑を浮かべる。

　その気配を察して恵那も苦笑し、抱きつく力をゆるめたとき——三人はハッとした。

　また妙な雰ふん囲い気きになりかかっていたような……。

「も、もうすぐ要塞だし、降りる準備しなくちゃダメだよねっ」

「あ、ああ。ウルディンはまだ来てないみたいだな」

「夜にもどると言っていたけど、ち、ちゃんと宣言を守ったようね！」

　三人はあわててパッと離れ、平静を装いつつ話題を切りかえた。

　夕陽が世界を紅く染めあげている。これから流れる血の紅さにも思えてくるから、なんとも不吉な光景だった。しかも、不意にぞくりという寒気を護堂は感じた。

　昼間はうららかな春のあたたかさだったのだが。

　夜に向けて冷えてきたのか、今はすっかり晩秋めいた肌寒さであった。

　要塞裏手の船着き場でボートを降りるなり、三人は裏門へ急いだ。

　護堂の顔を確認すると、門番はすぐに通してくれた。ウルディンの襲来は近いはず。早くアイーシャ夫人と話をしなくては——。

　焦あせりにせき立てられながら、護堂たちは要塞内に足を踏み入れる。実をいえば、兵団の士気は最悪だろうと予想していた。魔王ウルディンの襲来を間近にひかえ、兵たちは恐怖にあえいでいるの

では、と。敵前逃亡している者も多いかもしれない。

　しかし、ボートを降りてからは違和感もあった。

　要塞から妙にうるさい物音や奇声が絶えず聞こえてきたからだ。そして——

「すっごく盛りあがってるね……」

「やっぱり、魅み了りようの権能を使ったのかしら……」

　恵那とエリカはややあきれ顔だった。無理もない。要塞のなかでは、あちこちで兵士たちが大声を張りあげていたのだ。いわく、

『必ず聖女さまを守り抜くぞ！』『うおおおおおおっ！』『おまえたち、声が小さあい！』『うおおおおおおっ！』『怖いのはウルディンじゃない！　あいつにおびえる俺たちの心だあっ！』『うおおおおおおっ！』『聖女さまあ！　聖女さまあ！』『うおおおおおおおおおっ！』

　飛びかう怒号・叫び声・絶叫・雄叫おたけび。

　約六〇〇名の兵士たちがあらんかぎりの声で熱情をほとばしらせている。

　彼らの熱い視線を一身に浴びるのは、アイーシャ夫人だった。いつも司令がスピーチをしている壇だん上じようにのぼり、困り顔で手を振っている。

「昔、友達の三み浦うらに誘われたコンサートを思い出すな。女の子のアイドルの……」

　護堂はつぶやいた。かたや命を懸かけて戦う男たちの軍団。かたやアイドルコンサートに青春と人生を捧ささげる青少年＆中年男性たち。

　真ま逆ぎやくの性質を持つはずなのに、なぜか共通点を見いだせてしまう。

　ちなみに、司令官や将校たちも兵に交じって、めいっぱい叫んでいた。もはや群衆のなかに埋没している。みんな目を血走らせ、狂騒状態だった。

　エリカ・恵那を連れて、護堂は夫人がいる壇に近づいていった。

「アイーシャさん！　これはどういうことですか!?」

「す、すいませんっ！　魅了の権能を使いすぎたみたいです！　最近、軍団の方々がウルディンさんや竜におびえることが多かったので、ちょくちょくやっていたら——」

「加減していても、積もり積もれば狂信者の集団を生んでしまうのね……」

「やっぱり、便利すぎる力には落とし穴もあるんだねえ……」

　兵たちの怒号に負けないよう、護堂と夫人は声を張りあげていた。

　対してエリカと恵那は、しみじみとうなずき合っていた。

「みなさん、わたくしを守ろうとして囲んでくださっているから……こっそり逃げることもできません。ここを離れると言っても、絶対ダメだって引き留められるんです……」

　壇から降りてきて、アイーシャ夫人はしゅんとして言う。

「ところで……草薙さんはどうして生きてらっしゃるんですか？　わたくし、てっきりウルディンさんに殺されたものかと」

「勝手に殺さないでくださいよ。どうにか脱出してきました」

「ご、ごめんなさい。草薙さんがもしお亡くなりになっていたら、わたくしが遺い志しを継つがなくてはと気分が盛りあがったもので……」

　恥ずかしげに言ってから夫人は拳こぶしを握りしめ、『やる気』をアピールした。

「実はわたくしも戦うために、癒いやしの技を反転させている途中でした」

「反転……なんですか、それ？」

「わたくしの癒やしは命の息吹をもたらす春の女神、ペルセポネの

力。実は彼女、春だけでなく、冬と死を司る冥界の女王でもあるのです。わたくしの権能も一日ほどかければ、全てを凍いてつかせる『冬の力』に反転することができます」

「そんなことが——！」

「うっかり使いすぎると、冬の寒さがしばらく残るので注意が必要ですが」

「具体的にはどのくらい？」

「半年から一年……場合によってはもっと長く。日照とかもずいぶん悪くなりますね」

「アイーシャさんは絶対『うっかり』すると思うから、反転は中止してください」

　現代でさえ、冷夏や厳冬は作物の収穫量に大きな影響をあたえる。まして古代世界なら、飢き饉きんにすら発展するかもしれない。

　他人のことを言えないのは重々承知しているが、護堂は強く思った。

　この人はなぜ、こんなに傍はた迷めい惑わくな権能ばかりを持っているのだろうと……。

「ウルディンとは俺が戦います。そのためにもどってきたんです」

「まあ！　つまり、わたくしを守るために戦ってくださると⁉」

「形の上では、一応そうとも言えますね……」

　感激したらしいアイーシャ夫人のまなざしを受け流してから。

　護堂は媛巫女に目を向けた。いつのまにか遠くの空をじっと見つめていたのだ。すでに夕陽も完全に沈み、宵よいの口くちとなっていた。

「来たよ。やっぱり竜が三匹。ウルディンさんも乗ってる」

「わかった。じゃあ、ちょっと行ってきてもいいか？」

　恵那はにやっと笑い、エリカも雌めす獅じ子しめいた微笑で応こたえてくれる。

　やはり、頼もしい仲間たちだった。護堂はひとつ大きくうなずくと、城壁に走った。要塞の外側は垂直な壁だが、内側はなだらかな坂で階段まである。

　城壁の上まで登ると、竜の到来を待ちかまえた。

　はたして数分後、半日ぶりに聞くウルディィンの声が空から降ってきた。

「よう兄弟！　まさか、おまえがここにいるとは思わなかったぞ！」

　古代と現代の神殺し同士がいよいよ相打つ——。ついに幕開けだった。

2

「ちゃんと話せば長くなるから、簡潔に言うとな。俺はルスカさんとクロティルドさんに頼まれて、ここに来たんだ。あんたをぶちのめしてくれって」

「なに、あいつらが!?」

　護ご堂どうは城壁上部の通路に立っている。高さは五メートルほどだ。

　アウグスタ・ラウリカ市の街並みや、そこに隣接する森、街道などがよく見える。見あげれば古代ヨーロッパの星空。そして、三匹の翼竜——。

　ウルディィンは騎竜に高度を下げさせ、わざわざ護堂の頭上にやってきた。

「こんなに早くバレるとは、ルスカの仕し業わざか」

　事情を察したらしく、フン族の神殺しはしみじみとぼやく。

　きっと似たようなことが何十回とあったのだろう。しかし、ウルディンはすぐに陽気さを取りもどし、にやっと笑ってみせた。

「まあ、あとであいつらのご機き嫌げんうかがいだな。それで、兄弟はオレを殺せとでも言われてきたのか？　同じ神殺しのよしみで見逃して欲しいところだが」

「できればそうしたいけど、無理だ」

　護堂はきっぱりと言った。

「これ以上あんたを好きにさせたら、街の人たちも迷惑する。アイーシャさんが自分も戦うとか言いだすかもしれない。俺があんたを止める」

「アイーシャ……それが聖女の名か。女の神殺しには、はじめて逢った」

　ウルディンは楽しげだった。そして、すでに臨戦態勢だった。

　闘志を全身にみなぎらせ、油断のない目配りで護堂を見おろしている。

「二対一でもいいと言うほど酔すい狂きようではないが、女のためなら苦労はいとわんぞ？」

「こっちにも事情があるんだよ。今回、あの人には休んでいてもらう」

　アイーシャ夫人は、彼女のためなら命すら惜おしまない集団のなかにいる。

　彼らがウルディン相手に玉ぎよく砕さいし、全滅する姿など見たくない。麗うるわしき女カンピオーネを参戦させないため、護堂は一対一でウルディンと向き合った。

「よく言った、兄弟！　ならば勝負と洒落しやれこもう！」

　ウルディンは騎竜を急上昇させ、上空で仲間の二匹と合流した。

フン族の竜使いが乗る一匹を先頭に、右後方と左後方に翼竜が一匹ずつ続き、『△』の陣形をととのえる。まるでフォーメーションを組んで飛ぶ戦闘機の小隊だ。

ウルディンが繰り出す最初の攻撃は——一本の矢だった。

「ルドラの雷いかずちよ！　天より下る鉄てつ槌ついとなれ！」

騎竜の鞍くらから小振りの弓と矢を取り上げ、一瞬の早はや業わざで撃うつ。矢は『ひゅん！』と護堂の額ひたいめがけて飛んできた。

城壁上の通路にいた護堂はとっさに横へ跳び、かろうじて避けた。

その矢は背後の要よう塞さい内部へ飛び——稲いな妻ずまとなって、兵舎のひとつに突き刺さった。

ゴオオオオォォォォォォンンンンッ！

稲妻が落ちる轟ごう音おん。ウルディンの矢と稲妻は兵舎の壁を抉えぐった瞬間、電光と衝撃をほとばしらせて、平屋建ての建物をやすやすと崩壊させた。

「ルドラの火よ、この地を灼やき浄きよめろ！」

ついで、ウルディンは天に向けて矢を撃ち放つ。

騎馬民族の弓は総じて小振りだが、射程距離はずいぶんと長い。木だけでなく、動物の腱けんや骨なども素材に使うため、弓ゆ弦づるの力が強いのだ。

この弓に後押しされ、高く打ち上がった矢は——数百もの火の玉となった。

地上めがけて、続々と火の玉が降ってくる。花火が夜空に広がる光景に似ていた。これが全て着弾すれば、要塞はまちがいなく火の海だ。

凶悪な飛ひ焔えんに対抗するため、護堂も武器を抜いた。

ウルスラグナ最後の化身『戦士』は、黄金の刃を持つ剣の使い手

なのだ。

「ルドラは古代インドの神……。そして、弓をたずさえる嵐の神だった」

　神格と神力を切り裂く剣の言こと霊だま――。

　護堂が言霊を唱となえはじめると、黄金の光球が宙を乱舞しはじめる。

　銀河の燦きらめきにも似た輝きは広い要塞を天てん蓋がいのごとく覆おおってしまい、その上に落ちてきた数百もの火の玉はことごとく消滅していった。

「彼は破壊神シヴァのもうひとつの姿だとも言われる。シヴァの名前は『静かなる者』を意味する。対してルドラの意味は『咆ほう哮こうする者』。二柱の神は表裏一体を成す存在だと考えられていた！」

「ルドラの矢を打ち消す光と――言霊だと？」

　城壁上で言霊を吐き出す護堂と『剣』の天蓋を見おろしながら、ウルディンは空中で怪け訝げんそうにしていた。しかし、手は休めない。

　弓に矢をつがえ、三本目を撃つ。今度は暴風暴雨の矢だった。

　大きな雨粒まじりの突風が矢と共に『剣』の天蓋へ激突。そのまま消滅してしまう。

「ほう……オレの矢を防ぐというより、消してしまうのか」

　ウルディンは感心した体ていでつぶやいた。そして、にやりと笑う。

「ぶつぶつやっているのはルドラ破りの呪じゅ文もんと見た。だとしたら、それ以外の権能も破れるものか……試ためしてみたくなるな。竜どもよ、行け！」

　クゥゥアァァァアアッ！　クゥゥアァァァアアッ！

　竜の鞍あん上じようでウルディンが指示すると、背後にひかえて

いた二匹がいきなり動いた。

　城壁上部の通路にひとりで立つ護堂めがけて、二匹同時に急降下してきたのである。ふたつの後ろ肢あしに装備する『恐ろしい爪デイノニクス』を振りかざして。

　ウルディンの翼竜は、体長七メートルほど。

　巨体ではあるが、神獣のなかでは小さい方だ。その分スピードと敏びん捷しようさは群を抜いていた。それこそ矢のような速さで翼竜二匹は襲来する。もちろん『剣』では防げない。

　割って入ってくれたのは、やはりエリカと恵え那なだった。

　さっと城壁に駆けあがってきて、それぞれの武器を振るってくれたのである。

「七人の祭司、各々角笛を吹き鳴らし、甲かつ冑ちゆうのいくさ人はこれに先立ちて進軍す！　ヨシュアは告げたり。主はこの邑むらを汝なんじらに賜たまわれりと——！」

　聖せい絶ぜつの言霊を口にしながら、エリカは楕だ円えん型けいの楯で一匹目の爪を受け止めた。

　クオレ・ディ・レオーネ本来の形にもどした長剣を突き込み、翼竜の後ろ肢を一刺しするのも忘れない。深ふか傷ではないが、まずは一撃加えた。

　エリカがまとうのは、紅と黒ロツソネロのケープに聖なる殲せん滅めつ者しやの特権である。

「天叢雲あまのむらくもの御み劔つるぎよ。夷い狄てきを討うち払うため、我に力を！」

　一方、二匹目の飛来を止めたのは恵那だった。

　手には漆しつ黒こくの神刀・天叢雲劍を持ち、体には神刀の気を神がかりでみなぎらせ、護堂の前に駆けつけてくる。

　八はつ相そうの構えから神刀を振りおろそうとしたら——二匹目の方から恵那を避けた。

急降下の軌道を曲げて、天叢雲劍の切っ先を避けたのだ。

二匹目はそのまま上空のウルディンのもとへ帰っていった。さらに一匹目もエリカに反撃しようとはせず、やはり主のところへすんなりもどった。

「いつもとちがって、ガーッと来てくれないね。やりにくいな……」

「あの竜たちはたぶん、ウルディンの意思でコントロールされているのよ。彼の分身、飛び道具のひとつみたいなものだわ」

それぞれ護堂の右と左に陣取り、少女たちはささやき合った。

翼竜たちを操るのは、竜神ウシュムガルから簒さん奪だつした権能だった。古代シュメールの聖獣であり、現代では伝承の途と絶だえた神格である。エリカと恵那が教えてくれた。

しかし、この知識を『剣』に変えることはできない。

ウルディンの権能をひとつ封じるなら、やはり『ルドラの矢』であろうと思うからだ。

「軍団の人たちはどうだ？」

「夫人に指示してもらったわ。『自分を守って砦とりでから待避せよ』って。要は彼らに大切な人を守らせてあげればいいわけだし」

エリカの報告を聞いて、護堂はちらりと背後を見やった。

六〇〇人から成る兵団が整然とした動きで移動をはじめていた。各小隊ごとに城門をくぐり、順番に要塞の外へ出ていく。

「アイーシャさんに怪け我がを治してもらえるんだし、あっちはあっちにまかせようよ。王様はウルディンさんに集中しないと！」

恵那のアドバイスにうなずき、すぐに上空へ注意を向け直す。

翼竜三匹はまた『▵』に編隊を組みなおし、悠々と滑空していた。また、いつのまにか夜空に暗雲が増えていた。ウルディンの権能が呼んだのだろう。

弓の神ルドラは、雨風を呼ぶ嵐の神としての相そうも持つのだから――。

しかし、草くさ薙なぎ護堂にとってはべつの相こそが最も厄やっ介かいだ。

あげくにその相をウルディンが行使しはじめた。上空に広がる黒雲のなかに、太陽の燦きらめきがたしかに見える。もちろん本物ではない。

真の太陽に比べれば、小型もいいところの疑ぎ似じ太陽である。

だが、その熱と焔ほのおは尋常ではない量だった。

「ちょこちょこと牽けん制せいし合うのは、趣味ではなくてな」

疑似太陽が輝く夜空から、ウルディンの声が降ってくる。

「どうせ通じないのなら、景気よく矢を撃ち尽くすことにした。それに――おまえはこの攻め方をされる方がいやそうだぞ、兄弟？」

「状況に応じて、すぐに次の手を打ってくるのね……」

「こんなところも王様に似てるんだ……」

エリカと恵那が驚く横で、護堂も唖あ然ぜんとしていた。

ウルディンは遥はるか上空を飛んでいるというのに、間近で対戦しているように護堂の顔色や気配を見切っている。これも彼が持つ『将』の才覚なのかもしれない。

どれだけ距離を隔へだてていようと、敵将の思惑を見抜き、裏をかいて打ち破る。

それができて、はじめて名将・智将と呼ばれうるのだから――。

「民たみよ、祈れ。ルドラの矢をまぬがれるために」

ウルディンの右手に二本の矢が顕あらわれた。どちらも鏃やじりは黄金製。数日前、護堂の『白馬』と対つい消滅した〝黄金の矢〟である。

あのときは一本だけだったのに、今度はなんと倍だ。

「やっぱり火力の差は大きいか……」

　所しよ詮せん、『白馬』は一〇の化身のひとつである。

　権能の全てを火力にできる『ルドラの矢』とは、底力がちがうはず。

　予想どおりだったので、どうにか護堂はひるまずにすんだ。代わりに集中する。これからの撃ち合いが最初の正念場なのだ。なんとしても切り抜ける——！

「ルドラの名前は『咆ほう哮こうする者』という意味だ。でも、それだけじゃない。『赤き者』『光り輝く者』という意味もある。そして、神話に現れるルドラは赤い肌の持ち主で、輝く黄金を装飾としていた！」

「遠方より撃ち殺す神に祈り、慈じ悲ひを請こえ。この矢はあらゆる命を殺し尽くす」

　共に言霊を唱えて、たがいの武器に呪力を注ぎ込み——

「聖典『リグ・ヴェーダ』はルドラをこう呼んでいる。『太陽のように明るく、黄金のように光り輝く』と。彼は太陽神の属性も持ち、火と光を司つかさどる権能の所有者でもあった」

「父、母、老人、赤子にいたるまで——全てを殺あやめる神にひざまずけ！」

「ウルスラグナの『白馬』を迎え撃つ焔は、太陽神としてのルドラが撃つものなんだ！」

　一気に解き放つ！

　まずウルディンが黄金の矢を二本とも弦につがえ、まとめて撃ち放った。

　護堂ではなく、雲間に見える疑似太陽めがけて。

　疑似太陽は黄金の矢を呑み込んで、一気に輝きを増した。そして、これをきっかけに落下がはじまった。

　疑似太陽が地上へ——護堂たちがいる要塞めがけて、落ちてきた

のである。

　直径四、五〇メートルの球状だった。大地に激突すれば、その瞬間に焔が燃え広がり、周囲一帯はまたたく間に灼き尽くされるだろう。

　これを空中で受け止めたのが、護堂の操る『剣』たちである。

　おびただしい数の小さな『剣』が集まって、星雲のように燦きらめきを広げ、光の網となって疑似太陽の落下を食い止めていた。

　ルドラの神力を切り裂き、疑似太陽の光と焔を一気に減少させながら。

　しかし、疑似太陽には『ルドラの矢』が持つ全火力が宿っている。その全てを消滅させるには――時間が足りなかった。

　疑似太陽の落下を支えきれなくなって、すこしずつ光の網がのびていく。

　要塞と、護堂・エリカ・恵那の頭上にどんどん落ちてくる。地上まで、あと一〇〇メートル、九〇メートル、八〇メートル、七〇メートル……。

「護堂！」「王様!?」

「あいつは……ウルディンは必ず仕掛けてくるはずだ……そっちを頼む！」

　エリカと恵那に声をかけられても、これしか口にできない。

　呪力と集中力の全てを権能のコントロールに向けているからだ。

　しかし、ふたりはさすがだった。これだけで護堂の意をくみ取って、頭上の疑似太陽よりも周囲に注意を向けてくれた。

　降りそそぐ黄金の光を浴びながら、もうすぐ大量の熱と焔が落ちてくる窮きゆう境きようで。

　しくじれば、彼女たちまで巻き添えになる。自分はともかく、エリカと恵那が消し炭になる光景など――絶対に見るわけにはいかない！

「我がもとに来たれ、勝利のために……。不死の太陽よ、輝ける駿しゅん馬めを遣つかわし給たまえ」

　護堂は言霊を唱えた。ウルスラグナの化身をふたつ同時に行使するためだ。

　頭に走る激痛は、強大すぎる力にともなう代償だった。

「駿足にして霊妙なる馬よ、汝なんじの主たる光輪を疾とく運べ！」

　剣の言霊を維持しながら、東方の空より『白馬』を呼ぶ。

　疑似太陽によって黄金に染まっていた夜空を、暁あかつきの曙しょ光こうが薔ば薇ら色いろに上塗りしていく。それは極北の地で見られるオーロラの出現にも似ていた。

　疑似太陽が『剣』で消しきれないなら、『白馬』の力も借りる——。

　ウルディンと草薙護堂が切り札をぶつけ合った結果、ついにあらゆる光が対消滅を起こしていった。焔も、太陽も、言霊の光も、曙あけぼのの光も全て消え失せる。

　ふたたび夜よ闇やみと静せい寂じやくがもどってきた。

　しかし、すこし前までは頭上に強烈すぎる光源が存在していた。

　急すぎる闇の復活に目がすぐ慣れない。獣けもののように夜目が利きくカンピオーネとしてはめったにないことに、護堂は夜闇のなかでどきりとした。

　今、襲われたら——まずい。仲間にも警告しようとした瞬間だった。

「雲隠る、小島の神の恐かしこけば……目は隔へだてども、心隔てや——。天叢雲あまのむらくも、おねがい！　恵那の目になって！」

　太た刀ちの媛ひめ巫み女こが言霊を誦ようし、鋼はがねの相棒に懇こん願がんする。

　次の瞬間、天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎから呪力がほとばしるのを護堂は感じ取った。

　黒き神刀は『剣』でありながら、一箇の神格として意思と知覚を持っている。剣である以上、通常の視覚を持つはずがない。神の超感覚によって事象を捉とらえているはず。

　つまり、闇も昼間も関係ない——。

　天叢雲剣は今、知覚の網を広げ、敵の接近を探っていた。

「いやああああああっ！」

　そして、恵那がいきなり神刀を振るい、闇を斬り裂いた。

　ギィン！　硬い物体同士がぶつかり合う音。闇のなかより飛来した『恐ろしい爪デイノニクス』を、天叢雲剣が迎え撃ったのである。

　いつのまにか、翼竜の一匹が音もなく接近していたのだ。

「うわあっ！」

　クオオオォォォォンンンッ！

　爪と神刀はほぼ互角の威力・硬さだった。恵那は天叢雲剣ごとふっとばされ、城壁の内側に転げ落ちていく。翼竜はよたよたした飛びっぷりで上空にもどっていく。

　なんとか闇に慣れてきた目で、護堂がそれを見届けた瞬間——

「護堂、さがって！」

　エリカに警告され、空を見あげる。

　二匹目の翼竜が急降下してくるところだった。しかも大きい。

　今まで体長七メートル程度だったのが、倍近い大きさになっている。ウルディンが呪力を注ぎ込み、強化したのだ！

「このジェリコに邑むらを建つる者、主の御前にて呪わるべし！」

　紅あかき光をまとって、エリカも飛び立つ。

聖なる殲滅者は短時間なら天翔かけることもできるのだ。

空中で巨体化した翼竜と正面衝突する。翼竜は『恐ろしい爪デイノニクス』を大きく開き、エリカをつかみ取ろうとした。猛もう禽きん類るいに近い狩りの作法だ。

これを紅き光の加護で防ぎながら、エリカは獅子の魔剣を敵の黒い表皮に突き立てた。

「礎いしずえを据すえなば初うい子ごを失い、門を建てなば末すえ子ごを失わん！」

ここぞとばかりに、エリカが殲滅の特権を注ぎ込——もうとした。

が、『ぴゅう』と口笛の音がした。その瞬間に巨体化した翼竜は無造作にエリカの体を放り出し、上空へもどっていく。

二匹つづけて、徹底したヒットアンドアウェイ。

エリカも恵那も攻めきれず、神獣に痛打をあたえられない。しかも、ついにやってきた三匹目にはウルディンが乗っていた。

翼竜を駆って急降下しながら、城壁の護堂へ矢を次々と射いかけていく。

みごとな連射の妙技で七本の矢を放つと、すぐさま騎竜を急上昇させる。

護堂はとっさに横っとびし、転げまわって矢をどうにか避けた。それでも全ては防げず、一本だけ左肩に刺さってしまったが。

「はははは！　闇にまぎれて仕し留とめるつもりだったが、かんたんにはいかんか！」

笑い声だけ残して、ウルディンは上空へ帰っていく。

疑似太陽で派手な一撃をぶつけてきたと思ったら、不意討ち・翼を活いかしたヒットアンドアウェイと、なんとも振り幅の大きい戦いぶりだ。

「やっぱり、空を飛ぶ神獣はそれだけで脅きよう威いが増すわ

ね……」

「大おお晦日みそかとお正月もそれで苦労したもんね……」

　護堂のそばに、エリカと恵那がもどってきた。

　竜たちの飛びっぷりをうらやましく思いながら、護堂は肩の矢を引き抜いた。肉を抉えぐられているので、当然痛い。血も流れる。だが深傷ではない。

　鉄製の鏃やじりも、カンピオーネの鉄より硬い肩けん甲こう骨こつを貫つらぬくことはできなかったからだ。

「だったら、まだまだ戦えるってことだよな……」

　飛翔する敵への対処法なら、護堂はすでに学んでいる。

　犬いぬ吠ぼう埼ざきで、そして赤道直下の南洋で繰りひろげた戦いのなかで——。

3

「鋭く近寄り難がたきものよ。主しゅは仰おおせられた——咎とが人びとに裁さばきを下せと」

　護ご堂どうの言こと霊だまに応こたえて、要よう塞さい内部に『猪いのしし』が顕けん現げんする。

　体長二〇メートルの黒き神しん獣じゅう。その魁かい偉いな巨体で要塞内に建ちならぶ兵舎を踏み砕き、押しつぶしながら、こちらへやってきた。

　城壁の上に陣取る護堂たちのすぐ背後へ——。

　破壊を命じた標的は三匹の翼竜たち。今も上空を旋回し、次の攻撃にそなえている。

「いいか……あとで好きなだけ暴れさせてやる」

護堂の背後で『猪』はぐるぐるとうなり、闘志で猛たけり狂う寸前だった。

それを抑おさえ、たしなめながらのつぶやきだった。

「まだ動くなよ……。今のおまえは城、要塞の代わりだ！」

オオオオオオォォォォォォンンンンッ！

不満そうな吠ほえ声が『猪』の口から出てくる。しかし、それは反抗を意味しない。黒き巨獣は不本意ながら、主あるじの指示に応えようとしている。

護堂がうなずいた瞬間、翼竜が一匹、こちらへ急降下してきた。

さっきエリカが食い止めた、通常の倍も巨体化した竜。ウルディンは乗ってない。

「やれ！」

オオオオオオオオォォォォォォォォンンンンンッ！

護堂が叫ぶと、ふたたび『猪』が吠えた。いつもの衝撃波をともなう咆ほう哮こうだ。急降下してきた翼竜を、これが真後ろに吹き飛ばしてしまう。

巨体化した翼竜はバランスを失いかけたが、どうにか立て直した。

ひとまず地上攻撃を中止し、ウルディンの方へもどっていく。

「おお、兄弟も獣けものを飼っていたとは奇き遇ぐうだな。行け！」

ウルディンは騎竜の上から感心した体ていで『猪』を眺め、そして命じた。

すぐさま二匹目の翼竜が降下をはじめる。だが、これもあっさりと吹き飛ばされた。もちろん地上の『猪』が吠えたのである。

オオオオオオオオォォォォォォォォンンンンンッ！

衝撃波が見えない巨人の手のように、二匹目を払いのけた。

攻撃はおろか、城壁に近づくこともできず、二匹目はそのまま地上に墜つい落らくしていった。一匹目よりも小さいので、堪こらえ切れなかったのだろう。

——『猪』をあえて突撃させず、衝撃波を砲台とする砦とりでに見立てる。

すこし前に暁あかつきの女神キルケーがやってみせた用法だった。護堂はあれを真ま似ねたのだ。

「妙な芸を持っているやつだな。だったら、こいつはどうだ!?」

ウルディンが叫ぶなり、ふたつの革袋を竜の鞍あん上じようから投げ捨てた。

中身がばらばらと空中にぶちまけられる。

大量の白い牙きばだった。一〇〇個近くあるだろうか。

護堂は思い出した。アウグスタ・ラウリカ市で最初にウルディンを見たとき、やつはこの牙を魔獣に変えた——！

「ルスカが言っていたわ！　ウルディンの『竜使い』は竜たちの抜け落ちた牙や爪も眷けん属ぞくに変えてしまうって！」

「やっぱり、これもあいつの権能なのか！」

エリカに教えられて、護堂は舌打ちした。

牙たちは空中で変身していく。体長四メートルほどの小型デイノニクスに。しかも、前まえ肢あしの代わりに『翼』が左右の肩から生えている。

つまり、一〇〇匹近い小型翼竜の軍団なのだ！

小型翼竜たちは次々と護堂たちのいる城壁へ飛来してきた。

それも四方八方、三六〇度のあらゆる方向から。迎え撃つのは『猪』の役目である。

オオオオオォォォォォンンンンッ！　オオオオオォォォォォンンンンッ！

　オオオオオォォォォォンンンンッ！　オオオオオォォォォォンンンンッ！

　黒き神獣は立てつづけに衝撃波の吠え声を放ち、迫りくる小型翼竜たちを流れ作業のように撃げき墜ついしていく。

　それでも数が多いので、討ちもらしは当然出てくる。

　しかし、衝撃波をかいくぐった連中も、結局は護堂を狙ってくるので、エリカと恵え那なが危なげなく魔剣で貫つらぬき、神刀で斬り捨てた。要塞にローマの軍団兵が残っていれば混乱になったかもしれないが、待たい避ひは完了していた。

　やがて、小型翼竜たちがほぼ全滅した。

　それを見て、ウルディンの竜が高度を落としてくる。護堂たちのいる城壁まで、距離にして二〇メートル程度の位置だ。

「さすがだぞ、兄弟。おまえの器量にはもちろん期待していたが——正直に言って、ここまでやれるとは思っていなかった」

　地上に降りた翼竜から、『翼』が消えた。

　左右の翼が短い前肢に変化したのだ。今まで観察したかぎりでは、この前肢、どうやら物をつかむ程度の機能しか果たせないらしい。

　これで翼竜から、デイノニクスへもどったことになる。

「ますます名みよう代だいにしたくなったぞ。約束しろ。その砦、これからオレが攻め落とす。そのあとで、もしおまえが生きていたら——今度こそオレの軍門に降くだれ」

　デイノニクスにまたがりながら、ウルディンはにやっと笑う。

　今までとは逆に、その笑みを護堂は城壁の上から見おろす形になった。背後には〝砦〟の要よう諦ていである『猪』がひかえている。

　黒き神獣は魁偉な巨体を震わせて、『ゥゥゥ……』と静かにうなっていた。

　目が血走っている。闘志を抑おさえるのも、そろそろ限界かもしれない。

「ただ残念ながら、おまえを生かしたまま勝てる自信がない。夢物語のようなものだな。先に断っておくが、死んでも恨うらむなよ？」

「あいかわらず、勝手なこと言いやがって……」

　ウルディンの言いぐさに、護堂は苦笑した。

　必勝と必殺を宣言するくせに、この男にはどこか愛あい嬌きようがある。また古代世界の蛮ばん族ぞくでありながら、知性まで感じさせる。

　たしかにある種のカリスマなのだろう。だが、だからといって――

「あんたこそ約束しろ。俺が勝ったら、そういうことは二度と言うなよ！」

「いいだろう、これで賭けの成立だ！」

　勝ちを譲れるわけがない。護堂が吠えれば、ウルディンも同じ調子で応える。

　そして、フン族の神殺しは新たな言霊を唱えはじめた。

「母よ。あらゆる形とあらゆる命の創造主よ」

　小型翼竜の骸むくろが死し屍し累るい々るいと横たわる戦場――。

　そのなかで動き出す巨体があった。もともとウルディンがつれていた翼竜二匹である。神獣たちが主の頭上に飛んでくるのを見て、護堂はうなずいた。

　二匹は倒れていたのではない。すこし休んで、力を蓄たくわえていたのだ！

「今ふたたび竜どもに鋭い牙と、無む慈じ悲ひな毒をあたえ給え！」

　二匹の翼竜は体を重ね、融合していく。

　合体だった。二匹の翼竜はひとつの体に結合し、ただ一匹の『竜』となり、さらなる巨大化を遂げてしまった。

　広げた両翼はきわめて大きく、翼長四〇メートルはあるだろう。

　純粋に頭から胴体までを見れば、『猪』とほぼ同等のサイズだった。

　首長竜のように長い頸けい部ぶと尾を持つのは今までどおり。しかし、尾はサソリのものに変わっている。

　頭から生える七本の角が、王冠にも似た威い厳げんを誇示していた。

「そのでかぶつをしとめるためだ。これくらいの仕込みはしてやらんとな」

　ウルディンの体から、尋じん常じようでない量の呪力が流れ出している。

　向かう先は、彼の頭上で翼を広げる巨竜だった。主の力を受け、より猛悪な形状になった竜の表皮はあざやかな赤色の竜りゆう鱗りんに変化している。

　赤き巨竜の出現に合わせて、黒き大猪が高らかに吠えた。

　オオオオオオオオオォォォォォンンンンッ！

　咆哮に宿る超音波のせいで、空気だけでなく城壁や地面までもびりびりと震える。こいつを抑えるのも限界か——。

　護堂は仲間たちに目配せした。エリカも恵那も軽いうなずきを返してくれる。

　ここが勝負どころだと、彼女たちも理解しているのだ。

「鋭く近寄り難きものよ。契けい約やくを破りし罪科に鉄てつ槌ついを下せ！」

「竜よ。恐怖と焔の冠をまとい、神となれ！」

　次の瞬間、護堂とウルディンは同時に言霊を叫んでいた。

　すると、赤き巨竜が長大な翼を広げて要塞上空へ飛来し、凶悪な牙がならぶ口を広げて、猛火を吐き出した。対して、黒き大猪はいつもの咆哮を放つ。

　オオオオオオオオォォォォォォォォンンンンンッ！

　声にふくまれる衝撃波が竜の焔をかき消した瞬間、『猪』は跳んだ。

　発射台から飛び立つロケットのごとく、空中の赤き巨竜めがけて。猛進した『猪』は口元の牙で竜の胸を抉えぐり、そのまま空飛ぶ獣ともども地上へ落ちる。

　巨獣二匹が組んずほぐれつ、地上でもつれ合う。

　その格好は、人間の格闘家同士が寝技で攻防する姿にも似ていた。

　上にいるのは『猪』、下になったのは赤き巨竜。しかし、竜は長い頸くびをのばして、太い猪の首に喰らいついていた。傷口からは鮮血が流れ出ている。

　さらに、竜の後ろ肢。その先端にはあいかわらず『恐ろしい爪デイノニクス』が健在だった。

　両足の鉤爪は『猪』の魁かい偉いな胴を左右から抉り、引き裂きにかかっている。突進力こそ大猪が勝っていたが、グラウンドでの格闘はどうやら竜の方が有利――。

　勝負の明暗がはっきりしかけたとき、エリカが動いた。

「十字を成なす紅あかき印よ……楔くさびとなり、穿うがて！」

　紅き光を全身にまとい、聖なる殲滅者として全速力で飛翔。

　左手の楯たてで体をかばいながら、赤き巨竜の横っ面へ一直線に突っ込んでいく。

　体ごと獅子の魔剣を叩きつけ、巨人の右ストレートさながらに竜を殴打――。それは、現代でエリカの叔お父じが見せた突進とよく

似た一撃となった。

　さすがの竜も巨大な頭部をぐらつかせ、『猪』の首を口から放してしまう。

　並の神獣なら、これで倒せただろう。が、さすがウルディンの力を注がれた〝とっておき〟、巨竜は尚も健在だ。

　エリカはそのまま飛翔を続け、巨竜のそばを離脱する。

　今の一打で殲滅者の力を使い果たしたのか、身にまとう光は弱々しく、すぐに着地してしまう。だが、ともかく十分な距離を離れることができた。

「やれ！　今度こそ全力でぶちのめせ！」

　エリカのおかげで息をつけるようになった『猪』へ、すかさず護堂は命じた。

　黒き獣の口こう腔こうが深々と空気を吸いこむ。

　そして、全力の咆哮――。

　オオオンンンンンンンンンンンンンンンンンッ！

　大猪が持てる全ての力を懸かけて、衝撃波を解き放つ。

　その破壊力は巨竜の肉体を激しく揺さぶり、ボロボロに打ちのめしてみせた。人間でいえば、体内の骨という骨が粉々にされ、臓器という臓器が損傷する惨状だっただろう。

　まあ、代償もかなり大きかったが。

　二匹は組んずほぐれつ、もつれ合っていたのである。衝撃波は『猪』自身の巨体もいい具合に打ちのめしていた。二体の巨獣は相打ちの形になり、必死に苦痛を堪こらえ、しかし耐えきれなくなり――なかよく地上から消え去った。

　その直後だった。大きな影が護堂たちの前に現れた。

　ウルディンを乗せた神獣、デイノニクスだ。

　もう翼はないくせに、軽やかな跳躍で城壁の上にまでジャンプしてきたのである。

　器用なことに、例の『恐ろしい爪デイノニクス』で城壁の縁をがっちりとつかみ、バランスもしっかりと取ってみせた。

「王様、危ない！」

　恵那が護堂の前に出て、神刀の切っ先を神獣の喉元に向けた。

　対して、デイノニクスは鋭い牙がびっしりと生えた口を開ける。恐竜に似ているだけで、爬は虫ちゆう類るいでもなんでもない超生物である。火か稲妻でも吐くかと思えば——外れた。

　デイノニクスは灰色の煙を吐き出した。

　ただ前方が見えにくくなるだけの煙だ。しかし、護堂も恵那も意表を突かれた。

　その隙すきにデイノニクスはしなやかな長い尾を『ぶん！』と鞭むちのように振りまわしてきた。

「わあああああっ！」

　この一打を浴びて、恵那が大きく吹っ飛ばされた。

　アイアンですくい打たれたゴルフボールのように、城壁の外へ放り出される。さらにデイノニクスも軽やかに飛び降りて、媛ひめ巫み女こを追っていく。

　もちろん護堂もあとを追って、恵那の加勢をしたかったのだが——。

　ひゅん！　風を切る音。護堂は勘かんにまかせて避けた。

　城壁の外へジャンプ——身を躍おどらせたのである。高さ五メートルから地面へ落ちていく。両腕で頭を抱えこみ、衝撃を逃がすため地面を転げまわる。

　ダメージが打だ撲ぼく程度ですんだのは、やはりカンピオーネの

頑丈さがあればこそだ。

　体のあちこちがずきずきと痛み、見ばえも悪かったがかまわない。今まで護堂がいた空間を、三本もの矢が駆け抜けていったのだから。

　ひさしぶりに地面へもどってきた護堂は痛みを堪え、すぐに立った。

　城壁を見あげる。そこにいるのはもうひとりの神殺しだった。

「よく避けた、兄弟。そろそろ一騎打ちを楽しむのもいいと思って、遅ち参さんしたぞ」

　ウルディンが弓をかまえ、つがえた矢を地上の護堂へ向けている。

　今の一幕の間に、いつのまにか城壁の上に降り立っていたのだ。カンピオーネふたりの立ち位置は、さっきとちょうど真ま逆ぎやくであった。

4

　要よう塞さいの周辺は、小型翼竜の骸むくろで死し屍し累るい々るいだった。

　あちこちに死し骸がいが転々としている。一〇〇匹近い竜たちが『猪いのしし』の衝撃波を受けて全滅したのだから、当然だろう。

　エリカは疲れた体に鞭むち打うち、よろよろと要塞めざして歩いていた。

　すでに殲せん滅めつの特権は使い果たしている。全身がだるく、頭もぼうっとする。

　やはり、背伸びして聖騎士パラディーノ級の秘儀を使っている身では、叔お父じたちほどの持続性を発揮することはむずかしい。

しかし、向こうでは最愛の少年がウルディンと戦いつづけている。

おそらく戦闘は最終局面というところ。一刻も早く加勢しなくては――！

要塞めざして、エリカは懸けん命めいに駆け出す。そんな彼女の前に、仲間のひとりが放物線を描いて飛んできた。天あまの 叢むら雲くもの 剣つるぎを持つ清せい秋しゅう院いん恵え那なだった。

だが、さすが太た刀ちの媛ひめ巫み女こ。地面が近いと見るや、くるりと宙返りを打つ。

みごとに足から着地。猫のような身のこなしだった。

しかし、すでに強烈なダメージを受けていたらしく、着地は決めたがきちんと立てない。うずくまってしまい、神刀を持たない左手で脇腹を押さえている。

「恵那さん、傷を負っているの!?」

「だ、大丈夫っ。ちょっとだけ見てて。すぐに片をつけるから！」

恵那が苦しそうに顔をゆがめ、うずくまったままエリカに答える。

とても大丈夫には見えない。しかし、ともかく言うとおりにしたら――空から今度はデイノニクスが降ってきた。恵那を追って、跳躍してきたようだ。

大地に降り立ったデイノニクスは、弱った恵那をめざとく見つける。

頭から背中、尾までを一直線にする走り方で距離を詰めると、獰どう猛もうな顎あごでうずくまる媛巫女に喰くらいつこうとする！

「おじいちゃま！　もし聞こえていたら――恵那に力を貸して！」

デイノニクスの牙きばで引き裂かれるという寸前、恵那が叫んだ。

直後、彼女の体から守護神スサノオの神力がほとばしる。風と大

気を司つかさどる暴風神の力で小型の竜巻を起こし、デイノニクスの動きを抑おさえ込んだ。

　うずくまっていたのは、敵の攻撃を誘うためだったのだろう。

「いやあああああああっ！」

　その隙すきに起きあがり、天叢雲剣を投げ槍やりの要領で投げる。

　ふつうの剣であれば不可能な使い方にも神刀はよく応こたえ、鋭い切っ先でデイノニクスの喉のど元もとを貫つらぬいてみせた。

　これが致ち命めい傷しようとなって、神獣の巨体が横倒しになる。

　エリカは目をみはった。今、デイノニクスが見せた野獣の戦いぶり。ウルディンと共にいたときのヒットアンドアウェイとはまったく異なる雑さだった。

「う、ウルディンさん、王様にかまけているから、た、たぶんいけると思ったんだ……」

　息を切らせながら、恵那が天叢雲剣を拾いあげた。

　あいかわらず苦く悶もんの表情のまま、脇腹を押さえている。ダメージは〝ふり〟ではなかったのだ。それでも恵那は不安げに要塞の方を見やった。

　城壁の上と下でふたりの戦士が向き合っている。ウルディンと護堂だった。

「とりあえず、治ち癒ゆの術をかけておくわね」

「あ、ありがと。さすがエリカさんは気が利きくね……」

　この手の治癒術に即効性はない。効果が出るまで時間がかかる。

　それでもエリカは術をかけ、恵那は感謝のまなざしを向けてくれた。それから、ふたりでうなずき合う。早く護堂のもとへ――相談するまでもなく、意思を共有できたからだ。

　エリカが肩を貸し、恵那が歯を食いしばって歩きはじめる。

　このとき、信じがたい現象が発生しはじめた。

　だが想定内でもあった。この力があると先に聞いていたからだ。

「これってやっぱり……」

「ウルディンがついに切り札を使ったということね……」

　起きあがる屍たちを目まの当たりにして、エリカは恵那とささやき合った。

　時間はすこし遡さかのぼる。

　エリカも恵那もいない。『猪』も消えてしまった。

　護堂はついにひとりきり。対するウルディンもひとりだった。フン族の神殺しは小振りな弓をたずさえ、竜の鞍くらから外した矢や筒づつを腰帯から下げている。

　城壁の上にウルディン、下に護堂。この位置関係では、接近戦もできない。

「だからって、勝負が決まったわけじゃないけどな……」

　護堂はつぶやいた。まだ使える化身がある。『山や羊ぎ』だ。

　虐しいたげられた民衆を味方につけたとき、使用可能になる稲妻使いの聖獣。ウルディンはアウグスタ・ラウリカ市の敵であり、この要塞の近くに二万もの民が住んでいるのだ。

　精神感応を駆使して、みんなから力を引き出すことは十分に可能だった。

　矢とちがって『弾切れ』はない。むしろ、自分が有利かもしれない——。

　そう思いさえしたのだが、護堂は不意にめまいを感じた。

「な、に……？」

足がもつれる。吐はき気がこみあげてきて、寒気までする。

はじめて味わう感覚に、護堂は愕がく然ぜんとした。

「ようやく効いてきたか。そのしぶとさ、さすがオレの同族だ」

城壁の上から護堂を見おろしつつ、ウルディンが苦笑気味に言う。

「並大抵の毒じゃ、オレたちには通じないからな。神殺しをも悶もん絶ぜつさせる特別製……遥はるか東方で調達した品を奮発した甲か斐いがあったぞ」

毒⁉　バカな、と護堂は思う。以前リリアナから一服盛られたときもそうだったが、カンピオーネの強きよう靭じんすぎる肉体は、毒への耐性もデタラメなのだ。

こんなものを一体どこで喰らったのか。

ウルディンの砦とりでに滞在中も飲食物には十分に気をつけ、毒など盛られた気配は一切感じていなかったというのに……。

もしかしてと護堂は気づき、ハッとした。

するとウルディンがにやりと笑い、矢筒より矢を一本引き抜く。

想像どおりだった。どろりとした透明な液体が鏃やじりからしたたっている。

護堂はあの矢をさっき肩に受けた。そういえば、矢に毒を塗って人や獣けものを射いるのは、騎馬の民が得意とする戦法らしい。元げん寇こうの際、鎌かま倉くら武士もこれに苦戦したという。

体から徐々に力が抜けていく。

がくっとつんのめり、護堂はついに片かた膝ひざをついた。

「ふふふふ。すこしあっけないが、オレの勝利で幕を引けそうだな……」

ウルディンは矢を引きしぼり、ひょうと射る。

この毒をこれ以上受けたら、そこで勝負は終わる。

　護堂は両手両足を狼おおかみのように動かして、必死に右へ跳んだ。どうにか避ける。

　すると二本目、三本目の矢が風を切って飛んでくる。四よつん這ばいのまま、かろうじて二本目は避けたが――三本目はかわし切れない。

　矢は左足のふくらはぎに突き刺さってしまった。

「ぐあっ！」

　激痛が走る。かなり深く刺さっていた。

　足をやられた以上、今までのようにしのぐこともできないだろう。そのうち毒もまわってくるはずだ。しかし、運よく太い血管は外れていた。急所を貫かれたわけでもない。

　つまり、まだ最後の勝負を仕掛ける余裕はあるのだ――。

　おかげで、賭かけに出る覚悟が定まった。

　残された力を全て『山羊』に注ぎ込むつもりで、護堂は足の痛みと吐き気・寒気を堪こらえ、根性でどうにか立ちあがったのだが。

　ウルディンはそんな護堂を見おろして、なんと弓を放り出した。

　からからと音を立てて、フン族の飛び道具は城壁の上を転がっていく。

「追い詰められても手負いの獣けものとなり、返り討ちを狙う……。オレのお仲間なんだから、やはりそう来るよな。本当に楽をさせてくれないやつだ！」

　微笑ほほえみながら、ウルディンは護堂を見おろしている。

　今までの笑みはどこか快活で、陽性の闘志をまき散らしていた。しかし、この微笑は獰どう猛もうだった。必ず獲え物ものをしとめるという狩人かりゅうどの笑みだ。

　ウルディンも最後の勝負を仕掛けるつもりなのだ。

　それを我がことのように感じ取り、護堂は舌打ちした。さすが同

族だ。

　圧倒的に有利な場面でも――否いな、だからこそ、全力でたたきつぶしにくる！

「我がもとに来たれ、勝者の剣よ！」

　フン族の神殺しが言霊を叫ぶ。

「この手におまえが在あるかぎり、オレはいかなる戦場でも勝利する。この手におまえが在るかぎり――我が軍勢は不死身であり、無敵だ！」

　弓を捨てたばかりのウルディンは、空になった右手を宙にのばす。

　その手に忽こつ然ぜんと顕あらわれるのは、一振りの長剣だった。

　鋼はがねの刀身は細めで、刃渡りは八〇センチ程度。柄は飾り気のない簡素なもの。しかし、この長剣が顕れるのと同時に、空から文字が降ってきた。

　北欧のルーン文字である。『←』の記号に似ていた。

　この文字が数え切れないほど、それこそ雪のように降ってくる。

　エリカと恵那から教わった知識のおかげで、護堂はその意味を知っていた。これは北欧の軍神、勝利と戦争の神を象しよう徴ちようするルーンだった。

「テュールって神様の力か！」

「ルスカのやつ、オレの切り札までばらしやがって」

　護堂のつぶやきに、ウルディンは一瞬の苦笑で応えた。しかし、すぐ真顔にもどり、右手の長剣を高々と天にかかげる。

「テュールの剣よ、我が軍に不死と勝利を授けろ！」

　その号令を聞いて、屍たちが起きあがっていく。

　際限なく降ってくるルーン文字『テュール』を浴びて、全滅させ

たばかりの小型翼竜たちが目を開き、体を起こし、翼を広げていった。

　さっき『猪』の衝撃波で墜つい落らくし、その際に負った傷は全て治ち癒ゆしていた。

　――軍神テュールもまた《鋼》に属する神。鋼の系けい譜ふである以上、不死の属性を持つ。護堂は強敵ランスロット・デュ・ラックを思い出した。

　あの女神と同じ権能だ。軍勢の復活という形で不死性を具現させるのだ！

　しかも、小型翼竜だけではない。さっき『猪』が倒したばかりの赤き巨竜も、ふたたび上空に顕けん現げんしていた。

「くっ！　我は義なる者たちの守護者を招き奉たてまつる！」

　護堂はとっさに『山羊』の化身を行使した。



　人々の心を束たばね、稲妻をも操る。〝祭司〟の能力を持つ化身だ。

　護堂は精神感応の力を外へ——アウグスタ・ラウリカ市の方角へ解き放ち、ウルディンを恐れる人々の意思を束ねようとした。しかし、ダメだった。

　感応力を爆発させる寸前で、小型翼竜の一匹に襲われたのである。

　喉笛めがけて飛びかかってきた竜へ、護堂は右手を向けた。

　掌てのひらから電撃が放たれ、小型翼竜を打ち倒す。多数の人々から力をかき集めたときとは比較にならない威力の小ささだが、この程度の敵ならどうにかできるのだ。

　しかし、一匹目を倒したのはいいが、すでに護堂は包囲されていた。

　一〇〇匹近くいる、復活した小型翼竜たちによって。

　しかも、上空では赤き巨竜が旋せん回かいしながら地上に——護堂に視線を向けている。何より、城壁の上にはいまだウルディンが健在だった。

　テュールの剣を通路に突き刺すと、さっき放り出した弓を拾いなおす。

　絶対的な物量差。『山羊』の稲妻はかなり強力だが、この包囲網を一撃で灼やき尽くすほどの爆発力はない。それをするには、『白馬』のような攻撃が必要だ。

　しかも、神獣がもう一匹増えた。

　向こうからデイノニクスが走ってくる。さっき恵那を追いかけていったヤツだ。

　護堂はどきりとした。死神の手で心臓をわしづかみされた気分だ。まさか、媛巫女はやられてしまったのか——その恐怖ゆえだった。

だが、そのとき。

右腕に冷たい鋼の感覚がもどってきた。

『王様！　恵那たちは大丈夫っ。だから使って！』

右腕のなかに帰還した相棒が、太刀の媛巫女からのメッセージを伝えてくれる。

護堂は無意識に笑う。安心した。そして助かった。

これでまだ戦うことができる！　その無意識の微笑には、ウルディンと張り合えるだけの獰どう猛もうさがあふれていた。

「天叢雲あまのむらくも！　俺にも竜を調達してくれ！」

指示した瞬間、護堂の右手に天あまの 叢むら 雲くもの 剣つるぎが顕れた。

黒き神刀には〝敵の神力・権能をコピーする〟という能力がある。今回、真ま似ねさせたのはウルディンの『竜使い』だった。

天叢雲剣は神力を飛ばして、ここに走ってくる一匹を呼びよせた。

ずっとウルディンが騎竜とし、恵那を追いかけたデイノニクスである。

残念ながら、天叢雲剣のコピー能力ではこの一匹しか支配できないらしい。護堂は弱った体へ、さらなる重労働を強要した。できるかぎりのすばやさで竜の鞍くらに這はいあがったのだ。

そのまま前肢を翼に変化させ、翼竜として飛び立たせる。

「なんだと!?」

ウルディンが驚いていた。当たり前だろう。

加勢させるために呼びつけた竜が護堂の前に来るなり、倒すべき敵を乗せて飛び立ったのだから。しかし。

「まったく！　オレも他ひ人とのことは言えないが、本当にしぶといやつだな！　追え！」

　すぐ愉快そうに笑い、落ち着いて追撃を指示する。

　小型翼竜軍団は次々と飛び立ち、夜空の彼方へ去る護堂を追いかけてきた。

　さすが古代のカンピオーネ。自分たちが勝ち運に見放されたときこそ底力をしぼり出す生き物だと、ウルディンも熟知しているようだった。

5

　かくして護ご堂どうは逃げ、小型翼竜の軍団が追いかけてくる。

　あまり飛行速度の差はないらしく、護堂の翼竜がスタートダッシュした分だけリードしているという状況だ。

　行く当てもないので、即席の騎竜には月へ向かって水平に飛んでもらった。

　冴さえ冴ざえと白く光る三日月である。そういえば、満月になるとアイーシャ夫人の通つう廊ろうがふたたび開く（かもしれない）のだったか――。

　竜の鞍あん上じようは、意外にも馬と同じ程度の乗り心地だった。

　つまり『慣れれば気分がよさそうだ』である。毒を受け、矢で足を射い貫ぬかれて尚、体を酷こく使しした護堂には、この騎乗はかなりつらい。

　全身が疲ひ弊へいしていた。根性という燃料を投入しても、もう満足に動くまい。

　気を抜くと右手の天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎだけでなく、自分自身まで鞍くらから落としそうになる。そうなれば最後、二、三〇〇メートル下の地上に落ちて、一巻の終わりだ。

　――ふと気づけば、すぐ後方に迫っている小型翼竜がいた。

　力を振りしぼり、スピードを上げたのだ。護堂は『山や羊ぎ』の電撃を放って、この一匹を撃げき墜ついした。瞬殺だった。

　だが、よろこべない。敵はまだまだ大勢いるのだ。

　しかも、テュールの権能で再復活する可能性すら否定できない。

　このまま『山羊』の能力を恃たのみに戦っても、じり貧になるだろう。まちがいなく戦いは長びき、途中で草くさ薙なぎ護堂は力尽きる——。

　今ここで必要なのは、ただ一撃で戦闘を終結させる決定力だった。

　すでに『白馬』は使用済み。だが、当てはあった。

　制御する自信がないだけだ。しかし、幸いにもここは空中。近くに人里もなければ、仲間もいない。

　この窮きゅう境きょうを予感して、祐ゆ理りが用意してくれた力——引き抜くのは今しかなかった。

「暁あかつきの秘録よ……」

　言こと霊だまを唱となえる。天叢雲劍が蒼あお黒ぐろく燃えはじめる。

「俺に魔女の……女神の技を貸してくれ！」

　古代ガリアに来る直前、祐理によって封印を解かれた力。

　それはしばらく前、暁あかつきの女神キルケーが遺のこしてくれた〝言霊〟だった。権能と呼ぶにはささやかすぎるものだ。この呪じゅ文もんを口にすれば、草薙護堂はほんのひとときの間、魔女神の魔ま導どう力りょくを借りることができる——。

　いわば臨時の魔導書、女神の力を操あやつるためのガイドブックである。

　これがあれば、女神ならざる草薙護堂でもあの剣つるぎを——『はじまりと終わりの剣』を抜き放ち、天と地を開かい闢びゃくすることが可能になる！

「嵐を呼ぶものたち……千の竜と千の蛇へびよ。今こそ集まり、剱と成れ！」

ついに二度目の行使となる。

アテナが遺した置きみやげとキルケーの心尽くしによって、ようやく護堂の掌しよう握あく下かに入った破滅と新生の儀。もしかしたら、魔術にかかわる人々はこの秘剣をいずれ『草薙護堂、第三の権けん能のう』と見なすようになるのかもしれない。

三日月の輝く頭上に、小さな暗黒星が顕けん現げんする。

この星はすぐに膨ぼう張ちようし、またたく間に直径数十メートルへ成長を遂とげた。

そして回る。横回転をはじめる。ゆっくりなのは最初だけ、すぐに高速回転となる。ぎゅうん。ぎゅうん。ぎゅうん。回る暗黒星が発する、独特のうなりであった。

護堂の右手では、天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎがまったく熱さのない蒼黒き焔ほのおにつつまれていた。

『いくぞ王よ！　これより天地開闢の儀を執行する。今こそ嵐を呼ぶ時ぞ！』

天叢雲劍の思念だった。

意思まで持つくせに、この神刀はめったにしゃべらない。だが戦闘中——それもここぞという見せ場ではべつだった。ときどき妙に出たがりとなる。

相棒の言いぐさにうなずいた瞬間、暴風が発生した。

頭上の暗黒星めがけて吹いていく。

吹き飛ばすためではなく、吸いこむための強風であった。暗黒星のまわりで風がうずまき、飆ぐ風ふうと化す。嵐となる。

護堂を追ってきた小型翼竜の軍団は、塵じん芥かいのように暗黒星のなかへ吸引されていった。

精一杯あらがおうと翼を広げ、必死に羽ばたいても無駄だった。

「とんでもないことになってきたな……」

　思わず護堂はつぶやいた。

　今、飛翔する翼竜の真下には、古代ガリアの平原が広がっている。地平線の先まで、緑の草地なのだ。ブナや樫かしなどの生い茂る森があちこちに点在しているほかは、きれいに真っ平らな地勢だった。

　だが、この平原の形が変わりはじめていた。

　暗黒星は竜の軍団だけでなく、夜空に満ちる大気も、平原の草も、花も、土も、木々までも吸いこんでいるからだ。

　暴風のうなりに乗って、大量の土砂が空へ舞いあがっていく。

　当然、地上には巨大な穴がうがたれる。はじめ直径十数メートル程度だった穴はどんどん広がっていき、今やクレーターといっても過言ではない規模になりつつあった。

　これが現代なら、どれだけの被害が出たものか——。

　そして、この重力嵐のなか、小型翼竜たちを待つ運命は悲惨だった。

　小さな竜たちの悪あがきを嘲あざ笑わらうように無む慈じ悲ひな吸引は続き、おそるべき迅じん速そくさで竜たちの軍勢は夜空から消え失せたのである。

　全滅だった。これならテュールの剣による復活を案じる必要もない。

　一方、護堂とその騎竜はどうにか吸引の風をしのいでいた。

『王よ、もっと力を振りしぼれ！　己オレたちまで吸われてしまうぞ！』

　天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎが警告する。護堂はすぐに呪力を神刀へ送りこんだ。

　さらに、俺たちは吸いこむなよ——と強く念じる。

　おかげで暗黒星めがけて吹く暴風は、護堂たちを一応は避けていく。しかし、それでもすぐそばを吹き抜けていくから、そのたび翼竜は大きく揺れ、バランスを崩しそうになる。

　乗り手の護堂も、いつ転落してもおかしくない。

「く――っ。そろそろきついか……」

　頭を襲う激痛に、護堂は眉まゆをひそめた。

　暗黒星と嵐のコントロールがもう限界に来ているのだ。キルケーの力添えがあるとはいえ、やはり慣れてない護堂にはむずかしい。

　すこしでも気を抜けば、すぐ制御不能になるだろう。だというのに。

「はははは！　おまえという男は、こんな切り札まで隠していたか！」

　まだ健在な敵が痛快そうに笑っていた。

　翼竜にまたがるウルディンだった。護堂を追って、飛んできたのだ。

　背後に翼竜をもう一匹したがえながらの到来だった。合体して赤き巨竜になった連中を〝ばらした〟らしい。おそらく、巨体のままでは乗りにくいのだろう。

　ウルディンは裸馬に乗るようにして、翼竜の肩と首の境目あたりにまたがっていた。

　両足とふとももで竜の体をはさみ、巧たくみに姿勢とバランスを保つ。右手はテュールの剣まで持つというおまけ付きだ。

「最後は竜を駆っての決着――いい趣向だぞ、兄弟！」

　フン族の神殺しの後方で、二匹目の翼竜が暗黒星に呑のみ込まれていった。

　しかし、ウルディンの騎竜はどうにか無事であった。駆り手が持てる呪力をほとんど竜へ注ぎこみ、飛翔力を強化しているからだ。

　もともとウルディンは『竜使い』。騎竜の強化はできて当たり前なのだ。

　こちらも騎竜を強化するなどして、迎え撃つしか手はない。

　だが、すでに心身共に限界で——。体力と呪力が全て底を尽きかけている護堂に、ウルディンが勝利の剣を振りかざして飛来する。距離は徐々に詰まっていく。

　剣が届く間合いまで接近されたら、もう護堂の敗北だ。

　あれを避ける余力はない。『山や羊ぎ』の雷いかずちも満足に放てない。ここまで飛んできた代償というべきか、アウグスタ・ラウリカ市を遠く離れたことで、二万の市民やエリカ・恵え那なの位置を把は握あくできなくなっていた。彼女たちから力も集められない。

　精神感応を駆使すれば見つけ出せるだろうが、その余裕は今なかった。

　だから——本当はこの時点で完かん璧ぺきに『詰み』だった。

　それでも悪あがきできたのは、単なる「負けてたまるかよ！」というやけくそ気味のメンタルと、ここにいるはずのない仲間が力をくれたからだった。

『草薙護堂！』

『護堂さん！　もうすこしです！』

　いるはずのない少女たちの声。

　リリアナ・クラニチャールと万ま里り谷や祐ゆ理りの思念。『山羊』の精神感応でそれを感じ取り、護堂はかすかに首をかしげた。しかし、その存在はたしかに近い。

　彼女たちは何らかの手段で自分のことを見ているのだろうか……？

　だが度しがたいことに、その疑問はすぐに放り投げた。

　ここにいるはずのないリリアナと祐理から『力』——生命力と呪

力を捧ささげられたことに気づいたからだ。ほんのわずかだが、これさえあれば！

「これで——どうだ!?」

　仲間の助力と残った呪力を全て稲妻に変え、左手から放つ。

　ウルディンの騎竜に直撃する。フン族の神殺しはちょうど護堂の左上方へ回り込み、テュールの剣で斬りかかろうとしていた。

　クゥアアアアアアァァァァァァァッ！

　顔面に稲妻を喰らい、竜が絶叫する。そのまま暗黒星の重力にとらわれ、そちらへついに引きこまれていく。

「まだまだあっ！」

　しかし、吸引される騎竜の上からウルディンが飛び移ってくるとは——。

　護堂を乗せた竜の鞍くらめがけて、ジャンプしてきたのである。

　しかも、テュールの剣を途中で放り捨てている。代わりに腰帯から引き抜いたのは、手て斧おのだった。竜の鞍上——超至近距離で戦うなら、ナイフのように小さな武器の方が振りまわしやすくて有利なのだ。

　だから手斧へ持ち替えた。さすがに実戦慣れしている。

　まあ、護堂もとっさに天あまの 叢むら 雲くもの 劍つるぎを右腕にもどし、手斧を持つウルディンの手首を必死につかんだので、どっちもどっちかもしれないが……。

　とはいえ、体力面ではウルディンの方が断然有利。

　護堂は勝つために、残された最後の禁じ手を躊ちゆう躇ちよなく実行した。頭上の暗黒星に『すみやかに消滅せよ』と念じてから、竜にはこう告げたのである。

「このまま落ちろ！　地面に向かって飛べ！」

「なにィ!?」

　ウルディンが愕がく然ぜんとした瞬間、翼竜は急降下をはじめた。

　暗黒星が消え、その吸引力も消滅した。もはや飛翔を邪魔するものは何もない。

　かくして、地面に――ちょうど何もなかった平原の大地めがけて翼竜は力のかぎり飛び、みごと激突を果たしたのである。

　当然、護堂とウルディンもいっしょに墜つい落らくする形となった。

転章

「駄目だ。見失ってしまった……」

　リリアナ・クラニチャールは目を開けるなり、悔くやしさで肩をふるわせた。

「せっかく草くさ薙なぎ護ご堂どうを見つけられたというのに——！」

「仕方ありません。通つう廊ろうの向こうはまちがいなく、この世の彼方かなたの何ど処こか。むしろ、すこしの間だけでも御姿が観みえたことをよろこびましょう」

　己おのれを責めるように唇くちびるを噛かむ仲間へ、万ま里り谷や祐ゆ理りはやさしく声をかけた。

　そっと肩に手をかける。すこし気分が落ち着いたらしく、リリアナはうなずいた。

「そうだな。わたしの術と万里谷祐理の力で、向こうの様子を探れる。それがわかっただけでも収穫と考えるか……」

「そうですよ。救出作業はこれからが本番です！」

　仲間だけでなく、自分も勇気づけるように祐理が力強く言う。すこしわざとらしかったのでリリアナは思わず微笑し、媛ひめ巫み女こも照れかくしするように微苦笑をこぼした。

　ふたりの居場所は、トスカーナ州・カゼンティーノ地方の山中である。

谷底を流れる渓けい流りゆうのほとり。四人もの人間が消息を絶った場所だ。すなわちサルバトーレ・ドニ、草薙護堂、エリカ・ブランデッリ、清せい秋しゆう院いん恵え那なの四名が。

祐理とリリアナは崖のすぐそばにいた。

魔力暴走の権けん能のうを使った結果、洞ほら穴あなめいた闇やみ——『通廊』が出現した場所だった。

この道の遥はるか先にある〝この世の彼方〟を霊視した祐理は、自分が視みているものを精神感応で仲間にも視えるようにした。

リリアナは人捜しの魔女術を使い、術が示した方角に『魔女の目』を飛ばした。

結果、どことも知れない砦とりでで『竜に乗る青年と戦う仲間たち』を発見できたのである。

精神感応で視覚を共有していたリリアナと祐理は大いによろこんだ。

草薙護堂が助けを必要としていたので、通廊越しに〝力〟を送りこみさえした。

しかし、彼とコンタクトを取る前に『魔女の目』と精神感応は解けてしまった。やはり、向こう側に術をかけるのは容易ではないのだ。

リリアナは深々とため息をついた。

「それにしても、まさか『黒の剣つるぎ』を抜くほどの戦いになっているとはな」

「念のため、封印を解いておいてよかったようです。ただ、あの護堂さんに似ている御方、どういうご素す性じようなのでしょう……？」

「八人目のカンピオーネと考えてもいいのかどうか……」

首をかしげる祐理と向き合いつつ、リリアナは腕組みする。

この〝アイーシャ夫人が造ったという通廊〟、不可解な点が多す

ぎる。何かとバタバタしていたので、聖ラファエロらにくわしく事情を聞けていないせいでもあったが。

「ところで、この穴に飛び込んでまだ三時間も経ってないというのに。……護堂さん、あいかわらずトラブル続きみたいですね」

「最後は不時着するように墜落していったが、まあ——」

「り、リリアナさんっ。『たぶん生きている』みたいにおっしゃってはいけませんよっ。護堂さんだって人間なんです。万一のことだって、もしかしたら！」

「つまり、万里谷祐理もわたしと同じ意見なんだな……」

　何はともあれ『仲間の安否確認』から、『どうやって救出するか』を考えはじめる祐理とリリアナだった。

「いや、さすがにあのときは死ぬかと思ったぞ！」

　わははと豪快に笑いながら、神殺しウルディンはのたまった。

　恵那が手た綱づなを取る二頭立て馬車の荷台で、あぐらをかいている。護堂も向かい合うようにすわり、人間離れした言いぐさに眉まゆをひそめていた。

　ちなみに、馬車の横を歩く馬にはエリカが乗っていた。

「あれできちんと生き残るあたりがさすがよね……」

「うん。王様もウルディンさんもやっぱり無茶苦茶だよねえ……」

　エリカと恵那の言葉には、むしろあきれのニュアンスが色濃かった。

　魔王ふたりの失しつ墜ついは数時間前のこと。

　墜落時、どことも知れぬ広野に落ちた翼竜は、胴体着陸する飛行機のように地面をすべっていった。そこからカンピオーネ両名は投げ出され、数え切れないほどの打だ撲ぼくと擦すり傷、複数箇所の骨折といったダメージを負ったのである。

　ふたりともそのまましばらく悶もん絶ぜつし、立ちあがることもできなかった。

　だが、どうにか生き残り、あとを追ってきたエリカと恵那に救助されたのだ。

「なあ兄弟。あらためて誘うが、オレの代わりに王とならんか？」

　荷台に揺られながら、ウルディンはいきなり持ちかけた。

　護堂もそうだが、あちらもすでに元気を取りもどしつつあるらしい。

「ローマかコンスタンチノープルあたりに、オレたち兄弟の後こう宮きゅうをならべて建築するのはどうだろう？　なかなかいかした案だと思うのだが」

「そういうことはもう言うなって、勝負の前に伝えておいただろ」

　護堂が不機嫌につぶやくと、ウルディンは心外そうに答えた。

「おいおい。あれはオレが負けたときの約束だぞ」

「もう戦えないくせにバカ言うなよ。あんたをそこまで追い込んだのは俺だぞ」

「それを言うなら、兄弟だってもう戦えまい」

「お、俺はいいんだよ。俺は自分で自分をこうしたんだから」

「いやいや。それまでにオレがさんざん痛めつけたのを忘れてくれるな」

　文字通りの『痛み分け』を体現するカンピオーネふたり。

　不毛な会話をしている間に、馬車はアウグスタ・ラウリカの要よう塞さいまでもどってきた。

　あとからルスカとクロティルドがこちらへ来る予定なのだ。幸いにもローマ軍団は帰還しておらず、ウルディンとの鉢はち合あわせは避けられた。

　アイーシャは軍団といっしょなので、まだもどっていないはず

だ。

　城門の前でエリカが馬を、恵那が馬車を止めたとき――。

「あれ何だろ？　すごく急いでるみたいだけど」

「ローマ軍の急使だな。おそらくルグドゥヌムに緊急で伝える情報があるんだろう」

　恵那が街道筋の先を見つめてつぶやくと、同じ方角を眺めてウルディンが言った。

　フン族の視力は日本の自然児に勝るとも劣おとらないらしい。

「ルグドゥヌム？」

「現代風にいうとリヨンよ。この頃は属州ガリアの最重要拠点だったの」

　護堂が首をかしげたら、エリカが教えてくれた。

　南仏の都市リヨン。聞き覚えはあるが、護堂は行ったことがない。やがて、こちらに駆けてくるローマ騎兵の姿が見えてきた。

　全力疾走に近い速さだった。あんな乗り方を続けたら、馬がつぶれてしまう。

「ここへ脇わき目めも振らずに向かってくるから、替え馬が欲しいのかしらね？」

「ああ。馬を何度も替えて、スピードを保つんだな」

　ウルディンが『急使』と見抜いた理由を知って、護堂はうなずいた。

　一方、エリカは街道をふさぐように立ちはだかると、馬を減速させながら駆け込んできた騎兵へ問いかける。

「ここに駐留する軍団の者よ。いかなる報しらせを持って、お急ぎなのかしら？」

「て、敵が北方に集結しつつある……。フランク族の各部族があの男の傘さん下かに入り、大同盟を結成した……！」

最初、女のエリカが『軍団所属』と言ったので、急使は怪け訝げんそうにしたのだが。

先を急ぐせいか、息切れしながらもすぐに教えてくれた。馬だけでなく乗り手の方も疲労困こん憊ぱいしている。よほど急いできたのだろう。

「あの男、ですって？」

「名はサルバトーレ・ドニ……。いかなる国の生まれかは知らないが、あの男――いや、あのバケモノひとりの手でコロニア・アグリッピナの砦とりではあえなく陥かん落らく……くぅぅっ！」

よほど悔しい出来事だったのか、急使の青年は悔しそうに涙をこぼす。

しかし、護堂たちに気にする余裕はなかった。

「さ、サルバトーレ？」

「どうやら恐れていた事態になりつつあるみたいね……」

「あの王様もこっちに来てるんだもんね。そりゃまずいことがいろいろ起こるよねえ」

唖あ然ぜんとし、憂うれい顔になり、慨がい嘆たんする現代人三名。

しかも、ウルディンまで「そういえば」などと言いだした。

「その名、聞き覚えがあるな。三か月前、オレの森をうろついていた神殺しだ」

「な、なんだって？」

「この辺りはオレの〝狩り場〟だと教えたら、自分は北の方へ遊びに行くと言いだした。こちらにもうすこし慣れたら、オレと勝負したいなどと言っていたな」

いかにもあの男がしそうな妄もう言げんを、ウルディンは面白そうに語る。

　どうやら挑戦を断るつもりはないようだ。それにしても『三か月前』とは。護堂はつい舌打ちしてしまった。

　自分たちよりも、ドニはずいぶん先の時間に飛ばされていたらしい。

　その間に一体、どれだけの不始末をしでかしてきたのだろう？

「なあ。ドニの手下になったフランク族って……」

「たしかフランスを作った人たち、だっけ？」

「ええ。ゲルマン系のフランク族から登場したクローヴィス一世がメロヴィング朝を興おこして、フランスの歴史ははじまるの。でも、それは一〇〇年以上も先のことよ」

　現代人だけで集まって、小声でひそひそと話す。

　エリカの語る未来を聞いて、恵那は珍しくため息をついた。

「じゃあ、これも歴史を変えるかもしれない事件なんだね。やっぱり修正力ってやつに期待しないとダメなのかな……？」

「それについてだけど、期待してもいいのかしら？」

　エリカから悩ましげに言われて、恵那はきょとんとした。

「でも、それらしい力はあるってアイーシャさんも言ってたでしょう？」

「アイーシャ夫人は結局、旅行者よ。過去の世界を何年も旅することがあっても、いつかは現代へお帰りになる方。でも、このまま何十年、何百年も現代のカンピオーネが居続けることになったら——繰りかえし生じるはずの歪ゆがみを修正しきれると思う？」

　憂うれいまじりの声でエリカはささやき、ため息をついた。

「サルバトーレ卿きょうのことだから『現代へ帰る』のも忘れて、こちらに一〇〇年くらい居続けても不思議ではないと思うのよね……」

「あのバカなら、たしかにありうるな……」

思わず護堂はうなずき、新たな試練の発生を悟った。

どうやらサルバトーレ・ドニを訪ねて、首に縄なわをつけてでも連行する必要があるらしい。それはウルディンとの対決に勝るとも劣らないほど、面倒な難題になりそうだった。


カンピオーネ⑭
よろしく
お願いします♪
しこる

著者紹介

丈月　城（たけづき　じょう）

埼玉県出身。

２００８年スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！」にてデビュー。

同作は好評を博し、シリーズ化され代表作となっている。

シコルスキー

ライトノベルの挿絵を中心に活動中のイラストレーター。

集英社ｅスーパーダッシュ文庫

カンピオーネ！

XIV 八人目の神殺し

著者　丈月　城

２０１３年７月31日発行

この電子書籍は、集英社スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！

XIV 八人目の神殺し」

２０１３年５月29日発行の第１刷を底本としています。

発行者　鈴木晴彦

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号

〒１０１－８０５０

［電話］

０３－３２３９－５２６３（編集部）

０３－３２３０－６３９３（販売部）

０３－３２３０－６０８０（読者係）

制作所　株式会社デジタルディレクターズ